

# 登山の総合人間学

〈たかが山登り されど山登り〉



田中文夫

表紙の写真

**アンナフルナと夕陽**

(P29 南西壁より撮影)

ネパール・ヒマラヤ 1974年

# 登山の総合人間学

2015.12.7

日本の登山者人口は 1,000 万人を前後し、「登山とは何か・・・?」、などと考えながら山を登っている人は極めて少数派です。水と少しの食べ物を持ち、ズック靴をはいて徒歩で登る山は「たかが山登り・・・」と、気やすく出掛けることができます。少し慣れてくると自然の中で心身開放の心地良さに気づき、「登山のスポーツ性」を楽しむようになってきます。まだ、「たかが山登り・・・」の範疇といえましょう。

それから先の進歩において、「登山とは・・・」、「スポーツとは・・・」等々考え始めると、その道の深みへととはまり込んでいきます。「されど山登り・・・」の領域です。

私が半世紀前に山登りを始めた頃、「登山はスポーツである」という定説がありました。この文脈は現在も引き継がれていますが、その先へと進化ををとり、「スポーツ・クライミング」となって 2020 年東京オリンピックの追加種目候補となっています。

しかし私は当初から、「登山にはスポーツの要素が含まれる」と理解し、「登山はスポーツである」と割り切る考え方には、異論を述べていました。戦後日本の先端クライマー集団がかかげた「スポーツ・アルピニズム」に疑問をいだき、私が小さな批判文を書いたのは 1967 年、今から 48 年前のことでした。さらに日本の山岳界を束ねる日本山岳協会の業務処理に対し、憲法に反するという「日本山岳協会への批判」を山岳同人雑誌に発表したのは 1973 年、今から 42 年前のことです。しかし反響は、片手の指を折るほどしかありませんでした。

1974 年、ヒマラヤ 7,835m 峰の岩壁登攀へ出かけ、さらに 1978 年も同じ岩壁登攀へ出かけましたが、3 隊員遭難死亡事故となってしまいました。登山隊長として、計画の立案から事故処理に至るまでの全てをおこないましたが、これら一連の体験を経てみると、「登山にはスポーツ的要素が含まれる」という理解はさらに深まり、「登山の総合人間学」へと向かうこととなります。「されど山登り・・・」の領域です。

「山なんて難しいことを考えずに、楽しく登ればそれでいいんだよ」、最も多数派のご意見です。他方、「生命を賭けても値する登山の深み」があることも、哲学や文化として探求できるならば、「登山は人生無二の友」となってくれます。

# 登山の総合人間学

〈たかが山登り されど山登り〉

## もくじ

はじめに . . . . . 2

もくじ . . . . . 3

1章. たかが山登り されど山登り . . . . . 5

たかが山登り / されど山登り / そして大切なことは

2章. 山岳と登山のちがいがい . . . . . 16

山岳と登山の関係性 / 辞典類にみる「登山」の定義と解説 / 概念の再定義

3章. 登山と山岳スポーツのちがいがい . . . . . 22

スポーツの社会性 / 登山のスポーツ意識の普及～RCC II / アルピニズムの衰退 /  
アルピニズムへの希望

4章. 国民体育～山岳と登山の使い分け . . . . . 36

日本山岳会 / 日本山岳協会設立と国民体育大会 / 国民体育大会 山岳競技 /  
国民体育大会と登山者のアマ・プロ問題 / 未組織登山者という意識の問題

5章. 登山行動研究の経緯 . . . . . 59

登山行動研究の経緯 / 登山研究は総合人間学

6章. 中村先生の「正・反・合」から「新」を考える . . . . . 73

中村純二博士の正反合 / 正反合～弁証法の複合論 / 合と新のグループ

7章. 登山の生態系（分類） . . . . . 87

これまでの登山や登山者組織の分類 / 登山と山岳スポーツの新たな分類

8章. 登山様式の方向性 . . . . . 98

環境の複素な世界構造から表す登山様式 / トレッキング / 山岳スポーツ /  
死の弁証法（アルピニズム）と死の排除（スポーツ）

**9章. アルピニズムの変貌 . . . . . 112**

世界の背景から / 登山の弁証法から

**10章. 登山の学際的理解 . . . . . 125**

1. 自然現象の物理学的理解 . . . . . 125
2. 登山の物理学的理解 . . . . . 127
3. 登山の生物学的理解 . . . . . 129
4. 登山の美学的理解 . . . . . 134
5. 登山の脳神経学的理解 . . . . . 138
6. 登山の経済学的理解 . . . . . 142
7. 登山と戦争の相違から . . . . . 153

**< 資料編 >**

**その1. ヒマラヤ遭難登山隊長の自省 . . . . . 159**

山岳遭難とリーダー意識を考える要因 / 遭難時におけるリーダーの意識 /  
その後のリーダー意識の変遷

**その2. 失敗に学ぶ . . . . . 183**

失敗の種類 / 判断と責任の限界 / 登山の安全性と危険性 / 登山の失敗に学ぶ

**その3. 3.11 とクライシス・マネジメント . . . . . 193**

リスクとクライシスを区別 / クライシス・マネジメント /  
リスク・マネジメント / 環境エネルギー問題の考察

**その4. 社団法人 日本山岳協会への批判 . . . . . 220**

1973年山岳展望第17号掲載 ⇒ 批判の構造 / 現状批判

**その5. 登山の社会的背景～登山学確立へのアプローチ . . . . . 250**

1970年山岳展望第14号掲載 ⇒ 登山の史的背景 / 登山の展開

**その6. 「山岳展望」17号から「山岳文化」へ . . . . . 259**

日本山岳文化学会機関紙、2005年山岳文化第3号掲載

**おわりに . . . . . 266**

# 1 章 . たかが山登り されど山登り

「登山」を語る原点にはまず、一人の登山者として自身の山登りを始めた動機を述べなければならないでしょう。「たかが山登り」、の始まりなのですから……。

## 1. たかが山登り

幼い頃の私は、「見る自分」と「見られる自分」の意識が、いつも頭の中にありました。「自己を見つめる意識」は「客観」といい、「見つめられる意識」は「主観」となります。「見る自分」を神の目線にすると、「見られる自分」は常に不安となり緊張します。現実世界に完璧などありません。そこで外向に振舞うよりも、内向な探求へ向かう方が楽ですから、沈思黙考な数学や哲学の閉じた世界へと向うこととなります。客観と主観との狭間で、組織を率いるリーダーよりも、学究に向かう学者的適性を自覚していました。私が電気技術者への道を進んだのは、第一に敗戦の貧しさの中で大学へ進めなかったこと、第二に電気が好きだったことによります。電気は物理と数学の合理的世界です。ある系の中においては無矛盾で、論理的完全性が求められる世界だったからです。電気エネルギーはパワーを司ります。人体に例えると筋肉です。情報通信は、ニューロンやシナプスを経て脳と結ばれる人体の神経機能です。電波(電磁波)は人と人とが情報交換する社会結合分野です。

高校通学はバスで平塚駅まで、そして東海道線で横浜駅へ、さらに東横線に乗り換えて東白楽駅まで。通学する電車の中は約 1 時間、暇ですから沢山の小説を読みました。川端康成、井上靖はほとんどを読み終え、三島由紀夫、谷崎潤一郎などは代表作品程度です。川端康成の純文学を好むロマン派で、相模川の土手に一人佇み、大山、丹沢、富士山を西に仰ぎ見ながら、未来に向かって夢を拓げます。ある日読んだ井上靖の『氷壁』に憧れ、山へ行ってみたいと思います。山を通した男女のロマンもさることながら、主人公・魚津を陰ながら支える上司、常磐の繊細で豪胆な人物像描写に、私の対極的な人間像とした憧れを持ちます。

1964年は東京オリンピックの年です。18歳まで10日余りを残し、私は工業高校を卒業しました。同級生に山岳部員が二人いましたが、私はサッカー部でしたから、登山のことは全くわかりません。卒業式の夜は家に帰らず、卒業証書は親にあずけたまま山岳部の部室に泊まります。学校山岳部は、万座高原に山小屋を持っていました。山岳部員だった同級生の指導で、山を知らない他の3名は山スキーの手ほどきを受けます。まさか本格的登山にのめり込むなんて、少しも思っていない。

就職先は放送局用通信機器の専門メーカー、池上通信機です。会社には山岳部があり、部員の中には社会人山岳会に入っている先輩もいました。同じ高校で1年先輩の、学校山岳部員だったYさんに連れられ、週末ごとに丹沢の沢登りに出かけます。正月休みはYさんと二人だけで、大胆にも乗鞍岳山頂からスキー滑降に出かけました。60kgのキスリングを背負い、スキーを持つと歩けません。よろよろと少しは歩けますが、あとはスキーにキスリングを縛りつけて引っ張ります。たった二人で8人用帆布テントですから重たいわけです。早々に山麓へテントを張ります。乗鞍岳山頂までは、シールを付けて登ります。山頂からは覚えたての斜滑降で下りますが、ターンができないので転んで止まり、反転を繰り返します。深雪だからスピードが出ません。だからこそ怖くもなく、なんとか滑り降りることができました。

Y先輩と一緒に山を1年間過ごした翌年4月、社会人山岳会でも活躍していたSさんの紹介で、同じ社会人山岳会、コンテナスクラブに入ります。

1964年の大学進学率は、男=26.9%、女=19.6%、総合=23.4%となっています。中学校から普通高校へと進んだ同期生たちは、大学進学です。東大、東北大、横浜国大・・・、みなストレートで国立大学に合格していました。中学校で成績を競っていただけに、負けず嫌いな私は1年で池上通信機を退社します。中学校恩師の計らいで、県立普通高校の理科実習助手の職を得て、一級無線技術士(一技)の国家資格取得を目指して独学を始めました。取得できれば大卒相当以上にみなされて、学校教員への道が開けるからでした。

一方、新宿で集会をもっていたコンテナスクラブの山行は、最初から付いて歩くだけで精一杯。リーダーたちは多分、私が1年もたないだろうと思っていたことでしょう。荷を担ぐ縦走は苦手でしたが、身軽な岩登りは上手で、次第に慣れていきます。

1 年の見習期間を過ぎて正会員になるころは、岩登りの腕前がめきめき上達しました。八ヶ岳のもろい岩、谷川岳ノ倉沢、穂高岳滝谷の岩場を登ります。

入会して3年目、正月休暇を含む17日間は、東京都山岳連盟有志により韓国の山へと出かけます。雪岳山(ソラクサン)の麓に広がる花崗岩のバットレス、ウルサンバイの垂直な岩壁に、新ルートを拓きました(日韓親善東京登山隊ルート)。フリークライミングは私がリードし、ボルト連打の人工登攀は、後に東京都山岳連盟会長となったMさんのリードです。

この頃になると、いよいよ登山にのめり込みます。国家資格の一級無線技術士を目指して勉強していたのですが、それよりもっと大切なものを知ります。登山を通じた「生きることの意味」を求め、宗教、哲学、思想、そしてアルピニズムの本を読みあさります。親鸞と出会い、ニーチェに出会い、ガストン・レビュファやサン・テグジュペリに出会います。「本当のことは目に見えない。心でみなければ見えない……」、とサン・テグジュペリが「星の王子さま」に言わせたように、「**たかが山登り**」の段階を過ぎ、「**されど山登り**」の領域へと入り込みます。

気楽に趣味で登る山登り ⇒ 「**たかが山登り**」から、生命を賭して挑む山登り ⇒ 「**されど山登り**」の中こそ、「**自然を通して人が生きることへの意味**」を見いだせるのではないかと考えるようになります。

## 2. **されど山登り**

2015年、今、「戦後第二の登山ブーム」といわれています。スポーティでファッションナブル、そしてカラフルな登山用品で身をくるんだ山ガール、山ボーイ、ついでに山ジーヤと山バーヤまでが、100名山の尾根に列をなしています。……**たかが山登り**……、それはそれで大変結構なことです。家に閉じこもっているよりは、自然の中で大空に向かって深呼吸する方が、良いに決まっています。文部科学省が中心となり、生涯スポーツの奨励は、国策として戦後ずっと継続されています。

文化としての生涯スポーツは大変結構なことで、その中でも登山は、その人なりのコンディションで登り方が調整できる、格好な身体スポーツです。若者は若者らし

く、高齢者は高齢者らしく、健脚の人、荷を担げる人、身体が柔軟でクライミングが上手な人、瞬発力のある人、持久力のある人……、様々です。人の一生もまた同じで、青春の身体が先に動く時から、高齢の頭は働くが身体が動かなくなる時に至るまで、その時々の状態に応じて山の登り方を変えながら、続けることができます。

山頂へ至る仕事量は重さ(体重+荷物)によって決まるわけですから、急傾斜を最短距離で登るほどに、仕事当量は大きくなります。逆に、ゆるい斜面を長い道のりで登ると、仕事当量は小さくなります。軽自動車の低出力エンジンでも山道を登れるように、左右にジグザグ(九十九折)を切って緩斜面を登れば、仕事当量は小さくなり、小出力エンジン、少排気量の車でも、時間をかけて登ることができます。しかしいずれの場合でも、その仕事量が同じとなることは、物理学から分かります。

登山は、エンジン出力(心臓)とエンジン排気量(肺活量)に見合った、その人なりのコンディションに合わせた登り方によって、たいていの山は登ることができます。しかし初心者は自らのコンディションを把握できず、何が最適なのかが分かりません。そこが問題なのです。登山に限らず、自らを知ることの難しさは、人生を二度繰り返すことができない人間共通な生存条件です。小さな失敗を繰り返す自省の中から、より大きな失敗へと至らぬように自己制御(セルフ・コントロール)を想像する知恵も備え、相応に対処できるのが人間でもあります。

私は登山を始めた当初から、「登山はスポーツ的要素を含むが、スポーツそのものではない」、という考えを持っていました。その考えは経験を積み上げるほどに、確かなものとなります。一般的スポーツ、さらにオリンピックを頂点とする競技スポーツにおいて、「生命の安全確保」はスポーツ競技の第一条件です。しかし登山の真髄は、「山岳自然の死の領域から、生きて還るぎりぎりの行為にこそ、最大限となる人間の生命の燃焼がある」ことを、愚かにも確かめたい誘惑にあります。つまり、スポーツ競技の初期条件、安全確保を確定していたならば、登山の真髄を極めることができません。では、そんな危険な登山は登山でなく、無謀な冒険と呼べば良いのでしょうか。このことに理解を得ることは、人類の文明と文化を既成概念から洗い直す、膨大な「総合人間学」を要します。他方、それらの感覚を共有する人達にとっては、ことさら説明するまでもなく分かり合える細事です。

何事においても「道を極める」ことへの奥は深く、山登りも例外ではありません。ある登山者にとっては、**人生を賭けるに値する「登山」**があることを、ぜひ知ってほしいと思います。生涯に亘り、山岳自然の中で行為(スポーツ)する身体と、その主観と客観との対話を通じた世界認識(山岳文化)を重ねることにより、行為(スポーツ)だけにとどまらない、「**人と文化と文明**」がおりなす「**総合人間力の原型**」があることを、ぜひ知ってほしいと思うのです。身体の世界(スポーツ)と、心の世界(文化)を併せ持った**人間の原型**(総合人間力)として・・・！

…………たかが山登り ……身体の世界 (スポーツ)  
…………されど山登り ……心の世界 (文化)  
…………そして大切なものは ……心身の気づき (総合人間力)

生と死の境界をさまよな登山行為は、誰にでもお勧めできる方法ではありません。山岳自然の脅威は計り知れない一面があります。究極な登山の魅力と素晴らしさは、精神(欲望)の麻薬にもなります。戦場で戦った兵士の戦闘ストレス障害に似た、一種の PTSD (Post traumatic stress disorder=心的外傷後ストレス障害) が、そのような登山に潜んでいるといえましょう。しかし登山界で、そのような研究は見かけません。

究極な登山は、死の領域へと踏み込みます。いかにして生きて還れるか・・・、欲望と理性がおりなす人間ドラマに加え、「**偶然**」という理性と感性で捉えきれない確率的な自然の“**ゆらぎ**”にも遭遇します。生と死の周縁は、全てを察知することができない曖昧な世界だからです。人間が自然の中から発生した一生物である以上、自然の中に再び飲み込まれてしまう現実には、「**自然の摂理**」と呼ばれています。

しかし生と死の周縁世界における非日常的な体験は、日常世界で当たり前となって気づかない空気のように、在ることの大切さを忘れてしまう人間の無意識化にあって、「**真に大切なもの**」を思い起こすことができます。

人間同士が殺し合う戦場ではなく、大自然の過酷さの中で人間がおりなす生存希求の登山行為は、人類にとって「**生きることの意味**」を学べる貴重な方法です。日常の、物と知識に溢れた文明社会の中で、人間の無意識化はどんどん深まりま

す。「真に大切なもの」が何であるのか・・・、人の「気づき」は次第に失われていきます。そんな味気ない文明社会に対し、生命活動がもたらす生命を燃焼させることの意味をふたたび呼び戻すことが、「されど山登り」への情熱であります。

1956年、日本山岳会は世界第8位の8,136m峰、マナスルに初登頂しました。

その18年後の1974年、マナスルの隣に連なるP29（7,835m、測量番号が山名となった）南西壁の大岩壁を、私たちが体験したときです。誰も登ったことのないルートに足跡を示す感情の高まりは、“身も心も洗い流されたスッキリ感”をもたらせました。その感覚は、うまく言葉で説明することができませんが、理性が冴えて物事の道理や判断が、頭の中で迅速冷静に処理される感覚です。物事の限界を見極める判断力が増し、その中から、絶対的限界と相対的限界という概念に思い至ります。

絶対的限界は、もう元の状態へと戻れない客観的な限界点です。相対的限界は主観的限界とも言い換えられ、自身で「もうだめだ……」と思い感じても、客観的にはまだまだ余裕がある状態の限界です。訓練を重ねるほどに相対的限界は絶対的限界へと近づきます。たとえば訓練と経験を積んだアルピニストがエベレスト山頂で限界を感じた時には、絶対的限界点の直近にある状態となり、余裕がなくて死に至ってしまう場合です。何も訓練しない人の相対的限界点は、絶対的限界点のおよそ1/3程度で警報が鳴る感覚です。そうでないと、人は簡単に死んでしまいます。

このように、アルパイン登山は相対的限界点を、絶対的限界点へと近づける経験の中に進歩を認め、向上心を満たす行為ともいえます。

この域に達すると、「されど山登り」の領域に入って行くわけです。

### **3. そして大切なことは**

1983年12月～1984年1月、ネパールヒマラヤ、コンデ南稜冬季登攀を最後に、私は先鋭的な登山から退き、山岳界からも離れました。離脱の要因は、1978年9月、ネパールヒマラヤP29南西壁遭難死亡事故であります。遭難隊長として事故処理と残務整理を終えてみると、戦後の高度成長時代に流行った「三人寄れば山岳会」という安易な気持ちで山岳人が集まり、それらの人々を束ねる意味を失ったからで

した。遭難死亡事故に直面した仲間たちに対しても、安易な妥協ができませんでした。以来一人で山に登るか、家族や家族の友人を伴った山行となりましたが、生命を賭ける登山から、次第に離れていきます。1981年8月、妻と二人で登ったアイガーとマッターホルンを最後に、仕事と子育てが生活の中心となりました。

1974年、横浜山岳協会隊は、ネパールヒマラヤの中央部にあるマナスル3山（マナスル、P29、ヒマルチュリ）の一つ、P29（7,835m）の南西壁に遠征隊を派遣しました。私も参加し、先頭に立ってルートを延ばしている時です。世界の誰も通ったことがない未知のルートを、自らの手と足で切り開いて高みに登る行為の中に、まるで天に登るような神聖で満ち足りた感覚が生じました。生死を考え、生死に縛られる感覚ではなく、宇宙原理から解き放たれた神聖で自由な心身感覚です。

私は唯物論者ではありませんが、神を信じるわけでもありません。風雪荒れ狂うビバークでは、こんな時に神様がいて助けてくれたらいいな・・・と思うのですが、神様なんていないと思う自分も同時にいて、都合の良い無神論者といえるのでしょうか。所詮、人間が定めた神様を信じることはできず、宇宙原理の必然性と偶然性を神と呼ぶならば、それは神であっても、科学であっても良いと思うのです。この自然の気まぐれな偶然を、ことさら神と呼ばなくても良いと思うのです。

登山の喜びは、宇宙原理たる必然性に逆らうことの中にあります。低き地表から高き頂きへと登り、より勾配のきつい岩壁を蛇行するよりも直線的な最短距離で攀じ登る、オーバーハングはなおさらです。安定して滑りにくい地面から岩場を辿り、さらなる滑りやすい雪と氷壁を登ります。これら重力に逆らうほどに喜びが増す登山行為の中で、宇宙の必然に囚われない心身の自由なる高鳴りと喜びを感じることができます。高度な知能を持つ人間だけが、このような宇宙原理に逆らう行為を喜びと感じるのでしょうか。そのことを人間は「遊び」と捉え、「芸術」と称し、「文化」として位置づけます。他方では宇宙原理の必然性を「科学」として観測・計測し、原理・公理・法則などとして、証明・説明しようと努めます。

近代登山は、山岳の未知なる部分を知ろうとする科学的見地からの踏査に始まりましたが、頂きを登り尽くすと、次なる次元は宇宙原理から解き放たれる、心身の自由な表現へと移ります。そのことを「登山はスポーツである」と呼んできましたが、

私がかねてから「登山はスポーツ性を含んだ文化である」、強いて言えば「自由を表現し実感する遊びである」、と考えてきました。宇宙の原理から解放された自由人の遊び、このことを称して人は「文化」と呼んでいるのだろう……と。

それが「文化」であるためには、単に登山の喜びを体感して終わるのではなく、体感して得たものを他者に伝えることができるメディアへの定着(二次加工化)によって、文化の中身が形作られると考えるのです。つまり、直接体感とは「遊び」の領域であり、二次加工されたメディア化によって「文化」として定着すると考えるわけです。「たかが山登り」はまだ「遊び」の範疇にあり、「されど山登り」となって「文化」の領域へと深まっていくと考えるわけです。

メディア(media)とは、情報の記録、伝達、保管に用いられる物や装置を指しますが、ここでは人と人がコミュニケーションを図るための媒体としての意味を与え、あらゆる表現媒体、表現様式を指します。人体の5感に対応する二次化となりますが、言語、音楽、絵画、映像、写真、舞踏……、特に視聴覚を中心とする様々な文芸作品は、感性を具象化させた物理的表現実体としてのメディアとなります。

それぞれのメディアが内蔵している特性(自己インピーダンス)は、外部からの同類なアプローチが調和すると共感・共鳴・共振状態を生じ、抑制抵抗が減少して  $1 + 1 \Rightarrow 4$  となるような、増幅拡散効果を発揮します。融合し、発信状態となって、より広範囲に放射伝播、拡散増幅されます。

「メディア効果論」なるものがありますが、電気技術者から考えると、情報カオスの中に際立ったメディアが投射されるとそれが核となり、フラクタルな同類性の結晶がどんどん成長するイメージが描けます。際立ったメディアとは、強い個性をもった差異化による、シンボリックな形象です。

登山における究極的な精神の高まりは、一種麻薬患者のようなもので、一度味わってしまうとなかなか抜け出せなくなります。優れたアルピニストの多くが山で遭難死してしまったように、これらの魔力は山岳登攀だけではありません。戦場で生命を懸けた兵士において、生命をやり取りする究極な戦闘行為の中にある兵士の精神もまた、異種同類と思われまゝ。自我を失い、生物人間となった本能欲求の興奮を鎮めるためには、無償な愛で包み込む以外に方法はないのでしょうか。そして癒えるまで、

時をかけて包み続けることです。それができるのも「愛」という心の作用であり、愛を拒むのも自我という人間意識の形成過程における心の作用です。「愛」は科学によって説明し尽くせません。「登山」と同じように、自然の摂理への抵抗や消滅の原理を同じくする、と考えるからです。それがまた「無償の行為」であるがゆえに、人間の「実利的精神」からは分かり合えない、異なる次元や位相にあるのでしょう。

戦後の高度経済成長社会は、製造業を中核とした生産実利社会を過ぎます。環境を切り取り、科学的合理性にかなう高効率を目指し、人工環境とした都市を発達させました。その文明進化は目を見張るスピードで展開され、世界でのエネルギー消費量は近代の100年間で18倍以上に及んでいます。(資源エネルギー庁:第【201-1-4】人類とエネルギーの関わり=1,900年/2,000年比)

結果、物が溢れ、豊かさを感じる人工的生活環境に囲まれ、生産に優越する消費社会となり、豊かさの実感(欲望)とそれを叶える物(商品)とを等価交換させる、「金融社会」を招きました。等価交換を媒介する「貨幣(マネー)」の性質は、①「平等性」=誰が使ってもその価値が同じ、②「中立・公平性」=持つ人、使う人を選ばない、③「利便性」=物を動かさずに交換価値を「情報」として扱い、貝殻⇒コイン⇒紙幣(証券)⇒電子データと変遷し、極めて利便性が増しました。それらを共通に担保しているのはただ一つ、「信用」という無形な人の「意識」なのです。信用を失えば、等価交換は成り立たず、貨幣は情報としての価値を失います。とくに現代の「電子情報」はその性質、①伝播速度が極めて早い(光速と同じ)、②電子機器を媒介するので、計算処理、記憶、蓄積、論理化、複製、等々扱いやすくなりますが、各種エラー(ヒューマン、メカニカル、電源喪失)によって消去・消失される可能性がある、③電波や光の性質=拡散・減衰・増幅・等々の作用は、等価交換の共通担保となる「信用」そのものへ影響を及ぼし、貨幣のもつ平等性、中立・公平性を歪めます。権力や金融力による情報操作は、“悪貨は良貨を駆逐する=グレシャムの法則”ごとき、宣伝増幅効果の弊害をも生み出します。人間を性善説で見ようとするか、性悪説で見ようとするか、「文化の分かれ目」となります。ロマン派の私にとって、性悪説の立場をとるのは難しいのですが、実利と権力を好む人々の存在も認めないわけにはいきません。これからの人工知能とロボット開発にとって

も、この問題には重要な意味があると思っています。

これまでの**生産＝科学>消費＝文化**の社会にあって、実利が優越した人工社会環境を成してきました。もつといえ、**“遊び<文化”**という本質的理解(遊びは文化の一部)にほど遠い、生活優先な**実利的社会状況が続いた**といえます。結果、社会の営みの中で科学や技術の進化がもたらせる文明の物質的豊かさに溺れ、感性の営みである非物質的な文化を享受する、“**心のゆとりを失っていった**”と理解することができます。

**登山<趣味<遊び<消費 = 文化<文明 = 生産<人工社会<科学<環境 … ①**

**登山<趣味<遊び<消費 = 文化 + 文明 = 生産<人工社会<科学<環境 … ②**

①式と②式の違いはアンダーライン部分の関係性。つまり文化と文明の理解の違いです。①式は、現在も無意識な一般常識内での理解です。②式は私が提起する「複素的世界観」という、実相(実数)と虚相(虚数)の組み合わせが織り成す3次元空間意識における理解(認識)となり、さらに時間軸を加えると、4次元時空間認識となります。“**新たな時空間的認識**”といえます。

このような理解の仕方は未だ非常識な領域にありますが、この視点からの考察こそが、新たな視野を提示したい本論全般にわたる主旨でもあります。

山岳自然と人々がおこなす非日常体験を顕在化させ、真に大切なものへの「**気づき**」を「**山岳文化**」としてフィードバックすることが、ロボットにはならない人間の、人間としての生き様の一つを指し示すことができると思うのです。その根底には、「**失ってみないと気づかない、人間の愚かさ**」がかくされています。山岳の非日常体験の一つ「**されど山登り**」は、そのことへの気づきを与えてくれたからです。

文明の人工物に囲まれて自然の驚異から身を守り、体験を経ない知識として自然を学習する日常生活にまみれると、人(主体)は他者(客体)が存在することへの感性(気づき)を鈍らせてしまいます。一方で、コンピュータがもたらせるバーチャル情報は、実態(リアリティ)を信号化(バーチャル・リアリティ)して身体は受け取りますので、身体

が受け止める認識(意識=心)は信号化された自己中心的な世界認識を形成しがちです。そのような人間の意識(心)は、人間が自然の部分であったことを忘れ去り、人間の意識世界が自然の中心であったかのような錯覚が、日常意識となりつつあるのが現代といえましょう。生身として生きているリアルな人生を、バーチャルな人生ゲーム化に向かってほしくない思いです。

釈迦は「常楽我浄(※)」に加えて「諸行無常(※)」を説きます。しかし私は意識のダイナミズム、つまり、「愛情に発する人の情動エネルギーによって決める心」を大切にしたいと考えます。

もしも人間の意識(心)がプログラム化され、途絶えることのない永遠を確保できたとするならば、人間個体とする身体は細胞の代謝のごとき世代交代の一時の姿、“心の抜け殻という淀み”となって現世に滞留します。そしてこれまでの死生観は不要になり、抵抗の美学、消滅の美学はなくなり、「文化」そのものが不必要となるのではないのでしょうか。

一方、不滅の対象を靈魂や神仏、諸行無常といった形而上的の信仰に託す人々もおります。しかし私は信仰と別な科学的理解により、知性をもってこの世界をなお一層理解に努めたいと考えます。そのような中で、「失ってみないと気づかない人間の愚かさ」に対し、大いなるエール(愛情)を送りたいと思っています。

※ 常楽我浄 ⇒ 釈迦が説いた四顛倒 (逆さまな見方)

- ・無常であるのに常と見
- ・苦に満ちているのに楽と考え
- ・人間本位自我は無我であるのに我があると考え
- ・不浄なものを浄らかとみる

※ 諸行無常

- ・諸行とは、一切のつくられたもの
- ・この世につくられた現実存在はすべて、姿、本質が常に流動変化していて、一瞬といえども存在は同一性を保っていない

## 2 章 . 山岳と登山のちがい

「木を見て、森を見ない!」、という格言があります。木は森を構成する局所であり、森は木々やその他植生動植物を含む局所の集合体とした、自然の特定領域環境となります。この格言が言い表す、部分と全体を見渡す視野の違いは、個人と社会、分子と物質、人類と自然等々対象を変えれば、様々な部分と全体を言い表す言葉に置き換えられます。さらに、知覚(5感 = 視・聴・触・臭・味) ⇒ 認識(意識) ⇒ 思考(判断) ⇒ 作為(行動)、する人間一人一人の視野からは、主体と客体、主観と客観のように、相対する哲学概念から理解を深めます。

人類の作為(行動)が地球資源の形を変えさせ、文明社会を築いて、文化を享受しています。資源が形を変えるたびにエネルギーを消費し、消費されたエネルギーはふたたび、資源の形を変える仕事に使えなくなります。この消費され、使えなくなったエネルギーを「エントロピー」と称し、「閉じられた系の中でエントロピーは増大する」という定義が、宇宙の熱エネルギーを説明する第二法則であります。ちなみに宇宙の熱エネルギーを説明する第一法則は、「エネルギー保存の法則」で、エネルギーは決して作られることも、無くなってしまうこともなく、形が変わっていてもそのエネルギー量は一定に保たれていることをいいます。

閉じられた系とする地球資源には、限界があります。エネルギーを消費して文明が作り出した様々な人工物は文化によって享受され、その消費された廃棄物(エントロピー増大の法則)は地球の気候を変え、災害となってふたたび社会に還元(エネルギー保存の法則)されます。人々の欲望を満たした後の廃棄物(エントロピー増大の法則)は、総量一定となる全体において地球温暖化を招き、異常気象を引き起こし、自然災害として人間社会へと還元(エネルギー保存の法則)されます。

地球もまた、宇宙の一部分と理解されている現代の自然科学において、地球の目、つまり人類の認識能力は、宇宙全体を理解する科学的実証に励んでいます。人類の知能は、部分の詳細を観測、計測し、部分の事実から全体構造を明らかにする帰納法により、科学の素晴らしい宇宙像を築きあげる知性です。その方法論は、

部分から全体を語ることのパラドックス(論理的矛盾)を含んでいます。つまり、部分の真実をいくら積み上げても、必ずしも全体の真実を正しく反映しているとは限らない、矛盾(パラドックス)を内蔵しているということです。

人間脳はフラクタル(※)な思惟により、宇宙さえも概念化(イメージ)することができます。そのイメージ(直感)は、帰納法により科学的証明をおこなうための前提となる、「仮説」の創発を引き起こすことができます。

仮説の創発を引き起こす直感は、帰納法で得た個別な法則や規則性を、さらなる別な個別事象へとフラクタルに拡張発想する演繹思考力により、脳内に気づきを生み出す作用といえましょう。それゆえに、人間脳は「小宇宙」ともいわれ、他の生物にはない特異な解析、創発能力をもった特異な生命体といえます。

※フラクタル=部分と全体が自己相似になる、幾何学概念

## 1. 山岳と登山の関係性

山岳と登山を考察するに当たっては、山岳自然環境の中でおこなわれる登山行為ですから、全体(山岳)と部分(登山)という相関関係をもつことになります。さらにこの論考も、部分(個)から全体(山岳・登山)を論じる、フラクタルな演繹概念を用います。個別の実証データから普遍的結論へと帰納させる、科学的手法ではありません。科学的手法(帰納法)だけでは、不可思議な宇宙の全体像を捉えきることができず、知識をフラクタルに活用(演繹)する人間の意識と思考によって、全体像を仮説的に把握することができます。この帰納と演繹を繰り返すことにより、より確かな全体像に迫ることができるのです。そのことは、実相と虚相が織り成す複素的世界観として提示するのですが、まだ端緒についたばかりであり、未成熟な思考です。

以上のような視点から、登山者の部分(個人)と全体(団体、組織、国家)を考えてみますと、次のような登山者の全国組織名称に特徴を見出すことができます。

- ・ 公益社団法人 日本山岳協会 (略称=日山協) ……公益財団法人 日本体育協会—文部科学省 (公益性)

- ・ 日本勤労者山岳連盟（略称=労山）・・・新日本スポーツ連盟（自主スポーツ）
- ・ 公益社団法人 日本山岳会（略称=山岳会）・・・日本最初の山岳会、日本を代表するアルパイン・クラブ（The Japanese Alpine Club）として世界に知られる。

登山ガイドの全国組織は、以下となります。

- ・ 公益社団法人 日本山岳ガイド協会・・・内閣府（公益性）

登山を学術的に研究する全国組織は、以下があります。

- ・ 日本山岳文化学会・・・日本学術会議一内閣総理大臣（総理直轄諮問機関）

登山者の安全を医学知識の進歩と普及によって守る組織は、以下があります

- ・ 一般社団法人 日本登山医学会・・・認定山岳医制度、研究・講習会

このようにみてきますと、日本登山医学会を除き、いずれも「山岳」を名称に含め、「登山」は表象されません。全国組織ですから、木ではなく森の表象となり妥当な名称といえます。つまり「登山」は「山岳」における人間行為の一種であり、その他様々な山岳行為があることを含んだ言葉といえます。このような大局的視点から「登山」を捉えると、「登山」の概念はいたって単純化されます。

登山 = 山に登ることを目的とした登山 = 山登り

登山の動機や目的、方法、成果、評価、効果等様々に分かれていますが、共通する点は、単純に山に登ることが目的な登山を「登山」とすることです。そして登山の多様化とは、登り方の様式、形式が細分化され、多くの種別に分けて把握できることといえます。

他方で現代は、山に登ることを目的としないで、山に関わる山岳行為が増えています。その主たるものは山岳競技・競争を目的とする「山岳スポーツ」であり、山岳で歩き回ることを目的とする「山岳トレッキング」に分けられます。現在はそれらを含めて「登山の多様化」といわれていますが、本論では「登山／トレッキング／スポーツ」を明確に分類します。それらの分類は別表とし、【現代登山と山岳ス

【スポーツ等の生態系】に一覧表【表 4-1、4-2】(P.123-124) としました。つまり、登山は登山とし、山岳スポーツ、トレッキングは別分野とする分類方法です。

## 2. 辞典類にみる、「登山」の定義と解説

百科辞典類における「登山(mountaineering)」の定義や解説のいくつかを、以下にあげてみましょう。「登山」にたいする、社会的概念の理解ができると思います。

### 【ブリタニカ国際大百科辞典 小項目辞典】

- ・ 山に登ることに楽しみを求め、それ自体を目的とするスポーツ。〈定義〉
- ・ 山に登った記録は紀元前からあるが、スポーツとしての登山の歴史はルネサンス以後に始まるといってよい。スポーツ登山の最初は、シャルル 8 世が行わせたモンテグィーユ登頂成功(1492 年)とする説が普通である。〈解説〉

### 【世界大百科辞典 第 2 版】

- ・ 近代登山(alpinism)は、山に登ること自体に限りないよろこびを見だし、登山が肉体と精神に与えるものを汲みとり人生のうるおいとすることを目的とする。  
〈定義〉
- ・ 宗教的な登山や戦争のための登山と異なり、登るという行為以外に目的をもたない点において近代登山はまさしくスポーツであり、ハイキングのような軽登山も高度の技術を要する岩壁登攀や氷壁登攀も登山である。〈解説〉  
※ モーゼはシナイ山に登り、神の啓示を受けた。

### 【百科辞典マイペディア】

- ・ 山登り。〈定義〉
- ・ 山に登ることそのものに喜びを見出すところから近代登山は始まり、やがて、より高い山、より困難な季節やルートによる登山が行われるようになり、アルピニズム(alpinism)が誕生した。〈解説〉

## 【日本大百科全書 (ニッポニカ)】

- ・ 山に登ることだが、地理・地質の研究、動植物の採集や探求、山菜・薬草採集や鳥獣魚をとるために山へ登るのは登山が目的ではない。〈解説〉
- ・ 登山そのものを目的とし、そのなかに限りない喜びをみいだしながら、自己の生活のなかに生かしていくことが登山の本質であり、近代アルピニズムの真髄である。〈解説〉
- ・ 近年は登山人口が世界的に増加し、観光化する地域が増え、スキーによる登山もリフトの発達した地域が中心となり、シール(滑り止めのついたスキー)を履いて登るスキーツアーなどはあまりおこなわれなくなった。交通機関も発達し、乗鞍岳や立山、木曾駒ヶ岳などでは 2500 メートルの高度まで歩かずに登れるようになり、登山用の宿泊施設もホテル化するなど、登山は観光レクリエーション化した。〈解説〉
- ・ 登山人口は高年齢層にまでおよび、その意味で登山は盛んになったといえる。また職業ガイドの組織である日本アルパインガイド協会(論者注=現在は日本山岳ガイド協会に統合)も発達し、多様化した形で登山が行われるようになっている。(徳久球雄)←論者注 = 日本山岳文化学会、創設時副会長 〈解説〉

## 【デジタル大辞泉】 & 【大辞林 第3版】

- ・ 山に登ること。〈定義〉
- ・ 山登り。〈定義〉

## 【知恵蔵 2015】

- ・ 岩と雪の山に登るアルパイン・クライミング、谷や沢を下流から登る沢登り、タイムや得点を競う競技登山、登山の基本ともいえる尾根歩きなどがある。〈解説〉
- ・ 近年の登山は中高年層の尾根歩きがブームで圧倒的に多く、中高年登山という言葉まで出現。また、ガイドやインストラクターが引率して登山を楽しむガイド登山も盛んになっている。海外のガイド登山も増え、世界七大陸最高峰(セブンサミッツ)でも公募隊による遠征が行われている。(松倉一夫) 〈解説〉

## 【スポーツ用語がわかる辞典】

- ・ 山に登ること。〈定義〉
- ・ 尾根歩きやロッククライミング、フリークライミング、沢登り、トレッキング、競技登山などがある。〈解説〉
- ・ 登ること自体を目的にしたスポーツとしての登山を、「近代登山」、「アルピニズム」という。〈解説〉
- ・ 近代登山は1786年、フランスとイタリアの国境にあるモンブラン初登頂に始まり、1857年、イギリス山岳会の創設以降本格化して、1953年にヒラリーがネパールと中国の国境にあるエベレスト初登頂に成功した。日本では古くから宗教登山が盛んだったが、1888年のウェストンの来日以降、近代登山が発展し、1905年に日本山岳会が創設された。〈解説〉。

### 3. 概念の再定義

「山岳」を構成する主たる部分として「山」は存在します。人類発祥以前から存在する自然としての「山」は、ことさら定義づける必要のない、**公知の概念**と考えます。古代から人が意識する山は、神として崇められる御神体であり、それぞれに頂きをもった山に「富士山」や「エベレスト(現地名=ネパール:サガルマタ、中国:チョモランマ)」といった名前がつけられました。御神体ですから、人がその山へ登るなど、神への冒瀆行為でしかありませんでした。

その御神体へ登る(登山)ようになったのは、山岳信仰、山岳宗教に始まり、近代登山では山に登ること自体を目的(登山)としました。すでに人類より先に山はあり、その山を人類がどのように意識し、行為してきたか、それらの考察は登山と次元を異にする「**山岳文化**」の課題となります。以下に用語の再定義を試みます。

「山」とは、公知な実在としてある「山」。

「山登り」とは、「山に登ること」。

「登山」とは、「山登り」を目的とする行為。

「登山者」とは、「登山」する人。

### 3 章 . 登山と山岳スポーツのちがい

【19世紀の「スポーツ」概念は、「戸外でおこなわれる競技的性格を持つゲームや運動をおこなうこと、及びそのような娯楽の総称」を意味するとされます。さらに1968年の国際スポーツ・体育競技会(ICSPC)の「スポーツ宣言」では、「遊戯性の性格を持ち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動」と定義されたとしています。(井上俊、菊幸一『よくわかるスポーツ文化論』、ミネルヴァ書房、2013.07、P2)】

巨大建築が可能な現代では、19世紀の「戸外」という条件は当てはまりません。現代は大規模屋内運動場、球技場が建設され、多くのスポーツ種目が屋内競技化されています。クライミング競技のボルダリングは、屋外・屋内双方で実施されていますが、その規模は屋内仕様が当てはめられます。

その他のスポーツ要件については、遊戯性、競争、対決、運動等、妥当なところですが、だからといって「スポーツ」の下位分類に、「登山」をまるごと収めることは無理があります。「登山」に含み得る人間力の総合性は、「登山にはスポーツ要素を含む」という、スポーツの上位概念となり得ることが、本論の主張です。「されど山登り」の世界があるからです。

登山への動機分析を理解すれば分けられますが、動機の多様性が登山の多様化を招き、その多様化は人間がそなえる諸能力の証であり、山を登る行為の中へと実施、統合されていくからです。つまり登山は、身体的スポーツ要素と、情緒的要素の複合体であります。スポーツ要素は目に見えるから分かりやすく、情緒要素は目に見えにくく、かつ相互に分かり合うことが難しい性質をもっているためです。だからこそ、多様で複雑な進化を果たし、それら価値観の相違は、比較、序列化できるものでもなく、傍目からは混乱とも思える多様性を示すといえます。

例えば「ハイキング」は、山を登ること自体が目的でなく、山を鑑賞しながら山麓を歩くことや、危険のない低山(丘)を歩きます。今流行の「トレイルランニング」は、山に登るのが目的でなく、山岳を走り抜きます。「登る」という行為を同じくする

「フリークライミング」、その一種の「ボルダリング」は、山岳でない室内や海岸でもおこなわれています。これらの共通点は、身体運動の自由な解放気分を楽しめることがあり、この体験のことを「山岳スポーツ」として、登山と異なるジャンル分けをすることが、本論の主旨であります。

## 1. スポーツの社会性

「死の断絶」は多様な文化様式を生み出しました。自然の中で安全を担保し、死生観を伴わない身体的行為へ移行していくと、その行為は「スポーツ」と呼ばれる分野へと展開されていきます。死生観をともなった登山と、死生観をともなわない登山との比較は、思考空間が別な世界となり、単純に比較することができません。しかし、死生観をともなわない登山だけを考えてみれば、心身の適応能力等において、その比較競争はスポーツ種目の展開となって、益々進化を果たします。

では「スポーツの定義」とはいかなるものとなるでしょうか。

まず私が考える定義を以下に提示しておきます。

**【スポーツの定義 = 安全を担保した環境の中で心身をもって、自己と自然との対峙、または自己と他者との競争・競技により、自己の存在を再確認する行為とその記録】**

『よくわかる スポーツ文化論』（井上俊、菊幸一・編著、ミネルヴァ書房、2012年）によれば、1968年の国際スポーツ・体育協議会(ICSPC)「スポーツ宣言」をとりあげ、「スポーツの定義」は【遊戯の性格を持ち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動】と記述しています。さらに【近代スポーツの特徴としては、①教育的性格、②禁欲的性格、③倫理的性格、④知的・技術的性格、⑤組織的性格、⑥都市的性格、⑦非暴力的性格】を強調し、【近代社会における人びとのライフスタイルにとって基本的に望まれること】をあげています。【古代ギリシャ、ローマ時代にも「スポーツ」が存在していたといわれるように、広い意味で

のスポーツ的な営みはあらゆる**文明**において見出され、それぞれの**文明**や時代、社会の特徴を帯びながら、**文化**としての共通性をもって世界中に遍在してきたものと考えられます】と述べますが、「**文明と文化**」の違いに対する言及はありません。文脈から読み解けば、「ギリシャ文明、ローマ文明」といった国家や社会という実態(有形)の総体を称して「**文明**」とし、法や制度、知識(哲学や科学)、芸術、遊戯などの意識に刷り込まれる個別細分化した価値(意識、無形)の総称を「**文化**」としてるように読み取れます。

さらに同論は、「**スポーツをめぐる文化**」において、スポーツを三段階のピラミッド構造に分けています。最下層は「**物質文化**」としての物的用具(用具、施設、衣服等)、中間層は「**行動文化**」としての技術体系(各種目の技術)と規範体系(ルール、フェアプレイ精神、スポーツマンシップ等)、上位層は「**観念文化**」としてのスポーツ論としています。

ではスポーツを特徴づける中心要素は何でしょうか。それは「**記録**」にあると云えます。

「**記録**」が意味する、時間、距離(長さ、高さ)、重さ、回数、というデジタル要素は、物理定数そのものであり、競技における客観的比較を担保します。データを比較し、優劣を競い、その中で優れていたいとする人間の欲望が育まれます。そして「**記録を求め、他者に優越したい欲求**」は、人間の闘争本能と優越感を満たします。人間の闘争本能は戦争から遊戯に至るまで、様々に類別できます。例えば、途上国に対する先進国、オリンピックメダリスト、ノーベル賞受賞等々、様々な類別呼称をもって優越が顕彰されています。

その初源を「**遊戯**」に求め、その成果を『**ホモ・ルーデンス**』(訳本:中央公論社、1971.9)にまとめたのがヨハン・ホイジンガでした。「**遊戯**」の根源を探り、文化の一つに「**スポーツ**」を取り込んでいます。冒頭の「序説」において、【遊戯は、ここでは文化現象として捉えられる。生物学的機能としてではない。】として、「**遊戯** ⇒ **文化**」をまず主張しています。ホイジンガが文化現象と生物学的機能とを分けて考えていることに対し、私は「**文化現象** ⇒ **欲望の充足** ⇒ **文化**」と「**生物学的機能** ⇒ **欲求の充足** ⇒ **文明**」として、解釈内容を加えてみたいと思

います。(人の意識・文明・文化＝環境の複素的な世界構造)

部族集団生活の古代から都市・国家・国民生活に至る現代まで、人類の闘争本能は「遊戯 ⇒ 文化」の範囲において平和裡に活用されてきました。単純に個と個がジャレ合う遊びから、統治の潤滑油(ガス抜き)に利用されるまで、知らぬ間に日常生活の中に組み込まれてきました。それが「遊戯」の平和な範囲(文化)を超え、相手の滅亡領域まで達すると、「**遊戯 ⇒ 文化 ⇒ 戦争 ⇒ 文明の興亡**」へと進んでしまいます。「遊戯 ⇒ 文化」の平和な範囲にあれば、「遊戯」の活用と尊重・充実は、オリンピック憲章に表現されるよう「**戦争 ⇒ 文明の興亡**」への抑止力でいられます。

一方で現代文化における遊戯要素の考察において、ホイジンガは【時代感覚の差は、たまたまその人が属することになった世代の差異によっているというだけのものではない。それはその人の所有している知識如何にも、おおいに依存しているのである。一般に、歴史的視野の上立った人は、瞬間という近視眼的な視野の中で生きている人より、過去というものを〈現代〉〈今日〉というイメージとして、その心に受け止めていることが多い。(P-325)】と述べています。〈知識〉は蓄えるだけでなく、蓄えた知識を活用し歴史的広い視野で物事を考え〈現代〉を把握すること、今という瞬間を〈今日〉と捉えて対処すること、〈知識とその活用の差〉によっても時代感覚の差が生じることを述べます。このことを逆説的に考えると、「知識によって物事を考え、理解し、他者に伝えることの難しさ」、極論を述べれば「発信者の意図と受信者の理解には、両者の知識の差によって、全く同じように伝わらず差異を生じる」ことも示します。

それはさておきホイジンガは、【スポーツが社会機能として、社会の共同生活の中で次第にその意義を押し広げ、次々と大きな分野を、その領域の中へ引き込んでいるのである。(P-326)】と、指摘しています。ホイジンガの指摘から 40 年以上過ぎる現代において、スポーツは益々興隆をきわめています。身体の殺戮をともなう戦争ではなく、「安全」を担保したスポーツの闘争は、オリンピックやワールドカップ競技として、国家や地域の団結と力の誇示の代理戦争でもあります。ナショナリズムを戦争へと駆り立てない「**ガス抜き装置**」として、十分に機能しています。

【『ホモ・ルーデンス』の目次と項目ダイジェスト】

- ① 文化現象としての遊戯の本質と意味……文化因子の遊戯、自律的範疇の遊戯、他
- ② 遊戯概念の発想とその言語による表現……遊戯の概念、表現、真面目、他
- ③ 文化を創造する機能としての遊戯と競技……遊戯としての文化、競技は遊戯、他
- ④ 遊戯と法律……競技としての訴訟、権利をめぐる競技、裁判と賭け、他
- ⑤ 遊戯と戦争……闘争は遊戯、戦争の競技性、戦争の祭儀性と闘技性、儀式と戦術、
- ⑥ 遊戯と知識……競技と知識、哲学的思考の発生、競技は祭祀、社交遊戯、他
- ⑦ 遊戯と詩……詩は遊戯の中に生まれた、文化の遊戯相としての神話、他
- ⑧ 詩的形成の機能……形象化、抽象概念、擬人化、詩の諸要素は遊戯機能、他
- ⑨ 哲学の種々の遊戯形式……哲学的対話の起源、学問の闘技的性格、他
- ⑩ 芸術の種々の遊戯形式……音楽と遊戯、舞踏は純粋遊戯、造形芸術と遊戯、他
- ⑪ <遊戯ノ相ノモトニ>見た文化と時代の変遷……古代以後諸文化の遊戯因子、他
- ⑫ 現代文化における遊戯要素……スポーツ、職業、芸術、科学、政治・国際政治、  
現代戦における競技因子、遊戯要素は不可欠

人類相互の闘争本能は弱められるのか、進化の欲求と等しく、人類(生物)を人間たらしめてきた本能、欲望と知性とのバランスを、今の社会はもう一度正面から見直さなければならない時節にあると思います。人類が減びないためには、文明～文化～人の意識を宇宙の進化とともに、人間環境として知識の活用、知恵の発揮が今こそ必要と思うのです。

さらにホイジンガは、【スポーツの組織化と訓練が絶え間なく強化されていくと共に、長い間には純粋な遊戯内容が、そこから失われていくのである。このことは**プロの競技者とアマチュア愛好家の分離**の中に現われている。遊戯がもはや遊戯でなくなっている人々、能力では高いものを持ちながら、その地位では真の遊戯者の下に位置させられる人々(プロ遊戯者)が区別されてしまうのだ。これら職業遊戯者のあり方は、もはや真の遊戯精神ではない。そこには自然なもの、気楽な感じが欠けている。こうして、現代社会では、スポーツが次第に純粋の遊戯領域から遠ざかってゆき、

〈それ自体の〉 sui generis(独自の) 一要素となっている。つまり、それはもはや遊戯ではないし、それでいて真面目でもないのだ。現代社会生活の中ではスポーツは本来の文化過程のかたわらに、それから免れたところに位置を占めてしまった。本来の文化過程は、スポーツ以外の場で進められてゆくのである。(P-328)【論者注:この記述は1970年代以前のアマチュア優位時代の考察】と、指摘しています。しかしホイジンガ世代におけるオリンピックは、アマチュア優先思想の時代でありました。1972年、IOC 会長アベリー・ブランデー退任以降はプロのオリンピック参加が次第に認められることとなり、次なる問題としては“過度な商業主義”が蔓延するのです。

ブランデー退任以前のアマチュア区分においては、① アマチュア(文化的)、② ステートアマチュア(共産圏の国家支援プロ)、③ コマーシャルアマチュア(企業支援プロ)がありました。アマチュアは貴族や市民の遊戯性を体現する演技者として文化的価値が高く、その貴族や市民の観賞欲を満たす格闘技等の身体競技者は“プロ”として、アマチュアよりも一段下層に位置づけられていました。身体競技の頂点に君臨してきたオリンピック運営は、近代オリンピック創設者、ピエール・ド・クーベルタン男爵の名言【オリンピックで最も重要なことは、勝つことではなく参加することである】に代表されるよう、貴族趣味的文化性があったからです。併せてクーベルタン男爵は、【同様に、人生において最も重要なことは、勝つことではなく奮励努力することである】としますが、奴隷制を残す未成熟社会の上に立った市民の遊び目線からの、文化的スローガン(ソフトパワー)を述べます。

ホイジンガの指摘から40年以上過ぎた現代スポーツは、競技者と指導者、さらに支援組織のチームプレーとなり、個人的なアマチュア概念とは別物となっています。各種目競技団体は国際化し、それら頂点の競技大会をオリンピック、ワールドカップ、世界選手権等々として、戦争をはるかに超えた人類社会の一大イベントとなっています。イベント結果の情報価値は競技者を離れ、送り手のメディア、受け手の市民・国民・民族、それぞれの文化圏を巻き込んだ平和裡な代理戦争になり得ます。もはや遊戯としての単純なスポーツではなく、文化による戦争の抑止力、あるいは闘争心のガス抜きともいえます。【スポーツを通じて世界は一つになる】や【オリンピックは単なる世界選手権大会ではない。それは平和と青春の花園である】とい

うターベルタン男爵の名言は、戦争に代わる平和裡なイベント(興行)として、世界のビジネスチャンスを満たします。そして“**過度な商業主義**”は、感性の純真さ(文化性)を損なってゆきます。スポーツの最高峰・オリンピックはこのように、遊戯性をはるかに超えた文化のソフトパワーを発揮します。しかしその持てるパワーの下で、「純真な感性」が蝕まれる副作用もあるのです。ソフトパワーが秘める権力、政治、価値等の無形な架空性(虚な世界)は「**情報**」となって伝播し、人々の知性と感性、そして心を満たします。「**実な社会**」意識の中に、「**虚な社会構造**」が気づかぬうちにのしかかり、現実世界を構成します。純粹にスポーツを目指す人々の目標は、自己又は他者との「**記録の比較、更新**」ですが、それは哲学的「**虚無の世界**」、仏教的「**空の世界**」ではありません。むしろ一神教的でデジタルックな、「**神の世界**」に近づくことが目標となります。「**記録＝神**」の世界です。

ホイジンガは、【古代文化の中では、競技が常に神に捧げられた祝祭の一部をなして幸をもたらす神聖な儀礼として、不可欠なものとされていた。(P-328)】と指摘しているように、記録中心となった現代スポーツは、“**祭祀への先祖返り**”と考察することができます。波動は周期(サイクル)という性質を持ち、繰り返し現れます。文明—文化の大きなサイクル変動の中で、スポーツは遊戯の祭祀性として様式を変え、オリンピック、ワールドカップ、その他多くの国際大会となって、再び現代に蘇っているとも理解できます。

## **2. 登山のスポーツ意識の普及～RCC II**

戦前に存在した日本初のロッククライミング同人「RCC (ロッククライミング・クラブ)」は、その後 1958 年 1 月に**第二次RCC**として再結成されます。「**これに属さない一流クライマーではない**」と言わしめる活躍があり、国内の未踏岩壁を登りつくし、ヨーロッパ・アルプス3大北壁(アイガー、マッターホルン、グランドジョラス)等を制覇して、日本のアルピニズムの流れを登山の中心に築きました。そして『日本の岩場』という、国内岩壁登攀ルート図集とともに、グレード評価をおこないます。巻頭で時の代表者、上田哲農氏は次のように記されます。

【 私たちは、現在、行為される岩登りの現実を熟慮した結果 —— 「近代登山はスポーツ的要素を含む」 —— という定説のもつ、あいまいな表現を拒否し、それが人と人の競技ではないにしても、さらに一步、スポーツそれ自体の本質に近づきつつあるのが現状であり、また、これとは全く別の次元で登山という感覚から離れて、岩自体を楽しむ、スポーツそのものの岩登りが、別の人達によって誕生しつつある事実をも知っている。

この二つの傾向の構成分子は、スポーツ以外のもの —— 古い装いであるところの情緒的要素を捨て去り、冷厳な岩そのものの上に、片方はアルピニズムをスポーツ的見地から解明しようとし、他は「新しき価値」として、その出発をスポーツから拡張たものである。RCC—IIは、前者に属する。『日本の岩場 グレードとルート図集』、第2次RCC、山と溪谷社、1965年】

1967年、当時21歳だった私は「小さな批判 —RCCIIへ—」という一文を書きました。青年海外協力隊でラオスへ赴任する元クライミング・パートナー、H氏へ餞別の書『一ノ倉』（田中丈夫、1967年、A5版、謄写版刷、96頁、簡易製本）に収録。

そして……、【果たして現代登山には、情緒的要素が不要なのだろうか？冷厳な岩そのものの上にあるアルピニズムとは、果たしてどのようなものであろうか？「スポーツ要素をふくむ」という定説のあいまいな表現を、果たして拒否する必要が現代登山にあるというのだろうか？

しかし僕は思う。彼ら(RCCII)こそ、最も情熱的な人間ではないか】……、と。

さらに……、【「近代登山はスポーツ的要素をふくむ」 —— それで良いではないか。そして、「ならば、それ以外にどんな要素がふくまれるのか。その間の関係は、それが僕らにとってどれほど必要なことなのか。どうして山は、僕ら呼び続けているのだろうか……」と、アルピニズムの行為を通して思索し続けたいのだろうか。捨てることなく、論証することこそ、現代登山家のなすべき道程ではなからうか。そして山は、そんな僕らに関係なく、いつも、そこに、存在しているのだ。

僕は山に登り、哲学へと導かれた。美と芸術へと導かれた。宗教を考えさせられ、心理学も教えられた。そして今、生活の主要な一部となっている。

山登りは文明ではなく、文化の所産なのだ。そして文化は、文明によって支えら

れている。（拙著『若き日の山々』2014年、未出版、A5版、162頁、再収録）】・・・、と。

引用が長くなりましたが、登山とスポーツの関係は、古くて新しい問題であり、山岳界では誰も整理をしてこなかった、古い問題です。そして前記のように RCC II の実績と思想が、日本登山界の主流となります。社会人山岳会が活躍し、大学山岳部は衰退していきます。1960年に日本山岳協会が発足しますが、アルピニズムとスポーツが一体となった「スポーツ・アルピニズム」は、今も続いています。フランスの名アルピニスト、ガストン・レビュファは名著『岩と雪』、『星と嵐』等々で、アルピニズムの中に含まれるロマンを表現していました。日本では、RCC II が切り捨てた「情緒的要素」をもって「登山」を考える思想は、今もって発展しませんでした。

半世紀あまりを過ごした今再び、「第二次登山ブーム」と言われます。1,000万人を前後する登山者が、山々を賑わしています。高齢者から若年層に至るまで、「登山の多様化」現象として現れ、高齢者の山岳遭難事故も増えてきました。また登るだけでなく、大学生の卒業論文や大学教授の論文テーマとして、登山動機の心理面研究や行動パターンの調査等が、学問対象として登場することになります。他方では「スポーツ・クライミング」が国体種目となり、2020年東京オリンピックの追加種目候補、5種目のうちのひとつとなっています。スポーツ・クライミングをおこなう人口は、約50万人と推計されています。

※ 2012年の登山人口 = 860万人（2013年レジャー白書）

2009年の登山人口 = 1,230万人（2010年レジャー白書）

登山用品市場 ≒ 1,860億円（産経新聞：ビジネスの裏側）

スポーツ・クライミング人口推計 ≒ 50.2万人（内：常連 ≒ 2.2万人）[mickipedia.blog113](http://mickipedia.blog113)

前記 RCC II によって、【全く別の次元で登山という感覚から離れて、岩自体を楽しむ、スポーツそのものの岩登りが、別の人達によって誕生しつつある事実】とした「フリークライミング」は現代、各種の大会を開いて盛況となり、オリンピック種目候補に挙がるほどです。他方、RCC II が目指したアルピニズムは成長の限界を過ぎ去り、衰退の一途をたどっています。

### 3. アルピニズムの衰退

登山をスポーツと定義して謳歌したはずのアルピニズムが衰退し、スポーツ登山とは別次元なものと切り捨てたフリークライミングが盛況となったこの半世紀において、「アルピニズムの衰退の原因」は一体何であったでしょうか。その答えを持論で述べれば、以下となります。

第一に、RCC II が中核となって展開させた“アルピニズム＝スポーツ＝登山”という関連付けにおいて、地球上の山頂やバリエーション・ルートは有限なものですから、限界の先に衰退があることを論理展開で忘れてしまったからでしょう。現代の地球環境問題を、日本のアルピニズムはまさに先取りした格好です。

第二に、登山をスポーツの下位概念として押し込めてしまった結果によります。登山の動機は多様であり、勿論その中にスポーツ要素も含むわけですが、そのスポーツ要素だけを別次元と切り捨てた「フリークライミング」が独自の展開を果たし、現在の盛況となります。一方でアルピニズムは探検、冒険、開拓場所を失い、パイオニアワークを発揮することができません。そのことは 1953 年にエベレストが登頂された以降を指して、本多勝一氏が「山は死んだ」と述べました。RCC II の展開はその後の登山ですから、彼らの主張には賞味期限が隠されていたわけです。

第三に、日本は先進国となって文明度が上がり、物質的豊かさの中で、非日常的な山岳環境を開発し、日常的環境を山岳に持ち込んだことにあります。アルピニズム登山の非日常的体験は、日常生活途上の災害や危機対応へと応用できるのですが、近年は逆に、日常生活そのものを山岳へと持込み、それに呼応する諸産業が追従した結果、山岳の非日常性が日常の周縁として組み込まれてしまったのです。従って、東日本大震災のような自然災害においては、個々の自主対応能力が劣化し、代わりに行政機関を柱とした日常社会システムの中へ、非日常対応を組み込んでいます。文明社会の日常性の中に、非日常的災害等を組み込んでいます。

10 年前の 2005 年を反映する、2006 年『レジャー白書』において、【レジャーの中で日常よりも非日常を楽しみたいとする者は、全体の 38.3%に留まる(P.94)】となっています。10 年前すでに、およそ 6 割の多数派は、日常の延長で余暇を楽し

む結果が示されていました。さらに同白書の第2節では、【団塊世代と「これからの10年」の余暇】があり、以下の特徴を見出すことができます。

- ① 自宅よりも外で 60～70%
- ② 価格よりも感動重視 60%超、特に女性
- ③ 男性はのんびり志向 50%程度、女性の60%以上は行動志向
- ④ 男性は仲間志向 50%程度、女性の60%以上は仲間志向
- ⑤ 日常派は60%以上、非日常派は40%未満
- ⑥ 気軽な余暇志向は男性79%、女性65%
- ⑦ 新しい楽しみチャレンジは33%

団塊の世代が定年退職を迎えた2015年の現在、数字はともかく、傾向は全てその通りの結果を迎えています。子育てと組織・管理社会の中で働きずくめから開放され、以後の人生に自己実現を図ると見るのは一般的です。しかし別な考えを述べれば、「生き方の違い(生き様)」を指摘することができます。子育て、仕事、趣味、これら全てを自分の人生と覚悟して過ごす中で、「悔いを残さぬ時の過ごし方」の中で全力を尽くすこと、すなわち子育て、仕事、趣味、を分けて事に当たるのではなく、全てを一緒くたにしたその時々の中で、それぞれの課題に向き合って挑むことの継続、それを人生と受け止めるという生き方です。アルピニズムという思想はなにも登山だけにあるのではなく、何事においても「**より進歩、向上**」をめざす様態は、人類進化の方向性として必然な「**文明的性向**」そのものなのです。還暦、定年退職、確かに区切りや転換点ではありますが、そこで大きく変節するのではなく、連続の中の通過点とみる考え方です。一本の竹とそれぞれの節のように、人生を一本の竹とすれば、真っ直ぐに伸びているか、途中で曲がってしまうかの違いのように例えられます。なにも還暦、定年退職で曲がることなく、常に志は一本の竹のごとく、真っ直ぐに伸ばし続けたいと私は思うのです。アルピニズムという思想はなにも登山の中だけにあるのではなく、一人ひとりの人生を貫く志(こころざし)なのですから。

さらにアルピニズムの衰退とは、そのように生きる必要がなくなった人々が増えたという、文明と文化の変化にともなう必然ともいえます。

レジャー白書の統計からは、そのようなことが読み解けました。

## 4. アルピニズムへの希望

時代の社会風潮、高度経済成長社会の森の視点から展開させた「古きアルピニズム」は、有限な地球環境の中で「人類初や世界初」という森の概念の臨界を迎え、衰退に向いました。

「新たなアルピニズム」の希望を考えるならば、個とした木の視点からの出発となります。人類が続くかぎりにおいて、個体としての体験サイクルは繰り返されます。つまり、「新たなアルピニズム」の概念は個の体験という、森ではない木の視点から展開すべき時節にあるのです。登山成果は他者との比較競争にさらされるのではなく、多様な個性となって「それぞれの人生」という一本の竹を貫いてゆくものとなります。つまり、個が多様であるならば、それぞれの人生も多様な存在であることとなります。しかしながら人は、有形で目に見える存在から、無形で目に見えにくい「虚な世界」を含んだ人生に安堵できません。多様な世界で自立し、一人でいること不安定よりも、同類なパターンの人々と群れているほうが安堵を覚える生物個体的弱者でもありましょう。

RCCⅡが述べた、【近代登山はスポーツ的要素を含む—— という定説のもつ、あいまいな表現を拒否】しないで、私が主張する文化的展開は、21世紀の多様化社会の中でまだ有効に機能し得る登山の役割であると考えます。登山はスポーツに属するのではなく、登山の中にスポーツ要素が含まれるのであって、登山とスポーツは別物と分けて考えて取り扱い、登山の本質に文化的探求を意識づけた一般理解が深まるよう、登山の意識を再認識することが重要と考えます。

1978年、ヒマラヤ登山遭難隊長として背負った様々な失敗の責任からそのことを考え続け、できることを成し続けることが、私の第二の人生となりました。また、生き抜く力となったことや、語り尽くせない人生への自信を与えてくれた経験は、私の生涯の宝となりました。

登山とはこのように、人生を賭けて値する、大きな気づきを与えてくれます。スポーツと割り切るにはあまりに惜しく、深い人生哲学を読み取ることができます。「現代登山と山岳スポーツ等の生態系」分類をおこなう中で、現役登山者のみなさんに、じ

つくりと考えていただけたらと、老いを歩む一人のお節介なメッセージ(道標)です。

各種スポーツ競技者も、その先には「道」があります。剣道、柔道、野球道、〇〇道、…。そのことは競技、競争と別な次元の世界観を生み出します。「新たなアルピニズム」は自らの限界に気づき、競い、争う、小さな哲学者ともなれます。そのようなことが苦手な人は、多数派となるでしょう。人間の二分法的性格分類をおこなうと、「山型」と「海型」に分かれます。別な表現とすれば、山型＝内向的・自省的な性格、海型＝開放的・外交的な性格、となりますが、この二つの気質は持って生まれた性格として、遺伝的必然とゆらぎの偶然によるものと理解します。

どちらが良い、悪いといった相対論ではなく、双方が補い合えばより完全に近づく相補的統合が可能です。お互いの感性が分かり合えないにしても、その存在意味、存在場所は許容できるはずです。相反する二つを「対称性」として捉えてみると、宇宙の物質存在の基本原理、「CP対称性」に類似(フラクタル)してきます。

人類は文明作用(人工化)によって自然の対称性を破り、エネルギーを加えて人工物を造りあげます。そして文化も相補的対称性を破って競い、戦い、一方の価値へと収奪します。しかし「新たなアルピニズム」は、自らの心の内の戦いですから、他者を収奪することがない平和裡な自己との戦いです。敗れたところには自らの「死」が待っている、危険な思想といえます。だから、誰にでも薦めることはできませんが、適格性をもった登山者には、最高な人生舞台となり得ることを忘れてはなりません。

「新たなアルピニズム」の理論展開はできるとしても、それが実践される可能性は低いものと思います。大衆ウケを望むものではなく、大衆に向かってキラリと光る小さな星のような存在として、希望を託することができるのではないのでしょうか。

## ※ CP対称性

素粒子物理学では、左右だけでなく、上下や前後を反転させても物理法則は変わらないことになっていて、そのように空間を反転させることをパリティ変換といいます。そして、左右や上下を入れ替えても物理法則に変化がないことをパリティ対称性とよぶのです。

このパリティ対称性がCP対称性のPの部分です。では、Cは何を意味するかといえば、粒子と反粒子の入れ替えのことで、電荷共役といいます。この変換によって粒子を反転すると、その粒子に対応する反粒子になります。つまり、C対称性が保たれていれば、粒子から反粒子に変換することができるのです。

(村山斉『宇宙になぜ我々が存在するのか』講談社、2013年、P.48)

※ 1964年にK中間子でCP対称性が破られてしまう現象が見つかった。

## ※ CP対称性の破れ

「小林一益川理論」 ← ノーベル賞受賞

この理論では、クォークが3世代6種類あれば、CP対称性の破れが説明できるといいます。…(省略)…

この宇宙がはじまった直後に、粒子が生まれ出されると同時に同じ量の反粒子も誕生しました。粒子と反粒子はペアで生まれて、ペアで消滅するので、完全の対称性が保たれているならば、すべての粒子は反粒子とともに消滅して、この宇宙には何もなくなってしまうはず。ところが、いつの間にか反粒子はこの宇宙から姿を消して、粒子だけが残っています。この粒子だけが残っている理由にCP対称性の破れが関係していると考えられているのです。小林一益川理論は、単にクォークの数を予言しただけではなく、この宇宙に物質が残った理由を理解するためにも大切な理論なのです。(同上、P.51-52)

## 4 章 . 国民体育～山岳と登山の使い分け

これまでの日本文化では、登山方法や登山者についての分類や類型だった研究は、少なかった。なぜならば、太平洋戦争に破れて疲弊した戦後社会の中で、国民の健康増進を目標にかかげた国民体育普及の一環として、「山登り」が取り入れられていたことが原因の一つと指摘できるでしょう。

終戦の翌年 3 月に生まれた私は、小学校 5～6 年生の夏休み、学校行事で大山（雨降山 1,252m）登山に行かされました。平塚の地に生まれ、毎日大山を見上げながら過ごしていましたが、子供心にその頂へ登る発想はありませんでした。学校行事をこなすバスに揺られた引率登山でしたが、行事の目的は学童体育の向上であったものと思われます。大山山頂から、さらに西にそびえる丹沢山塊の荘厳さに、小学生だった私の心が畏敬の念に包まれた記憶は今も残ります。しかし、「国民体育」の一環だったことなど、知るべくもありませんでした。

### 1. 日本山岳会

1956 年 5 月 9 日、マナスル(8,163m) 初登頂が日本山岳会隊によって果たされました。その翌年、「マナスルに立つ」という記録映画鑑賞が、学校行事としておこなわれました。小学校から街の映画館まで、1 時間近く歩いて見に行かされたのは、小学 6 年生だったと思います。マナスル氷河を歩く隊員は、まるで別世界を歩いているような、現実感の全くない異次元世界に見えました。まさかその 17 年後(1974 年)、マナスルのお隣の山、P29 (7,835m=測量番号であるとともに、世界で 29 番目の高さの山)を登りに行くことなど、全く想いもよらぬことでした。

公益社団法人日本山岳会は 1905 年(明治 38 年)、日本で最初につくられた山岳会で、110 年の伝統を有する日本登山界の中核です。初代会長・小島久太(鳥水:横浜商法学校～横浜正金銀行)を始め、設立発起人 7 人の顔ぶれは多彩で、知識人や資産家でもありました。日本開国の港「横浜」の地で、英国人宣教師で登山家のウ

オルター・ウエストンと交遊関係にあった小島烏水は、ウエストンから山岳会設立を勧められたとされます。

**日本山岳会**は日本の登山界にあつて中核を占めてきました。1960年、日本山岳会は全日本山岳連盟と合流して**日本山岳協会**を設立し、**日本体育協会加盟団体**となります。1968年、日本山岳協会の法人化(文部省)にともない、日本山岳会は組織上、東京都山岳連盟傘下の一山岳会となります。これにより、日本体育協会傘下の山岳組織のトップは、日本山岳協会となります。しかし一山岳会となっても全国の支部体制は残ります。2012年には日本山岳協会と同格な公益社団法人に移行し、現在でも全国32支部、約5,100人の会員を擁する、日本を代表するアルパイン・クラブとされています。日本山岳会の入会案内には、【①日本山岳会は、山を愛する人々が集まる会です。②日本山岳会は仲間と山登りをする会です。③日本山岳会は山登りの趣味の会です。ですが山登りという趣味は、限りなくフィールドが広く豊かな世界です。等々】、とあります。この趣旨から、あらゆる山との付き合い方が含まれていることがわかります。さらに目的として、【山岳に関する研究並びに知識の普及及び健全な登山指導、奨励をなし、あわせて会員相互の連絡懇親をはかるとともに、登山を通じてあまねく体育、文化及び自然愛護の精神の高揚をはかることを目的とする】、とあります。つまり、「**山岳**」という自然の中で、「**登山**」を通じて仲間とともに諸活動する団体です。従って行政機関からは独立した自主自立的な存在であり、国体に付随した山岳競技スポーツ路線でもなく、幅広い自主自立の総合登山を展開しています。ただ、「登山」についての定義はありませんが、「すべからく山に登ることを登山」としているように見受けられます。さらに登山だけでなく、「**趣味**」として生涯山と関わってゆく様々な中で、喜びを仲間と分かち合う「**山岳文化**」を含む文脈もうかがえます。

日本山岳会は最古の山岳会であるとともに、文部省～大学山岳部関係者が中心となる組織でした。他方、全日本山岳連盟は、社会人山岳会が中心の組織でした。戦後の外貨持ち出し制限は、一般社会人山岳会の海外遠征登山にとって資金調達ができません。大学山岳部関係となれば学術調査を名目として、文部省(現:文部科学省)の外貨割当の中から、遠征登山資金を調達できました。外貨持ち出し制限と

海外登山層との関連は、大きなものがありました。1964年、日本がIMF8条国に指定された後、外貨の持ち出し制限が順次緩和されます。一人一回の持ち出し制限額は、1964年⇒\$500-、1969年⇒\$700-、1971年⇒\$3,000、1972年⇒制限なし、という次第です。

象徴的な海外登山はマナスル初登頂で、1952の踏査隊派遣から1956年初登頂に至るまで、日本山岳会によっておこなわれました。1956年当時の一般人は、外貨の持ち出しができませんから、一般社会人山岳会のヒマラヤ登山(渡航上は観光目的)は門戸が閉ざされています。制限撤廃となった1972年以降になり、一般社会人山岳団体のヒマラヤ登山は活発に展開されます。私が初めて韓国遠征に行った1967年、制限の枠は一人\$500-、個人負担金は一人\$100-の遠征でした。1974年、横浜山岳協会P29南西壁登山は、制限撤廃となった2年後となります。世界視野での登山様態の変遷は、世界情勢の変化によっても関連づけられます。

日本人の外貨持ち出し制限と時期が重なる、1965～1968年に亘り、地上最高峰エベレストを含むネパール・ヒマラヤの全面入山禁止となります。1968年から順次解除されますが、1974年のP29遠征にあっても、ネパール政府の国内引き締めは厳しく、スパイ罪適用に注意をはらいます。重要な地域へ入る登山隊には軍隊出向のリエゾン・オフィサーが、その他の地域へ向かう登山隊には警察出向のリエゾン・オフィサーの管理下におかれました。

## 2. 日本山岳協会設立と国民体育大会

1960年、日本体育協会が仲介役となり、日本山岳会と全日本山岳連盟を一本化させた統一組織、「**日本山岳協会**」が設立されます。さらに日本山岳協会は、日本体育協会傘下の加盟団体となります。このことが登山と国民体育大会を結びつけ、さらにはオリンピック憲章のアマチュア規則に登山が結びつけられることとなります。登山が本来備えている個の自由な表現や探求、趣味を「文化」として成熟させようとする日本山岳会発祥の原点は移行し、国民体育を飛び越えて、オリンピックを頂点とする国家、行政統轄色の滲む「**スポーツ競技団体化**」と「**組織 vs 未組織**

**登山者意識**は、より一層強いものとなります。

個の自由な表現行為であるべき登山と、国民体育大会参加種目から競技種目となった原点、さらにオリンピックとの関係を考えてみましょう。

国民体育大会における「山岳競技化」への経緯は、元・日本山岳協会会長、さらに日本山岳文化学会創設会長となられた斎藤一男氏の近著、『山 その日この人』（論創社、2015年）の下巻、第7章2、「国際競技大会」、3、「スポーツクライミング・コンペディション」、4、「山岳競技」に詳しく述べられています。（P.222～242）

- 1) 登山のクライミング部門における競技化の世界的流れ
  - 2) それに連動する日本国内での流れ
  - 3) 1960年4月1日、日本山岳協会設立と同時に日本体育協会傘下組織となり、国民体育大会へ参加した経緯。初期の国体参加は精神面を強調した儀式的集団登山様式となり、オリンピック精神を地でゆく「参加することに意義がある（クーベルタン男爵語録）」として得点にからみません。参加者たちは肩身が狭く感じ、得点種目化を目指す採点競技化へと意欲が増し、第20回（1965年）岐阜大会で得点種目の試行となり、その後第35回（1980年）栃木国体からは天皇杯・皇后杯を競う得点競技に正式参加となります。
  - 4) 日本体育協会に促されて、全日本山岳連盟と日本山岳会の統合が図られて設立された日本山岳協会と、日本体育協会との関係、
  - 5) 日本山岳協会と国民体育大会山岳競技の得点種目化一連の流れ
- 以上が簡潔に、うまく説明されています。

斎藤一男氏は、現在（2015年9月）尊命される岳人の中では生き字引的な存在で、晩年の著作は日本の登山を総括（登山総合史）されています。戦後登山を牽引した先鋭的な社会人登山グループ「山岳同志会」創設を起点に、日本山書の会、山岳展望の会、山岳文化学会を創設されました。また東京都山岳連盟、日本山岳協会、アジア山岳連盟、日本山岳文化学会等々の会長職を歴任された、山岳界の第一人者でもあります。

組織に群がるのが嫌いな私は、山岳展望の会と日本山岳文化学会で斎藤さんと名前を連ねさせていただきましたが、直接お目にかかっていた話しや、お手紙をい

ただいたのは、日本山岳文化学会設立総会以降となります。その設立総会会場で、斎藤会長と初対面の会話を記したのが、【「山岳展望」17号から「山岳文化」へ】（日本山岳文化学会機関紙「山岳文化」第3号、2005年）のくだりです。

1973年、「山岳展望の会」機関紙「山岳展望」第17号に私が執筆した論文【**社団法人 日本山岳協会への批判**】が載りました。17号発刊後、「山岳展望の会」の活動は休眠状態となりましたが、その30年後の2003年に生まれ変わって誕生したのが「日本山岳文化学会」です。設立総会席上、斎藤会長との初対面での第一声は「また、あのような論文を書いて下さい」の一言でした。ほとんど反響がなかった30年前の論文、「日本山岳協会への批判」を忘れずに記憶されていた斎藤会長に驚くとともに、日山協会長を歴任された後だったその時、当時の論文をどのように受け止められていたのかまで、話は深まりませんでした。しかし山岳文化学会機関紙「山岳文化」創刊第1号に斎藤会長が書かれた、「山岳文化よ、大いに興れ」の末尾を締めくくる以下の文章は、確かに私の共感を呼び起こしました。

登山のための登山こそ正統派、と称した時代はどこへ行ってしまったのか。かつては若者の歓声にどよめき、長蛇の列を連ねた山に昔日の面影はない。山頂には不釣り合いの看板の前で中高年者の群れが写真に興じ、足元の三角点を見落とし、展望する山の名も知らない。高山ハイキングは、もはや「生活」圏の一部なのだろうか。日本は、ふたたび浮薄な時代に直面しているが、気骨に満ちた先人たちの山に対し、姿勢を振興したい。

私たちの山岳文化学会は、このためにある。

（日本山岳文化学会：機関紙：「山岳文化」創刊号（第1号）、アテネ書房、2003 P.6）

文頭の言葉、「登山のための登山こそ正統派」と書かれていますが、まさに本論2章で定義した、「登山＝山に登ることを目的とした登山＝山登り」と同じ意味となります。

さらに私は「登山」と「スポーツ」とを分離したのですが、日本山岳協会や第

二次RCC、その他諸氏が【登山はスポーツである。(斎藤一男、『山 その日その人』論創社、2015、下巻 P.237)】と、今もその定義は変わらず、登山界自らの首を絞めていると私は考えるのです。しかし一方で斎藤さんはそれだけでなく、以下のことも述べます。

『「山に登ること」「山へ行くこと」がすなわち「登山」であるという考え方のもとに登山は普及したが、登山そのものの概念は、どうもすっきりしていない。人によっては山の中のスキーも、低山ハイキングも登山であろうし、定義がなければヒマラヤへ登頂した人も、今まで一回か二回、簡単な山登りをしただけの人も、一様に登山者の中に入れられる。

だから登山人口が何万人いるとか、山岳愛好者が幾人いるか、などと議論するのは早計である。社会に対する登山の浸透度を知りたいなら、やはり登山の概念をはっきり定めてからにすべきであろう。

一般の人達と、山岳関係者とは立場上、大きな格差があっても、やむを得まい。』

(斎藤一男、『山 その日その人』論創社、2015、下巻 P.244)

しかし、登山の定義、山岳の定義、文化の定義等々の仔細は詰められていません。登山界や山岳界の中で、そこまで遡って論じる人がいない現状は、戦中、戦後派登山家の限界と、山岳文化の未成熟さを感じます。一世代前の大先輩、斎藤さんの一連の著作やお話の中には、やはり世代間ギャップを感じるのです。激動の第二次世界大戦に青春を過ごし、戦時の国民総動員体制で育った世代と、終戦翌年に生まれた私たち戦後教育世代とでは、大きく社会環境と社会体験が異なります。特に個人と組織(または国)の関係性においては、明確です。加えて私自身の個性として、子供のころから群がることに馴染めない、自主、自立、自己負担、自己責任、そしてなによりも自由意思を尊重する完璧主義者にとって、周囲と容易に馴染まない肌感覚がありました。組織の中で群がることを好む体質を、今は亡き登山界の論客、原真氏(1936—2009)は「日本人的体質」と論破し、「日山協批判の論文は書かない」との返信をいただいたのは、やはり42年前でした。

このように登山界にとっては、今でも未解決な古くて新しい問題、「登山、山岳、スポーツ競技」の関係性整理と統合が残されています。本論考はさらに、その点にも光を当て、「現代登山と山岳スポーツ等の生態系」として7章に展開しています。

### 3. 国民体育大会 山岳競技

「国民体育大会」は、今でも継続されています。その前身は1924年～1943年まで行われていた「明治神宮競技大会」といわれ、水泳(夏)と陸上(秋)を中心におこなわれました。水泳は海軍、陸上は陸軍の、軍事訓練成果発表的性格が感じられます。戦後は「国民体育大会(以降、国体)」と呼称を変え、敗戦後の貧しかった生活の中で、国民体育の向上を目標に掲げます。競技会ですから順位を競うはもとより、順位を得点に変換し、都道府県ごとの累積得点を競うようになります。そして総合優勝には、天皇杯が授与されます。

国体における山岳競技は得点数値化できなかつたために、長らくは参加するだけの種目でした。しかし近年、多様化の中で**登攀種目**(フリークライミングのリード競技とボルダリング競技)、**踏査種目**(荷を背負いチームでオリエンテーリング)、**縦走種目**(荷を背負い縦走のタイムレース)として、数値化を図るようになります。2008年の大分大会から現在に至り、**登攀種目**(フリークライミングのリード競技とボルダリング競技)に絞られます。

国体の実施機関は、「公益財団法人日本体育協会」。2008年の公益法人制度改革により、主務官庁は文部科学省から総理大臣(内閣府)へ移行します。山岳競技の主務機関は、「公益社団法人日本山岳協会」。このように国民体育向上を目指す制度の中で、内閣府(旧=文部省)→日本体育協会→日本山岳協会という一連した行政系列の中で、登山は「スポーツ競技」の側面が強調されていきます。2014年11月25日、「国民の祝日に関する法律」改正では、8月11日を「山の日」と制定されます。

このように登山は、国民体育と生涯スポーツの一環として、国体の中で「スポーツ意識」が定着していくわけです。ただしここで注意を要することは、国体種目においては「登山」でなく「山岳」、「山岳競技」となっていますが、この用語の違

いは何も説明されていません。登山を競技化するなかで、数値化して比較競争できる要素が、登山のもつ多様な因子の中の一つ、「**スポーツ因子**」であることにより、その因子によって**登山**そのものであるかのように理解されてしまいました。登山に含まれる情緒的因子は数値化ができず、比較・競争・順位立てることができません。情緒を取り除いた身体の競技性、つまり「**スポーツ因子**」だけを取り出したのが「**山岳競技**」と理解することができます。そのことは図らずも、前節の「**登山とスポーツのちがひ**」で述べた、第二次RCCの主張と一致してしまいます。しかし国体では「**山岳競技**」としており、「**登山競技**」としていません。その点国体では、「**登山**」と「**スポーツ**」が分離されていると理解することもでき、私が論じる「**現代登山と山岳スポーツ等の生態系**」に符号し、私が展開している論理との整合性を確認することができます。

#### **4. 国民体育大会と登山者のアマ・プロ問題**

「**国体**」と「**登山**」の間で過去には、もう一つ大きな問題がありました。スポーツ競技参加資格における、「**アマ・プロ問題**」が「**登山**」に波及したことです。

最初は1970年代のヒマラヤ登山等において、登山隊々長の資格問題として現れました。現在はオリンピック競技に「**プロ**」も参加し、この問題は意識に上がりませんが、1970年代の一時、ヒマラヤ登山等においての隊長資格に、オリンピックのアマチュア規定を適用して運用されました。つまり、ヒマラヤ登山等をおこなう場合、当該国の登山規則に則って登山許可を得ます。その申請の過程において、日本を代表する組織の推薦状が必要となりました。日本ではその代表組織として、日本山岳協会が主管（法令化されたわけではありません）とされます。つまり、日本山岳協会の推薦状を添えて、当該国へ登山許可申請をおこなうのです。

同じその頃（1971年4月）、プロガイドを称する職能組織、「**社団法人日本アルパインガイド協会**（**ガイド協会**）」が誕生します。初代会長は橋本龍太郎、元内閣総理大臣です。2015年、現在の二代目会長は谷垣禎一、自由民主党幹事長です。またガイド協会等の統合組織改編があり、現在の名称は「**公益社団法人日本山岳ガイド**

協会」となっています。

当時日本山岳協会は、アルパインガイド協会に所属するガイドを「プロ」と認め、「隊長がアマチュアでない」ことを理由として、当該ガイドが登山隊長となっている登山隊に、推薦状を発行しないという事態が生じました。「日本体育協会アマチュア規則」に反するので、日本山岳協会として推薦状は発給できない、というものでした。

その事例には、私も関係していました。

1974年、横浜山岳協会主催の「ネパールヒマラヤ、P29南西壁登山隊」は、隊長を古川純一氏で申請しました。古川氏はRCCⅡを代表する当代随一の名クライマーで、国内未踏岩壁の初登攀を数多く果たされています。その古川氏はアルパインガイド協会に参加しており、「プロガイド」であるから、古川氏が隊長である「ネパール・ヒマラヤ、P29南西壁登山隊」へ推薦状発給はできない、というのが日本山岳協会の判断でした。一方で、「古川氏は隊長でなく、総指揮であるならば良い」という解釈も加わり、古川氏は総指揮におさまります。そして、申請書類上の隊長として選ばれたのが、私でした。その結果、申請書類上の隊長は私、総指揮に古川純一氏と改めた書類を作り直して再提出、登山隊は、日本山岳協会の推薦状発給を受けてネパール政府へ申請し、登山許可を得ました。

一般的な登山隊組織の構造は、隊長～副隊長～登攀隊長～登攀リーダー～隊員となるわけです。「総指揮」という名称は、隊長へのアドバイザー役を設定したのでしょう。登山隊の総責任と権限は隊長にあり、総指揮は隊長へアドバイスをおこなう役割なのだから、責任ある立場でなくなる・・・、という書類上の解釈です。それゆえ、登山許可申請書類の総責任と権限は「アマチュア」である隊長となり、「日本体育協会アマチュア規則」に反しない・・・という解釈をしたのでしょう。しかしそのことは申請書類上だけであって、実質の登山隊長が古川氏であることは、何ら変わらぬわけです。しかしネパール政府側から見れば、申請書類にそんな伏線があることなど、知る由もありません。あくまでも申請上の隊長は私でありますから、ネパール政府観光省への出頭や手続きは、私が隊長としておこないます。その過程において、登山隊の中で、無駄な誤解とトラブルが生じたことの内容は、省略とします。ま

た当時、同類な「アマ・プロ問題」によるトラブルは、いくつかの登山隊でも生じました。

このように登山とオリンピックとは何ら関わりないものが、オリンピックのアマチュア憲章、アマチュア規則のために、名目と実質の異なる二重構造な登山隊組織構成を招き、不必要で無駄な、しかし重大なトラブルを発生させました。大人の知恵と言えるかもしれませんが、杓子定規な規則の運用をおこなった日本山岳協会は、文部省(当時)～日本体育協会～日本山岳協会～都道府県山岳連盟～各山岳団体という、縦割り行政機構の上位下達方式による運用により、登山にスポーツの「アマ・プロ問題」を持ち込んだのです。

以上のことの詳細は、“憲法に反する”という批判論文として、1973年発行の山岳雑誌、『山岳展望 第17号』(山岳展望の会、1973年)に、「**社団法人 日本山岳協会への批判**」と題して、私がかきました。その主張の要点は、以下となります。



### 1) 海外登山推薦状発行システムにおける違憲性

- ・推薦状発行手続きにおいて憲法第14条に定める「法の下での平等」に抵触する。

### 2) 組織批判

- ・「未組織登山者」という言葉を使う裏には、登山者を統治する意識が隠されている。
- ・登山者にとって、組織の意味と機能を問い直す。

### 3) 新たなる哲学の要求

- ・登山を「遊び」として広義な枠(文化)で捉え、「スポーツ」という狭義な枠に押し込めると諸問題が発生する。登山の哲学的意味と、その自由と責任について考える。
- ・「遊び」の仲間と機能から、その組織についての対応を図る。
- ・「遊び」の失敗、「遭難」において、どのように対応を図るべきか。

#### 4) アマチュアリズム～アマチュア規定批判

- ・登山にはスポーツ性が含まれ、スポーツそのものではない。
- ・自然と対峙する登山ならば、みな等しくプロフェッショナルな自覚をもった登山者であることのほうが望ましい。
- ・自然の側(山)から見れば、登山者のアマ・プロは関係なく、みな等しく人間となる。

#### 5) 国体登山と、日本体育協会参加への批判

- ・登山が国体に参加することは、批判の対象でない。
- ・登山が国体へ参加することにより、国体参加資格のアマチュア規定を逆に、登山に対して適用するならば、海外登山等における法定手続きの中で憲法違反状態を招く原因となっている。(基本的人権、法の下での平等)



以上のことはもう 40 年以上も前の出来事で、そっくり現在に当てはまるわけではありません。オリンピックにプロが参加している現在、ヒマラヤ登山計画における日本山岳協会の審査・推薦状発行業務もなくなりました。私自身も本格的登山の実践や、登山界、登山情報から離れて四半世紀が過ぎます。

なぜ今、改めて問題を掘り起こしているかといえ、登山を本質から考えて論考する人が、未だに現れないことにあります。さらに私自身の登山体験を経たその後の人生において、登山体験を通して考えた諸々のことが、私の人生の中核となって自立を支えてくれたことにあります。還暦を過ぎ、会社を閉鎖し、今再び登山をおこないながら考える時間をもてる時節となり、「**老いの道標**」としてお役にたてれば・・・といった、お節介(オセッカイ)でもあります。

2013 年 7 月発行の日本山岳協会『登山月報』第 532 号、海外委員会 国際委員長の澤田実氏の記事によれば、以下のことから今の登山界の状況を垣間見ることができます。

〈 海外委員会の現状 〉 …………… (澤田実)

- 1) 以前は推薦状発行という必須の役割があったが、今はそれもなく、……海外委員会の存在意義が改めて問われている。
- 2) 今年から日山協は公益法人となり、日本の登山界をまとめる存在になろうとしている。そのため国際委員会も、広く登山者全体のための事業を意識しなければならない。岳連(日山協の下部組織=都道府県組織)に関係しない登山者人口は相当数いて、その人たちを岳連に取り込む努力をすべきであろう。
- 3) いまや未組織登山者は全体の 80%ともいわれ、彼らこそが主流と言えなくもない状況になっている。
- 4) 国際委員会は、日山協の中では「卓越登山」を担うものと考え。海外に出て山を登ることが特別なことではなくなったこの時代、またヒマラヤにおいてさえガイド登山が主流になっている昨今に、日本の登山界のために国際委員会にできることを考えていかなければならない。

〈 海外登山遭難対策研究会 〉

- 1) 参加者人数の少なさが現在日本のヒマラヤ登山の現状を示している。
- 2) 多くの高所ヘリコプターレスキューの事例が紹介された。華々しい救出劇の裏では、実は結構な確率でヘリコプター事故も起きており、高所でのレスキューには大きなリスクがある。
- 3) エベレストをはじめとする高所登山ガイドを仕事とする氏(近藤謙司)からは、顧客をエベレストに登らせるまでのプログラムや、無事に登らせるために注意していることなど、高峰ガイド登山の実際を披露していただいた。
- 4) ガイド登山が隆盛な近年だからこそ増えている遭難事故のスタイル(客が多すぎるためシェルパの経験や質が低下したための事故)にも注意が必要とのこと。
- 5) ガイド登山の功罪について参加者からの質問があり、自分でルート工作できる人が減るのでは —— との指摘もあるが、現在多くいる未組織登山者の受け皿になっていること、その人たちがゆくゆくは自立した登山者になっていければと考えていること。

.....

同・登山月報の1面記事は、「第27回ジャパンカップ」です。3葉の写真とともに男女の成績表があります。東久留米スポーツセンター第1体育室の、高さ11mのクライミングウォールにおけるボルダリング競技が、国体リハーサルを兼ねて開催されたという報告です。このように日本山岳協会のメインは、国体競技種目となっているフリークライミングの一種、ボルダリングの様子です。アルパイン登山は影が薄れ、スポーツ・クライミングにスポットライトが当たります。このことは、国体競技種目として山岳競技を組み込み、数値化して順位を競うスポーツ種目の必然な結果といえます。しかも登山競技ではなく、山岳競技とした種目名称への考察は、3章「登山と山岳スポーツのちがひ」の通りです。

本論では、「登山と山岳」、「登山とスポーツ」の違いを考察してきました。日本山岳協会は国民体育大会の下でスポーツに傾き、古くは「アマ・プロ問題」、新しくは一般の登山者離れを招いています。しかし日山協首脳部の意識は、「すべての登山者を統合する組織」であるから公益社団法人であり、かつては海外登山計画への推薦状発行審査があり、その意識から協会傘下でない個人登山者を「未組織登山者」と呼ぶことが、「登山」の本質をないがしろにしてきた証しとして、40年前から指摘してきたことでもあります。

近代オリンピックの父と呼ばれたピエール・ド・クーベルタン、第2代国際オリンピック委員会(IOC)会長(1896~1925)の名言、【オリンピックで重要なことは、勝つことではなく、参加することである。人生で大切なことは、成功することではなく、努力することである】、があります。その根幹となる思想は「アマチュアリズム」にあり、「オリンピックの出場者は、当該スポーツによって金銭的な報酬を受けるべきでない」とする主旨です。1925年に制定されたオリンピック憲章とアマチュア規定は、アベリー・ブランデー第5代会長(1952~1972)がさらに原理化を推進します。

しかし1970年代以降のスポーツ界は、用具の進化にともなう記録更新と商業主義に飲み込まれ始めます。金メダルを獲得する手段とコマーシャル・メリットに目を付け、企業内育成や開発用具を携えた表彰台効果、さらに選手のアイドル化、スタ

一性もからめ、コマーシャルイズムが浸透します。それら選手は「コマーシャルアマチュア」とも呼ばれ、オリンピック憲章のアマチュア規定概念を薄めてゆきます。他方で共産主義体制国家においては、国家が育成する「ステートアマチュア」が生み出され、「コマーシャルアマチュア」に対抗します。次第にオリンピック金メダルは国家戦略となり、道具と記録、栄養と記録、心身管理をふくめたコーチングと記録・・・等々、個人身体競技の域をはみ出し、システムチックにチームプレー化しないと勝てなくなります。この段階まで進化すると、アマチュアリズムは邪魔にさえなります。

ブランデーが退任し、キラニン、第6代会長(1972~1980)となった1974年、オリンピック憲章からアマチュア規定が削除されます。

さらにファン・アントニオ・サマランチ、第7代会長(1980~2001)になるとオリンピックのアマチュアリズムは大きく変化します。サマランチ会長は、最も優れた運動選手がオリンピックで競い合う路線へと転換し、プロ選手の解禁を漸進的におこないます。その過程における一部選手のボイコットなどの混乱を生じますが現代へと定着し、「アマ・プロ」の精神的な概念区別を薄めてゆきます。つまり、その運動競技において金品を得ることを生業とする職業人を「プロスポーツマン」と定めるようになります。金品物質の授受が判断基準となり、精神性は不問となります。しかし世界で勝ち抜くためには、選手個人の精神集中はもとより、サポート体制がより勝敗を分けることとなります。もはや個人技だけを競う時代を過ぎ、システムチックで科学的合理性を追求する、チームプレーへと変質しました。個の能力を神輿に担ぎ、担ぎ手はチームから組織へと拡大の一途をたどります。神輿に乗るプレイヤーがスター性、アイドル性を持てばなお良く、支える組織はより大衆へと拡大されます。

このような連鎖はオリンピック競技を肥大化させ、テレビ放映から新聞、雑誌に至るマス・コミュニケーションによって商業化を促進させます。オリンピック開催はもはや「純粋アマチュアの個を競う場所」ではなくなり、都市基盤整備や国内総生産(GDP)アップ、国家の威信誇示に利用されています。2020年東京オリンピックも、まさにその路線をひた走っています。そのような現代社会の中で世界一を獲得するためには、子供の時から純粋培養したトッププレイヤーによって可能となり、もはや「アマ・プロ」概念は何ら現実的意味のない空論と化します。逆説的に述べると、現代トッ

プレイヤーの純粹培養環境において、勝つことに全ての情熱と努力を費やす純粹精神は、クーベルタンの純粹アマチュアリズムに通じるものがあるでしょう。スポーツ競技において「勝つ」という欲望は、戦争における「勝敗」とは異なり、個の生存にとって不可欠な価値判断ではありません。戦争は生存権をかけて戦うわけですが、スポーツ競技の敗者となっても、生存権までを奪われるわけではありません。

古代ローマの剣闘士ならば、敗者は死を意味しました。生死をかけて戦う剣闘士を、「プロ」の原型と見ていたのは、クーベルタン男爵ではなかったでしょうか。戦いを安全な場所で見つめる貴族や市民の視線は、勝敗の賭け事を楽しむ娯楽でもあり、その視線から文化(欲望や趣味の世界観)を生み出し、「アマチュア」の概念を導き出します。古代から近代に至るまで、生存権を無視された奴隷制度がありました。奴隷はまた、貴族や市民の生存を確保するために労働させられます。クーベルタン男爵の「アマチュアリズム」の根底には、貴族趣味が反映されていると言われます。剣闘士のようなプロフェッショナルを蔑視排除し、貴族や市民の娯楽の延長にオリンピックを見据えたという論もあります。その後の近代において、ブルジョアージと労働者との階級闘争の中で、ブルジョア的趣味のアマチュア・スポーツマンと、労働職業を生かしたプロ・スポーツマンとのハンディを解消すべく、アマチュア・スポーツマンの世界大会となったのが近代オリンピックとなります。

アマチュアは「素人(しろと)」、プロフェッショナルは「玄人(くろと)」という日本語があります。「アマチュア」を「プロ」と区別する概念として、以下のようなものがあります。

- ① プロに匹敵する知識や技術をもっているが、職業としておこなうための資格を持っていないか、持ってもそれを職業としない人。〈セミプロ〉
- ② 知識や技術をもっており、職業となる資格ももっているが、技量がプロに及ばない人。

スポーツにおける「アマチュア」とは、「スポーツを職業としておらず、かつ、報酬を受け取っていない人」と言い換えられます。逆に、「プロフェッショナル」とは、「スポーツを職業とし、かつ、報酬を受け取っている人」と言えます。

そもそも登山とは、スポーツなのでしょうか。そして登山ガイドは皆、「プロ」と認定されるべきなのでしょうか。まず前者の問いに対する私の答えは、「登山は単に山へ登る行為であり、その行為者(登山者)は全人格をもって自然を受け止めることができ、その一つにスポーツ要素も含んでいる」、となります。後者の問への答えは、「登山における**ガイド**はみな、有償/無償、職業/趣味を問わず、**プロフェッショナル**でなければならない」、と考えます。

現在日本の「山岳ガイド」は、ただの「山岳ガイド」と、「認定山岳ガイド」とがあります。「認定山岳ガイド」は、公益社団法人日本山岳ガイド協会が定めた認定試験に合格した者であり、認定ガイドは公に業務報酬を得られる職業人となりますが、必ずしも専業であるとは限りません。日本山岳ガイド協会は内閣府を主務官庁とする公益社団法人ですから、その認定は公的資格と呼ばれます。国家資格の場合には依って立つ法律があり、その中で定められる試験に合格した者が、有資格者となるわけです。国家資格は、①業務独占、②名称独占、③登録制度等がありますが、公的資格の場合はそれができません。それゆえに、ただの山岳ガイドであっても、業務報酬を得ている者もいます。なぜなら、山岳ガイドを位置づける法律がないために、法に依って立つ国家資格の独占権のない、任意な資格だからです。そして公的資格は、自由に設定できる民間資格よりも公共性を帯びるため、信頼性は高まります。

日本山岳ガイド協会の認定ガイド資格(公的)は、以下に分けられています。

- 1) 自然ガイド … 四季を通じて自然にふれあう活動やエコツアーのガイド
- 2) 登山ガイド … 夏山の一般登山道のガイド
- 3) 山岳ガイド … 四季を問わず日本の山をガイド
- 4) 登攀ガイド … 岩壁やアイスクライミングなどをガイド
- 5) 国際山岳ガイド … 世界の山々をガイド

**プロフェッショナル**(Professional 略称=プロ)という言葉の定義は明確ではありませんが、一般的には、「職業上の自称、呼称名称として、そのことを職業として生計を立てて

いる人」のことを言っています。対義語としては**アマチュア**(Amateur 略称=アマ)があり、類似語としては**エキスパート**(Expert 熟練者)、**スペシャリスト**(Specialist 特化した分野の専門者)があります。しかし登山ガイドに当てはめて考えた場合、上記の理解で納まるでしょうか。

エベレストの初登頂者エドモンド・ヒラリー卿は、「技術はプロ、精神はアマチュアがよい」と言ったといいますが、この言葉の裏には、当時(1953年)のオリンピック精神に基づく「アマ・プロ観」があることを理解に加えなければならないでしょう。前にも記しましたが、当時オリンピックのアマチュア規定の裏には、プロを労働者階級とみなし、アマチュアを貴族階級や労働者でない文化市民階層の人々とした、差別意識が隠されていたと言われています。ヒラリー卿が言う「アマ」も同様な意味合いが含まれていると読むべきでしょう。

ヒラリーは別に、【人生そのものが登山であり、冒険である】と。また1951年の偵察において、【エベレストよ、今回は私たちの負けだ。だが必ず舞い戻って、登頂してみせる。なぜなら、山はこれ以上大きくならないが、私はもっと成長できるからだ。(エドモンド・ヒラリー「魂をアツクさせる名言・格言集」)】とも言っています。「人生そのものが登山」とする意識こそが、「プロフェッショナルな登山者精神」であると理解できます。つまり、人間の限界に挑むような登山者は、「技術も精神もプロフェッショナル」でなければ叶わないことを、言い表します。

ここにおける「プロ概念」は、「その行為(登山)を人生の中心軸(核)にすえている」ことにあり、その行為を職業として交換価値を得て生計を立てることは別次元な論理です。貴族階級は職業を持たずとも所有資産で生計がまかなえ、趣向をたしなむ中から「文化」を育成(スポンサー)してきました。また労働者を管理・統御する市民階層もまた、趣向を楽しむために「文化」を育んできました。そのような中世の西欧社会において、職能をもって「プロ」という概念が生まれ、プロ=労働者、アマ=貴族と文化市民、という図式をもって棲み分け意識をもったのが「アマ・プロ差別思想問題」の起点と推測するのです。

一方、ヒラリーの次の時代に登場するイタリア、南チロルの登山家、ラインホルト・メスナー(1944年9月生)は、登る哲学者ともいわれるように、死とともに登る深い思索を

しています。1986年に人類史上初、8,000m 峰全 14 座の無酸素登頂を成功させます。わたしより 2 歳年上ですが、彼の成果は同世代の登山家として私たちに大きな影響力を及ぼします。メスナーの名言は究極な登山の本質を言い当てています。

- 1) 死ぬ本人にとっては、死は悲劇ではありません。本人が生きていて悲劇を味わうわけではないからです。悲劇は後に残された者だけのものです。
- 2) **死の危険**がなかったら、**クライミング** (スポーツ・クライミング) は、もはや**クライミング** (登山) ではありません。山に登っているとき、私は死を求めているのではなく、それとは正反対に、なんとか生き延びようとしています。
- 3) **クライミング** (登山) の真の技術とは生き延びることだ。それが最も難しくなるのは、従来行動の限界と考えられていたところまで到達してしまい、さらにもう一步踏み出そうとするときである。……そういった未知の領域では、感覚と経験は『踏みならされた』世界で得られるよりもはるかに強烈である。

このメスナーの言葉から読み解く「**クライミング**」は「**登山**」であって、安全を確保して競技する「**スポーツ・クライミング**」ではありません。さらに**登山の本質は「死を求める」ことではなく、「生きている実感」を体得すること**にあります。戦後流行った「弁証法」流にいえば、【人間が生きることは尊い＝〈正〉、しかしただ生き続ければよいのか＝〈反〉、死を媒介にして生きることほど生きる実感を得る行為はなく、そのことが究極な生である＝〈合〉】、となります。私はこの論法がアルピニズムの本質を言い表す表現として、若きころ弁証法とともに流行ったニーチェの「**ニヒリズムの克服**」として、「**登山原理の究極**」と理解しました。そのために**登山は「アマ・プロ」など関係なく、自然の中で生き延びることは、みな真剣に生を営み続けるプロフェッショナルであり、自然界ではアマチュア**といって庇護してくれるわけでは**ありません**。<sup>ひとつ</sup>重に人間社会では子供から大人に至るまでのモラトリアムな養育期間をもうけ、その庇護を共同体社会の中で、相互扶助体制としておこなってきたわけです。しかし自然の中では大人も子供も区別なく、人間を自然の中に包み込んでいます。

このように「**アマ・プロ問題**」の根は深く、「プロ登山ガイド」の定義を一様に定めることはできません。オリンピックから国民体育大会、さらに日本山岳協会へと

至る「アマ・プロ問題」への対処は、人類文化の課題でありました。そして、人が山に登る「登山」の中で、登山者は自然を通して自らの精神(こころ)と対話することができます。スポーツ・クライミングではない「登山」であり、本当はそのことこそ「国民体育と生涯学習」に適うと信じるのです。

2008年、第63回国体以降における山岳競技種目はフリークライミングのみとなり、①リード種目、②ボルダリング種目、を人工壁でおこないます。かつては、①登攀種目、②縦走種目(荷重負荷)、③踏査種目(オリエンテーリング)、もありました。国体は全国くまなく開催されるため、山岳競技に適しない都道府県も生じます。そこで山岳の自然から離れ、人工壁でのクライミング競技へ変遷してきたものと考えられます。

1960年に日本山岳協会が設立され、日本体育協会へ加盟したことにより国体参加となりますが、当初は「参加する」だけで、得点競技種目ではありませんでした。このことはまた近代オリンピックを創設したクーベルタン男爵の、「オリンピックは、勝つことではなく参加することこそ意義がある」、という名言があります。「山岳」はまさにオリンピック・アマチュア憲章を地で行ったようなもので、ピッタリと当てはまります。しかし国体の変遷は、天皇杯獲得を争う得点競技種目化が鮮明となり、「山岳」もまた、得点競技種目へと絞られていきます。その結果に行き着いた先が、「人工壁のフリークライミング」という理解ができます。

オリンピックのアマチュア憲章は、ファン・アントニオ・サマランチ第7代会長(1980～2001)になると、テレビ放映権やスポンサーシップという商業化路線に舵がきられます。メディア、企業、金融、さらにプロ選手の参加と商品化、等々、「スポーツ」は世界の一大エンターテインメント産業へと変遷し、戦争に代わる平和裡の戦いを繰り広げています。

そのような社会背景の中で、国民体育大会も変質し、「山岳競技大会」は山岳自然環境を離れた人工環境の下で競うこととなります。

もはや「登山」と「スポーツ・クライミング」は分け、各々の正統な位置づけこそが本論の主旨であります。

## 5. 未組織登山者という意識の問題

“山ガール、山ボーイ、(山ジーヤ)、(山バーヤ) ……” の流行語を生んでいく現代登山の大衆化は、戦後の高度経済成長時代の登山ブーム再来と言われていきます。

日本の登山者人口の推計は、「レジャー白書」(公益財団法人日本生産性本部:発行)に、年度ごとに推計されています。2009年には1,230万人を記録しますが、東日本大震以降のレジャー自粛ムードもあり、2012年は860万人とされています。(レジャー白書 2013) あくまでも推計値なのでしょうが、日本国民の約1割前後に相当する数となります。

そのうちの4割以上が、60歳を超える高齢登山者だそうです。平均寿命も年々更新され、60歳定年退職以後の健康保持に、「登山」はとても適したものとと言えます。また、「国民体育」そのものとも言い換えられます。国民体育が国民体育大会となり、得点競技種目されてきたこととは別な面、「国民の健康と福祉の下で文化を享受し、生涯をどのように過ごすのか…」という側面は、平和国家、平和な世界に生きるための「基礎」となり得ます。つまり「登山」は、「健康に生きるための文化の基礎」となるのです。

それゆえに、「国民生活基礎」の一つとして、「登山」を学校教育の中に取り込み、「総合人間力」を育む良い機会とすることを提起するのです。日本の山岳地帯の国土面積比率統計はないようですが、山と森林が多く、低地に都市を開発して住みます。その日本は、地震・津波・火山噴火・風雪水害等々、自然災害の宝庫です。これを「自然災害」として人工防衛整備を図るか、自然事象の変化をより正確に把握し、「自然事象とともに」賢く生き抜くか、半世紀の登山体験を経て振り返ってみると、後者の立場に立つことにより、豊かな心根でいられることに気づきます。登山の生死体験を経てもなお、自然の諸事象を受け入れられる心のゆとりは、いかなる知識の習得や蓄積よりも、知恵の賢さが教えてくれました。この事実を、教育に生かさない手はありません。また、津波から逃げて山へかけ登る技術、緊急露營生活、集団生活におけるリーダーシップとメンバーシップ、パートナーシップ、忍耐と

自省の心、火災等緊急時にロープ 1 本で懸垂下降できる技術、救助ロープの応用技術、等々、登山で得た技術の災害時応用は多くあります。これら登山の「非日常的体験」は、災害時等の「非日常的体験」を乗り越える力を養ってくれます。しかし現代の登山は山岳に「日常性」を持ち込み、「非日常的体験」領域が少なくなっています。つまり山小屋の宿泊は当たり前となり、その山小屋に求めるものは日常生活を延長した、ホテル並みの施設・食事です。自然保護と名うった登山道整備は、丸太と石敷の階段舗装路です。そんなところばかり歩いていると、災害の被災地など歩けません。日常体験領域と非日常体験領域を分け、登山は山岳の非日常体験の中で人が生きることの意味や知恵や知識・技術を学べる環境整備こそが、未来社会に役立つと考えるのです。

そのような総合人間力を育むに適した「登山」を「山岳スポーツ」と区別して考えることにより、「スポーツ・クライミング」は国体競技種目でよく、「登山」は学校教育を含めた「国民生活の基礎」として、日常生活で発生する「非日常的体験」を乗り越えられる「総合人間力」が育めます。まさに教育における「登山学」であり、「国民体育」の中に納まりきれない「総合性」があるのです。

登山は大自然を介し、その人(個)なりの実情に応じて実施することができる最適な活動といえます。しかし登山の難しさは、登山についての知識と経験がない人(個)にとっては、何が最適なのが分かり得ないという自己矛盾性(パラドックス)があります。誰でも、どこでも、誰とでも、自由に山を登ることはできますが、反面で山岳の自然は、登る人間側の諸事情を考慮してくれません。登山で起こる災害、つまり「遭難死亡事故等」への対処が最大な課題となります。その課題を低減するには、二つの面からの努力が必要です。第一には、事故を招かぬようにする**安全登山の普及**です。第二は、万一の事故に対処できる**救難救急救命搬送体制の備え**です。そのためには、国民体制としての組織支援を要します。

登山者の全国組織は揃って、上記同様な組織理念を掲げています。現状の登山者全国組織は大別すると二つに分かれ、所属する登山者を「組織内登山者」と呼んでいます。

- 1) 公益社団法人日本山岳協会（日山協） ・・・・ 1,248 団体、 約 49,500 人
- 2) 日本勤労者山岳連盟（労山） ・・・・ 650 団体、 約 25,000 人

他方で組織に加入しない一般大衆登山者のことを、組織側では「**未組織登山者**」と呼びます。しかしこの呼び方に差別の意識があることは、42 年前の『山岳展望第 17 号』で書いたことです。現在でも「**未組織登山者**」の記述は多く、意識は変わっていないように見受けられます。

そもそも、昨今の推計登山者数は 1,000 万人前後を推移している(レジャー白書)とされますが、この登山者総数に比べた**組織登山者**(74,500 人)は、たったの 0.75%に過ぎません。日本の登山者の**99.25%**は未組織登山者であり、その登山者を指して「**未組織登山者**」と位置づける必要はどこにあるのでしょうか。大多数の一般登山者こそが「**登山者**」であり、あえて「**未組織**」を被せるところに、「**国民体育**」を考える上での根本的違いがあります。国民体育(内閣府、文部科学省)を競技化し⇒国民体育大会(日本体育協会)⇒国体山岳競技(日本山岳協会)⇒スポーツ・クライミング種目という構造の中から、行政意識を強めた山岳部門の**統轄意識**が見えてきます。2 章に記したよう、山岳と登山は異なり、「**登山**」と「**スポーツ・クライミング**」は別なジャンルと位置づけました。副題とした「**たかが山登り～されど山登り**」の、「**されど山登り**」に含まれる登山の本質を、改めて考え直したいものです。

※ クライミング競技人口の推計=50.2 万人 登山人口に比べると5%程度

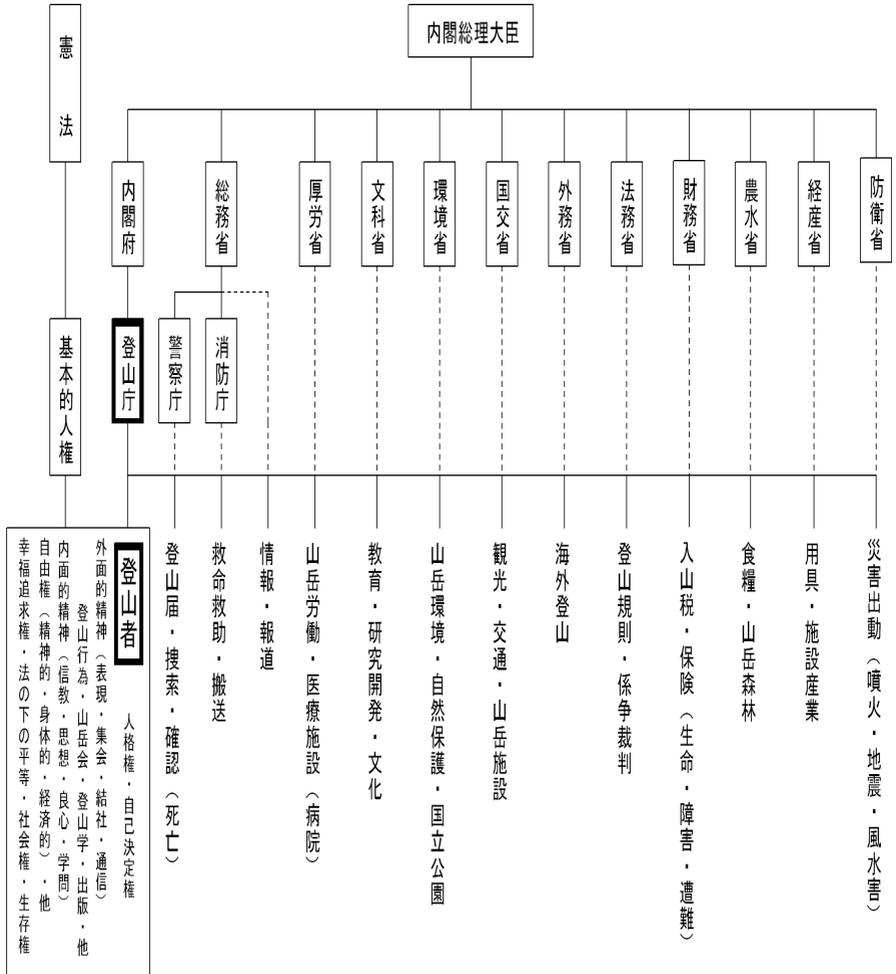
<http://mickipedia.blog113.fc2.com/blog-entry-82.html>

本論の提言は、「**未組織登山者**」という言葉を使わないでいただきたい。「**登山者**」は単に「**登山者**」なのです。「**組織内登山者**」という言葉を用いたい組織なら、それはそのままでも良いのでしょうか。

まずこの「**登山者**」意識から出発し、登山者のための啓蒙や教育、相談、指導、技術訓練、安全対策、災害事故対策、登山保険、等々。そのための組織は内閣府に「**登山庁**」を設置するくらい、登山の総合力は文化国家の平和的存続にとって、

有用な意識づけがおこなえます。2016年8月11日から「山の日」として国民の祝日が制定(2014年)されたので、登山庁構想(案)を提起しておきます。また、2015年10月1日から「スポーツ庁」が開庁されますが、本質的関連領域としては「登山庁」のほうが、はるかに心・技・体の統合を図れると考えるものです。

### 【 登山庁構想(案) 】



## 5 章 . 登山行動研究の経緯

### 1. 登山行動研究の経緯

登山行動に関する研究は、これまで多くを見かけません。このような研究をしても、“飯の種＝職業”にならないからでしょう。さらに、登山そのものが置かれている社会的な位置は、“登山≪趣味”、“趣味≪遊び”、“遊び≪消費”、“消費≪文化”という常識の枠を抜け出せないでいるからでしょう。いや、このような分析・理解さえ、されていないのが現状です。

近年は大学学部において、スポーツ科学研究とともに、スポーツ社会心理学からの研究・理解も広まってきたように見受けられます。その前提には、“スポーツの勝者”となることによる商品価値の高まりがあります。その価値を知らしめる各種メディアの存在、受信者の心地よい評価、受信者となるマスに対するコマーシャル効果、それらは一連の消費・享受産業を形成し、関わる人々の“飯の種”となります。勝利を得るためには局所(各種目)を最大化(勝者)しようとする研究の二つの面、身体的科学と心理的科学により、演繹的におこなわれます。

他方で人類は、発祥から現在に至るまで“戦争”が止みません。戦争は、諸象を破壊する“マイナスの消費”に位置づけられます。また反面では、過剰生産され在庫となった物質文明の、荒療治な在庫処分ともいえます。そのようなマイナスの消費戦争に対極し得るのがスポーツです。戦争のさ中でも、古代ギリシャの地オリンピックに集まり、一時の和解の中で“オリンピック・ゲーム”を生み出し、殺戮を伴わない平和裡な競技によって勝者を決め、勝者は讃えられ、勝者が属する都市国家は誇りを持ちました。人類の喜怒哀楽(心)を掻き立てる“プラスの消費”であり、オリンピック、ワールドカップを頂点とする諸々のスポーツ関連事業もまた、**文化的消費産業**と位置づけることができます。

さらにスポーツは、以下に示す二つの面があります。

- 1) 人間欲求の基本要素としての「遊び」…… 内面の問題(個や集団)

2) 戦争の対極となる平和裡な「闘争」……外面(社会)の問題(国家、都市、地域)オリンピックやワールドカップのようなスポーツは、国家の代理戦争とする見立ては多くあります。しかしスポーツを人類発祥の文明から出発し、人類欲望を煽る文化競技を含め、人類の存続に役立つ未来志向な共通事象の研究は不毛な領域にあります。そのことは“哲学から政治権力、商品経済学、人類の社会学、近年目覚ましく発展を続ける情報社会学”等々へ踏み込む、学際を超えた“総合人間学”となりますが、容易に総合化できるものではありません。未だ、“飯の種＝職業”にならない研究領域です。

登山はスポーツの一種とみなされて、久しく時は過ぎましたが、登山を学問的に捉える素地は、未だ一般的ではありません。なぜなら、スポーツは行為であり、考えるよりも先に、まず身体を動かし(スポーツ)勝者となることに重きを置いてきたからです。しかしスポーツを代表するオリンピック競技において、近年は身体的鍛錬の積み重ねだけでは勝者になれません。それぞれの種目に特化した個別条件を科学的に分析し、個別条件の下で最高なパフォーマンスを発揮できるよう、科学的心身改造により、心身の限界で競う時代となっています。またその勝者には、栄誉とともに商業価値が高まり、生計を営める職業＝プロフェッショナルとなれる時代だからです。それは単にプロフェッションとした個人の問題だけでなく、支え、支援し、科学的研究とトレーニングに励み、戦略を分析して戦術を練るプロジェクト化し、同様な競争者を選び集めて事業(オリンピック、ワールドカップ等)とする、**一大エンターテイメント産業**です。心身だけでなく用具や器具はもちろんのこと、全ての下支えをする科学理論、科学研究も同様となります。スポーツを演じるのは個であっても、それを支えるチームから団体、組織、国家に至るまで、今やスポーツ(オリンピック、ワールドカップ等)は戦争に代わる経済成長産業の主役とさえいえそうです。あえて証明するまでもなく、オリンピックやワールドカップ招致と開催は、殺傷武器なくして戦う、世界代理戦争の一面を呈しています。そのことは 2020 年東京オリンピック開催決定と経緯を目の当たりにすれば、納得できるのではないのでしょうか。

人類の闘争欲求が戦争ではなく、スポーツに収斂することは良い事です、プロバガンダとガス抜きにも転用されます。闘争欲求を鎮める「美と愛と受容の感性」

## は、自らの生命を賭けて挑む登山を経て得られる、実存的かつ社会的役割である

との思いは、私の青春から今でも変わることなく続いています。闘争エネルギーを「リビドー (Libido)」として、性的衝動の発散力から解明したのがジークムント・フロイトであり、すべての本能のエネルギー源としたのがカール・グスタフ・ユングであり、精神分析学では様々な欲求に変換可能な心的エネルギーであると定義しているようです。その特徴は肉食系(男子・女子)により強く現れ、草食系(男子・女子)は弱まるのでないかと私は考えるのですが、まだ究明に至っていません。現代の日本社会を観察すれば、あながち間違えではないと思えるのです。原子力発電と太陽光発電との違いのように、高エネルギーに圧縮された核燃料を電力変換させるのと、太陽系宇宙へと放出拡散されエネルギー密度が低い太陽光を、ふたたびかき集めて電力変換させる太陽光発電との違いに似ています。前者は高密度ゆえに高効率で危険に、後者は低密度ゆえに低効率で安全となります。人類の近代、産業革命以降は高効率を追い求めてきました。ついには、人の手に負えない原子力へとたどり着きます。日本社会は原子力利用の負の面、原子爆弾の被爆と原子力発電メルトダウンという、文明2大災害を世界で唯一経験しました。リビドーが低下し、草食系男子が多くなったといわれる現代日本社会から、環境破壊を招く高効率文明願望社会に対し、時間軸のスローダウン思想を発信したいものです。

登山をおこなう「山岳部」は学校部活動であり、学問における「学部」ではありません。しかし登山における「総合人間力」を学問表現、学問評価し直せば、「山学部」ができて不思議でないと思えるのは、私だけでしょうか。

登山を人間行為の始原な体験の一つとして捉えるなら、持続して生を営む人間行為の総合は、生を営みながら持続展開する「総合人間力」の文化的側面として再編成、さらに統合することができます。

社会のプロフェッションとして定着するためには、大学教育の中で「学部」として自立し、継続されるなかで法整備されて資格が確立し、専門職業となって定着していきます。「山学部」は遊び心の冗談としても、21世紀の人類社会にとり、山岳自然体験がどのような役割を果たせるのか、真正面から考える必要があります。しかし昨今の商業主義社会においては、納税者の立場から費用対効果が問われ、実

利な学問が優遇されます。文部科学省は国立大学の人文社会系学部の存立見直しに着手しました。そんな中で山学部の創設など、最も経済的実利から遠い学問は、論外となることでしょう。しかし経済的実利ばかりでなく、人間が生活し、生きる上での心身的実利の面から評価すれば、「山学」は人間の総合力を鍛える理論と実践の場とすることができます。そのことに、人々は気づいていないだけなのです。

## 2. 登山研究は総合人間学

現代における登山行動の動機や心理の調査、研究の大まかな概要は、以下に引用する『登山行動に関する社会心理学的研究』（岡本、藤原、2015年）の[引用文献]によくまとめられており、その中から本論に該当する研究を年代順に取り上げ、整理し直したものが、次の①～⑩にあげるものです。

- .....
- ① 1968年 小林晃夫、小川新吉「アルピニストの心理と性格」東京教育大学スポーツ研究所報、6. 1-16
  - ② 1989年 佐藤知行「クライマーの動機とフロー経験に関する研究」筑波大学体育研究科修士論文抄録、11. 41-44
  - ③ 1989年 飯田稔、坂本昭裕、遠藤浩「中高年の登山動機に関する研究」筑波大学体育科学系運動学研究分野運動学研究、5. 21-26
  - ④ 1983年 龍ヶ崎隆司「尾瀬を訪れる中高年登山者・ハイカーの動機、行動と計画」明治薬科大学研究紀要、人文科学・社会科学、27. 63-74
  - ⑤ 1999年 龍ヶ崎隆司「ハイキング行動の動機づけ」早稲田心理学年報、31. 21-3
  - ⑥ 2000年 張本文昭、大村三香、平良勉、小橋川久光、川端雅人「登山におけるフロー経験」野外教育研究、4(1). 21-37
  - ⑦ 2005年 龍ヶ崎隆司「登山者・ハイカーの動機——東京近郊日帰り登山者を対象とした調査」日本工業大学研究報告、34(3/4). 301-307

以上のように文献が少ないことは、あまり研究されてこなかった分野といえます。これに加える研究として、以下があります。

- ⑧ 2007 年 高谷和郎 「登山の多様化について」 早稲田大学スポーツ科学部  
卒業論文
- ⑨ 2015 年 太田和利 「高校生の学校登山に対する意識に関する考察（Ⅰ）、  
（Ⅱ）」 日本山岳文化学会論集、91-114
- ⑩ 2015 年 岡本卓也、藤原武弘 「登山行動に関する心理学的研究」 文部科学  
省科学研究費補助金・基礎研究、167-180

.....

本論記述に先立つ先駆的研究を、以下について述べます。

1) ①にも採り上げられている、『1968 年 小林晃夫、小川新吉 「アルピニストの心理と性格」 東京教育大学スポーツ研究所報、6. 1-16 』があります。当時先端活動をしていた第二次RCCが取り上げ、『現代アルピニズム講座Ⅰ』として出版紹介しました。私たちはこの本を読んで知りました。

2) 1970 年発行の山岳同人雑誌、『山岳展望 14 号』に掲載された「**登山に関する実態調査報告**」（山岳展望の会、編集部、6-19）は、登山行動研究調査の初期段階にありました。同雑誌の中、前記報告書に続いて掲載されたのが、私の書いた記事「**登山の社会的背景 - 登山学確立へのアプローチ -**」（田中文夫、20-27）です。当時私も『山岳展望』の第二次編集同人となっていた関係から書いたものですが、前記『登山行動に関する社会心理学的研究』の「近代登山以前の登山、近代登山の隆盛」に類似した内容です。副題に「登山学確立へのアプローチ」と記したよう、登山を学問的に把握したい願望がすでにありましたが、45 年を経た今、ようやくそのことを含めた論考を進めているところです。

3) 1970 年代、京都在住の塚本圭一先生が「**登山学を提唱する**」という一文を山岳雑誌『岩と雪』に発表されました。社会学、心理学、哲学的アプローチからで

はなく、「登山技術教書」的な内容だったと記憶にあり、私が望む社会的方向性でなかったため、資料保存をおこないませんでした。

4) ⑧で採り上げた、2007年 高谷和郎「**登山の多様化について**」早稲田大学スポーツ科学部卒業論文は、その抄録だけがインターネットに開示されています。その抄録からは、研究の概要を知ることができます。各章の要約をさらに短くまとめると、以下となります。

- ・ 第1章は、山と登山の定義について述べ、かつ目的別に登山分類をおこないます。
  - ① 宗教的登山、② 職業的登山、③ スポーツ的登山、④ 静観的登山
- ・ 第2章は、人と山の関わりについて、信仰、仕事、スポーツの3方面から捉えます。
- ・ 第3章は、登山が多様化している——として、登山方法の違いを分類。
  - ① アルパイン・クライミング、② フリークライミング、③ 記録を目的とした登山、
- ・ 第4章は、登山の多様化について、結論と課題をまとめます。多様化の根拠を述べます。
  - ① 道具と技術の進歩、② 登山者の価値観の変化課題として、登山そのものの概念が曖昧となり、自然環境への配慮と主体的な登山の心掛けが大切、とします。
- ・ 第5章は、全体のまとめとして、登山者自身が「自分にとっての登山とは何か」を考えることが重要、とまとめています。

この研究内容は本論に近いものですが、大学卒業論文であり、「老いの道標」から見る生活体験、人生体験を経た論考、要因、相関の深みが見いだせません。登山を通して養う“総合人間力“は、もっと哲学的・宗教的、社会的存在者からの位置づけとともに、学問的分析と論考、さらに仮説を実証しようとする帰納と演繹の統合を示さなければなりません。

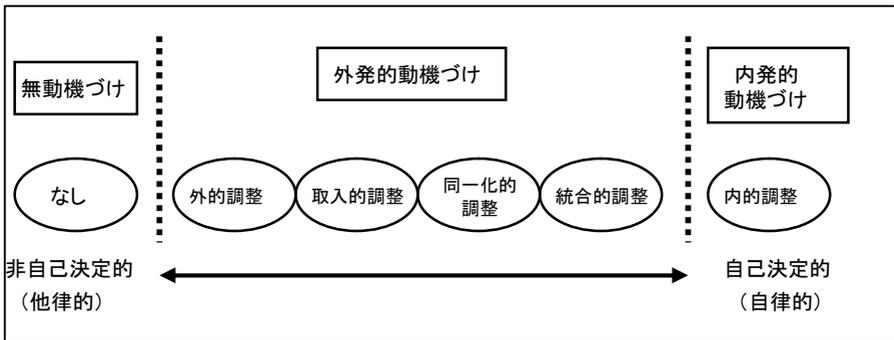
5) ⑩で採り上げた『**登山行動に関する社会心理学的研究**』は、インターネットに公開されています。(岡本卓也=信州大学人文学部准教授、藤原武弘=関西学院大学社会学部

教授、共著)

“ 登山動機の構造とその変遷 ” という副題があり、その「引用文献」からこれまでの主要な登山動機や登山行動に関する研究年代、研究者、研究事項を知ることができます。

『登山行動に関する社会心理学的研究』においては、心理学で用いられる「動機づけ理論」の主要な二つの下位理論、「達成目標理論」と「自己決定理論」の内、後者の「自己決定理論」による分析から試みられています。内(心理)から外(社会)を語る試みです。「自己決定理論」では、分析因子として、次の6つをあげています。

- ① 非動機づけ …… 行動しない、自らおこなう意図が欠けている
- ② 外的調整 …… 報酬をもらう、罰を逃れるために仕方なく従う行動
- ③ 取入的調整 …… 行動の価値は認めているがやらなければ罰があると思う行動
- ④ 同一化的調整 …… 行動の価値を認め、自分にとって重要と認識し積極的行動
- ⑤ 統合的調整 …… 目的達成手段としての重要性を認識した積極的行動
- ⑥ 内発的動機づけ …… 行動すること自体を目的とする行動



<山口剛, 2012.10, 法政大学大学院紀要> 引用

燕山荘と横尾山荘という二つの場所において、類似したデータ特性を得たから合算して統計処理をおこなったという二次データから、登山者全般についての言及、

一般化や普遍化を述べようとする帰納法を適用した論述は、適切と思えません。各種データ解析がおこなわれていますが、登山動向や心理のアンケート調査は、調査する場所の特定段階において、すでに特定地固有のバイアス(bias=偏り)がかかっています、それに関する論証がありません。

調査場所を特定することにより、その場所に集まってくる登山者の、特定傾向の蓋然性(バイアス)は、小林、小川の「**アルピニストの心理と性格**」研究(前出①)において、顕著に現れています。同研究が「アルピニスト」を対象に特定することにより、登山方法が特定され、山とルートが特定され、その場所に集まる登山者も特定されてきます。それらの特定された登山者の心理と性格を表す数値データとして、同研究の成果は理解できます。

しかし『**登山行動に関する社会心理学的研究**』は、その場所におけるデータの意味しか持ち得ません。例え、横尾山荘が類似な結果であっても、同様であると理解します。

北アルプス燕岳・燕山荘の場合、初心者から熟達者の尾根歩き縦走者が大多数で、アルパイン・クライマーはほとんどいないでしょう。また、山荘宿泊者へのアンケートの場合、一般的縦走者が多く、テント泊、ツェルト泊のアルパイン・クライマー等は、通過したとしても宿泊はしないでしょう。また横尾山荘は前穂高屏風岩の麓にありますが、屏風岩を登るクライマーはテント泊ツェルト泊がかつてのアルパイン・クライマーでした。前穂高の岩壁、北穂高の滝谷を登るクライマーも同様に、横尾山荘は通過するだけです。

つまり、登山様式の種別により、調査項目としての登山動機、登山経験、登山頻度、等々の特定傾向が、すでにバイアスとなって隠されています。登頂や縦走という特定登山様式における登山者の分析・統計として、その研究は有効ですが、その結果から登山の全容、登山者全体の特性を結論にすることはできません。

つまり、個別的・特殊な事象から一般的・普遍的概念を見出そうとする帰納法において、「前提が〈真〉であっても、結論が〈真〉であるとは限らない」という、部分から全体を述べる帰納法展開のパラドックス(paradox = 論理的、直感的矛盾)が隠されているのです。

むしろ本論【図-4-1、-2】(P.123-124)に提示した一般的概念からの質的分析をベースとし、現地調査・統計数値による量的研究の〈真〉を積み上げ(帰納法)れば、全体の〈真〉をさらに高める演繹的展開ができるのではないかと考えます。本論の登山分類は、そのような帰納法にとっては仮説の提示として、演繹法にとってはより高次な〈真〉の道標として、活用の期待をするものです。

「哲学」は自我から認識した世界を語ろうとしますが(デカルト⇒コギト・エルゴ・スム)、「心理学」は認識された世界から自我(コギト)を説明しようとしています。事象が同じ空間次元にあったとしても、認識する視線のベクトルは、真逆方向です。つまり「哲学」は主観が認める個別な前提から、普遍的と成り得るような真理を語ろうとする「帰納法」的推論となります。ミクロな世界を説明する量子論は、ハイゼンベルクの不確定性原理から、未来は確率的に生起することが証明されました。つまり、帰納法による「真」は確率的に決まり、絶対的な「真」ではないとされます。

他方、「心理学」は客観的事実の普遍的な「真」から、個別的事象の「真」を説明しようと「演繹的推論」を用います。前提とする「真」から始まる「演繹的推論」は、「真」の総和となりますから、答えは必然的に「真」となります。

科学の手法は個別の観察(計測)データをかき集め、それらに共通した普遍性をもって「原理、法則」としています。しかし観察前には「仮説」を立て、その方向性に沿って観察するわけです。その時に立てる「仮説」は、他の普遍的な前提をもとに、それとは別な個別的、特殊な答えをイメージネーションするわけですから、仮説の推論は「演繹法」によるわけです。つまり科学の手法は、①仮説(演繹法)を立て、②実験、実証、を観察(計測)し、③一般的・普遍的な原理、規則、法則等の答え(整理、統合)を機能帰納的に見出すこととなります。

※ **理性の限界に関する三大定理** (高橋昌一郎、『理性の限界』、講談社、2008)

- ① 社会科学(選択)の限界 …… アロウの不可能性定理
- ② 自然科学(実在と相補)の限界 …… ハイゼンベルクの不確定性原理
- ③ 形式科学(認知論理)の限界 …… ゲーゼルの不完全性定理

ではなぜ、哲学は科学と呼ばれないのでしょうか。つまり、科学的手法には「**理性(客観)の限界**」があり、人間はそれとは別な「**知性(主観)**」によりさらなる理解を深めようと、「哲学」する生物でもあるからです。しかしこの人間知性にも、「**知性(主観)の限界**」があります。

※ **知性の限界** (高橋昌一郎、『知性の限界』、講談社、2010)

- ① 言語の限界 …… 不可測性(論考のパラドックス、言語ゲーム、指示の不可測性、言語理解)
- ② 予測の限界 …… 不確定性(帰納法のパラドックス、予測の不確実性、未来予測の限界)
- ③ 思考の限界 …… 不可知性(人間原理のパラドックス、アナーキー、究極の不可知性、人間思考の限界と可能性)

つまり人が世界をまるごと知ろうとするためには、科学的理解(客観)と哲学的理解(主観)を統合(複素的世界観)する必要があるわけです。統合してもなおかつ、「人間であるがためのパラドックス」は残され、宇宙を知りつくそうにも「**人間の限界**」がある、ということになります。

また、「次世代人間科学の原理」として、「**構造構成主義**」の提起(西条剛央、『構造構成主義とは何か』。北大路書房、2005、2013)があります。人間を科学で捉え、帰納主義、反証主義、規約主義等々を包摂するメタ理論(原理)の構築をめざしています。哲学的構造構成と科学的構造構成を融合させようとする構造構成主義は、科学の立場に立つことにより、すでに理性、知性の限界にその答えは置かれます。方法論としての秀逸性は別として、「**人間なるがゆえの限界**」、つまり「**人間であるがためのパラドックス**」をどのように包含するのか、哲学と科学という従来から相反(矛盾)する視野に対し、同書の10章7節に「**矛盾に対する態度**」をすすめています。その答えとして、現象の多様性を認識する「**関心相関性**」から多様な観点(視点)を認め、それらを包含して矛盾としない高次元な認識ステージを構造構成主義の思想的態度としています。しかし現象学による「現象」を核に据えても、他者からは「現象」

と見えない、客観的証明不能な人間深層の「**虚相**(=抽象)事象」、意識、無意識、夢想、気づき、判断、創発、等々は、構造構成の中でどのように位置づけられるのでしょうか。「構造構成」は、視聴覚が捉える「**実相**(=具象)事象」のみを対象とするのでしょうか。また視聴覚で捉えきれないために、言語や記号化表象できない意識や感性の「**虚相**(=抽象)事象」をどのように表現するのか、科学を標榜する限りにおいて後者は対象外となるのでしょうか。

「**社会心理学**」は科学の一分野として、数値データによる客観的裏付けをおこないます。仮説を立て、観察—調査—計測—データ処理—メディア表現となり、結果を公表、伝播、再検証、周知、公知されます。社会科学における各種データは人間様式に付帯するもので、量的・質的な各種調査結果、アンケート結果等を統計的処理し、さらに高次な二次データ化を図り、論点を見やすく絞ります。統計処理は確率分布的に把握、表現されるわけですから、量子力学の統計的推論に近似しています。量子力学における「真」は確率的に極めて高い現象をもって「真=必然」と認めるわけですが、確率分布の端所に極めて希な頻度で出現する現象を、「偶然」と理解します。

私が『**偶然と必然**』（ジャック・モノー、みすず書房、1972）を読んで意識したのは、1973年でした。この書を読んだ動機は、翌年に控えた初めてのヒマラヤ遠征登山（1974年、横浜山岳協会 P29 南西壁登山）における、「死」について考えていた時です。その4年後の1978年、ふたたび同じルートに挑みましたが、氷河崩落に出会い、3隊員死亡事故となりました。この時私は隊長で、その責務の全てを背負いました。帰国後の合同追悼会の集まりの中で、「彼を返して下さい！」という死亡した隊員の見知らぬ彼女から心の叫びを聞いたとき、「偶然と必然」の論考を経ていた私の答えはありましたが、そのときの彼女へは“**沈黙**”で返しました。23年後に出版した報告書『青春のヒマラヤに学ぶ』の中で彼女への答えは、「遭難と死亡は、氷河崩壊という自然の成す必然と、登山隊行動計画上の必然な行為とが、その時、その場所で、偶然に出会ってしまった結果に生じ、登山隊としては全く予期、予測していなかった出来事」、であることを述べています。しかしその裏には、報告文章で

書けない「死んでしまった人を、生かして返すことは、誰にもできない」という科学的認識が、伏せられていたのです。また、その認識を彼女に返したとしても、彼女の心を満たし、悲しみを拭うことはできません。“沈黙”という曖昧な寛容さの中に、包み込んでおくしかないという瞬時の判断でした。

『偶然と必然』で書かれる科学の限界を意識すると、この世に絶対な事象はなく、絶対＝完全なるもの＝神をもって都合よく世界を「制御」することは、「不都合な真実」であることに気づかされます。当時流行ったニーチェのニヒリズム、「神は死んだ」とする主張に見事符合、整合(マッチング)しました。しかし世間は神にとって代わる「科学的合理性」を、理性の中核にすえます。目覚しい科学的手法の展開、解明に意識が集中してしまった世間は、時に科学的探求の限界を忘れてしまいます。私たちは科学万能でないことを、改めて再認識したいものです。登山行動には、哲学や宗教という心理の抽象性も含み得るわけですから、より総合的に捉えるためには、後述で提起する「複素的視野(世界観)」が良いと考えています。

2015年5月19日付けの朝日新聞オピニオン欄に、現代日本を代表する社会学者、見田宗介(みたむねすけ)東京大学名誉教授へのインタビュー記事が掲載されました。掲載記事『歴史の巨大な曲がり角』との関連は別な章でおこないますが、見田先生の若き頃の著作、『人間開放の理論のために』(ペンネーム:真木悠介、筑摩書房、1971.11.20第1刷発行)をヒントに、私は1973年に以下の試論を書き始めました。(試論構成、項目)

.....

## 『山登り～その社会学的研究と応用 (試論)』 1973年

### 1. 序説

- 1. 山登りと学問との関連性
- 2. この研究の目的
- 3. 展開方法への序説

## 2. 登山者資質の研究

- 1. 登山者性向の分類 ～ 人間欲求の理論から

※ 1973年には以上までを書き、下記項目内容の記述は断筆



- 2. 認識視点の自覚と確立～対自化の一手段として
- 3. 対自からの創造～欲求の実存性

## 3. 山登りへの展望

- 1. アルピニズムの対自化～生と死の自己顕在的弁証法化～多様性
- 2. レジャー登山～スポーツ、観光、ヒューマンリレイション～画一性
- 3. ニュース性(社会性)の喪失 -1. -2. の分化そして組織化

## 4. ヒマラヤ登山の研究 (ヒマラヤ登山と哲学)

- 1. 状況の理論 (何を乗り越えるか) — 過去
- 2. 目的の理論 (何を目指すか) — 未来
- 3. 実践の理論 (いかなる生を選ぶか) — 現在

## 5. 登山隊組織技術論 (技術)

- 1. 場の理論 ～ 人間存在の有限限界と日常性から
- 2. 時間の理論 ～ 隊構成の歴史的(時間性)有限性への自覚
- 3. 実存の理論 ～ 愛の関係性へ
- 4. コミュニケーション理論 ～ 伝達(コミュニケーション)媒体として
- 5. 実践のシステム理論 (方法論)
- 6. 人脈の理論

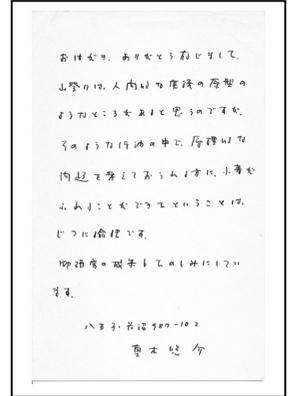
## 6. 組織理論の社会的応用 (応用)

- 1. 生の哲学 ～ 遊びと勤労との調和 ～ そして「遊び」の理解
- 2. 職場組織への応用
- 3. サークル組織への応用 (同好グループ、山岳会)
- 4. 国家組織との相違から

.....

『人間開放の理論のために』の中、「人間的欲求の構造(P-103)」を参考にして、  
2. 登山者資質の構造、2-1. 登山者性向の分類、までをまとめた手書き原稿コピー  
を見田先生へ送りました。そして返信葉書をいただきましたが、以下の通りです。

【おはがき、ありがとう存じまして、山登りは、人間的な実践の原型のようなところがあると思うのですが、そのような行動の中で、原理的な問題を考えておられる方に、小著がふれることができるということは、じつに愉快です。御研究の成果をたのしみしています。 (1973.07.13 葉書受領)】



[見田先生から返信の葉書]

また登山者分類の例として、第2次RCC編の『現代アルピニズム講座』に掲載された【小林晃夫、小川新吉「本邦アルピニストの心理と性格」東京教育大学体育心理研究】を比較できるように引用しました。内田クレッペリン検査を用いた10分類に整理されたものです。標題に「本邦」が付加されていますが、前記列記項目①の1968年論文と同じもので、登山者分類の先駆的論文だと思われます。

私が書き始めた、『山登り—その社会学的研究と応用(試論)』はその後、拙著『青春のヒマラヤに学ぶ』(文芸社、2001.01.01:P.77)に掲載していますが、論考は2-1.「登山者性向の分類」で中断したままとなり、未完成なものです。しかし1970年代において、社会学と連携した論考は、極めて珍しいものでした。

あれから42年を経た今、時間を得、改めて考え直してみると、着想の鋭さは衰えましたが、総合力をもって統合する力は、『老いの道標』として提示できると思う次第です。

## 6章 中村先生の「正・反・合」から「新」を考える

### 1. 中村純二博士の正反合

2013年12月16日、中村純二先生から、夏(2013年)におこなわれた東京大学山の会・記念祝賀懇親会における中村先生の挨拶文の写し(次頁参照)とともに、お手紙をいただきました。その概要を要約すると、以下の項目となります。

- ① 大学山岳部は戦後大きく変わり、「正→反→合」の「進化」をおこない、ようやく「合」の立場に達した。
- ② 今後「正」のグループは「反」のグループともよく付き合い、ともに「合」のグループの成長を見守りたい。
- ③ ところが「合」のグループは大学の授業に熱心で、講義や演習を休んでまでトレーニングや合宿に出かけることもなく、個人的にボルダリングで才能を現す学生が出るくらいである。

「正」の立場とは、世界の山岳界がエベレストやヒマラヤ 8,000m 峰の初登頂を目指し、人類として未踏の高みへ到達するような登山様式とされています。

「反」の立場は初登頂終焉以降、個人の能力や趣好に応じて岩登りやボルダリング、その他様々な関わりで山に入る多様な登山様式とされています。

「合」の立場とは、「正・反」次の世代として生まれた「新しい世代」で、「正・反」併せ持ち、かつ、旧来に囚われない自由な登山様式とされています。

そして「進化」とは、「正 → 反 → 合」へと移行する様態を示されます。

さらに私は、「合→新」へ論考を発展させたいと考えるものです。

## 第Ⅱ部 記念祝賀懇親会（12時～14時）

司会：「これから、第Ⅱ部記念祝賀懇親会を始めます。

最初に、中村先生に御挨拶と乾杯の音頭をお願い致します。宜しくお願い致します。」

中村 純二 氏：東京大学山の会（昭和22年9月卒業）

「中村でございます。例年夏は3ヶ月間程外国の山旅に出かけて居るのですが、今年は1月に大動脈瘤破裂を起こしたため、海外の旅は取り止め、リハビリ上日本に留ることとなり、このような夏期のTUSACの記念祝賀会にも出席できて嬉しく思っております。

この機会にTUSACの在り方について近頃感じて居る点を一言お話し申し上げ度思います。

本日は外国遠征の歴史や意義についてのお話がありましたが、物事は正反合の状態を通じて進化しているようです。

TUSACはもとより、世界の山岳界が当初はエベレストを目指して、精神的にも技術的にも体力的にもひたすら励んで居りました。所が20世紀後半、ヒマラヤの8,000米峰がすべて登られると、この『正』の立場だった山岳界の在り方が全く変わりました。即ち人類として未踏の高みに達することの評価は急速に衰え、その後は『反』の立場、即ち個人の能力や嗜好に応じて、岩登りや、ボルダリング、あるいは様々な対処法によって山に入ると云う多様性の時代に入りました。

TUSACも例外でなく、『正』の世代には互いに結束してバルトロ、キンヤン、アラスカ、チューレン等目指し、京大に少し遅れを取っていたものが、『反』の世代になると、個人的な面も加わって、『正』の世代の人々には想像もできなかったような人工登攀とか、雪崩の危険など構わないスキーや速攻登攀などはじめ、輝かしいシヴリン、K7、ヨセミテ遠征などを達成、京大をも凌駕する活動を続けるに至りました。

唯一時、多少共正反の交換が疎遠となり、総会やシニア会にも反の会員の出席率など少なく、互いの交流まで冷やかになったのは些か残念であったと考えて居ます。

所が二年前、現役が居なくなり、TUSACの危機に直面した時、内田会長はじめ藤本会員らが声を挙げ、正反の会員が共に募金に応じたり、勧誘や指導に努めた結果、『合』にも相当する新しい世代が生まれ、冬山合宿も行えば、人工登攀も積極的に行うと云う時代を迎えることができ、本会場には特に正反合の充実した会員の集合が見られます。これはTUSACにとっても将来性のある初めての記念すべき会合だと思われま

す。皆様の健康と更なる各分野での活躍を祈って乾杯を致したく思います。どうかご唱和下さい。

乾杯 … どうも有り難うございました。」

（拍手）

## 2. 「正・反・合」～ 弁証法の複合論

哲学的な【正 反 合】の考え方は、ヘーゲルによって定式化された弁証法論の三段階を示すとされています。ある判断を定立(正)とし・・・①、それに矛盾する判断を反定立(反)とし・・・②、正反二つの判断を統合したより高い判断を総合(合)とする・・・③、三段階です(大辞林：参照)。このことは『論理的なものの見方』に、三つの側面があることも示します。

- ① 抽象的側面あるいは悟性的側面 (定立＝思惟の固定した規定性)
- ② 弁証法的側面あるいは否定的理性の側面 (反定立＝反対となる諸規定への移行)
- ③ 思弁的側面あるいは肯定的理性の側面 (統合＝対立する二つの規定を肯定的に解消統合し、総合とする)

しかしこの三つの側面への移行は単純なものでなく、それらの隙間にこそ弁証法のダイナミズムが存在するという解釈があります。その隙間における対話のせめぎ合い(弁証)こそが、隠れて見えない重要なアクションである、という指摘です。これら三つの側面は直列に順序だてて表出されるばかりでなく、時には並列に、時には前後逆転させる脳の意識と言語機能の多次元性によるものです。

ヘーゲルの弁証法は「対話なき弁証法」と言われ、三段階の隙間にあるせめぎ合いのダイナミズムに欠けると指摘されます。それを克服し対話によって立つ方法として、「正—正—反—合」という“複合論”が登場します。嶋喜一郎氏は『複合論は認識の領域だけに位置づく小さな道具(方法・技術)にすぎません(弁証法試論)』として、「**弁証法の複合論**」を複素数モデルで提示されます。

例えば： $A = a + bi$  実数部分「a」は「自己表出」、虚数部分「b」は「指示表出」とし、あるもの  $\boxed{A}$  の認識論理形式を**複合構成**します。

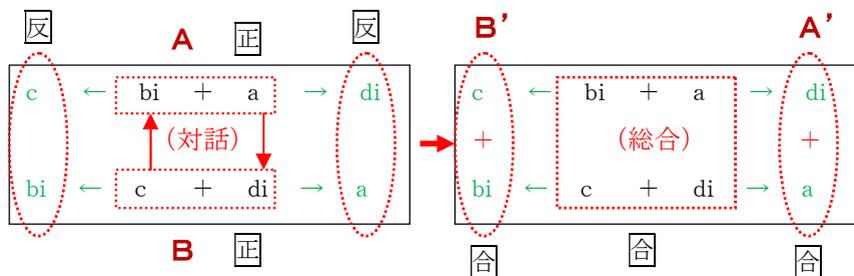
対話による思考方法(弁証法)は、異なった認識論理が二つ以上同じ場所にあることになり、次の二つの  $\boxed{\text{正}}$  を選択します。

- ①  $A = bi + a$
- ②  $B = c + di$

この二つの論理の対話は、次の図のように表せるといいます。

### 【 第1段階 】

① A と ② B の対話(議論)の中で、お互いの理解・啓蒙・学習等により、「相反」する要素 (c, di, bi, a) が認識され、左右の四隅に  $\boxed{\text{反}}$  の要素として抽出されます。



### 【 第2段階 】

次に  $\boxed{\text{反}}$  の要素どうしが「結合」すると新たな論理が創出され、③ A' と ④ B' で表わすことができます。

$$\textcircled{3} \quad \underline{A' = di + a}$$

$$\textcircled{4} \quad \underline{B' = c + bi}$$

### 【 第3段階 】

第1段階における対話内容の総合 [ A×B ] と、第2段階において創出された新たな論理内容の総合 [ A'×B' ] は、同一場所にあつてより高次元位相へと昇華します。

以上の段階をまとめてみると、次頁の表となります。相反する相手と「対話(弁証法)」することにより、より高次元合意へと至ることになります。会議は、関係者が集まって「議論(対話)」により意思決定するものですが、「提案・質疑応答・議論・議決」行為となります。議決された内容は「決議」となり、決議事項、決議内容、決議書となります。また、国会決議においては「法律」となります。

「討論(論破)」はディベートともいわれ、ある主題についての賛成・反対等の意見

を表明、主張、闘わせることで、「議論(対話)」のように多様な意見を聞き、学び合うものではないとされます。

第 1 段階 (対話)	$\boxed{\text{正}} \text{ ① } A = bi + a \Rightarrow \boxed{\text{反}} c, di$
	$\boxed{\text{正}} \text{ ② } B = c + di \Rightarrow \boxed{\text{反}} bi, a$
第 2 段階 (結合)	$\text{③ } A' = di + a$
	$\text{④ } B' = c + bi$
第 3 段階 (総合)	$\boxed{\text{合}} A \times B = (bi+a) \times (c+di)$ $= bci + ac - bd + adi$ $= \underline{(ac-bd) + (bc+ad)i}$
	$\boxed{\text{合}} A' \times B' = (di+a) \times (c+bi)$ $= cdi + ac - bd + abi$ $= \underline{(ac-bd) + (cd+ab)i}$
	$A \times B \doteq A' \times B' = x + yi$ <b>(昇華)</b> $= \mathbf{C}$ (より高次な位相)

**弁証法** (dialectic) : 思考を深める方法

対立した意見の持ち主が対話をおこなうことにより、互いにより深い思考に向かっていく方法。

**討論** (debate) : 論破により自己主張の正しさを論証する方法。

異なった意見の持ち主が議論を戦わせ、互いに自己主張が正しいことを論証する営み。

**議論** (discussion) : 多様な意見を学び合う方法。

異なった意見の持ち主が集まり互いの意見を語り合うことにより、多様な意見を学び合う営み。

### 3. 「合と新」のグループ

中村先生の【正・反・合→新】に話を戻します。現在の登山は、【正・反・合】三つの世代が共存しています。「正」の世代は戦前派と云え、少人数となりました。「反」の世代は戦後派とも云え、団塊の世代とも呼ばれて定年退職期を迎え、あるいは過ぎ、新たに「老いの山」に取り組んでいます。昭和後期から平成に亘る「合」の世代は、登山とともにスポーツ要素が拡大浸透してきました。さらに近年「合」は進化し、「新」の世代を考えなければなりません。「合」と「新」は混じり合い、「合と新」にて括ることにします。つまり各世代の表現は、「正・反・合と新」としてみます。

現代の電子空間情報社会(PC、SNS)は、「合」の多様化とともに、デジタル電子回路による「時分割、空間分割」技術は、脳の次元意識を変えてゆきます。それらは「サイバー空間(cyberspace)、ネット空間(net space)」とも呼ばれ、脳にバーチャル・リアリティ(仮想現実感)を与えるようになりました。「合」の目に見える形での多様化から、「新」の目に見えない多様・多層・多次元化への進化を促します。多様性はさらなる重層構造(多層、多次元)となり、各層(layer)の積み重ね構造となり、さらに時間が加わると複雑です。これまで身体がおこなってきた運動(登山)もは、電子機器(ゲーム機)の中で仮想現実感覚に代替されるようになってきます。現在顕著なゲーム分野は、野球、サッカー、バスケット、ゴルフ、マージャン、将棋、バトル、戦闘等々、数え切れない進化を果たし、ハードウェア&ソフトウェア&プレイヤーの一大産業となっています。映画はすでにコンピュータグラフィックス(CG)により、三次元映像感覚を見事に表現させました。それらはいずれも脳が認識する「虚な世界」であり、現実の身体が存在している「実な世界」とは異なる層(相)にあります。これまでは機械を用いず、脳と体の中から意識する「心」は、その印象を他者にさらすことができませんでした。目に見えない虚な世界だからです。しかし現代の科学(分子生物学、他)とデジタル技術は、人間の「心」の解明と表象に大きく迫ります。

このような現代社会において、「正・反・合」のアナログ的連続感覚の分析だけでは足りず、デジタル的不連続な時分割・空間分割技術がもたらせる「バーチャル・リアリティ(仮想現実=虚実)」な感覚も、併せて理解することが不可欠な時代に入

ったと考えるのです。「合」の目視的多様性と、「新」の虚構現実を組合せ、「合と新」へ進化する、新たなグループを考えなければなりません。このことは登山だけでなく、現代社会の共通事象となっています。

世代間ギャップで、何が一番異なるかを考えてみると、「**死生観**」が浮き上がります。ゲーム機の中では、何度死んでも生き返ります。このゲームに慣れた小学生の多くが、リアルな“自然生命感”を失っているといわれます。さらに在宅で、“老いの死を看取る”習慣も薄れています。老いの病は病院へ隔離し、医師が死の判定を下す社会制度とも重なり、日常生活の中に「生と死」を体験する契機が失われました。加えて技術は、iPS細胞を始めとする再生医療の進化と、遺伝子操作による生命体の複製(クローン)も成功させ、従来の「**カタストロフ的死生観(生と死は断絶)**」へ大きな影響を与えています。これまで一人の人間のサイクルは、出生をもって心身生命活動の始まりとなり、死をもって物質に還り生命活動は終了することになりました。生と死は個体人間周期の始めと終わりであり、その前後は断絶(catastrophe)と認識されていました。

一方で技術は、機械をより人間に近づけようとするロボット化と、生物そのものの複製(遺伝子操作)と再生(万能細胞)という二つの面から、“**人工的生命**”を造る努力をしています。現代文明は、これまでの生殖による生命継承、種の保存とは別に、人工的生命操作技術の開発努力を、日進月歩の勢いで重ねています。このような技術進化の一方方向性は、文明とする人類欲求の必要条件であり、宇宙変容の方向性と位相を同じくするものといえます。

“自然生命と人工的生命”の違いはまた、文化の一大転換をもたらせます。世の中は常に移ろいゆくもので、同じもの同じことは永遠に続かないと、**無常**を唱える**仏教**。**断絶**のはかなさを美しく語る**文学**。それらは過去の概念となります。「生・反」による登山意識もまた、死を媒介として生を燃焼させる弁証法スタイルから、もはや死は交通事故のような想定外のアクシデントと受けとめられ、生死の意識を除外した「スポーツ」へと変遷してゆきます。では自己に向かって問う哲学は、どうなるでしょうか。極論を示せば、もはや個性は無きに等しく、物質の分子や元素同様、ある定型な種類に**類型化**されてゆくのでしょう。物質の最小単位を対象とする素粒子物

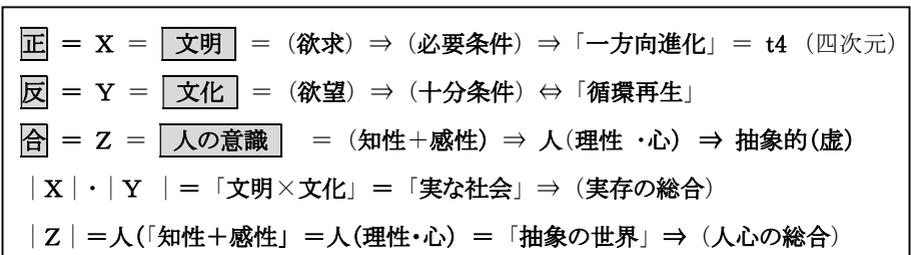
理学同様、人類行動の基本類型が集約され、基本類型哲学は社会学と一体となり  
そうです。重ねてこのことは極論で、真実から帰納させる科学的表現ではありません。

では、「正・反の登山」と「スポーツ登山」の違いは何かといえ、やはり前記  
の「死生観の違い」にあると云えましょう。自然に分け入る「正・反の登山」の場  
合、「安全(生)の保障」はありません。「スポーツ登山」とした場合、「安全の保障」  
は競技開始の基本条件となります。この違いによる行為者の意識と感性の差は大き  
く、行為者の性質を決定的に異なるものとします。

このような単純な視点から論ずる人を、浅学な私は知り得ません。

これまでのアナログ的身心体験(実体験)がデジタル的心身体験(疑似体験)に代わ  
ることにより、脳の意識がバーチャル・リアリティを受け入れやすくなっている新世代  
を育むこととなります。それゆえに、「新」の世代は「正・反」の実存世界へのこ  
だわりはなく、抽象世界をも受け入れられる「**複素的な世界観**」に至るのではない  
かと、考えるのです。

前節、「弁証法の複合論」にとらわれず、「正・反・合」を私の理解する言葉に  
置き換えてみると、【正⇒文明、反⇒文化、合⇒複素な世界】となります。次頁の  
【図-1】、座標軸x方向ベクトルを **文明**=X、y軸方向ベクトルを **文化**=Y とすれ  
ば、その二つのベクトルが織り成す二次元平面の層は「**実な社会**」、つまり実在  
する社会を表現します。そしてz軸方向ベクトルを **人の意識**=Z とすれば、人間の  
知性と感性によって意識される「**虚(抽象)な社会**」を表現することができそうです。  
「虚」といいますのは「目に見えない意識の中にあるもの」を意味し、「人の心」  
や「**社会脳(social brains)**」などと言い換えることもできます。



【 図-1 】 **人の意識・文明・文化 = 環境の複素的な世界構造**

狂気  
天才

無意識=直感、ひらめき、第6感

$|Z| i(t) =$   
**人の意識 (知性+感性)**  
 $\Rightarrow$  **人の意識 (理性+心)**  
 $\Rightarrow$  権力(政治)・価値  $\Rightarrow$  **幸福**  
 国家・支配という虚構  $\rightarrow$  戦争

日常の中の  
非日常性

相対的境界/絶対的境界  
 フィードバック(生/負)  
 (権力価値調整能力) 政治  
 (環境適応調整能力) 思想  
 (中心) (周縁)  
 国家法治主義  $\Leftrightarrow$  諸制度設計

<他者・差異性>

虚な世界

**意識** =  $|X| \cdot |Y| i(t) \leftarrow |Z| i(t)$   
 (リアルタイムな環境) = **複素な多次元世界**

バーチャル  $\rightarrow$  不連続

抽象世界

**理性+心**  
**意識** (4次元意識)  
 <4Dメディアポイント>

共感・感動  
**美** **情** **知**

共鳴、共振、同期、同調

Y

位相  $\theta 1$

位相  $\theta 2$

X

**意思**  
 神(完全)  
 超人(ニチエ)  
 スーパー(人)

(民主主義)  
**相対多数決**

(4次元時空間)  
 $t4$

**ハラス**  
**限界**

<ソフトパワー>  
 (必要性への目的)  $\rightarrow$  **意識力**

**人工物**  $\leftarrow$  **自然界**  
 余剰  $\leftarrow$  <ハードパワー>  
 (必要性への手段)

優越願望  
**Y = 文化** 生存の十分条件

生命世界

自然代謝  
**X = 文明** 生存の必要条件

(意識の欲望) **主観**

<公共  $\rightarrow$  同一性>

(無意識な欲求) **客観**

意味・価値の表現様式=時限性(情報)、文芸・レジャースポーツ・遊び・学習思想・宗教・死生観・家族、意味と価値の表現様式=歴史、戦争、経済(資本)

日常性

生命=種の継承保存・生死・食料  
 労働・科学・技術・道具・エネルギー  
 都市・競技スポーツ・記録とデータ  
 進化の方向性=成長、武器

リアル  $\rightarrow$  連続

代謝=生命

人間環境 自由

異種共存

必然 人工環境

**意識** =  $|X| \times |Y| i(t) \leftarrow |Z| i(t) =$  「**実な世界**」 + 「**虚な世界**」

$\Rightarrow$  **リアルタイムな環境**  $\Rightarrow$  **人と環境の総和**  $\Rightarrow$  **複素な多次元世界**

<4Dメディアポイント>

数学では有理数(比で表せる数)と無理数(比で表せない数)を合わせた数を「**実数**」

(real number)」といい、その性質は「**連続性を持つ**」数とされ、電気信号に例えると「アナログ信号」となります。人類社会は日々の連続を積み上げ、歴史を残してきました。一方、意識によって創造された数を「**虚数**(imaginary number)」といい、目に見えず根拠のない架空な数として編み出されたものです。

「虚数の2乗 = -1 [  $i^2 = (\sqrt{-1})^2 = -1$  ]」として、電気の計算や量子力学では普通に使いますが、実社会での一般的理解は難しいものです。さらに「**実数 + 虚数 = 複素数**」とする、複層(複相)を考えるに便利な「**複素数**(complex number)」を用います。

光は**波**(波動)の性質と、**粒子**(物質)の性質を併せ持っていると言われます。数学、物理学、電気工学において、光の伝播はつぎのような波動方程式で表現されます。

$$[ D^2 x + D^2 y + D^2 z - (1/v^2) D^2 t ] \Psi(x, y, z, t) = 0$$

D: 微分記号       $\Psi(x, y, z, t)$ : 波動関数  $\Rightarrow$  心の関数(心  $\rightarrow$  波)

アンダーラインの項が「-」となっていますが、「虚数の2乗 ( $i^2$ ) = -1」という「**虚な時間**」表現を導入すると次式に変換され、X, Y, Z, t の加法総合表現に変わります。

$$[ \underbrace{D^2 x + D^2 y + D^2 z}_{\substack{\uparrow \\ \text{(実な世界)}}} + \underbrace{i^2 (1/v^2) D^2 t}_{\substack{\uparrow \\ \text{(虚な時間)}}} ] \underbrace{\Psi(x, y, z, t)}_{\substack{\uparrow \\ \text{(人} \Rightarrow \text{心の関数)}}} = 0 \quad \text{(空、虚無)}$$

$\uparrow$  (虚な世界)       $\uparrow$

**波動**は時間的(t)、空間的(x, y, z)な振動減少とみなされますが、それはちょうど人間社会での日々刻々な変化に類似したものと受けとめることができます。空間的(x, y, z)要素を前記の「**複素な世界構造**」に照らして、**X = 文明、Y = 文化、Z = 人意識**、としてみると、**物質(粒子)的存在となる「実な世界(物質世界)」と、波動(波)的存在となる「虚な世界(抽象世界)」**とに対比して理解できそうです。さらに波

動方程式の「右辺⇒0」の理解は、仏教的表現においては「空」の世界を示し、哲学的表現においては「虚無」の世界に当てはまるのではないかと考えます。

光子の「粒子」たる性質は電気場(E)、磁気場(B)のエネルギー(力)をもたらせます。真空中の誘電率 =  $\epsilon_0$ 、透磁率 =  $\mu_0$  とすれば、光の電磁波たる数式は以下となります。

$$[D^2 x + D^2 y + D^2 z - \epsilon_0 \mu_0 D^2 t] \cdot E = 0$$

$$[D^2 x + D^2 y + D^2 z - \epsilon_0 \mu_0 D^2 t] \cdot B = 0$$

伝播速度 =  $v$ 、光の速度 =  $c$  とすると、

$$v = c = (1 / \sqrt{\epsilon_0 \mu_0}) = 3 \times 10^5 \text{ [km/s]}$$

(地球一周  $\approx 4 \times 10^4$  [km] とすれば、光は1秒間に地球を7回半廻る)

(赤道一周  $\approx 4.77 \times 10^4$  [km] とすれば、光は1秒間に地球を6.3回廻る)

(極間一周  $\approx 4.90 \times 10^4$  [km] とすれば、光は1秒間に地球を6.1回廻る)

光子の「波」とした性質は互の干渉能力を持ち、干渉縞となって現れます。その縞模様は人間の織り成す「社会(心)現象(集合特性)」といえます。一方で粒子たる物質性は、一人ひとり数えることのできる人間の「個性(独自性)」を示すともいえます。

「文明」は人が生存を続ける上での必要条件であり、人として持って生まれた自然な「欲求」として、その主たる目的は種(DNA)の保存となります。種の継承をより確実にするために、科学の合理的知識によって技術を進化させ、エネルギーによって人の活動範囲と能力を増幅させる道具(人工物)を作り出し、自然を人間生活に適する人工環境社会へと改造、その領域を拡大し続けることにより、それを文明の進化として人類史を連ねてきたといえます。

「文化」は人が生存を続ける上での十分条件として、「欲望」の充足を図る情報(意味・価値)様式と捉えます。生命維持の最低条件を文明が与えるものとすれば、文化は生命活動における安全、安心、ゆとり、優越感といった心の表現様式、つまり意識の意味と価値を実存世界の表現様式へと変換したものと いえます。それは必

然から心身の開放をめざす文芸、スポーツ、遊び(遊戯)とともに、原理・規則性に安寧をもとめる思想、宗教でもあります。

「人」にそなわる**知識と感性**は、見えない人の意識の中に保存され、虚な社会、あるいは抽象の世界として構成されます。文明と文化は見える現実社会の二つの軸ですが、知性と感性は現実と関わりながらも見えない、人の脳と身体に宿る意識の世界です。それゆえに現実の層(相)にありながらも、様々な層(相)を重ねる多様な存在となります。意識の層は多次元、多層であり、価値が類似した同層(同相)の中では意識の権力構造が芽生え、政治力学を発生させます。このことは文化と緊密に連動し、文明進化の速度を変える力ともなります。

人の**意識**(知性と感性)は、自然における人類の生物環境適応(文明適応)への調整を図るとともに、人の欲望を満たす行為が自然環境をどれほど人工化させ、そのことが自然再生循環にどれほど障害となるかという「**気づき**」を与え、文明を変えてゆく力となります。人類は自然の全てを制御・支配しきれるのか、あるいは一生物として自然の中で適応進化を図るべきか、複素な世界観からは後者の立場を支持するものであります。

以上のことから中村先生の「**正・反・合**」に併せてみると、【表-1】(P.86)へと整理できます。

山岳人は【**合・反・正**】の順次に減少してゆきます。多数派「**合と新**」の世代は多層化し、「**正・反**」による実存的登山観を超えたスポーツやレクリエーション、レジャーというように、身心のバランスよりも頭脳のバーチャル化してゆきます。「**正反**」の**命(心身)を賭けた冒険・探検・初登頂・初登攀**は、過去の**記録**として歴史に残されますが、「**合と新**」世代の「**感動**」を呼び覚ますことができるでしょうか。**もはや同類な思いは伝わらないと思うのです**。そのことはまた、**宇宙的進化の必然な帰結**でもありましょう。

「合と新」世代のテクノロジー、つまりコンピュータと感覚センサ、インターネットに代表される「**電子・ロボット化ネットワーク社会**」は、人間の脳機能とともに五感を代替する各種センサとも共生し、直接体験を経て獲得してきた知性・感性とともに、

電子情報をもたらせる蓄積プログラム知性・感性(バーチャル・リアリティ)へと変化をとげてゆくのでしょ。身心のアナログ的形態よりも、頭脳デジタル的バーチャル化が進むのでしょ。「正・反」は、ただ見守るだけで精一杯な、飛躍的技術進化です。このように考えるとテクノロジーは、人間の特性までを変質させ、文化要素も変えてゆきます。「正・反」の身心アナログ的体験世界から、「合と新」世代はコンピュータと情報のバーチャル・リアリティが加わる「**実と虚な世界**」、つまり「**複素な世界**」へ進化してゆくと考えます。「正・反」の世代としては、そのことの理解と論理的背景を少しでも把握し、位置づけてみたいと思うのです。

**【中村先生からのコメント】** 2014.02.21 付 手紙

実数軸の自然な文明の時代、虚数軸の多様で自然を意識的に見る文化の時代、並びにこれらを総合した複素空間の宇宙空間的心の時代、と定義していただき、私まで不十分な点が補われた気がしているところです。

確かに「反」は単なる反発でなく、個人で多様な目標が持てる自己充実の時代で、すでに正をも含む自由で新しい目標を意識した開拓、創造の時代です。そして「合」はまさに、地上の山だけに拘らず、宇宙的で、学業や思想を超越した心の世代で、不確定性や相補性、統計情報をもとり入れた、知性と感性をもつ人間の世代といった気が致します。

人類が他の全ての生物と共に、どのようにこの限られた地球で存在し、平和に適意の日々をおくっていくか、これまでの人間の歴史や自然史を顧み、客観的眞実とともに心の充実や究極を求めて、より高次元空間へ入り込んで行くべきだと思いました。

<b>[表-1] 進化 = 正 ⇒ 反 ⇒ 合 への変遷 (中村先生の分類から)</b>			
状態	正	反	合
1953年5月	エベレスト初登頂(イギリス)		
20世紀後半	ヒマラヤ初登頂(8000m峰)	岩登り、人工登攀、ボルダリング(アルパインクライミング&フリークライミング)	
から	未踏の高さへ: 初登頂	未踏のルート: 初登攀	正・反こだわりのない
現代へ	極地法登山	速攻登攀、競技登攀	
	心技体の練磨	個人の能力・趣好	学業優先
	世界・国家目標達成の時代 単一目標(世界初)	個人目標達成の時代 多様化(自己充填・満足)	新しい世代
東京大学山の会の例	バルトロ、キンヤン、アラスカ、 チューレン	シヴリン、K7、ヨセミテ	ヒマラヤからボルダリングまで
	正・反の交流・支援 ⇒		新世代の育成
<b>進化 = 正 ⇒ 反 ⇒ 合と新 の理解 (田中の分類)</b>			
呼称	正 ⇒ 文明	反 ⇒ 文化	合と新 ⇒ 複素な世界
次元	1次元 : 直線的	2~3次元 : 空間的	多次元 : 多次元、多局面
意識	無意識のままに ⇒ 自然のままに一方向的に進化 (科学、技術、生命、記録)	意識的に ⇒ 自然に意識的に逆らう (思想、文芸、スポーツ、遊戯)	意識と無意識の複合 身心 = 体と心 [知性(意識) + 感性(無意識)]
進化の方向	一方向な宇宙時間の中で技術 的適応が進化を図る(直線性) ~物質の性質	一方向な宇宙時間の中で同質 性が繰り返し現れる(周期性) ~波の性質	多次元世界(少なくとも4次元) を理解し、過去と未来を統合す る今(脳と身体)
評価・比較	絶対評価・比較 1局面での強者/弱者	相対評価・比較 多局面での強者/弱者	評価・比較は無意味 異なる次元・局面・世界相互の 比較は無意味
	絶対的単一要素	多様性の中で要素の条件設定	多層構造化(なんでも有り)
人間の条件	生命 : 自然の中	生命 : 自然の中	生命 : 自然 ⇒ 人為的
	自然な欲求(本能)	意識的欲望(心=理性+感性)	局所化と統合(心身と世界)
	必要条件(生存に不可欠)	十分条件(生存の付加価値)	適正条件(生存の最適化)
	探検・冒険・発明発見	開拓・開発・創造・模索	局所(部分)化と統合(全体)
	人類史観	個人史観	宇宙史観
	鳥の目(自然)	虫の目(心)	宇宙の心眼(目と心)
数式表現	実数 = a	虚数 = b i	複素数 = a + b i

## 7章． 登山の生態系（分類）

元来「登山」は、衣・食・住を自ら背負って山へ登り、無事帰宅するまでの道程を指してそう呼んでいました。山菜やキノコなど、山の食料調達はできるものの、近代登山にあつてはそれさえもなくなり、山では水の補給をおこなう程度と、自前で衣・食・住を運びました。その中から**登山技術、炊事技術、生活技術**（テント生活）、**気象知識**等々を磨きます。登山技術はそれらの半分程度で、残りの諸々は生存にとっての基礎技術ともなるべき、生活の知恵となっていました。

濡れた木でも焚き火を起こし、石を三点に置けば釜戸となります。狭いテント生活は、習慣のちがいによる我が儘や思いやりの葛藤が、日常生活への訓練にもなりました。約 50 年前、私が社会人山岳会に入った頃でも、登攀技術とともに生活技術の訓練と意識づけが大切な要素としてありました。

現代、登山者の多くは山小屋を利用しています。それが良い、悪い、という視点から述べるものではありません。**衣・食・住を自ら背負わない登山を「登山」と思い込まれる風潮**に対し、「**何と、貴重な体験を失っていることか……！**」、という驚きなのです。元来の登山様式が備えていた山岳体験による自己練磨の素晴らしさは、近年の自然災害被災においても役立ったはずです。自然災害ばかりでなく、**日常生活の中で生じる非日常事態**（アクシデント）に対しても、その技術や心構えは役立ちます。**登山の多様性を論ずる前に、まずこのことを思い返してほしいものです。**

登山及び登山者についての多様性は、「生物多様性」に似た行動様式や行動への動機づけ等による類型～様式～形式～種別と、系統だった分類が考えられます。従来は、次頁以降に示すような形式的分類がおこなわれ、それらの人間的特性に踏み込んだ、系統だって整理する手法は見当たりませんでした。

さらに「**登山＝スポーツ**（登山は生涯スポーツである）」と考える、戦後日本登山界の主たる潮流に対し、異論を唱える者は見当たりませんでした。これまで日本の登山を牽引してきた、文部科学省⇒日本体育協会⇒日本山岳協会の行政府ルートは勿論、行政府系列に属さない日本勤労者山岳連盟にあつても、同様な認識の下

で世界の山々を登っています。

しかし本論においては、「登山 / トレッキング / 山岳スポーツ」と、類型分離をおこないますが、初めての試みかもしれません。身体行為が登山の主体であるわけですから、登山にともなうスポーツ要素を排除する考えではありません。2章で定義したように、登山は単純に山に登るそのことを主目的とするわけですから、山ではない海岸の岩壁や屋外・屋内人工壁に登るスポーツ・クライミングは、登山とは別ジャンルとして扱うほうが、登山の本質に迫るものと考えからです。

同様に山嶺を駆け抜ける「ランニング」や、心身の健康スポーツをめざす「ウォーキング」も別ジャンルとし、クライミング、ランニング、ウォーキングを合わせて「山岳スポーツ」として括ってみます。

それらは生物多様性のごとき、様式～形式～種別として分類整理することができます。その分類は一人の登山者の所属を決めるものではありません。一人の登山者にあっても、その都度の山、ルート、登り方、季節、パートナー等々のケースに応じ、多様な登山をおこなうからです。つまり登山者個人を所属分けするものではありません。個としての登山者が、いろいろな山に、多様な登山をおこなうことを整理・分類するのであり、それを生態系のように捉えて整理すると、理解しやすくなると考えたわけです。

このことは登山者を登山組織の一員と見るものではありません。多様な登山ができる個が先にあり、どのような登山をおこなうかによって、適正組織の必要性が生じるという捉え方です。旧来の「まず、組織ありき」ではなく、「何のために、組織が必要か」、という視点です。

## 1. これまでの登山や登山者組織の分類

従来の登山や登山者組織の分類をみると、次のような分け方があります。

### 【 登山の分類 】

- 1) 内容別の視点（登山様式）
  - ・ 軽登山 …… 日帰り登山

- ・ 小屋泊登山 …… 小屋に泊まりながら複数日の登山
  - ・ テント泊登山 …… テント持参による複数日の登山
  - ・ 雪山登山 …… 積雪のある山への登山
- 2) 習熟度の視点 (登山レベル)
- ・ 初級登山 …… 特別訓練しなくても普通の人ができる登山
  - ・ 中級登山 …… 基礎レベルを習得し、応用段階における登山
  - ・ 上級登山 …… 自主判断、自立対応できる人達の登山
- 3) 難易度の視点 (登山グレード)
- ・ 初級登山 …… 安全度が極めて高い登山
  - ・ 中級登山 …… 予期せぬアクシデントを含み得る登山
  - ・ 上級登山 …… 生死に関わる内容を含む登山
- 4) 対象別の視点 (登山形式)
- ・ 無雪期縦走 …… 無雪期の山稜を登る
  - ・ 積雪期縦走 …… 積雪期の山稜を登る
  - ・ 無雪期登攀 …… 無雪期の岩壁登攀
  - ・ 積雪期登攀 …… 積雪期の岩壁、氷壁、雪壁登攀
  - ・ 沢登り
- 5) 国別の視点
- ・ 国内登山 …… 日本国内 (特に名前を付さない)
  - ・ 海外登山 …… 日本以外 (海外遠征登山)
- 6) アマ・プロの視点
- ・ 職業登山 …… プロ (金品報酬)
  - ・ 趣味登山 …… アマチュア

## 【 登山者に関する全国組織 】

### 1) 全国組織の視点 (登山者)

主に日本山岳協会とそれを構成する下部組織、都道府県・山岳連盟、市町村・山岳協会という、全国組織の中でおこなわれています。以下の分類は日本山

岳協会の運営組織として、初期段階からあったものです。

・ 組織内登山者 ……

① 文部科学省⇒日本体育協会⇒日本山岳協会⇒都道府県山岳連盟⇒  
市町村山岳協会⇒各山岳会、各種登山グループ⇒登山者

② 新日本スポーツ連盟⇒日本勤労者山岳連盟⇒各地方連盟⇒地域・職  
場・学校等の各山岳クラブ・山岳会⇒登山者

※「組織内登山者」という言葉の使用には、「差別意識が含まれる」とする  
のが本論の主張。

・ 未組織登山者 …… 上記に加入していない個人登山者

※「未組織登山者」という言葉の使用は、「不適切である」とするのが本論  
の主張。

2) 公益社団法人 日本山岳協会 (47 都道府県山岳連盟が正会員)

一般団体、職域団体、大学、高校の 1,248 団体、49,481 人(2014.04 現在)  
日本の登山界を統轄する組織 (HPより)

下部組織 ⇒ 都道府県山岳連盟 ⇒ 市町村山岳協会  
⇒ 各、山岳会、山岳グループ ⇒ 登山者

上部組織 = 日本体育協会、日本オリンピック委員会、国際山岳連盟、  
国際スポーツ・クライミング連盟、国際山岳スキー連盟、ア  
ジア山岳連盟、日本ワールドゲームズ協会

3) 日本勤労者山岳連盟 (現在約=650 団体、25,000 人) HPより

地域・職場・学校等の山岳会・クラブ等が団体加盟

下部組織 ⇒ 地方連盟、地方協議会 ⇒ 地区連盟 ⇒ 各、山の会・ク  
ラブ ⇒ 登山者

上部組織 = 新日本スポーツ連盟

4) 公益社団法人 日本山岳会 (32 支部 5,083 人) 2013.03 現在

日本を代表するアルパイン・クラブ (HPより)

下部組織 ⇒ 各支部 ⇒ 団体・個人 ⇒ 登山者

上部組織 ⇒ 東京都山岳連盟 ⇒ 日本山岳協会

## 【 登山を支える機関等 】

- 1) 国立登山研修所 …… 文部科学省
- 2) 公益社団法人 日本山岳ガイド協会 ……認定山岳ガイド職能組織（内閣府）
- 3) 日本山岳レスキュー協議会 …… 日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、  
合同組織
- 4) 日本ヒマラヤ協会 …… ヒマラヤ登山研究団体
- 5) 日本山岳文化学会 …… 山岳文化の学術研究団体
- 6) 日本山岳レスキュー協会 ……認定山岳ガイドのレスキュー技術指導組織
- 7) 日本山岳サーチ・アンド・レスキュー研究機構 ……山岳レスキュー研究団体
- 8) 日本山岳救助機構 …… 個人・団体会員相互扶助組織、東京都岳連連携
- 9) 全国山岳遭難対策協議会 …… 行政機関連携  
文部科学省、環境省、警察庁、気象庁、消防庁、公益社団法人日本山岳  
協会、独立行政法人日本スポーツ振興センター国立登山研修所、山岳遭  
難対策中央協議会
- 10) 日本登山医学会 …… 登山者の安全を医学知識の普及によって守る

## 【 山岳スポーツに関する全国組織 】

- 1) 特定非営利活動法人 日本フリークライミング協会  
（現在約＝1,600人）HP(2015)
  - ・ 賛助会員 …… 個人、家族、地方協会（現在5協会）会員、団体会員
  - ・ 団体会員 …… クライミングジム、社会人山岳会、学校山岳部、有志団体
- 2) 日本トレイルランニング協会  
地域協議会(10) ⇒ 地区協会(45) ⇒ 会員
  - ・ 一般会員 ・ 団体クラブ会員 ・ 賛助会員
- 3) NPO 法人 日本トレッキング協会
  - ・ 正会員(個人、団体) ・ 特別法人会員(法人) ・ 友好会員(個人)
  - ・ 賛助会員(個人・団体) ・ 家族会員(家族)

登 山	自己 統合	アルパイン登山	A-1	単独形	単独登山	
			A-2	複数形	パーティ登山	
			A-3	企画事業形	選抜対価登山	
			A-4	企画公募形	応募有償登山	
			A-5	交流形	任意無償登山	
	趣味 の 展 開	レコード登山	B-1	記録更新形	〇〇記録	
		メモリアル登山	B-2	記念顕彰形	〇〇記念登山	
		コレクション登山	B-3	収集蓄積形	7大陸、百名山等	
		ヘルス登山	B-4	健康希求形	自主健康登山	
		ツーリズム登山	B-5	観光引率形	企画形観光登山	
		ファッション登山	B-6	社会風潮形	流行登山	
		ワンダーフォーゲル	C-1	鑑賞自立形	山嶺巡行登山	
	トレッキ ング	アルパイン・トレッキング	C-2	鑑賞自立形	自立形山岳巡行	
ツーリズム・トレッキング		C-3	観光引率形	企画形山岳巡行		
山 岳 ス ポ ー ツ	クライ ミング	ボルダリング	D-1	ロープなし	高さ 5m 以内	国体
		トップロープ・クライミング	D-2	トップロープ形	12m 以上のハング	
		リード・クライミング	D-3	スポーツ形	12m 以上のハング	国体
			D-4	トラッド形	ナチュラル・プロテクション	
	ラン ニ ン グ	トレイルランニング	E-1	山野を走る	自然の路面、高低	
		マウンテンランニング	E-2		登下降	
		スカイランニング	E-3		標高 2,000m 以上	
		ウルトラランニング	E-4		42.195km 以上	
		ポッカランニング(駅伝)	E-5		荷を背負う	
	歩 行	ウォーキング	F-1	山野を歩く	〇〇ウォーキング	
		ハイキング	F-2	山野を散策	〇〇ハイキング	

## 2. 登山と山岳スポーツ等の新たな分類

本論においては、登山、トレッキング、山岳スポーツを大別し、【表-2】に提示しました。これまでの考察により、【表-2】分類の特徴は、登山、トレッキング、山岳スポーツ、と大きく三つに分けたことです。従来は全て山岳に含まれ、**山岳＝登山**という認識でした。 ※詳細分類は【表-4-1、-2】(P.123-124)

本論はさらに様式と形式の違いにより、種別分類をおこなったものです。登山者個人においても、その都度の登山内容によって登山種別が異なり、個人の多様な登山展開を理解するものです。例えば今週はアルパイン登山へ出かけますが、来週はツーリズム(観光)登山へ出かける、というような流動的多様性です。

しかるに、登山様式・形式に適する人間的特性は、あらかじめ特徴づけられてきます。その特徴を「人間的存在の位相」から分析し、次に「主たる行為の形態と、要素(物的空間、心的空間)」へと整理します。それらの特徴に適う、山頂、山稜、岩壁等はあらかじめ特定できます。今日はどの山、どのコースを登るか、その「選択の動機づけ」は様々ですが、選択する特性によって、あらかじめ山頂、山稜、岩壁等は絞られてきます。登山への動機づけ意識調査を実施する「場所」の特定により、すでにその山、そのコースを選ぶという「バイアス(特徴の顕著な傾向性)がかかっている」ことになるわけです。ある調査場所までを、どのような動機で登って来たかを整理・分析・分類することはできますが、すでにその場所、そのコースを選んだという、動機のバイアスについてさらなる考察が必要となるでしょう。そのバイアス論考の基礎として、本論の分類が役立つと考えるところです。

山やルートを決める「自己決定権」は、憲法で定める基本的人権の主要素であり、心理学研究における「自己決定理論」の中で、動機づけ因子の相関を「相関係数」を用いた数値化の研究方法があります。また、前節の『登山行動に関する社会心理学的研究』においては、二次元平面(x, y)座標上に動機因子をプロット表現しています。特定な山、ルート上にいる登山者の、登山動機の相関は特定な結果となるでしょうが、登山全体を網羅する帰納法による一般化、普遍化、の「真」になるとは限りません。

より全体の「真」に近づくためには、本論で述べる【別表 4-1-1、-2】、【現代登

山と山岳スポーツ等の生態系】から演繹的な推論を交え、上記の個別な実証を繰り返し調査・統計整理することが良いと考えるものですが、今後の研究テーマに留めておきます。以降、【別表 4-1-1、-2】についての概要を述べます。

### 【A-1, 2, 3, 4, 5】 アルパイン登山

戦後の登山界にあって、「アルピニズム(Alpinism)」という言葉が流行りました。本来の意味はヨーロッパ・アルプスにおいて、狩猟や信仰でなく、【「山に登ることを目的とする登山」のことをさしました。ヨーロッパ・アルプスの登山も初登頂の時代が過ぎると、より困難なルートを進むようになります。1880年代から活躍したイギリス人登山家A.F.Mummery、「ママリーは登山を純然たるスポーツとみなし、登山の真髄とは登山者の修練と技術によって種々の困難と闘い、それに打ち克つ喜びであるとし、そのためにはより困難なルートを求めて挑戦し、登山者の心身両面における極限を追求しようとした」。この考えは「ママリズム(別名;マンマリーイズム)」と呼ばれ、アルピニズムの代表的思潮となり、今日に引き継がれている。(北海道大学山岳部・山の会・12)】、という思潮は、戦後の日本の登山界に浸透します。

日本では「ママリズム」を「日本のアルピニズム」と読み替え、「より高く、より困難を目指す登山」へと意味を置き換えます。これを実践して活躍したのが「第二次RCC」のメンバーたちでした。これに対する批判は、「3章. 登山と山岳スポーツのちがいで述べましたが、アルピニズムそのものを批判するのではなく、「登山＝アウトスポーツ・アルピニズム」を登山の枠組みとしたことへの問題点でした。実際、私自身の登山内容はアルピニズムそのもので、丹沢からヒマラヤ岩壁登攀までを実践したわけです。

現代の登山は形態や形式の面において、社会的意味をもつ初登頂・初登攀による限界を目指す登山はなくなりました。エベレストが登頂された1953年以後の登山において、「山は死んだ」と『パイオニアワーク論』を書いた本多勝一氏(元:朝日新聞編集委員)は、京都大学山岳部から探検部を創設します。しかしこのことは外面的形式への着目であり、登山者の内面性を考究した視点からではありません。

前記の「ママリズム」を純粹に追求する方向は二つあります。第一は人類の視

点からです。第二は個の視点からです。有限な地球環境の中で、第一の視点からは限りがあります。それが本多氏の述べる「山は死んだ」発言の視点です。第二の視点からは、人類が世代交代を果たしながら永続する個体の中で、量を変え、質を変えて繰り返すことが可能となります。つまり、個にとっての向上心や探究心、冒険心は、世代が代わるごとに質を変え、量を変えて繰り返し実践することができます。エベレスト初登頂以後に登山を始めた私たち世代にとっては、第二の個の視点においてこそ、「ママリズム＝アルピニズム」の実践が可能でした。この視点は、現代においても有効です。

このように、現代「アルパイン登山」の“アルパイン”には、「アルピニズム＝ママリズム」の思潮が反映されており、内面的な向上心を登山体験によって自己統合しようとする、欲求の向上性と記録更新性があります。その中でも定性的違いにより、以下の形態へと分類整理してみました。

＜A-1＞ **単独形** …… 同上を単独でおこなう登山

自己責任、自己負担の下、一人で登り、順次ステップ・アップする向上性をもった登山

＜A-2＞ **複数形** …… 四季にわたり高度な山岳登攀、登頂を目指す登山。

自己責任、自己負担の下、パーティを組んで登り、自分やパートナーにとり順次ステップ・アップする向上性をもった登山。

＜A-3＞ **企画事業形** …… ○○主催(後援、協賛)○○登山

事業化の中でおこなう登山。大規模から小規模に至るまで多様な企画を持ち、企画に見合った外部の資金調達を得、成果をもって対価とする。成功の確率を高めるため、選抜やスーパースター等の強力メンバーを選び抜き、事業成功の確実性を担保する。責任は事業主催者にあるが、選抜等の条件づけにより、強化を図る一般的な組織形登山。

＜A-4＞ **企画公募形** …… ○○公募(企画)○○登山

堅実と見込む企画者(社)へ対価を支払って参加し、企画者(社)側のリードによって目的達成を図る登山。応募登山者は自らの登山に集中できるが、責任範囲は契約事項等により、海外の場合は、相互理解の意思疎通が難しい。

**<A-5> 交流形 ……** ○○ガイド登山(無償)、○○コーチング登山(無償) 事業ではなく任意無償な自己責任、自己負担行為で、ガイドやコーチ、講師となり、同行登山者へのアドバイス支援をおこなう。同行者の登山意識や技術レベル向上を図り、お互いの交流によって登山の喜びを共有する形態。

### 【 B-1 】 レコード登山 …… 記録更新形

アルパイン登山と形態・形式的には同類となるが、単に登ることだけが目的でなく、様々な記録の特定条件を設定し、その結果における「記録達成(更新)」を主目的とする登山。

○○最年少登頂、○○最高齢登頂、○○女性初登頂(初登攀)、○○最短時間登頂、○○単独○○登頂(登攀)、○○厳冬期○○初登頂(登攀)、等々諸条件を特定する。

### 【 B-2 】 メモリアル登山 …… 記念顕彰形

登山形態・形式は多様となり、単に登ることだけが目的ではなく、様々な記念や顕彰の特定条件を定め、その成果による「記念、顕彰」を主目的とする登山。

○○記念(顕彰)登山、○○周年記念登山、○○卒業記念登山、○○歓迎登山、等々

### 【 B-3 】 コレクション登山 …… 収集蓄積形

登山の成果を収集、蓄積することを主目的に登る登山様式。

ヒマラヤ 8000m 峰全山(無酸素)登頂、7サミット(7大陸最高峰)登頂、

日本 100 名山登頂、○○○○名山登頂、等々

#### 【 B-4 】ヘルス登山 …… 健康希求形

登山を通じて、健康保持や健康確認を主目的とする登山。

○○市民登山、○○学校登山、○○職場登山、○○健康登山、等々

#### 【 B-5 】ツーリズム登山 …… 観光引率形

山岳組織に属さない、多くの一般登山者の登山形態となっている。企画会社の企画登山(カタログ登山)を選択し、対価を払って参加する。引率ガイドのリードにより、カタログ明示目的を実施する登山。責任範囲は約款によるが、裁判となるケースも近年は出現。海外登山はもとより、今やエベレスト登山までもがこの範囲に含まれる実体にある。

[B-5] ファッション登山同様、大衆化は日常性を山岳に持込み、山岳施設整備は非日常的自然を日常化させ、消費産業構造化を促進させる。

#### 【 B-6 】ファッション登山 …… 社会風潮形

社会の流行に乗っておこなわれる、大衆化登山。山岳自然の非日常的危機に弱い。大衆社会の日常性を山岳に持ち込み、山岳施設整備は非日常的自然を日常化させる。ファッションブル、山の食グルメ化、山岳施設整備(トイレ、登山道、山荘のホテル化、等) 等々、消費産業構造化を促進させる。

#### 【 C-1 】ワンダーフォーゲル …… 鑑賞自立形

「渡り鳥」を意味するドイツ語で、山嶺を気ままに渡り歩くような登山形態。

高校、高専部活動でインターハイ競技はあるが、大学にワンダーフォーゲル部が残る程度。

## 8 章 . 登 山 様 式 の 方 向 性

2013 年 6 月から丹沢山歩きに復活した私は、毎週末の一日を、表丹沢歩き始めてみました。丹沢を2年間にわたって歩いてみますと、登山者の様変わりを目にします。山でスカートは当たり前。積雪のある冬山でさえ、スカート姿を見受けます。タイツに半ズボン姿の高齢男女の姿も当たり前となり、一様にストックを両手に携え大倉尾根へと向かいます。

「山ガール」という言葉が流行ってから、ずいぶん時は過ぎました。エベレストの女性初登頂者・田部井淳子さんの造語ということは、以前の新聞記事で知りました。山ガール、山ボーイ、山ジーヤ、山バーヤ、……デジタル時代の造語には、4 文字熟語が並びます。この多様化は近代技術の特徴、「軽・薄・短・小」そのものを表現します。アナログ時代であったなら、とても手にして操作できないスマートホンは、まさに「軽・薄・短・小」技術の代表格です。さらに腕時計形ウェアラブル端末のよう、「軽・薄・短・小」技術はますます進化を図ります。この進化の方向性は、誰にも止めることができません。人類の文明史観は、時間の流れと同じ方向に向かいます。デジタル技術によって、人類は時間を切り刻み、余分な時限空間を圧縮する技術を取得しましたが、時間が過ぎる方向性の制御技術は、未だ獲得できていません。つまり肉体を伴った人間個体として、過去や未来へとワープする、時限制御技術までは取得できていないのです。それゆえに時々刻々の出来事は時間の進む一方向に連続し、都度の記録は歴史として残されます。もし、ドラエモンのドコデモドアがあったとし、任意な時限空間へと人体がワープすることができるなら、人類の世界観は全く異なったものとなるでしょう。しかし人間の「意識の世界」においては、虚空時限世界を任意に思い浮かべることができます。人体の中で統合される人間意識はすべからく、各種の身体センサによって変換された信号が、脳を軸とした信号統合機能によりアウトプットされた「パターン認識信号」であり、実在を反映してはいますが、認知信号でしかありません。宇宙全体の物質エネルギーの内、人間が見、知ることのできる「物質」はたったの 4%程度で、目に見えず感じることのでき

ない暗黒エネルギー(74%)と暗黒物質(22%)によって構成されているとされます。その正確さは別として、人類が科学的、客観的視点とする根拠の物質は、宇宙のたった4%程度な存在でしかないということを、再認識する必要があります。

量子物理学では、物質の確率的な位置変位をもって現象の予測、説明をしますが、人間が確認できるたった4%だけの物質を捉えて宇宙を説明することが、はなはだ不完全な世界であることは理解できます。宇宙の諸現象を科学として捉え、客観的に説明することの限界への気づきは、現代知性の課題となっています。逆説として、だから科学の進歩はこれからだ、ということもできます。そして、目に見えない世界を含む論理思考実験は、科学の実証限界を超えた人間意識機能、意識のシステムの中であって、形而上的におこなわれています。

## 1. 環境の複素な世界構造から表す登山様式

本論で提起するのが『複素的世界観』であります。細かな説明は省略するとして、その構造を【図-1】(P.81)に示します。電気技術者や量子物理学者たちは数学の「複素数」を駆使して計算、理解、説明をします。「複素数 = 実数 + 虚数」となります。「実数」は目に見え、数えることができる数のこと。「虚数」は目に見えず数えることができませんが、そこに虚数(imaginary number)を当てはめるとうまく説明することができる数のことです。虚数記号は頭文字をとって、「i」で表しますが、電気技術者が扱う「i」は電流記号を示しますので、電気技術者は虚数記号を「j」としています。実数(X,Y)と虚数(Z i)をベクトル表示すると、【図-1】(P.81)のように三次元空間として表現ができます。X,Yの二次元平面は、目にみえ、数えることができる「実な物質世界」を表します。目に見えず、数えることができない意識の世界はZ i軸方向の「虚な意識世界」を表します。この物質世界と意識世界を三次元に組み合わせた世界を「複素的世界」と称してみました。

目に見える「物質世界」と、目に見えない「意識世界」を組み合わせた複素的(複素数的)世界観は、目に見える実相社会を数値で評価する実数軸と、目に見えなかった虚な社会をバーチャルリアリズムとして可視化させるデジタル技術によって、

虚数軸の世界までも認識表現の対象として取り込むことに成功しつつあります。しかしデジタル技術のみが先行し、人の意識世界をバーチャル認識として理解する哲学が、未だ不毛な段階にあります。

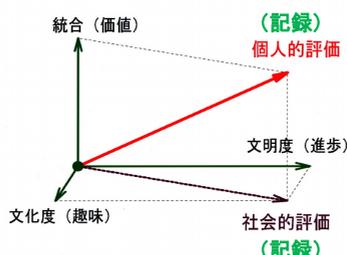
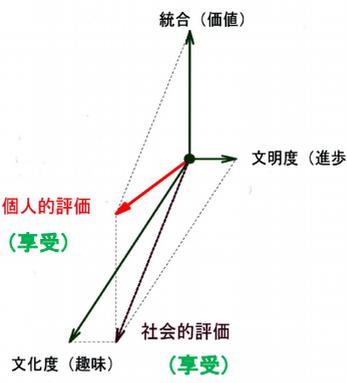
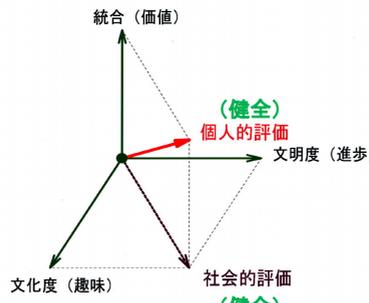
現実と意識の現象世界を電気現象理論からフラクタルに論理構造を着想し、それが人間の脳内機能として意識の中でおこなわれることは容易に理解することができます。しかし文系の人々にとっては、なかなか理解しがたい思考法だと思います。「複素的世界」では、X 軸方向を「文明」とし、Y 軸方向を「文化」とし、Z 軸方向を「意識」とすると、現実のあらゆる現象をこの空間内に位置づけて理解することができそうです。

登山様式を複素的世界同様にベクトル表現してみたものが、次の【表-3】(P.101)となります。X 軸方向を「文明度(進歩)」とし、Y 軸方向を「文化度(趣味)」とし、Z 軸方向を「統合意識(価値)」とします。X,Y 軸平面二次元要素を合成するベクトルは、目に見える形での現実社会を表します。さらに Z 軸方向の個人意識によって統合され、個人的評価意識(個人的価値)となり、自らの認識となります。個人意識が集合したところに社会意識となる澱み(部分集合)が生まれ、社会風潮が生み出されます。日本的な造語にすれば、「社会の空気」です。

### A 群 : アルパイン登山、レコード登山

このスタイルは「進歩」の方向性が強いことを特徴とし、より客観的なパフォーマンスにより、その評価(評価価値)を知らしめる傾向を表します。進歩の方向性は、その時代の社会的要請や自己の根源的欲求の発露という、明確な方向性と強い理念が支えます。個の欲求と社会的要請がマッチングする明確な方向性は、確たる理念や強いリーダーシップとなって表現されます。例えば戦後の高度経済成長社会と、より高くより困難な登山を求めたアルピニズムとのマッチングがありました。日本を飛び出し、アルプス、ヒマラヤの山々で初登頂や新ルートの初登攀など、平和を象徴する華々しい戦後登山の黄金期でした。しかし地球のそなえる自然の有限性は地球環境問題同様、登山様式も例外ではありません。社会が要請する客観的登山成果には、限りがあります。

【表—3】 登山様式のベクトル表現

登山様式	要因ベクトル	スポーツ様式
<p><b>A群</b></p> <p>アルパイン登山 レコード登山</p>	 <p>統合 (価値)</p> <p>文明度 (進歩)</p> <p>文化度 (趣味)</p> <p>社会的評価 (記録)</p> <p>個人的評価 (記録)</p>	<p>競技 スポーツ</p>
<p><b>B群</b></p> <p>コレクション登山 ファッション登山 ツーリズム登山</p>	 <p>統合 (価値)</p> <p>文明度 (進歩)</p> <p>文化度 (趣味)</p> <p>社会的評価 (享受)</p> <p>個人的評価 (享受)</p>	<p>レジャー スポーツ</p>
<p><b>C群</b></p> <p>メモリアル登山 ヘルス登山 ワンダーフォーゲル</p>	 <p>統合 (価値)</p> <p>文明度 (進歩)</p> <p>文化度 (趣味)</p> <p>社会的評価 (健全)</p> <p>個人的評価 (健全)</p>	<p>ウォーキング</p>

人類のパイオニアワークたるアルピニズムには、その終焉の必然性も同じパッケージの中に含まれていたのです。しかし個人的評価となる個の意識の局面にあつては、それぞれの人生という一つのサイクル(周期)が終わると、次なる新たな生命の人生もまた、別な人生のサイクルとなり、一人ひとり個における「より高く、より困難を目指す登山(アルピニズム)」は存続し得ることになります。つまりアルピニズムは、人類のマクロな局面から、個というミクロな局面へと移行することにより、その特性理念を引き継ぐことができます。アルピニズムの変質です。同様に「レコード登山」においてもその記録の意味は、もはや人類の記録としてではなく、個としての記録へと転換されます。

アルピニズムの実践には、「ステップ・バイ・ステップ」という段階を経て、それぞれの限界へと挑む手順がありました。その積み重ねの努力の中から、人が自然と対峙して切り抜けてゆく知恵と経験が獲得できます。最初は弱かった者が次第に強くなり、やがて自然に対峙できるまでの知恵や経験へと「進化」していきます。その性質はまさに人類が生き抜く方向性そのものと重なります。それゆえに進化の概念は、文明的ベクトル方向と合致するのです。

## **B 群： コレクション登山、ファッション登山、ツーリズム登山**

このスタイルは「趣味」の方向性を強くし、主観的なパフォーマンスによってその評価(享受価値)を知らしめる傾向を表します。主観的な趣味の領域ですから、それぞれ個の選択枝は多様性を増します。また一方でその多様性は確たる理念や統一性に欠け、リーダーシップも不在となるからこそ、多様でいられるわけです。一つの登山には、一つの物語として完結させるだけの知識、技術、経験、マネジメントが不可欠です。単なる趣味登山にあつては、アルピニズムの順序だった手順による知識、技術、経験を積み重ねた知恵の領域は、不要な存在となります。登山とならぶ他の趣味もあるし、登山は日常生活の中で一つの生活リズムでしかありません。そのような大衆登山者にとり最も手軽に活用でき、煩わしさを省けるのが、商業企画登山への参加となります。今、戦後第2の登山ブームは、まさにこの分野が時代の要請となっています。余暇とお金と意欲があれば、特別な知識、訓練、経験の積み重ねがな

くとも、日常生活意識の延長の中で容易に山岳自然環境を楽しむことができます。

登山者は専門ツアー会社の多様な企画の中から、好みのコースを選択します。山岳情報の提示(TV、インターネット、雑誌、新聞、カタログ、パンフレット)、用具の調達案内、交通アクセス、山岳コース案内(ガイド登山)、宿泊・交通手配等々、登山者自身は暇とお金を用意すれば、簡単に参加することができます。登山の大衆化とは、この一連の流れが消費産業構造化され、ある期間の長さを維持継続できる状態を示します。登山者は趣味と物資とサービスの消費者となり、それを提供する産業界や情報サービス業界と一体となり、文化生活を享受することとなります。今まさにエベレスト登山でさえこの流れの中にあるといわれ、登山の多数派になっています。

一方でオールド・アルピニストから見れば、自然を通して培う人間力の成長にとり、一連の産業化は人間と自然の間に隔たり壁を設け、自然に対する人間の弱体化を図るものだと理解します。仲間の生死をともなった、私自身も死の淵から生還した限界体験を経ても、これら消費登山への魅力は感じません。ただ消費するだけの趣味の世界から、人間文化のいかなる価値を生み出せるのでしょうか。エントロピー増大の法則は、消費に使われたエネルギーはふたたび使用できないで、ただ無用に溜まるだけになることを示します。

例えば山岳遭難事故は交通事故のような意識です。まさか自分が遭難すると思って参加する人はいないでしょう。山岳遭難事故に対処する事前の準備と心構えにおいて、アルパイン登山やレコード登山のような限界を意識するハードな登山様式との大きな違いは、まさにこの点にあります。その考証は、随所で展開しています。

### C 群：メモリアル登山、ヘルス登山、ワンダーフォーゲル

このスタイルは、客観と主観のバランスをとる方向性を帯びたパフォーマンスによって、その評価(価値)を知らしめる傾向を表します。このグループは社会的にも個人的にも、進歩や趣味を極度に主張するものではなく、両者のバランスを図る安定性の中に、新たな価値を認めようとするものです。



以上の説明は定性的に述べたものであり、調査統計による数値実証説明する量的研究と統合し、新たな説明を試みる必要があります。それら研究は別として、ここでは入口の概念だけを示すに止めます。

## 2. トレッキング

「トレッキング」は山登りが目的でなく、山を眺望し、山の中を歩き巡ることを指しています。ヒマラヤ・トレッキング、アルプス・トレッキング、目的の山域名を付した「〇〇トレッキング」と数え切れないほどあります。

例えばエベレスト・トレッキングの一例では、エベレストの山麓を歩きますが、トレッカーは私物の衣服と貴重品しか背負わず、その他の衣食住はガイド(シェルパ)とポーター(運搬)が用意してくれます。トレッカーはサーブと呼ばれ、まさに大名のような物見遊山となります。勿論自前で行なうトレッキングもありますので、大名の物見遊山ばかりではありません。

類似な行為としては江戸時代後期に始まる物見遊山と通過儀礼を兼ねた「講(こう)」があり、今は世界遺産となった富士山を巡る「富士講」や、丹沢・大山に詣でる「大山講」は、昔から名高いものでした。講は信仰の登山や修験道の精進でなく、物見遊山＝観光とした、楽しみを味わうものです。講や修験道は、それ自体で独自の発達と研究が成されており、近代登山とは別なジャンルとなっています。

※ 講の通過儀礼＝小泉武栄、『登山と日本人』、(角川ソファ文庫、2015年)P.110-111

## 3. 山岳スポーツ

「山岳スポーツ」における「スポーツ・クライミング」は、2020年東京オリンピックの追加競技種目候補に挙げられています(2015.06.23 現在)。テレビニュースは、屋内人工壁を登る様子を放映しています。もはやスポーツ・クライミングは山岳自然環境

とは別な人工壁によって、登攀力(クライミング)を競う純粋スポーツとなります。どんなに難しいオーバーハングのクライミングに失敗し墜落しても、生命の安全は確保されるルールに則り競技します。生死を媒介とするアルピニズムの限界追求と、その領域とは全く別物の「人工壁」となります。スポーツ・クライミングは単純な登山の定義、「登山とは山に登ること」からもかけ離れた領域となり、登山の一分野に含み得ない、「スポーツ・クライミング」となります。スポーツ・クライミングの登攀技術は、アルパイン・クライミングに類似しますが、自然な山の岩壁・氷壁・雪壁を登るアルパイン・クライミングと、屋内外の人工壁を登るスポーツ・クライミングとは別物で、登山のクライミングと同等に扱うことはできません。

本論では、「**山岳スポーツ**」として分離、分類しましたが、「**登山**」でないとしたので考察対象から外します。しかし山岳においては、登山と山岳スポーツの場が混じり合っています。山頂や山稜をトレイル・ランナーが駆け抜けます。岩壁の確保支点整備と称して電動ドリルでボルトの埋込みがおこなわれています。

アルピニズムの登攀でコンプレッサー・ドリルが



【日本アルパインガイド協会 facebook より】

初めて使われたのは1970年、パタゴニアの針峰、セロ・トーレです。イタリアのクライマー、チェザレ・マエストリは、1,600mの岩壁に約400本の埋込みボルトを打込みま

したが、完登はなりませんでした。その後別のクライマーによって完登され、「コンプレッサー・ルート」と名付けられました。しかし 1970 年代日本の岩場においては、コンプレッサー・ドリルの使用は登攀モラルに反するとして、誰も使いませんでした。日本の岩壁では、登るための埋込みボルト使用を最小限度に自己制限していました。埋込みボルトの取付は、穿孔キリ(ジャンピング)の頭をハンマーで叩きながら回し、少しずつ孔をあけたのです。その孔にボルトを差込み、ボルトの頭を叩くと孔の中で先端が開いて岩に固定されます。クライミングとは別な腕力、体力を要するため、ある面で職人技とも言われます。今では建設現場で、あと施工アンカー方式が多用されています。コンクリート壁や天井に充電式携帯ドリルで穿孔し、その孔に目的に合う各種、各サイズのホールインアンカーを打込みます。これと同じ器具を用いて岩壁に穿孔し、リングボルトを埋め込めば、容易に堅固な支点を作ることができます。しかしかつて日本の岩壁で、電動ドリルを持って登るアルピニストはいませんでした。

谷川岳は「魔の山」といわれ、2012 年までの遭難死亡者数は 805 名といわれます。その中でも特別に多いのが一の倉沢の岩壁登攀です。私が熱中して登っていた 1970 年代にあって、埋込みボルトは最小限度に抑えられ、ハーケンを中心とした人工登攀でした。リス(岩の小さな裂け目)に打込むハーケンの支持強度は一様でなく、ガッチリ固定されるものから、体重をかけると抜け出しそうな甘いものまで、様々です。ハーケンに身体をあずけ、もし抜けてしまった場合は墜落となります。同様に不確かなハーケンの場合、確保者も一緒に引きずられて墜死するケースが、時にはありました。私はただ一度だけアイスハーケンのリングが外れ、墜落したことがあります。それは厳冬の谷川岳一ノ倉沢滝沢リッジのドームで、オーバーハングの乗っ越しの時でした。約 10m の墜落でしたが、雪だまりの基部へ落ちたためショックもなく無傷でした。ちなみにフリークライミングの本番では、一度も墜落したことはありません。

固定ボルトは、一定の強度確保が期待できます。しかしキリで人為的に岩に穴をあけるわけですから、自然(リスやクラック)を利用することにならず、人工登攀(アーティフィシャル・クライミング)と呼んで、その使用にクライマーは一線を画しました。そしてなるべく人工的手段を使わずに登るのが、アルピニズムの精神でした。

山岳スポーツとしての「フリークライミング」は、それら人工的手段を使わない身

体機能だけで登ることを旨としています。しかし「リード クライミング」における確保用支点には堅個なボルトを複数打込み、リードの途中にも堅個なボルト支点到にカラビナをセットし、ロープを使った落下制動によって墜落を止めます。確かに安全性は格段に増し、谷川岳の墜死事故は激減したようです。この「山岳スポーツ・クライミング」と「アルパイン・クライミング」の違いは何かを考えると、それはたかだか「感性の違い」程度でないかと思われまふ。アルパイン登山は自然に敗れた場合の「死を受け入れます」が、山岳スポーツはそれら自然の脅威たる「死を受け入れず」、安全担保としての施設整備やルート整備を積極的におこないます。クライミングにおいては、人工支点的整備(固定ボルト)、落下安全装置の設置(クラッシュパッド)、トップロープ・クライミング方式導入(上部からロープで確保)等々です。つまり「死を受け入れる」ためには哲学や思想、宗教的心や芸術美的な感性等々、「文化要素」が必要となります。「死を排除」する「スポーツ」にあつては、肉体パフォーマンスの直感と結果の記録性が重要なテーマとなります。また肉体パフォーマンスの最適化は科学的、合理的思考と訓練によって助長することができます。つまりスポーツは文明と同じ位相にあつて、ひたすら進歩、向上、発展、進化を目指します。アルパイン登山、レコード登山も同じような位相となりますが、大きな違いは「死を受け入れた上での行動(アルパインクライミング)」なのか、「死を排除した行動(スポーツ)」なのかに帰着しそうです。

#### **4. 死の弁証法(アルピニズム)と 死の排除(スポーツ)**

21世紀社会は平和の中で、「人間の死を遠ざけて」います。再び戦争をし、殺したり、殺されたり、人為的死の体感こそは遠ざけるべきものですが、多くの人々は老衰の死期が迫れば病院へ隔離され、高齢期にあつては特別養護老人ホームへ隔離され、家族からも引き離されます。

もう半世紀前となりますが、私が青年期で最も恐れたのは、「死の恐怖」でした。そんな時期、18歳から登山を始めます。最も怖いはずの「死」と背中合わせなアルパイン登山を始め、山岳自然を通した「死との対話」をおこないます。すべての

場面において、私は自然に慄きました。

32歳の時、ヒマラヤ遭難事故の中で「**生死の審判**」を受けます。結果私は、生きて残されます。死んでしまった3名の仲間は、ヒマラヤ山中に埋葬しました。この審判がどのように下されたのか、今もって私にはわかりません。そこに「**神**」を持ち出して語る神性を、私は持ち合わせていません。私は量子物理学から導かれる「**不確定性原理**」に着目した、「**偶然な出会い**」と理解するにとどまっています。しかしその結果、死は恐れるものではなく、「**死ぬときは死ぬし、死なないときは死なない**」という単純な「**死の受容原理**」を受け入れ、心の安定を持つことができました。

**スポーツ・クライミング**にあっては、到底そのような境地に至ることはなかったでしょう。このことが、今も私が**登山**を続ける理由です。

戦後社会で唯物論とともに流行った「**弁証法**」があります。弁証法はヘーゲルによって【**正・反・合**】の3段階に定式化されます。すべての物事に内在する矛盾によって自己を否定(正)し、出現した他者と対立しますが、この対立はさらに否定(反)され、より高次段階へと発展(合)させる方法です。この考えをアルパイン登山に導入してみると、**正**⇒登山は死の危険があるから止めたほうが良い、**反**⇒死の危険を承知しても止めないで実践する、**合**⇒死の危険を乗り越えた登山の中でこそ、生きていることの最大な実感を得ることができる。さらなる極限を体験すると、死を受容できる精神(こころ)に達することができた・・・となります。

しかしこの方法は、極限状態から生還できた場合の論法です。一種、麻薬の享楽とも似ていて、戦場の兵士が極限状態を経てから帰還した後の、異常な精神状態に類似したもののようなのです。死を媒介とした弁証法は普遍的原理であっても、日常社会での適用は刺激的過ぎます。しかしながら、極限の非日常体験は、日常社会の精神に「**心のゆとり**」を生み出します。そのことがまた、自然のあらゆる偶然性を受け入れられる【**受容の精神(こころ)**】を育ててくれるともいえます。

.....

「**天国に一番近い男**」と呼ばれ、世界中の山々を少人数、無酸素、単独登攀な

どで今も登り続ける**山野井泰史**氏(1965-)は、近著、『**アルピニズムと死**』(2014.11、山と溪谷社)で次のように述べています。

- 山での死は決して美しくない。でも山に死がなかったら、単なる娯楽になり、人生をかけるに値しない。(P-93)
- 能力の限界を超えないように計画し、また実践してきたのです。(P-132)
- 限界のように思えて一線を越えた瞬間は表現できないほどの喜びがありますが、大幅に限界を超えてまで生還できる甘い世界でないことを知っているつもりです。(P-132)
- 限界線から一步踏み出すたびに、生命が躍動した。(P-182)
- 登山ブームは「楽しむだけ」の登山者を生んだ。ネット上には無数の「山」があふれ、メディアはこぞって気楽な山を紹介する。……略……僕は彼らを非難するつもりはまったくない。むしろ大いに自然に触れ、山を楽しんでもらいたいと思っている。それにしても……、アルピニズムは失われつつあるのだろうか。「どこまでやれるのかは必要ではないのだろうか。古典的な考えかもしれないが、僕はいつまでも限界に向かう道を忘れないでいたいと思っている。(P-183)
- 生命体として、いつかはどこかで僕らも消滅する運命です。(P-184)
- 結局、なぜ僕は死ななかったのでしょうか。それは若いころから恐怖心が強く、常に注意深く、危険への感覚がマヒしてしまうことが一度もなかったことが理由の一つかもしれません。さらに自分の能力がどの程度であり、どの程度しかないことを知っていたからだと思います。二つ目の理由は、山登りがとても好きだということです。……略……いつ何時でも、山と全身からの声を受け取ろうと懸命でした。……山が与えてくれるすべてのものが、この世で一番好きなのです。……だからこそ、今まで生きてこられたのかもかもしれません。(P-184~185)

.....

引用が長くなりましたが、この本の中に「スポーツ」という言葉が登場しないのが、印象的でした。私が論じるように、「登山」と「スポーツ」を無意識の中にも分けてあつかう考え方が読み取れます。つまり「アルピニズム登山」は、「死の恐怖心」と向き合うところから始まるといえます。

「スポーツ・クライミング」は、「競技スポーツ」と「レジャースポーツ」に分けられます。【表-3】(P.101)のように、競技スポーツはアルパイン登山、レコード登山、と要因ベクトルは同じ方向を向いているようです。つまり、「**進歩・向上性**」を大きな特徴とし、その結果の「**記録**」を重視します。他方、レジャースポーツは、コレクション登山、ファッション登山、ツーリズム登山、と要因ベクトルは同じ方向を向きます。つまり、「**趣味の享受**」を強く表現します。また「**ウオーキング**(山岳歩行)」は、メモリアル登山、ヘルス登山、ワンダーフォーゲルと、要因ベクトルは同じ方向を向きます。つまり進歩と趣味のバランスを図り、「**健全さ**」を維持しようと心掛けるようです。

このような分析は、登山そのものに直接貢献するものでありません。私が青年期の時、登山を通して死の淵で悩み、考えていたことは、32歳のヒマラヤ遭難とその対処の中で、一挙に心眼が開かれた思いがありました。つまり自然の中で偶然に「**死と出会って**」も、それは「**仕方ない時空の重なり**」として受け入れる、心の寛容さを知ることができたからです。もし登ることだけを考えていたら、遭難登山隊長の職務はおろか、自分自身の心の整理もつかずに、パニックに陥っていたことでしょう。登ると同じくらいに心が求め、本を読み、考えを巡らせていたことが、一瞬のパニックを経たすぐ後に、即座に冷静さを取り戻せたのでしょう。ヒマラヤの大自然の中で身体は疲れ切っていましたが、思考はとてもクリアな状態にあり、冷静に大局を見渡しながらか判断することができた経験です。

この体験をもとに書いたのが、【**危機とリーダー意識**】です。「**リスク・マネジメント**」と「**クライシス・マネジメント**」の違いを述べています。日常ほとんどの出来事は「**リスク・マネジメント**」で対応します。しかし、非日常的な「**死**」や原子力発電所炉心の「**メルトダウン**」のように、一回限りの重大事象がもう元へは戻せない危機状態にある時、「**クライシス・マネジメント**」として、即座に対処しなければならないことの

説明です。その判断の責任がトップリダーの主たる任務であることを、トップリダーは常に危機意識の中に備えていなければならないことを述べたものです。「たかが山登り」の遭難事例から導き出した、「されど山登り」への展開例です。

「たかが山登り」は「登山」そのものを述べるわけですが、「されど山登り」はその結果を反映させた二次的なものとなります。この「二次的な表現」が「文化」を媒介する中身となり、山岳関連であれば「山岳文化」となるわけです。

山はひたすら無心に登り、自然のもたらす万様の变化に浸るだけで至極良いのです。・・・が、その感激を後で振り返ってみると、記憶の中だけに留めておくには余りある感動を、他の誰かに伝えたい、共有したい意識化がさらに芽生えます。その「心」が、「山岳文化」を育む原点となるのでしょう。

## 9 章 . アルピニズムの変貌

### 1. 世界の背景から

『歴史の巨大な曲がり角』という標題で、朝日新聞はインタビュー記事を報道します。

「深刻な環境問題を抱えつつも、経済成長を求め続ける」—— ことに、「ならば成長をやめればよい」—— と明快な答え。

※社会学書 見田宗介 東京大学名誉教授へのインタビュー

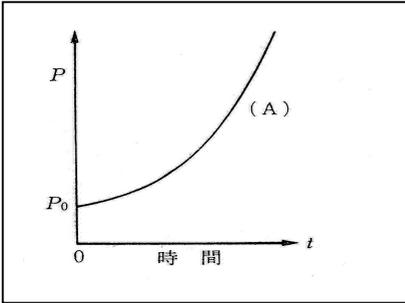
(朝日新聞 2015.5.19 朝刊)

成長の限界を見据えた世界の動きは 1968 年 4 月、世界各分野の学識経験者 100 名がローマに集い、会合を持ちました。1970 年 3 月に「ローマクラブ」として正式に発足し、世界問題についてのグローバルな研究をおこないます。1972 年、マサチューセッツ工科大学(MIT)のデニス・メドゥズを中心とした若手グループにより、第 1 レポート『成長の限界』がまとめられます。さらに 1974 年 10 月、西ベルリンで開かれた総会に、M・メサロビッチ / E・ペステルによる『転機に立つ人間社会』が報告され、こちらは第 2 レポートと呼ばれます。

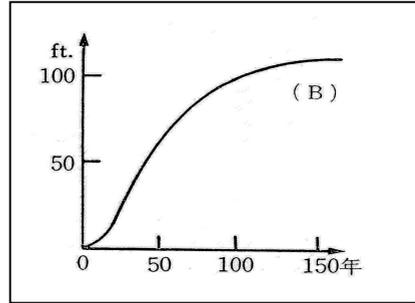
『転機に立つ人間社会(Mankind at the Turning Point)』は、大来佐武郎、茅陽一氏の監訳による日本語版が 1975 年 2 月、ダイヤモンド社から出版されます。当時私は、経済成長全盛の日本社会の中で、成長至上主義に疑問を持っていました。成長一色の一本道ではなく、一人一人の個性を活かす多種多様な在り方こそが、来るべき社会ではないか・・・と。この本を読み、「成長の限界」という視点をさらに強く意識づけられます。そして「成長」の思想は、「アルピニズム」の「より高く、より困難な登山」という思想とベクトル方向が一致します。

成長の特徴として、次の 4 パターンのグラフが提示されています。

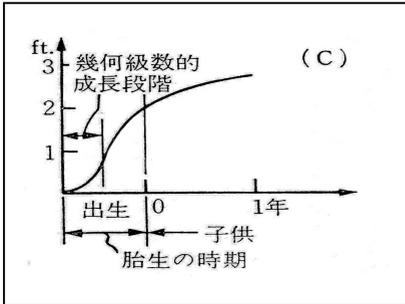
(A) 幾何級数形成長曲線



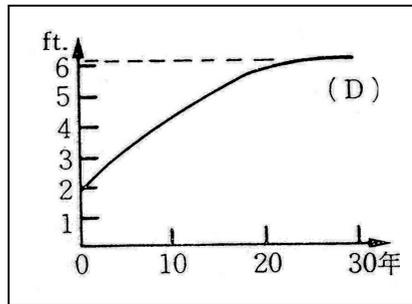
(B) 樫の木形成長曲線



(C) ロジスティックな成長曲線



(D) 人間の成長曲線



経済成長至上主義は (A) の幾何級数的成長となり、やがては自然資源を食い尽し、人類相互も食い合って、最後に残った強者もまた、自然の中へと食い尽くされ滅亡することでしょう。

(C) のロジスティックな成長は、最初は急激に成長しますが、成長につれてスロウダウンし、やがて成長が止まり飽和に達します。

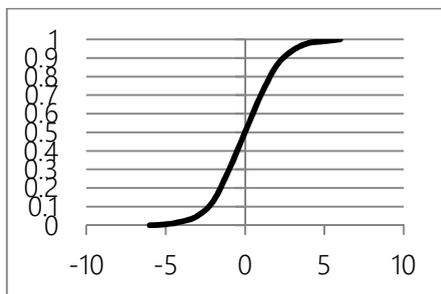
朝日新聞記事で見田先生は「ロジスティック曲線」を採り上げられています。生物を生存に適した環境に放つと、ある時点から爆発的に増殖しますが、環境の限界に近づくとスロウダウンして、安定した平衡状態に達する、というものです。このとき生物は環境に適応できたわけですが、平衡状態を持続することは大変困難であり、大方の生物は環境を食い尽くして衰退、絶滅してゆきます。

このことを物理学の法則から考えると、飽和状態を持続することが不可能であろう

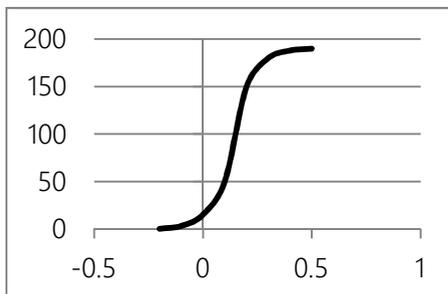
ことが理解されます。宇宙のエネルギー(熱力学)を支配する二つの法則、「第1法則＝エネルギー保存の法則」、「第2法則＝エントロピー増大の法則」、があります。物質は形象を換える中でエネルギーを発生し、仕事量となって消費されます。消費された仕事量は再びエネルギーとして活用できず、「消費」が増大していきます。仕事量での消費は、形象を換えた物質のエネルギー・ポテンシャルを減少させ、エネルギー活力を減少させていきます。そのようにして物質は、仕事量としての消費を増大させながら形象を換え、活性エネルギーを失って平衡状態へと変貌します。活性エネルギーを失った消費仕事量のことを「エントロピー」といい、「閉じられた系の中において、エントロピーは増大する」というのが、「第2法則＝エントロピー増大の法則」であります。人類が活動を続けてゆく中でエネルギー消費を累積すると、地球という閉じた系の中にあつてのエントロピーは増大を続け、最後は平衡状態となって活動エネルギーを失うことを意味します。そのことはまた、人類の滅亡を示すわけですから、滅亡の手前で止める「成長の限界」という考え方は必然的に出されます。

「成長の限界」をどのように理解するのか……、つまり、**生命とは何か…、生命現象とは何か…**、との問いに、分子生物学者・福岡伸一氏は『動的平衡』(2009.02.25:木楽社)という概念で説明します。生体を構成している分子は、すべて高速で分解され、食物として摂取した分子と置き換えられます。身体のあらゆる組織や細胞の中身は常に作り変えられ、更新され続ける。分子が流れる環境の中で、分子の一時的な淀み(滞留)が身体を作り出し、死してふたたび環境へと戻されてゆく。分子がかりうじて一定の状態を保って身体として平衡を保っている状態を、「生きている」といい、この特異な状態を「動的な平衡」と名付けたのが、ドイツ生まれの生物学者、ルドルフ・シェーンハイマーだといひます。「生命とは＝動的な平衡状態にあるシステムである」とし、「生命現象とは、生命の構造ではなく、効果である」とされます。さらに福岡氏は、生命現象を含む自然界の仕組みの多くは「シグモイド・カーブ」という非線形性をとる、とされます。

【シグモイド曲線の例】



【ロジスティック曲線の例】



見田先生のロジスティック・カーブと福岡氏のシグモイド・カーブとは類似な特性を表します。右側に傾いたS字カーブで、定常値へと収斂します。この制御を電気回路上でおこなうのが自動制御であり、帰還（フィードバック）回路によって出力を定常状態へ収斂させるように増幅作用（または入力信号）の調整をおこなうわけです。定常状態へ収斂する定数を環境要素に置き換えると、それぞれの要素がもつ「**環境容量**」と言い換えられます。

「定常状態」を見定める視点には、第一に、科学による観測・実験・定量的規則性の確認は勿論のことです。第二に、定常状態を「山頂」に例えるならば、山頂を見上げ、山頂へよじ登り、山頂に立った人間目線からの視点です。

頂点に立ち自然を「征服」したと見るか、自然の大きさ・美しさの畏敬とともに、人間活動のたわいなさに気づいて「無の境地(空)」となるか、さらに深く考えずに「自然とともに」あるか。前者は欧米中東型(アエリア系)、中間は東洋型(シュメール系)、後者は中南米・ラテン型、大雑把な民族気質分類を例に分けてみました。私は新たに山頂から俯瞰する「**複素的視点**」を提言するのですが、詳論は未完成にあります。

近代に始まる民主主義社会と経済成長路線の資本主義体制にあつては、魅力ある商品作りとともに生産量を増大し、消費欲望を煽ります。消費が増大するに比例して税収も増大しますから、増大した税の再配分によって所得が上がり、さらなる消費の欲望を満たそうとするウイン＝ウイン(win=win)関係となる、成長政策がとられ

ます。そこで問題なのは、「有限な環境容量の中で、無限な win=win 関係は持続しない」、という自明なパラドックスの自覚です。

今(2015年)の自由民主党、安倍政権は「アベノミクス」をかかげて日本経済を煽り、国民所得を増やし、消費拡大にともなう消費税率アップをねらい、まさにこの win=win 手法を実行しています。生活者の消費欲望を煽り、それに答える産業を拡大成長させます。しかしこの手法が適用できる範囲は、「無限な資源、エネルギー調達が可能」な外界に向かって開放された系の中であり、閉ざされた系の中とする地球環境では限界が生じます。

一方で「虚な世界」を思い浮かべてみると、人間の「欲望」はブラックホールによく似ています。思い描く欲望のイメージーションは、限界を知りません。その欲望に限りある限度を知らせるのが、「理性」の役目です。人類が生存を持続する基礎的な「欲求」をベースに、より良く、楽しく、美しく、快適を求める「欲望」は車のアクセルのようなもので、欲望を深めれば意欲は加速されます。他方、車のブレーキ役は「理性」が果たします。社会の周囲を見渡し、加速しすぎていけば抑制の信号を送り、減速しすぎて渋滞していれば加速の信号を送り、適正速度で走行維持を図る役割が「理性」となります。生活者の消費欲望を煽るアクセルを踏み続けられれば、生活者が乗った車は地球の崖を転げ落ちてしまいます。だれでも分かるこの単純な仕組みを知りながら、ブレーキをかけられない「欲望」の魅力は、一種の麻薬とも言えそうです。アルピニズムの段階的向上心は、欲望の享楽を満たす妥当な手順となりますが、その行き着く先は「死の世界」です。「死の環境に立ち入って、体験の中から死の恐怖を克服する・・・」、誰にでも勧めることはできません。自ら選んだ人のみに勧めますが、他者や信仰にすがりつくことのない、自由な意思で自立できる最高な道でもあります。

世界は今になってようやく、地球環境に限りあることの認識が伝わり始まりました。ローマクラブの指摘から、はや 40 年余がすぎますが、人類史の時間軸で見れば、まだ現代の出来事です。「欲望⇒成長⇒より高く、より困難な科学的合理性追求の到達点＝最高の価値」とする近代精神の高み(プラトール)を維持しつつも、その結果がもたらす**環境破壊と人格破壊**を手前で制御するためには、進化から開放された

豊かな**感受性**の下で培った**知性**をもって、最適条件へと定常化させるフィードバック回路を作動させなければなりません。ポジティブ・フィードバック(正の帰還)をかけると、成長はより促進されてしまいます。ネガティブ・フィードバック(負の帰還)をかけると、成長は減速されます。つまり、ネガティブ・フィードバックする要因は環境限界であり、無限な欲望を抑える豊かな感受性のイマジネーション(価値観)です。人間が科学によってロボットミエ化される前に、地球の豊かな自然とともに生きる感受性の喜びを知性に加え、人工知能と対峙していきたいものです。「登山」はまさに、そんな感受性を育む始原的な行為であることは、改めて強調したいところです。「**たかが山登り**」のスポーツに収斂させることでなく、「されど山登り」の**感受性を育み**、その素晴らしさを次世代へと繋ぎとめたいものです。

見田先生が指摘される【日本の社会は、世代が消滅しつつある】ことへの対処として、コンピュータ上のバーチャルな世界ではなく、山岳の自然にまみれる登山体験を通じた感受性こそが新たな感性と知性を生み出し、次の世代へと引き継がれる期待が持てます。

アルピニズムの変貌は、マクロな視点の人類からでなく、ミクロな視点の個から発し、山岳自然への感受性にまみれ、培われた知性をもって人類の視野へと、ふたたび演繹・帰納させることだと思うのです。個の視点から山岳自然を通して自らを見返すことは「**哲学**」の思索となります。また、自らを無にして何かに帰依すれば「信仰」や「思想」となります。しかし私は個と個が共鳴、共感、協調する、宇宙での基本的な在り様「対称性」へのマッチングこそが人間の自然な在り方と思うのです。人間の関係性で述べれば【**人と人の心を結ぶ無償な愛と真・善・美**】とする無形な部分(虚な部分)において、非対称的存在を対称的關係に統合化させて安定を図る、自然な人間的行為に期待するものです。つまり、アルピニズムの変貌は答えの出ない個々の心の変遷の中に DNA のように組み込まれ、百人百様、様々な関わり方によって表現することができますが、「**生きる**」そのことへの情動が、アルパイン登山表現となって表出され、必然として理解されるよう説明を続けたいと思うのです。「**リスク**」を乗り越える中に、成長の実感と成長の限界(主観的限界と客観的限界)を知り、幸せの実感を味わうことができることを知ってほしいものです。

**成長の限界**は二種類に分けられます。一つは「**主観的限界**」で、自らに自覚をもって「もうだめだー！」と諦める限界点。もう一つは「**客観的限界**」で、自然原理に基づいて決められ、科学的検証によって確認される限界点。体験的なアバウトで述べれば、「主観的限界は客観的限界の約1/3をもって自覚される」、といえます。例えば困難な中で「もう死にそうだー！」と思っても、まだ死んでいません。生物機能が停止し、分子交換できなくなる生命体の死に至るまでには、まだ2/3程度の余裕があるのではないか。健康自覚限界を1/3程度とすれば、それから疾病や精神活動の低下を招き、全ての交換機能停止に至るまでには、まだ2/3のゆとりがある。でないと、人は簡単に死んでしまうからです。システムの言え、疾病や活動意欲低下は死の前の警報(アラーム)信号であり、機械であれば部品交換すべき部位を知らせてくれます。人体の場合は、誰から調達するか倫理的問題と、調達できたとしても相互の生体適合性が適っているか、あるいはips細胞技術等の再生医療で、どこまで生命維持を続けてよいのか人工技術の限界が……等々、問題は簡単ではありません。一方で機械ならば、壊れたパーツを交換するか、不都合なブロックを交換するか、はたまた全部を新品に取り替えてしまうか、倫理は不問とするテクニカルな問題と、コスト・バランス(費用対効果)によって選択枝判断(設計)となります。

「**限界克服の再帰性**」においては「**リスク・マネジメント**」と「**クライシス・マネジメント**」の考え方があり、様々なリーダーシップの判断基準を設定することができます。その応用として、山岳遭難対応や、原子力発電所メルトダウン等々、〈資料編〉にて別途考察しています。

人類としてのアルピニズムは死んでしまいましたが、個としてのアルピニズムは世代とともに生まれ変わり、その様態は変遷をしていきますが、その思想は文化的生活が続けられる限りにおいてずっと継承されていきます。

なによりも、「今」を生きる、その時々々の“**生命の輝き**”がありますから……！

## 2. 登山の弁証法から

人類の進化の方向性は、無意識な欲求から生じる進歩・向上思想であり、アルピニズムの方向性とマッチングするものでした。情緒を捨て去り、身体のエネギーと技術を用い、より明確で客観的記録を求め、初登頂・初登攀がおこなわれました。その世界が無限であるなら許される展開ですが、地球の山岳においてはやはり有限な「閉じた世界」であることを実感します。

アルピニズムの進歩・向上をめざす悟性的側面を「正」と定立すれば、次の「文脈①：無意識な欲求」で述べる「**正の登山**」となります。次に正の定立を否定する理性の側面を「反」として定立すると、「文脈②：意識の欲望」が取り上げられ、「**反の登山**」が多様に展開されます。さらに対立する正・反両者を肯定的理性によって統合すると、「文脈③：複素な多次元世界」にたどり着き、「**合と新の登山**」は何でもアリとなり、全く自由な反面、無秩序ともいえます。その何でもあり、となる新しい世界をどのように理解できるか、難しい課題が横たわります。

次の三つの文脈から、順次考えてみましょう。

### **文脈 ①：無意識な欲求** (正の登山＝文明進化の方向性＝絶対的単一要素⇒成長)

「自己又は人類初として記録を求める**欲求**」は、文明進化と方向性を同じくする生存の**必要条件**に属します。この欲求は自然人として持って生まれた、未知なるものを知りたいという知的欲求本能であり、自己または人類とする単一視野にたった「**即自欲求**」であります。この即自欲求は自己又は人類の限界へ迫り、限界を知り、その限界領域を次々と拡大更新する文明の位相に属するものとなります。いわゆる「**正の登山**」の立場です。

近代登山の展開としては最初の段階で、**初登頂の時代**といえますが、もはや現代にあっては、終焉を迎えています。

### **文脈 ②：意識の欲望** (反の登山＝文化享受の方向性＝多様な中の条件設定⇒競争)

「記録によって他者に優越する**欲望**」は、文化として価値の多様な表現様式で

もあり、生存にとっての**十分条件**に属します。他者と共生する社会の中で、他者との比較(競争)によって他者よりも優越したいという欲望(意識)を満たす、感性(心)をとまなげません。この「対自欲求」は「欲望」という言葉に置き換えたほうが、その意味を適切に反映します。「反の登山」の立場です。この「欲望」が抑圧される社会にあつては、教条主義的フラットな文化となり、「欲望」を自由に発揮できる社会にあつては、多様な文化がさまざまに花を開かせるわけです。

現代日本は、後者の自由な領域にあると云えましょう。さらにつけ加えると、「人が感じる美とは、他者よりもほんの少し優れている」ことの中にあるといわれます。大きくかけ離れてしまうと周囲の環境とかけ離れ、孤立した不安な心が増します。

近代登山の展開としては第 2 段階で、**バリエーション・ルートの時代**といいますが、もはや限界に達しました。

### **文脈 ③：複素な多次元世界** (合と新の登山=幸福の方向性=なんでも有り⇒居場所)

文脈①と文脈②の、文明要素と文化要素は「実な世界」の二次元平面(東西南北=実社会)に現れます。さらに他者から見えず伝えにくい「知的本能(理性)、感性(心)」という「虚な世界(抽象な意識の世界)」が隠されています。「正・反」の実利的社会(二次元平面構造)に、新たな「虚な世界(意識の世界)」を加えた「合と新」の現代社会は、電子機器とそれを動かすプログラミングによって、4次元立体構造(東西南北~空・時)な物質(リアル)と意識(バーチャル)の混じり合った現実・仮想・複合社会という複雑な世界を生きることになりました。その複雑な世界を「**複素な多次元世界**」と考えると、【図-1】(P.81)となりますが、簡単には説明ができません。

外部から見えず、他者に伝え理解しにくい「**理性と心**」の「**抽象の世界**」は、私たち一人ひとりの心身の内にあります。その一人ひとりによって家族、職場、地域、国家、世界意識が構築されます。その「複素な多次元世界」は、身体によって体現される「実な世界」と、目に見えない「意識(知性+感性)」が統合される「**複素な 4次元世界**」は、数学の複素数ベクトルで立体可視表現してみたのが【図-1】(P.81)です。

「合と新の登山」は、この「**複素な 4次元世界**」を理解することにより、その行

為と心の理解が深められるものと考えられます。それゆえに「正・反」の「実な世界」からだけでなく、「虚な世界」の见えない、伝えられない、意識の世界の表現をいかに他者と共有できるのか、**新人類社会**の理解と説明が今後重要になると思うのです。

「合と新」による登山記録の複素な表現は難しく、また「正・反」の人々にとっては理解しがたいものとなるでしょう。**心性と身体性が複合する記録とは、一体どのようなものになるのでしょうか。**短絡的に述べれば、「**なんでも有り**」ということです。

ある時はアルパイン・クライミングをおこない、また別な時はボルダリングをおこない、季節によっては詩情豊かな景色とふれあうヒマラヤの麓へも行ってみたいような、アナログ的連続性でない、デジタル的不連続な発意の行為となり、その中心では心身の統合を図るバランス感覚が作用している……、そんなイメージが湧きます。

「**異なった次元での比較・評価は無意味**」となり、「**なんでも有り**」となります。

では「正・反」による実存的体験と知識は、もう役に立たなくなるのでしょうか。このことへの論考こそが、本論の主題であります。つまり、18 世紀以降の社会をリードし、今なお進化を続け、生命操作や人工知能を生み出している知性に対し、「体験して得る感性を取り込んだ**幸福という心の状態**」に価値を与える、「人の意識・文明・文化＝環境」の理解と普及です。

近代登山の展開としては第 3 段階で、現代の多様な登山として【表-4-1】(左側)、【表-4-2】(右側)にまとめてみました。

その中で、どこに「**自分の居場所**」が見つかるか、見つかったならば、「**幸福**」といえましょう。







## 10章. 登山の学際的理解

### 1. 自然現象の物理学的理解

自然現象における物質の移動は、「位置エネルギーを減少させる方向に作用」します。高いところにある物質は、低いところへ移動する方向へと力が作用します。そしてフラットな一様になると高低差がなくなり、位置エネルギー差を失い平衡状態となって安定します。

「因果応報」という日本の諺ことわざがあるように、ニュートン古典物理学の時代には原因と結果は連続的に結びつけて理解をしていました。しかし「不確定性原理」を唱えたハイゼンベルグやボーアの量子物理学の時代になると、原因と結果は「必然」として決定されず、確率的精度をもって結果を予測できる「蓋然」という理解へと変わります。

そのことは、物質の最極小単位である素粒子の運動性に由来します。素粒子は不規則な運動をしており、ある瞬間を切り取れば、粒子の密度は一様でなく、偶然に一部の空間密度が高まり、不均一な“ゆらぎ”を生じているといわれます。またこの“ゆらぎ”が偶然によって加速されると、集まった粒子が衝突し合って渦を巻き、高温や高圧となってさらなる反応を引き起こし、果ては宇宙の様々な現象を引き起こします。

「過去の原因から未来の結果が生まれる」、という古典物理学の「必然的因果律」の理解は、修正が余儀なくされました。原因から結果の予測をもたらせることは、その予測精度の確率が明確に分かるだけであるという、「蓋然的因果律」へと変わり、未来は「不確定」である、となります。

つまり、「自然現象は、位置エネルギーを減少させる方向に作用し、平衡となって安定しますが、粒子の不規則な運動性のために確率的精度をもって現象を予測することができる」、という理解となります。この「自然現象の不確定性原理」とともに、偶然の“ゆらぎ”によって生じる異常気象や巨大地震、火山噴火や核融合反応の

ような、莫大なエネルギー放出をとまなう自然現象の全てを正確に観測し、制御する技術を、人類は未だ持ち合わせていません。しかしコンピュータ時代の 21 世紀に入り、日常的な自然現象の把握は急速に進みます。観測網を張り巡らせて検知し、精度の高い確率予測をもって事前に対処できるようになりました。

人類は文明技術として、自然の物質にエネルギーを加えて加工し、人類にとって有益となる様々な人工環境を築いてきました。その流れは都市化だけに収まらず、山岳領域においても山岳道路、橋、ケーブルカー、ロープウェイ、登山道、山小屋等々の、交通、宿泊施設を整備してきました。それら整備による山岳自然の人工施設化は日常生活環境の延長を意味し、訓練を経ない誰でもが、容易にその中へ入り込むことができるようになりました。訓練を不要とする一般化現象は、自然界における物質の移動と同じで、位置エネルギーの性質やエントロピーの法則から理解することができます。しかし単純に、それだけで良いかとなると、そうではないと望むのが、人間の精神性から生じてきます。人間が物質的行動で満足できるかという、それだけで満足できない精神面が浮かび上がります。物質的行動を「文明」と呼んでみると、精神的充実は「文化」として対称できます。自然の中で生存する人間は、物質的存在であるとともに、精神的存在を意識する厄介な「二元論な動物」であり、物質的自然や他の生物らの単純さに比べると、「複雑系の生物」といえます。私はその基本構造を「複素的世界」と考えて四次元世界を考察しているのですが、電気工学や量子物理学が扱う(勿論数学も)実数と虚数で表現する電磁方程式と波動関数は、「二元論な動物事象」を表現できるのではないかと考えるのです。その構造のベクトル表現は【図-1】(P.81) に示しましたが、さらなる論考の詳細は、別な機会でおこないたいと思います。

人間の生活は“ゆらぎ”による人知を超えた自然の猛威から身を守るために、科学観測を重ねて基準や規則を定め、それに基づく物理的な人工施設で防御してきました。一方で人類の消費エネルギーや廃棄エネルギーの累積肥大化は自然現象に影響を及ぼし、自然の“ゆらぎ”は新たな様相を現わし、防御する基準や規則の定常値を乗り越えて災害となって還ります。日常的な自然は生活への恵みを与えてくれますが、“ゆらぎ”による非日常的な自然は生活への災いとみなされます。

どちらも自然ですが、その中で生活している人間の側においてのみ、**恵みと災害**の二面性として受け止めることになります。自然の側から見れば、単に「位置エネルギーを減少させる方向に作用」しているに過ぎません。

## 2. 登山の物理学的理解

登山を物理学的に理解することは、登山者の身体を物質とみなした行動理解となります。山上の岩や雪や氷は、平地にあるよりも位置エネルギー差が大きくなることにより、重力に引かれて崩れ落ち、平地に一体となって位置エネルギー差を失い平衡状態となります。

圧縮されて気圧が高くなった空気は、低い気圧の領域へ向かって流れ出して風となります。また、温められた空気は軽くなって上昇気流となり、冷たい空気は重くなって下降気流となり対流します。それらが混じり合って均一になったところで平衡状態となり、安定となります。

登山は低い位置から高い位置へと登る人為動作で、物理学的には「位置エネルギーを増大させる方向への運動」といえます。登山は自然現象と逆なベクトル方向に作用するため、その位置エネルギー差は自然への抵抗と感じられます。その抵抗を乗り越えるためには、位置エネルギー差と等価以上のエネルギーを消費する、身体行為となります。しかもその抵抗が大きほどに、消費エネルギーが多いほどに、登山の価値が高まるという、登山は反自然行為となります。それゆえに西欧から始まった近代登山においては、人間と山との物理的関係を主に置き、「自然を征服する」という征服概念が持ち出されました。

さらに地上の山頂に登り尽くされると、情緒を含まない物理学的登山概念からは、人と人が競う「**身体スポーツ**」へと向かいました。しかし山岳の自然条件は一定でなく、比較競技に向きません。それゆえに登山の一部分、つまり「クライミング(登攀)」を切り取り、一定条件を担保する屋内人工壁を登るボルダリングや、トップロープ・クライミングでの競技となります。この領域になると山岳自然の山を登る「登山」とはかけ離れ、「登山」とは別次元な「**クライミング競技**」となります。2020年

東京オリンピックの追加競技種目候補に残りましたが、もはや登山ではない「**スポーツ・クライミング**」なのです。

西欧の**表音**言語文化の中では、正/反、勝/負、YES/NO のような、自己を中心とした他者との二項対立的な概念思考となります。中庸で曖昧な事象は**表音**言語で定義することが難しく、西欧文化の思考法に馴染まなかったと考えられます。一方で東洋の自然観には、「**自然を征服する**」という概念は育ちません。中近東から東洋に至る**表意**言語や**象形**記号文化には、曖昧な事象をことさら定義しなくてもその言語や記号の中にも含み得るため、自然とともにある複雑で中庸な、そして微妙な差異と曖昧な事象を、その文化概念思考の中に取り込むことができたと考えます。

それゆえに日本の文化では「**山頂を征服する**」という概念ではなく、「**山頂に立つ**」という、許されて到達したというような、密教の他力本願的で控えめな表現が目立ちます(例=マナスルに立つ)。では誰が許したのかといえ、それは自然であり、神や仏の信仰と宗教の共生の中での多神性、多様性を容認することにより、主語は無意識化された多様な精神の中に隠蔽されます。

古代イスラエルに端を発するキリスト教やイスラム教での主語は、唯一絶対な神を信仰する一神教の神となります。それは抽象的な精神性よりも実証的な物質性に馴染み、客観的な科学へと収斂します。**表音**言語文化は「記号の論理化」、つまりあらゆる事象を記号によって定義し尽くすことを特徴とし、言語化においては常に主語が何をするのか、どうなるのか、を説明する論理と構造を要します。しかし**表意**言語文化は「情理形象文化」を特徴とし、言語や記号の中に全ての事象を網羅させ、必ずしも主語や論理構造の明示を必要としません。形象表現の中で事象を共有・理解する、アウンの感覚コミュニケーションも成り立ちます。

特徴的に記しましたが、この両者の間にはどうにも分かり合えない、二元論と一元論の言語構造がもたらせる、意識と感性の不整合(ズレ)が生じます。お互いに分かり合うためには、構造の違いを理解するとともに、双方の言語をもって交流を続け、徐々に近づき慣れる以外にないと思うのです。登山を物理学的に理解することは**表音言語**文化に類し、その到達点として「**登山=スポーツ**」の概念に収斂すると考えるものです。

### 3. 登山の生物学的理解

登山を生物学的に理解することは、登山を生命活動とみなした説明になります。

分子生物学者、福岡伸一氏はその著書『動的平衡』（木楽社、2009年）の中で、生命現象の生物学的説明を展開されています。

【生命活動とは、アミノ酸というアルファベットによる不断のアナグラム＝並べ替えであるといってもよい。新たなタンパク質の合成がある一方で、細胞は自分自身のタンパク質を常に分解して捨て去っている。なぜ合成と分解を同時に行っているのか？ この間はある意味で愚問である。なぜなら、合成と分解との動的平衡状態が「生きている」ということであり、生命とはそのバランスの上に成り立つ「効果」であるからだ(P.75)】とされます。また、【合成と分解との平衡状態を保つことによるのみ、生命は環境に適応するよう自分自身の状態を調節することができる。これはまさに「生きている」ということと同義語である。サステナブル(持続可能)とは、常に動的な状態のことである(P.75)】、と記されます。

自然の中から偶然に生命が発生した、あるいは宇宙から飛来した生命体かも知れない人類は、今、地球に繁栄(約73億人=2015年)しています。人類700万年の歴史(最古の人類=サヘラントロプス・チャデンシス)を経た進化の中で、人間は「中空の管」でしかない福岡氏はいいます。生命体という連続した管の中で、「今」を生きている個体や脳は、【ある一瞬を見れば全体と緩い秩序をもつ分子の「淀み」である(P.35)】、といいます。目に見え数えることができる物質もまた、分子の「淀み」によって形成される平衡状態ともいえます。代謝のない物質は、外部からエネルギーが加わらなければ変容されずに固定化され、生命体とは異なった存在となります。

人の身体をつくっている分子は代謝によって交代を繰り返し、生命体として継続を図ります。代謝にともなう廃棄物は分解されて自然に還り、ふたたび何かの様態へと変わっていきます。そのことは物理学でいう熱エネルギーの第1法則＝エネルギー保存の法則で理解できます。生命継続のために代謝を必要とすることは、熱エネルギーの第2法則＝エントロピー増大の法則によって理解できます。つまり個体の生命という時限性を、種の生命という継続性に位置づけるためには、「死(分解)」

という個体の廃棄と、同じ遺伝子を受け継いだ「再生(合成)」という「世代交代(代謝)」によって、人類は自立的におこなってきました。人工知能によって、人類の代謝機能を実現できるか……、もしも可能であったとしたら、人類はロボットに置き換えられる運命となるのでしょうか。

自然の一部とされる人間存在の平衡状態の中で自然に逆らう分解行為(登山)は、無事成し遂げて生還し、じっくりと喜びを感じずる合成行為(登山文化)となり、その一連の動的平衡の中で「生きている」ことの実感(意識づけ)をもつことができます。人が生命の実感を意識するのは、ただ自然に流されるだけの存在でない「抵抗(登山)」により、自我の意識を再認識でき知性があるからなのでしょう。そのことを通して、人はただ生かされるだけでなく、生きることを意味を知ることになります。人間が他の生物と異なって知能を発達させた結果の価値、つまり「文化」によって、「生きること」を楽しむ感情を育ててきた特殊性といえましょう。

生命現象は工学的な操作や産業の規格化・効率化・再現性に馴染まない特殊性があるとされてきましたが、遺伝子操作、人工授精、再生医療、冷凍保存や人工知能等のテクノロジーによって、21世紀からの様相は変わってきました。生命は自然の中での代謝から人為的代謝へと移行準備を始めています。自然代謝とされた時間軸の連続性、つまり歴史として積み重ねてきた過去から現在に至る時間軸の連続した自然な生命現象のほか、不連続な限時性をもつ人為的な代謝(人工生命)が加わることになります。

人間社会は日常の連続した世界ですが、登山をおこなう山岳領域を非日常の不連続で限時的な世界とすれば、登山者はすでに日常の連続の中に非日常的な不連続世界を組み込んだ体験を持っていることになります。このことは宇宙に存する光の性質、①波動性、②粒子性、に類似した理解ができます。つまり、①波動性は連続した波のように、日常の変化を周期的に繰り返し、アナログ信号のような性質を示します。②粒子性は不連続で限時的な、ある存在感をもった非日常的な特殊事情(登山)を随時に加える、デジタル信号のような性質を示します。

しかし今、デスゾーン(死の世界)から生還を果たすデジタル信号のような非日常的なアルパイン登山は衰退し、趣味的登山はアナログ信号のような日常社会に組み

込まれています。山岳環境の開発が進んだ結果、山稜の山小屋はホテルのうに整備され、登山の多様化はエントロピー増大の法則に則り、山岳の非日常性を日常性へと変えています。残された非日常的な山岳は、極めて少なくなった未知・未踏な山岳と、高所登山、冬季登山になりますが、それらの領域においてさえも、趣味登山(観光登山、ガイド登山等)が一般化し、自主・自立・自己負担・自己責任で未知に挑もうとする、非日常性への情熱が薄れています。

そのことは登山に限らず、日常生活の中での金銭対価のリスク・マネジメント意識が浸透し、生命のクライシス・マネジメント意識が欠落しているからといえます。もっと言えば、生命の危険を回避する経済主導で過保護な安全管理意識が、社会の価値意識の主流を成しているからといえます。あえて危険を冒さない安全意識の強化は、9章 P.115 のシグモイド曲線のS字カーブ上端に位置する、人類知性の限界点近くにあると言えるのかもしれませんが。

次なる知性の複素的な世界において、人類の知恵と人工知能の知識とが、どのようにコラボレーションされるのか、私にとっては未だ研究課題の領域です。

生物学者、本川達雄氏はその著書『**生物学的文明論**』(新潮社、2011年)第3章の中で、「**生物多様性と生態系**」についての説明を展開されています。これに類する「**現代登山の多様性と生態系**」(【表 4-1、-2】(P. 123-124) 現代登山と山岳スポーツ等の生態系)について考えてみました。

多様な生物の存在は説明するまでもありません。生物はそれぞれに生命(いのち)というライフサイクルを持ち、①個体の生と死、②種の生と死、という二種類の一方方向性時間軸を生きています。①、個体の生と死は人の一生ですが、種の連続性からみるとデジタル信号のノイズのようなもので、動的平衡のなかで人が生命を実感できる時限の一瞬にすぎません。②、種の生と死は親から子へ、子から孫へと、さらにずっと続くアナログ信号のようなもので、その継続は一つの種族継承となります。それがミトコンドリア・イヴまで遡れば、人類の起源に及ぶ長大な人類史とともに、現代の俎上では明確に始まりと終わりを知ることができません。しかし人類が生物である限りにおいて、宇宙の歴史上いつかは絶滅しなければならない、必然な因果律にあ

ります。一つの星さえも宇宙の中では、生成と消滅がある生命体ともいえます。スケールが大きすぎますので地球サイズに戻すと、「人類の生命活動が多様化する」とは、どのような現象を生じるのでしょうか。

**第一に**、多様な存在者の間に序列や主従、指示、命令関係が適切にある場合は、秩序や倫理を整えたヒエラルキー(階級、階層)が発生し、トップを頂点としたピラミッド型構造の安定社会を築きます。その構造は位置エネルギー的安定性が高く、内部での流動性(転移、交代)が良ければ熱エネルギー的安定性も高く、社会で最も汎用的な形態を呈します。社会は常にエントロピーが増大し、固定化へと向かいます。ピラミッド型が形骸化すると、上位下達、指示、命令、主従の信頼等々、適切な情報伝達に障害が生まれてきます。

エントロピーが増大した固定化とは、画一化されて内部抵抗が大きくなった状態を示します。内部抵抗が大きくなると、情報伝達の正確性に欠けてきます。人身の交代(代謝)が適切におこなわれ、情報エントロピーを減少させる正確な情報交換ができるような体制は、組織を継続できる在り方です。能力をとまなわない職業(身分)世襲や資産相続、適応へ自由裁量の少ない規則・規制や組織などは等しく、エントロピーを増大させます。

**第二に**、序列がつけにくい多様な友達関係にみる横並びや、自主・自立・対等なフラット型構造は一見安定しているように見受けられますが、フラットな構造体ゆえに位置エネルギーは低く、多様な混じり合いが容易におこなわれ、エントロピーが増大した内部活力に乏しい様な、耐久力のない状態を招きます。しかしこの局面だけに限れば、仲良く対等で平和な安定社会は内部エネルギーが低くてすみませんが、歴史の時系列を更新し続けて持続性を保つことは困難といえます。なぜなら自然の真理＝エントロピーの法則に逆向しているからです。

ではどのようにして、内部エネルギーを高めることができるのでしょうか。その答えは、人類知性の「**愛と希望を創造する意識の力＝エントロピーを減少させる**」ことにあると考えるのです。これまでの人類史に正統として現れなかった局面であり、この考えを支持・理解できる人は極く少数となることでしょう。そして私は、自然と対峙する**登山の内省**から、人類知性の「**愛と希望を創造する力**」が見いだせると思っています。

るのです。

物質に作用する位置エネルギーや熱エネルギーではなく、目に見えない虚な世界の人間の意識と情熱、つまり心の作用においてこそ、エントロピー増大に逆行する、エントロピーの低減が図れるもの、と考えるのです。心が物質に作用を及ぼし、代謝や世代交代という廃棄と再生機構を循環させるのです。その働きによって生態系の継続が図れるものと考えます。

第三に、中心と周縁という同心円な関係の中で、中心の勢力が弱体化すると、周縁の自立性が高まり、混沌が増した乱立的な生命活動の多様化現象が生じます。

社会学者、山口昌男(1931-2013)氏はその著、『知の祝祭』(青土社、1977年)において、「文化における中心と周縁」を述べています。中心に王や神を据えて軸をつくり、強固な文化を作り上げて深層化する。それを取り巻く周縁は、中心と結びつきの強弱関係によって変化する流動性をもって周縁を取り巻きます。それはちょうど地球と大気との関係のように、相互に意思疎通はないものの、相対性原理のようなエネルギー交換がおこなわれます。

地表の人工化により大気へ放出するエントロピーの高い廃熱は周縁大気を漂い、さらなる地表の温暖化を促します。これまで自然に循環していた地表と周縁大気の熱エネルギー代謝は停滞し、地表の温度が上昇して大気の異常気象となって地表へ還流されてきます。つまり人間が自然に力を加えて人造固定化することにより、それが過大となって限界を超えると、地球の持つ自然統治力が変容して人類の生活に悪しき影響、災害となって還元されてきます。大気という地球の周縁環境は温度が上昇して大気活動の自由度は増しますが、複雑で無秩序な多様性ばかりが増し、人間にとっては異常気象や災害となって還流されてきます。

人間社会に知識と視野が広がると、それまで隠されて密かに権威を保ち続けられた事物の神秘性は吐露させられ、権威の魔法は解かれてしまいます。特に21世紀のデジタル技術による電子化社会は、その傾向を一層推し進めます。情報の拡散スピードは光と電磁波の速度( $3 \times 10^8 \text{ km/s} = 30 \text{ 万 km/s}$ )を上限としますが、1秒間に地球を7回半も廻るそのスピードは、地上の出来事をリアルタイムに伝送するには

十分です。併せて肉眼に代わる電子の目は、人間の身体に代わって生命圏外へも進出して、人類の可視化世界を拡げます。

その効果として現れるのが中心の拘束力の弱まりで、その弱まりに反比例して周縁の自主・自立・独自性が強まり、さらなる中心力を弱体化させる方向性となります。他方では求心力を保つための手段として情報コントロールを用い、乱雑な周縁をパターン化して統合する手法です。情報を垂れ流し、その中に感性をくすぐる画一化へのメッセージ・パターンを潜ませ、ランダムな周縁を画一化した家畜化に導くことは容易となります。コンピュータや端末情報機器をネットワークで常時結びつけ、SNS(Social networking service)からの切り離しは社会のドロップ・アウトとみなすような、電腦社会の悪用です。支配者にとっては至極便利な家畜社会である反面、支配される人々にとっては太陽から離れられない惑星地球号のような、中心をぐるぐる廻る周縁社会の求心力を増します。極小世界においても、原子核の周りを電磁気力に引きつけられて廻る電子のようなものともいえます。電子は質量と性質を持ち、一人一人の人間に例えることができます。さらに、お釈迦様の手の平を飛び回る孫悟空の逸話にも、例えることができます。

人は、自己を中心として周縁を見渡す放射視点(主観)と、周縁を浮遊している個から中心を見つめ返す空間視点(客観)を併せ持ち、この二つの視点を複素的に合成した意識の全体像(複素世界)を構築することにより、多次元世界をイメージできる唯一な生物なのでしょう。山へ登る生命体の中心から見つめる視点(主観)と、その生命体が山頂に立って見渡す空間視点(客観)とを複合化させれば、自然と関わる人類の新たな視野を獲得できるのではないのでしょうか。

## 4. 登山の美学的理解

美は考える意識から出されるものではなく、直接的な体験の中で感じ取る知覚となります。また、知覚の背景に秘められている素養の豊かさにつれて美の知覚は成長し、より深くその味わいを増していきます。それゆえ自然美は、初期には無意識に、成長するにつれて人間の本質を問いかける要素として、その重みを増します。登山

もまた同様で、最初は「たかが山登り」の趣味として、さらに成長して深まるにつれて「されど山登り」という、人間が生きることへの深層へと誘<sup>いざな</sup>っていきます。美的感覚や登山は、人が生きる上での精神的根源要素、「真・善・美」へと関わるからです。

登山を美学的に理解することは、登山を通じて自然と調和し、調和の中で自己意識を消し去る「消滅の美学」があります。一方、自然の摂理に抗するほどに高揚する「抵抗の美学」という、心の二面作用から説明することができます。

「美学」を感性の心の作用ととらえてみると、電気技術者の私にとっては電気回路の現象に例えて説明することができます。心を電流に置き換えると、心の作用は電流がもたらせる様々な効果を表わします。電気回路の 3 要素には、抵抗、コイル、コンデンサがあります。抵抗は文字のごとく抵抗することで、電流の流れをさまたげようとします。電源エネルギー供給が一定を保てる条件において、抵抗が大きいほどに電流は少なくなりますが、その分抵抗体がエネルギーを消費し、発熱によってエネルギーを放出、消費して安定を保とうとします。このとき抵抗体が消費するエネルギー量 =  $W$ 、抵抗体 =  $R$ 、電流 =  $I$ 、と記号表現すれば、抵抗が大きほどに、また電流の 2 乗(情熱)に比例したエネルギー消費量となります。

$$W = I^2 \times R$$

登山を自然に抵抗する喜びとし、心の高揚を電流と見なせば、電流の 2 乗は情熱と言い換えられます。消費エネルギーを登山の喜びに例えてみると、以下の式で表わせます。

$$\text{登山の喜び} = \text{情熱} \times \text{登山の質} \leftarrow (\text{登山の質} = \text{抵抗の美学})$$

つまり、自然に「より逆らう(抵抗)」不条理な登山に、「情熱」を注ぎ込むほどに登山の喜びは大きくなるという、「抵抗の美学」の論理式を示しました。

また一方で、電気回路の 3 要素(抵抗、コイル、コンデンサ)を組み合わせた、複雑な合成抵抗(インピーダンス)もあります。抵抗は単純に流れ(電流)に逆らうことですが、コイルは流れを遅らせます。コンデンサは流れを止めて、溜め込んでしまいます。流れを溜め込んだコンデンサは、ある引き金によって一気に放出する過渡現象があり、物事を急激に押し進めます。放出とともに減衰し、ゼロとなって終息します。逆らう(抵抗)、遅らせる(コイル)、貯めてから放出する(コンデンサ)、この 3 要素を合成した特

性をインピーダンス(Z)といいます。それぞれの組み合わせ方により、回路固有のインピーダンスとなり、人間の個性のような多様な性質を帯びます。そしてある固有の周波数( $f_0$ )になるとコイルとコンデンサは互いに打ち消しあって共振を生じます。その合成インピーダンス値( $Z_0$ )は最小( $Z_0 = R$ )となるため、流れ(電流値)は最大化されます。つまり、コイルの遅らせる要素と、コンデンサの貯めてから放出する要素がお互いに打ち消し合う状態が共振となり、抵抗だけが残ります。登山の表現で言い換えると、自然の脅威が登山を遅らせようとするのに対し(コイル要素)、人が貯えた経験や情熱を注ぎ込む(コンデンサ要素)ことによって脅威を打ち消し合い、純粋な個の抵抗(登山)となって自然と一体化する「消滅の美学」の論理式を示します。

$$Z_0 = R + j[ \omega L - (1/\omega C) ] = R \quad \leftarrow \text{合成インピーダンス}$$

$$j[ \omega L - (1/\omega C) ] = 0 \quad \leftarrow \text{共振状態} \quad \leftarrow \text{（消滅の美学）}$$

$$f_0 = 1 / (2\pi \sqrt{LC}) \quad \leftarrow \text{共振周波数}$$

例えば、エベレストサミッターにおける「抵抗の美学」の代表者は三浦雄一郎氏、「消滅の美学」の代表者は難波康子さん、というイメージが描けます。

※ 三浦雄一郎 ⇒ 2013年、80歳でエベレスト3度目の登頂、下山でヘリコプター使用

※ 難波 康子 ⇒ 1996年、日本人女性2人目のエベレスト登頂者、下山で死亡

2012年に亡くなられた美学者、今道友信・東京大学名誉教授はその著書『美について』（講談社、1973年第1刷、2014年第50刷）の中で、美、芸術、人格、経験、の価値につき、幅広く論じられています。50刷の出版回数を顧みますと、美を学ぶ基礎学問教科書として、長く読まれてきたのでしょう。しかし根源において「美」とは、学び論ずるものなのか、感性の体験だけで済むものなのか・・・、「登山」を論ずる場合と同様な設問が浮かびあがります。

その答えとして今道先生は「まえがき」に、次のように述べておられます。

【誰でも、これは美しい、と感じたり、思ったりしたことが、いろいろとあるにちがいません。そのような感じや思いをもつことが、私の言う美的経験であります。……略…… そこで、この書物で著者は、美についての体系的な思索のサンプルとして、

著者自身の考えを書いてみました。その目的は、もとより本書の考えをおしつけるためではなく、私の責任による体系を示すことによって、読者の美についての思索を刺激するためであります。どうしてそのような目的を立てたか、と例えば、人みなの感激する輝かしい経験内容である美を反省しないでいることは、人間の光栄と喜びとについて考えずにおくことになるからです。(P.3) さらに、

【さて、私自身の思索を述べると言いますが、それは単なる思いつきの羅列ではありません。学問における独創性とは、ただ普通の考え方と変わっていると言う程度の、風変わりや奇矯のことではありません、気狂いや馬鹿でも変わり者になれるのです。学問上意味のある独創とは、その方法なり探求結果なりに関して、従来の研究以上の新たな成果を論証しなければなりません。そういう研究は、古今のいろいろな学説に啓発され、それらと論理的に対決するという努力のうちに培われて来るものであります。(P.4)】

少々引用が長くなりましたが、私が「登山」を論じるに当たり、今道先生の前記論考が力強いサポートになると思えるからです。登山も美学と同じように、第一に体感経験があり、第二以降に思索の整理・論考・秩序立てへと展開されます。特に登山においては思索と整理までは一般化していますが、その先の論考・秩序立てまでにはなかなか進みません。美を体感し、美に浸ることと、その美しさを他者へと伝える二次的表現化、つまり「文化」とは別物となるからです。登山も同様で、山を登り、自然の美しさに浸ることと、そのことを他者へ伝えるメディア化(登山文化)とは、別物であるからです。特に登山においては一次行為に集中し、「登山＝スポーツ」という直接体験の享受までが一般的となっています。さらなる二次的行為は映像化による写真や SNS へアップロードの垂れ流しが多く見られ、情緒や思索や論考を整理した、二次加工作品化(文化)への関心が薄れています。

芸術は自然に潜む「真・善・美」の一瞬を感性で切り取り、人為的に加工を加えて二次作品表現とした行為、つまり再現性、普遍性、物語性を作品(メディア)に定着させる文化行為といえます。重力に逆らって美しい身体表現に変えるバレリーナや、自然の瞬間の美を感じてキャンバスやフィルムに写す絵画や写真、さらにデジタルデータに変換加工して記憶・蓄積させます。文芸は言語を通じて心(意識)を震

わせる描写や表現により、他者の心に共鳴・共感・共振を呼び起こす正の波長を増幅させ、他方で批判を伝える言語は負の波長を増幅させ、正ばかりではないことへの反論をおこないます。芸術の最初は遊び心から発し、やがて文化芸術作品へと固着化され、記録、保存となっていきます。

体で表現する身体芸術は、重力に逆らうほどに困難さを増しますが、人並みにできない矛盾行為ゆえに美しさの感情表現も増します。特定物質に変換固着して表現する絵画、写真、映像、音楽、等々は、自然の一瞬を切り取った美しさに同調した物語性を隠蔽させ、再生・再現可能な普遍的メディアへと固着されます。

登山は身体芸術に類似し、重力に逆らうほどに躍動美を感じます。垂直な岩壁からオーバーハングへと向い、易しい足場からより困難な岩・雪・氷へと、その時々  
の恐怖の大きさ(反自然)を乗り越えるほどに快感は増す「抵抗の美学」です。

自然の側(客観)から見たら、登山は何と不条理(主観)な行為ですが、その不条理(主観)さこそが人間を人間たらしめている、唯一「文化」を発展させてきた知性的な動物、「人間」なのでしょう。それゆえに過度な文化の発展は、自然の中で人類自らの首を絞め、人類の存続を危ういものへと導くことにもなりかねません。

## 5. 登山の脳神経学的理解

自然は混沌とした意思のない世界であり、位置エネルギー、熱エネルギーの相対性によって活動します。熱エネルギーの法則、①エネルギー保存の法則、②エントロピー増大の法則と、確率的蓋然性からなる不確定性原理により、物質の振る舞いが確率的に見極められます。そしてわずかな「ゆらぎ」による偶然が重なると、加速度的に回転(スピン)を増し、核融合からブラックホール、ビッグ・バンへと極大化されたりもします。

そのような自然を知りながらも、一方では自然に逆らうことを楽しみに変えてしまう人間の「意識」は、宇宙をも飲み込むブラックホールのような「無限な虚無性」があるのかも知れません。意識の虚無性を、古来の人々は「神や仏」の概念を持ち出して納得しようとしたましたが、「神は死んだ」とするニーチェの理性は、ニヒリズム

(虚無精神)という精神世界を見定めました。しかし中心なき周縁ばかりの混沌とした個々の精神世界には、アナーキー(anarchy = 無政府・無秩序)な“何でもアリ”の無秩序世界が拡がります。無個性な多様化は混沌に等しく、エントロピー増大の法則が導く結果と符合します。ポテンシャル・エネルギー(位置エネルギー)を失いつつある平らな世界(平成)は、自由⇒混沌、平等⇒生命エネルギー喪失、博愛⇒家畜化として、エントロピー増大の法則から読み取ることができます。

フリードリヒ・ニーチェ(1844~1900) から 1 世紀以上過ぎ、多様化と呼ばれる現代の世界は、宗教的、思想的、社会的アナーキズム(Anarchism)に見受けられ、唯一「**お金(金融)の神様**」が跋扈しています。お金は持つ人の人格に関わりなく、平等に扱われます。お金を発行する国家の信頼性においてのみ、交換価値の差別を生じますが、お金に人格は作用せず、価値の交換システム(経済)における社会的信用という、抽象的な概念によってその価値は左右されます。お金は自然と同じように人間を差別せず、自然と同じような原理・現象・効果を発揮しますが、所詮は人間だけの閉じた世界で通用する人為的な信用システムであり、自然はそのような人類をも含み得る、限りない(測定不可能)宇宙の効果です。

しかし人間の特殊性は、外に向かって開放された宇宙を想像したり、内に閉ざされた自己の世界を構築したり、他者や動物、生物等々、様々なレベルにおける多世界を意識の中に構築します。さらに人間の意識はリアルタイムの今だけでなく、過去、現在、未来へと、時間の前後を自由に往来しています。リアルな今は四次元空間にありますが、意識がもたらす時間軸での往来自由な多次元世界は、リアルな今の四次元世界の中に再現できません。しかし、意識の世界を描ける人間だからこそが、その他の生物と異なる「人間」として存在し、自然を人工化しています。

厳密にはリアルな「今」の世界と思っても、時間を細分化するほどに「今」は過去となります。つまり、人の体験から意識としての「**気づき** (awareness アウェアネス)」となる時間は、最大で **0.5 秒の遅延を生じる** (ベンジャミン・リベット『マインド・タイム』岩波書店、2005 年) とされるように、今という時限は無きに等しい「**過去**」という理解もあるからです。人間の主観とする経験と、それを意識として「**気づき**(アウェアネス)」の客観とした理性になるために、「脳と身体の神経伝達回路の所要時間が最大で 0.5 秒を

要する」という、ベンジャミン・リベットの実験研究成果が示します。つまり五感のセンサーで検知した信号は、ニューロンとシナプスの体内伝送ネットワークを経て脳へと至り、記憶との比較、検証、判断をもって意識となり、気づき(アウェアネス)の応答信号を送出するといえます。これに要する時間が、最大で0.5秒遅延するというのです。

このように、現実の認識や判断の意識(気づき)がリアル(無意識)よりも遅延することは、私たちの現実感覚がすでに過去の残像でしかないことを物語ります。しかしベンジャミン・リベットの研究は、【しかしながらそこで、初期 EP(電気パルス)反応の時点にまで遡る、感覚経験の主観的な時間遡及が起こるのです！刺激を受けた皮膚と脳との距離によって左右されますが、皮質における初期 EP 反応は、皮膚刺激のわずか10～30ミリ秒後に開始します。この10～30ミリ秒間の遅延は、意識的に経験するには十分な長さではありません。皮膚の経験またはアウェアネスはこうして、初期EP反応によって信号が提供されるタイミングまで主観的に前戻し(時間的に逆行して遡及)するのです。(「マインド・タイム」P.87)】として、意識の遅延はなかったかのように主観的に現れるとしています。この無意識から意識へのプロセスは、他にも直感やひらめき、第六感といった蓋然性となって現れたりもしますが、その創出プロセスが実証不可能なために、科学や学問の対象として不適格とされます。しかし他方で無意識は、無かったこととして否定することもできません。

登山は自然の中で人間がおこなう、「抵抗と消滅」の心身行為だと理解すれば、「抵抗」は自然に対する意識がなければ成り立たず、「消滅」は自然と調和して意識を消し去る無意識化への、抵抗と逆転する行為と言い換えられます。その中で「気づき(アウェアネス)」の遅延時間差0.5秒は問題となりませんが、登山で問題となるのは「意識と無意識」についてです。

登山における恐怖心は、未知、未経験な想像の中に芽生えます。その感情は、自然に対峙する人間の、**無意識**で自然な本能的恐怖心といえましょう。全知全能の完璧ではない、人間の証しといえます。経験的にこの恐怖心は、登っている最中よりも、登る前の方が大きくなります。登っている最中は緊張した、心身を総動員した明瞭な意識下にあります。周縁の事象を直接五感に感じ、第六感も動員し、リアルに危険を察知しながら総動員した意識により、危険回避をおこないます。経験的に

人間の理性は、リアルの中にあつてこそ想像以上な冷静さを保てるものです。リアルに直面する前の想像世界は、心配や不安がふくらみ、虚無な深みに落ち込んでいきます。眼前のリアルな「意識」と、観念上の想像世界にある「無意識」への不安は、前者よりも後者において増長するという、経験的結果です。このことは併せて、ヒマラヤ登山準備と遭難体験、その後の処理と反省において、実際の経験から得られた考察となります。

また「**意識と無意識**」を考察するもう一つの場面は、**意識の積み重ね(知識)が、突然な無意識への反応(知恵)をおおいに助長することの体験**です。

先験的(アプリオリ)な意識づけ、それは知識となつて蓄積され、知恵と化して活用できます。ヒマラヤ登山のような、危険率の高い登山においては、事前の準備に3年間を費やすような、できることの範囲であらゆる対応を考え、対処します。なぜ登るのかという哲学的問への回答から、リーダーシップとメンバーシップ、組織の在り方からチームワークについて、はたまた資金稼ぎと物資調達から収集、登山戦略、荷揚げ計画、行動計画のシュミレーション、非常時の緊急連絡方法と搬送ヘリコプター相当金額のデポジット、物資運搬ポーターの確保から荷物管理と賃金支払い、ポーターストライキへの対応、キャラバン中にポーターへの疾病手当、シェルパの雇用と登山技術指導、リエゾンオフィサーやネパール政府への報告書作成…………等々。

最も重要だったのは、登山隊員以外の親兄弟、友人、同僚、報道機関等々への、出発前の計画説明会です。この説明会に参加された方々からは、遭難事故報告やその後の処置に関する苦情は出ませんでした。事前の計画説明会に参加されず、登山内容を知らない方々において、恨み言葉や疑念の態度が示されました。このように不安や疑念は、知らない、知らなかったことに対して助長されます。学習、理解、知識、心構え、等々事前の準備がどれほど大切であり、危急に対して感情を抑えて理性的でいられるか、経験によつても理解できることでした。

このように、登山を前後する雑事は全体のおよそ 1/2 以上に相当するような**総合登山**では、出たとこ勝負な**無意識**では対処しきれません。**総合人間力**を問われることのような登山にあつては、**事前の意識づけが重要**となります。単に登るための知識、

技術、体力、精神力だけでなく、登攀行為を支えるあらゆるものにたいするリアルな対処を確実に、信頼されるためには、意識づけられた確信に基づく総合人間力が不可欠となります。無意識に不意な自然事象と出会い、遭難死亡事故に至っても、一瞬の狼狽の後に極めて沈着冷静に判断できた体験は、事前の様々な意識づけを積み重ねた準備と、意識的学習の成果でもありました。そのことは客観的論証ができないにしても、主観(見られる自己)を言語に換えて自己を客観化(見る自己)する論述によって公示することで、少しは社会のお役に立てるのではないかと考えます。

それら意識と無意識を取り込んだ、実相と虚相の「今」をベクトル表現してみたのが、「人の意識・文明・文化＝環境の複素な世界構造」(P.81)です。「今」を時間軸の瞬時とすれば、今が、四次元世界となるまでは理解できるのですが、それ以上の多次元な世界になると、もう私には理解することができません。そんな中で、「文化＝意識の欲望」は、地球環境、宇宙環境を見定めた「限界への歯止め(抑制)」が不可欠です。現代の人類知性はそのことに気づき始めたのですが、世界の指導者たちはまだ抑制回路を作動させるに至っておらず、あくまでも開発、発展、拡大路線が止まりません。

地球のエントロピーを増大させる消費戦争文明から抜け出す知性文化が、今、もつとも必要ではないでしょうか！

## 6. 登山の経済学的理解

登山と経済の関連を論じるためには、冒頭にまず「**経済とは何か**」を総合人間学的視野から考えてみる必要があります。

経済原理とは = ある生活領域において、所有する何物かを交換し合うことによってお互いの不足分を補い合い、それぞれの生活環境に適応していく継続的な活動、を要します。この継続的行為が**経済活動**であり、それ自体は手段でしかありません。**経済活動**(交換)の目的は、生活領域の中で人々が**幸せに生きられること**にあり、そして、「**経済とは＝所有する何物かを相補的に交換し合うこと**」といえます。

生物が種を持続するためには「代謝」が不可欠です。人類の代謝は、**生殖と死**を繰り返しながら**世代交代**を図る、**生命の継続**にあります。**親**は子**を**、**出生**の再生とともに衣食住を確保して養育し、**死**をもって一世代の周期(サイクル)を終えます。子は養育された後に次は親となり、親の世代を交代します。この世代交代の周期的継続が**人類の代謝**となります。

現役世代の生活の場にあつては、衣食住のために**生産と消費**がおこなわれます。生産手段と消費手段における所有と交換形態が、経済体制を決めていきます。生産と消費が集団化し、組織化される過程で富の余剰が生み出され、**税**として徴収されます。徴収した**税**(富)を再分配する方法の違いにより、経済体制のさらなる枠組みが分化されていきます。つまり経済体制の種別は、**生産と消費**、**労働と分配**の方法的違いに要約され、分配の手段として**市場と貨幣**を必要としてきました。

**共産主義体制**だったソビエト連邦は破綻し、緩やかな共産主義から**社会主義体制**をめざした中国は資本主義的経済導入で方向転換をします。限りなき自由をスローガンとした**新自由資本主義**は世界をグローバル化に巻き込み、分配の格差を極大化させました。正統な権力と武力で対抗できない弱者の集団は、最終抵抗手段とした**自爆テロ**を派生させ、自己主張を繰り返しています。学問の世界では資本主義経済の限界を論じ、**ポスト資本主義**思想とその体制を模索しています。

このような世相にある今、経済学の特定な学説にとらわれず、まず経済の根本原理に立ち返って考察し直すことが、総合人間学的アプローチと考えるのです。**経済の根本原理**は先の通り、人々の**生活を安定**させことに寄与する**交換手段**であり、富の**徴収と分配**は公正、公平、環境適応へとおこなうべきです。経済活動範囲を同じくする共同体、つまり**市場**の中で、人々が**幸福**な日々を過ごせることが**経済活動目的**のはずです。まずそのことを確認した上で、次なる論考を進めましょう。

人は、ある限られた時間内であるならば、孤立、自活は可能です。たとえば、衣食住を背負って登る**登山期間**にあつて、その間だけ自らの力で生存は完結されます。そこには物資や情報を交換する他者の介在が不要で、自己完結な閉じた世界での営みがあります。衣食住は消費するばかりで、種蒔から収穫に至り、さらに種蒔

を繰り返す再生産や、代謝過程がないので持続がありません。このような自己完結型営みにあつては対人的交換要件の必要がなく、経済活動や経済概念は不要となります。しかし現代のツーリズム登山(観光登山)にあつては、山中の衣食住を提供する山岳ホテル、ロッジ、山小屋が整備されています。登山のリスク・マネジメントまでもが、登山ガイドによっておこなわれています。登山の安全確保サービスばかりでなく、山岳施設利用確保から交通手配も代行され、観光バスを仕立てて山岳へ直行する時代にあり、それらサービスを交換価値とした市場の商品化が図られています。

登山の全てを**自主、自立、自己責任で完結する登山**は古典的となり、**登山の経済化現象**は益々進行し、**大衆化**しています。その結果に失われていくものは、**自主、自立、自己責任**という登山過程における内面的諸問題の葛藤による、**人間的成長の機会**です。一番顕著な問題は、「**死の意識欠如**」という点であり、逆説的にいえば、「**生きるとは・・・、なぜ生きるのか・・・**」という**人間的(実存的)意識**が不要となっていることです。そんなこと考えなくても毎日を楽しく暮らせばいいんだ・・・とする人々にとっては、「**生きるとは・・・、なぜ生きるのか・・・**」といった哲学的命題は不要となります。つまり登山の経済化は、登山の哲学的命題の不必要性をあぶり出し、大衆化を促す登山の量的拡大現象とともに、質的低下現象を招きます。さらに「**登山の哲学的命題**」に代わって台頭してくるのが、「**山岳スポーツ化の波**」であり、すでにクライミングは2020年東京オリンピック種目候補となっています。

登山における内面の葛藤が、心技体の**総合人間力を鍛える**ことに変わりはなく、**経済商品化とスポーツ化**によってその機会が失われていくことを残念に思うは、老いた古き登山者ばかりなのでしょうか。人工知能でロボット化されゆく現代の文明にあつて、古き登山者意識は「**ただ消え去るのみ・・・**」なのでしょうか。

人は孤独な生活を持続できない動物としての**弱者**であり、その弱点を補うために**知能**を発達させて様々な危機を回避します。また、**共同体生活**を確保することにより個々の**弱点を補い合い**、共同の労役によって自然環境を人工都市に作り替え、進化、適応、持続を果たしてきました。そのことがあたかも、人間は自然の中の**強者**であるかのごとき**錯覚**を招き、自然環境を人為的に支配しているかのように思い込

んでいます。しかし人工的共同体環境から抜け出して山岳に分け入ってみると、自然の美しさ、自然の雄大さ、自然の荘厳さ、自然の脅威、自然の刹那さ、等々、**体験の非日常性**を感受するのは今の人々も変わりがない様子に見受けれます。

共同体を構成する基本単位の組合せは、個と家庭、家庭と地域社会、地域社会と町村都市、町村都市と国家、国家と世界という生活行政組織となります。他方資本主義経済体制にあつては、個人と企業、企業と業界、業界と権力(消費者を代表)となります。それぞれ数としての構成は、個を起点とすれば逆ピラミッド型の不安定さとなり、共同体を起点とすればピラミッド型の安定さを成します。

そもそも経済は、共存領域の中で人対人の生活集合関係において成り立ち、**それぞれの所有を認め合う**中で、**物資(モノ)や労働(シゴト)、情報(コト)を交換**することによってお互いの不足分を補い合う、**相補的關係による等価な価値交換**から始まります。しかしやがて捕獲、収穫、生産と消費の中から**余剰**が生まれると、必ずしも相補的等価交換ではない、**相対的不等価々値の交換**をおこなうようになり、交換の**損益**が生じてきます。利益となった「**利潤**」の蓄積は、より多く他の生産活動やサービスとの交換価値をもたらせる、「**資本**」という概念が生み出されます。

**資本**の始めは共同体内における相補的協力の下で、より豊かな定常と安定のために用いられ、人々の幸福を実感できるものとして、生きた経済であったはずですが。しかし**資本の所有と徴収・分配**の仕方により、**資本主義、共産主義、社会主義**という、生活の場における**経済体制**の選択がおこなわれ、共同体は**国家**として成立していきます。人間という存在が本質的に抱える自己矛盾にありながら、特定の経済体制の中で「**私有(私)と共有(公)**」を区別するに際し、**自由、平等、公正**に対する考え方が異なっていきます。それぞれの体制における考えの違いは、別な体制の立場から見ると偏りが露見し、それぞれの社会体制が持つ矛盾を指摘し合います。批判を強くした勢力はやがて自らの立場を主張し、改革や変革、究極は革命に至り、社会体制を変遷させていきます。

**不等価値交換**により利潤を生み出す心の部分は、やがて「**欲望**」をかきたて富の増殖をめざして「**投資**」をおこないます。投資により、不等価値交換の利潤(差益、差損)はさらに助長し、富の蓄積が増殖します。「**より……**」という**相対的価**

**値概念**は定常状態に満足できず、満たすことない「**欲望**」の心は進化と同じ、一方向性を目指して限りなくステップ・アップしていきます。

一方、**相補的な等価値**の交換を目指す心は「**欲求**」といえ、その欲求が満たされる定常状態に至ると、欲求はおさまります。欲求には差益や差損という相対性がないので、差益を富とし蓄積する概念も生じてきません。

この「**欲求と欲望**」の違いは何かといえ、**「欲求」**は生物の生存にとって無意識領域にあっても必要不可欠な**一次欲求**であり、複素的な世界構造における「**文明の位相**」にあります。他方「**欲望**」はその必然性をより意識的かつ相対的にレベルアップさせる「**より……、もっと……**」という、高次な欲求へステップ・アップしたい心の部分といえ、そのことは「**欲求**」のレベルをより**高次元化**した「**欲望**」と呼んだほうがわかりやすくなります。複素的な世界構造においては、「**文化の位相**」となります。この「**欲求と欲望の位相の違い**」は、**文明と文化**を論じる重要な基点となります。

これら資本主義経済体制社会においては、個人や組織のそれぞれの**所有権**が認められますが、資本が生み出される原理は利潤の創出にあるわけですから、所有者の間では自ずから**格差**を生じてきます。その矛盾を改善しようとする体制が**社会主義**や**共産主義**となりますが、ここではその先へと踏み込まないことにします。なぜならば、純粋な登山行為は消費行動ですから生産を伴わず、生産余剰たる富の発生がないからです。しかし現代登山の経済化現象から見直せば、純粋な登山行為へサービスを提供する業態が成り立ち、登山サービス産業となって**経済的な富**を生み出します。それと引き換えに登山者はサービスを受けた分、登山過程における総合人間力の成長機会を売り渡すこととなるのです。

**等価交換のゼロサム関係** ( $\Sigma$ 交換=0)からは差益を生まず、**不等価交換**の差益や差損の中から富の増減が生み出されます。富の増加はさらなる**欲望の心**を煽って経済をより活性化させ、人類の**活動エネルギー源**となっていくます。

初期の等価交換は物々交換であったものが、余剰な富の蓄積、交換、再分配を簡便化するために「**貨幣**(money マネー)」が生み出され、貨幣を介在した間接交換方式となります。最初は貝殻を始め貴金属等による**物神貨幣**(モノ)であったもの

から、信用を基軸とする**象徴貨幣**(シンボル)へと変わり、今や電子マネーはデジタル・シンボリックな数値情報へと変遷しています。

これら交換経済の間接取引(価値交換)は、**生産と消費**、それを取り持つサービスからも離れ、デリバティブ取引(局所最大化=微分方程式)に見られるような数学マジックとなって実態を反映しない**仮想数値交換**となりました。

人類は集団化した社会生活を営むことにより、個別生活の余剰な富を生み出します。その富は蓄積され、共同体社会の資本となります。その資本は相補的再分配により、社会全体の均等化を図って穏やかな生活を安定化させました。**社会主義**共同体(国家)です。また私有を排除する、**共産主義**共同体(国家)ともなります。

他方、その富を相対的強者に集積されることにより、共同体内の差別化が助長されます。差別化は支配～被支配の構造的ヒエラルキーを生み出すとともに、強者の富と権力によって共同体をより強固に束ねあげることができ、都市や国家という生活地域概念を生み出します。余剰な富は資本となることから、資本主義国家といわれます。資本(富)の蓄積が強権力による強制徴収であるなら**専制国家**と称され、人々の自主納税とともに自主政府による再分配がおこなわれる生活領域は、**民主主義国家**と称されます。

富の余剰と納税、そして再分配が物資そのものでなく信用通貨(貨幣)に移行すると、富の価値交換は実物を離れた通貨数値に換算され、**実相(実物)**を離れた**虚相(価格数値)**となって浸透を拡げます。これら交換価値にともなう実相と虚相を取り扱う概念が、「**経済学**」とされます。**貨幣**は信用に基づく虚相な**メディア**(情報媒体)であり、貨幣の信用はそれを持つ人の人格にかかわらず**公平な交換価値**を保ちます。現代社会は余剰な富を通貨メディアに代替し、虚相資本として富の余剰交換と差益増殖に用います。そして余剰交換における実相の**相補性**よりも、資本のもたらせる差益と差損の相対的増殖効果に、虚相の欲望をふくらませます。虚相なメディア増幅効果による不労な富が、実相な労働資本を圧倒し、労働の不等化交換が余儀なくしています。資本の複素性を理解することなく富を蓄積する、現代資本主義のグローバリズム弊害が、今や人類の地球問題となって顕著に現れています。

資本主義の要諦、「**拡大、成長、成熟と定常化**」という3つのサイクルは、成熟と

定常化以後の展開をどうすれば良いのか不透明な現在です。サイクルと表現するからには、ふたたび拡大へと戻るべき周期性を表します。無限に開かれた系の中にあるならば、この周期性の展開は理論的可能性があります。しかし地球という閉じられた系の中で定常化(臨界)の先も拡大し続ければ、地球環境は破壊へと導かれます。今、「**ポスト資本主義**」の論理展開が様々成されていますが、価値の交換がもたらせる実相と虚相を理解し、交換にともなう人々の「**欲望**(欲求ではありません)」をどのように制限させるのか、「**文化(心)の問題**」ではないかと私は考えるのです。

現代文化は価値の**多様な存在**を見つけだしましたが、その**価値の構造的安定性**を見出していません。多様な価値が独り歩きする「**混沌**」状態にあり、「**何でもあり**」の社会状況です。量子力学によると、素粒子の自由な振舞いは、時間の経過による位置の特定ができず、確率的にその位置を予測できるだけとするように、必ずしも原因と結果が直結した因果律にあるだけでなく、偶然なイレギュラーが確率的に生じてくることを説明してくれます。心地よい旋律のハーモニー(安定)だけでなく、突如なノイズ(不安定、アクシデント)をも組み込んだ現実を説明します。

それらノイズは小さくても、閉じられた系における臨界をメルトダウンに導くトリガーを引く役割もあります。これまでのアナログ(連続性)文化は、現代の電子機器によってデジタル(非連続性)文化へと移行しつつあり、そのことを実社会の中に最も適用させてきたのが、虚相経済たる**グローバリズム**での差益創出ではなかったでしょうか。**成熟後の定常期**においては、「**心のビッグバン、意識のビッグバン、文化のビッグバン**」といわれ、同一性、同類性、同質性が一気に世界を駆け巡るというのです。そのことは、**技術の進化が平行**するからではないかと考えるのです。

現代に当てはめると、**アナログ技術**から**デジタル技術**への移行です。情報をデジタル符号に変換(encode エンコード)し、変換データを圧縮して送り、受け手側は元の情報へと復元(decode デコード)します。その変換に共通する**規則**(algorithm アルゴリズム)と**技術**(program プログラム)は、**人の感性に左右されない一律性**の中で作動することから、**マネー**(信用通貨)と等しい**公平な流通性**を帯びます。さらにデジタル信号を伝搬させる電磁波や光は1秒間に地球を7回半廻るスピードで駆け巡り、一方向か

ら 360° 無指向性、さらにソーシャル・ネットワーク(SNS)を介し、同一性、同類性、同質性が瞬時に**拡散伝搬**されます。**経済のビックバン**、つまり**グローバル経済**がまず先行して実相を表し、その現実を受け止めた次に、**心、意識、文化のビックバン**を誘因すると解釈できるのです。しかし、さらにその先の展望までを、人類の知性は示していません。地球という閉じた系の中における「**限界(臨界)の諸問題**」をどのように乗り越えるか……、「**ポスト資本主義の地球問題**」であり、多面的なアプローチが成されています。

**経済**は一見、**登山**となんの関係もなさそうに思われますが、登山の神髄を表す「**アルピニズム**」という思想は、まさに**資本の論理と同じ位相**にあることを示したかったのです。資本の軸となる「**拡大・成長**」を求める志向は、「正⇒反の登山」においても同様で、登山ではそれを「**アルピニズム**」と言い換えていました。科学同様に登山の専門分化が展開され、各種のスペシャリストが誕生します。初期のアルピニズムにおいてはそれらスペシャリストに資本を投与し、成果の名誉や記録を得ます。名誉や記録は交換価値をもった商品でないがために、資本の役割は対価としての利益を得ることではなく、社会的榮譽へ協力貢献するという、無形で知的な資本の社会役割と理解することができます。

初期のアルピニズと同類な指向性は資本だけにとどまらず、道具や技術、科学や競技スポーツ等々、常に進歩発展を目指す一方向性の生命現象、つまり**文明の指向性**と理解することができます。その指向は複素的 3 次元ベクトル位相の一つとして位置付けて構成し、**文明の位相**(x軸) / **文化の位相**(y軸) / **意識の位相**(z軸)として、複素的世界認識方法(世界観)の中で理解することができます。そして今問題なのは、**文明ベクトルの一方向性**、つまり「**限界(臨界)問題**」であります。地球人口と地球環境問題、無限を前提とするグローバル資本主義問題、自然生命と人工生命問題、人間知能と人工知能問題、人類の制御能力を超えるシステム技術化問題(特に原子力)、等々、閉ざされた系における「**限界(臨界)の諸問題**」であります。

ここで特に主張したい人類の主たる問題は、「**人間の欲望の自由と制限＝総合人間力の限界問題**」であります。**欲求**の位相は**文明**、**欲望**の位相は**文化**と分けましたが、この**文化の位相の様々な事象**は、自由、平等な中で**混沌**としています。そ

のような現代状況において、個々の「自由と制限」をどのように制御できるかという問題となります。グローバル社会となった現代において、自由のみを主張するそれぞれが、地上で棲み分けることは不可能となっているからです。お互いが複雑に絡み合う複雑系社会をもたらせた要因は、貨幣(マネー)であり、情報網(ウェブ)であり、それら手段を生み出した現代文明の技術進化(通信、交通、物流)にあるからです。

結論を述べれば、人類が地球上で生活する限りにおいては、「もはや何らか自由の制限を受けざるを得ない」ということとなります。

山岳環境においては登山と山岳スポーツとの共存問題、山岳文化においては死の許容(登山)と死の排除(山岳スポーツ)の問題があります。まず山岳スポーツにおいては、その競技条件の大前提としての「安全確保」があります。山岳で「死」に至る条件にある場合は競技を中止し、死に至らぬよう競技規則(ルール)を皆が順守する「自由の制限」を課します。さらに競技限界を自覚して途中でリタイアしても、安全確保のための補助体制を用意します。それに比べ登山の醍醐味は、山岳の「死」に隣接する環境の中から「いかに目的を果たして生還するか」という、生と死の境界と周縁での活動となり、生と死が隣接するほどにその醍醐味を増すという弁証法的論理を含んでいます。また登山者が自らの限界を自覚しても、もはや引き返すことができない状況も生じます。山岳スポーツのような、途中リタイア可能な安全担保がありません。このように「死への対処」について、登山と山岳スポーツの決定的な違いがあります。そしてまた、登山の中に含まれる「スポーツ的要素」の楽しみを発展させたのが、登山のリスク・マネジメントを経済産業構造に組み込んだツアー、ガイド登山様式であり、第二次登山ブームといわれる日常性の延長です。

山岳を非日常環境として保全するか、日常生活の延長として開発を進めるか、あるいは両者がどのように共存できるか、「山岳環境における総合人間力の育成活用(登山の死生観とクライシスマネジメント)と生活利用(趣味とリスクマネジメントの経済化)」の問題を、山岳文化の主要なテーマとして考えるものです。その根底には経済活動がもたらせる富の余剰(余暇)による、日常生活を幸せに生きるための生き甲斐探求や趣味の享受があり、文化全般へと波及するものであります。

6章に展開した登山進化の弁証法的理解の中で、「正⇒反⇒合と新」への変化を述べました。「正⇒反」までの時代における「登山」は初登頂、初登攀、新ルート開拓等々、衣・食・住を自ら背負って山を登る消費行為であり、そこから再生産されるものは物質(実相資本)でなく、**名誉や記録という無形な付加価値**(虚相資本)となります。その無形な付加価値(虚相資本)は今や**ブランド**となり、現代のサービス産業における登山ガイド業務のように、支援労務を提供することへの**信用担保**(認定資格)となっています。本来は登山者自身で果たすべき目的達成と安全確保を、ガイド業務によって代替サービスの提供を受け、その対価を支払って交換する経済行為は、登山商品と化しています。登山ガイド業務ばかりでなく、ツーリズム登山においては、企画、予約、実施から保険に至る、すべての工程とリスク・マネジメントをパッケージした商品化をし、観光旅行同様な販売により市場提供しています。

そのことは経済合理性にかない、登山を安全に大衆へ普及・享受できるという、大きな経済メリットを生み出しています。しかし他方で経済合理性の追及は登山者の質の低下を招き、登山の本質的特徴である「自然(山)を通じて自分と向き合う」弁証法的内面対話の機会を奪っています。さらにまた、山岳自然を非日常環境として受け止める感性を鈍らせ、山岳自然の中にあっても**日常生活の延長**とした欲求を満たす欲望を持ち込ませ、山岳自然の非日常環境を日常的な人工環境化する開発行為を招いています。

**ブランドに群がる大衆化心理**を肯定するならば、一部の山岳へ登山者が集中する結果を受け入れ、自然を開発して人工施設化するのも止む負えない時節に至った、と思えます。例えば富士山 5 合目やエベレスト・ベースキャンプなどでは、衣食住の供給と、インフラ整備を図った固定施設化を考える時節なのでしょう。もはや山岳は孤高なアルピニストだけのものではなく、**だれでもが余暇を過ごせる、美しき憩いの場所**なのですから。大衆化にともなう産業規模の拡大は**経済利潤**を生みだし、多くの人々へ**労役提供の場**(仕事)を作り、日常生活の豊かさを増す**経済原理の目的が叶う現実**を現しています。

しかし他方では、人類の人類たる特徴とする**知性の欠如**を招きます。そのことへの批判はリーダー犬に統率され、ひたすら草を食みながら追従する羊の群れに例

えられます。よく言えば従順で整然とまとまった集団、悪く言えば個々に意思を示さない烏合<sup>うごう</sup>の衆の例えです。大衆化の裏面は、羊の群れ現象を招いているのです。

「大衆化」という指標は標準偏差値の平均値周辺に規格化される、最も当たり前で標準的な多数派集合です。一方「多様化」は平均値に関わらずばらついた分散領域が広がることを示し、各々が価値の自己主張をや存在感を示すものですから、大衆化や標準化と異なる方向性があります。

経済合理性において、大衆化はハードルを低くし、同一規格で量的拡大を求めます。一方多様化はハードルを高くし、それぞれ質的差異化を求めます。この量的拡大を好む人々と、質的差異化を高めようとする人々が、それぞれ棲み分け分布ができるならば社会は安定しますが、今や資本のグローバル化は地球規模での棲み分けが困難な状況背景を作り出しています。交換差益(利潤)を除けば、人や物資や情報交換での結果は、経済原理の相補的關係となっています。その経過を複雑にしているのは社会体制の問題であり、富の搾取か分配(福祉)か、条件の平等性か機会の公平性か、人間的欲望の集約が示されます。人種問題、民族問題、宗教問題、格差社会問題・・・山岳利用もまたしかり。

それらの状況は遠心分離機にかけ、掻き回してあぶり出された分子的存在のように、大衆化と差異化への偏在が顕著に見えるようになってきました。原動力はグローバル化による極度な自由化であり、また、遠心分離機の遠心力がごときソーシャルネットワークにおけるデジタル情報の拡散です。情報の垂れ流しは、情報エントロピーを低減させます。情報の真偽は、真に大切な人、もの、こと、が何であるのか、人間的本質追及の意識を攪乱させる結果を招いています。

経済の分野では「ポスト資本主義」が論議・提言されています。しかし登山の世界では、「ポスト・アルピニズム」が論じられることなく、「山岳スポーツ」が展開されています。オールド・アルピニストの世界を抜け出す論考は、目の当たりにしません。登山を全人格的行為と認めるならば、アルピニズムから山岳スポーツへと飛躍する前に、「文明的アルピニズムの終焉と未来思考」を論じなくてはならないと思うのです。

## 7. 登山と戦争の相違から

太平洋戦争(第二次世界大戦)が終わり、戦後 70 年が過ぎました。この年月は、私の人生と同じ長さです。終戦の翌年 3 月に生まれた私の人生は、戦後日本の歩みと重なります。そしてこの間日本国民は、権力の強制による死と向き合わされることがなくなりました。**憲法は戦争を放棄し、国民の徴兵制がなくなったから**です。

平和となった時代の中で、幼い頃の私はよく追い詰められて死にそうな夢を見、いつも死の寸前で目が覚めました。大きな岩に押しつぶされそうになったり、天井が降りてきてこれまた押しつぶされそうになったり、誰かに追い詰められて断崖の縁に立っている夢です。青春の時も死の恐怖は拭い去れませんでした。ちょうどその頃から山登りを始めました。**遭難死を恐れながらも、なぜ私が登山に熱中できたのか……、これこそが『登山の総合人間学』の核心**です。そして答えは、「**何ごとも、直面する困難から逃げようと思えば恐怖心が湧きあがり、ちょっと我慢して向き合ってみれば、冷静に、理性的に振舞い、対処できる**」、ということを知ります。簡単に言えば「**何ごとも逃げるな!**」、ということで、**逃げようと思う心が恐怖心をかきたてる**、ことに気づきます。

困難な岩壁登攀にあっても、いざ登り始めると恐怖心はさほど感じる事がなく、冷静でいられます。登り始める前までの、様々な想像が恐怖心をかきたて、引き返す理由を探します。逃げようとするから……、怖かったのです。冬の岩壁登攀は顕著でした。しかし繰り返すうちにやがて**自信**となり、一時の怖さを**我慢**できるようになります。そのような登山を 10 年も繰り返すうちに、ヒマラヤ岩壁登攀に立ち向えるまでになります。そして 32 歳のヒマラヤ岩壁登攀で、**現実の死と向き合いました**。3 隊員は死亡し、私一人だけが無傷で生き残りました。戦争に代わる「**死の体験**」です。

現役世代が生活するためには、まず**食料の確保が第一**となります。動物の間では食物連鎖の循環系がありますが、人類だけは食物連鎖を免れた動物の頂点に立っています。食物連鎖を免れるために、人類は「**武器**」を作り出しましたが、その使用対象は他の動物種を**捕獲～食料**とするだけにとどまらず、人類相互にも用

いてしまい「戦争」という概念を創り、民族間の争い、宗教間の争い、権力者間の争いを引き起こします。人類の強力な武器使用は動物種の頂点に立ち、人類を食物連鎖から断ち切る手段でありましたが、頂点に立った人類は食用動物を保護・飼育するようになり、食料確保に「武器」使う必要性が低下しました。しかし人類が考案した**武器文明**は独自に進化を重ね、食料確保のためでなく、リスク・マネジメントの道具となり、**武器**を用いる**職業**を生み出し、人類相互に**政治利用**されます。

**戦争の表面**は**経済原理**が果たすべく**相補的交換**でなく、**相対的勝者**による一方への**捕獲、搾取、帰属**となります。経済の目的であった人々が幸せに生きられること、そのための相補的交換とは別に、戦争は勝者の側へと一方向的に帰属させる権力行使となります。生存のための必要条件をはるかに越えた、「より……」という限りなく十分条件を満たそうとする**意識の欲望**が、**政治権力**をもたらせたといえます。戦争の勝者は、文化的勝利者ともなり、敗者の文化は消し去られるか、異分子(マイノリティ)となって密かに潜伏・浸透を企てるか……、あるいは権力者側の**混合融和政策**によって浸透復活できるか……、困難な状況に陥ります。

それら戦う手段の優劣は、文明の**技術力の差異**から生じますが、それを適切に活用する**戦略と戦術**は、相対する人間意識の欲望の制御をとまなう**総合人間力の争い**となります。つまり、**文明**は戦いの手段であり、勝利を導くのは戦いの**知性と文化**であるという理解です。しかし「**戦争が決して平和の手段とはならない**」(山極寿一、〈戦争の起源〉、『戦争を総合人間学から考える』、総合人間学会、学文社、2010、P-5)というように、戦争は破壊的大量消費であり、武器の在庫処分であり、技術文明の実験場であり、勝者となった権力による敗者の搾取であり、**経済原理＝相補的交換**のもたらせる幸福な生活の確保＝対極な破壊消費行為であります。また、勝者の文化が敗者の文化を吸収して成長することは難しく、これまでの歴史においては敗者の文化が消滅し、消滅は憎悪となって敗者の心に沈殿してしまうことが多くありました。つまり**戦争は、文明を進化させても、文化の成長と人々の幸福に役立つ手段でない**、ことを示します。「**戦争と平和**」は並び立たず、「**欲望と平和を望む心の調整**」こそが、**ポスト戦争論**の主役であると考えられます。

一方で戦争は、自らの死と直面するとともに、自己と共同体（国や家族）との関係を考える契機となります。そして日本社会における戦後 70 年という時間の経過は、戦争による死との直面をしなくて済んだ平和な期間といえます。その結果、死との直面は現実(リアル)から遠のき、仮想な現象化(バーチャル)となってゲームに等しい虚相が増してきました。国民は死の現実を直視する必要が少なくなり、今まさに平和の中にどっぷりつかっています。これが良いことであるのは間違いありません。世界の国々も日本のように、平和な生活が願いでしょう。そして日本の平和がこれからどのように、いつまで続くのか、世界の眼差しが注がれます。しかし生体的死の現実には排除できません。平和の中で死をいかに受け止めるか、古くて新しい課題です。

比較文学の道を拓いた A・トインビー(1889~1975)は、西欧文明の挫折と前途を案じ(文明の挫折論)、諸文明の比較・検証をおこないますが、挫折の主因を「戦争」という制度においたとされます(吉澤五郎、<戦争と文明>、『戦争を総合人間学から考える』、総合人間学会、学文社、2010、P-23)。S・P・ハンチントン(1927~2008)は、『文明の衝突』(集英社、1998)から戦争を論じています。

それらは「文明」という括りをしていますが、「文化」の括りとすべきでないかと私は考えるのです。つまり文明の進化はそれ自身が目的を持たず、限りなく進化する一方向性を帯びた事象の性質と理解すべきでないかと考えるのです。例えば競技スポーツは、進化の段階(レベル)を競い合いこそすれ、競技者どうしが敵対して破壊、収奪、帰属させる行為ではありません。それらは競技規則(ルール)に則って行為に制限があることを、競技者すべてが受け入れています。

文明の括りの中で武器を進化させ、武器を行使することが戦争となりますが、その面からは武器という文明の衝突となりますが、武器を行使する判断は文化の要因が引き起こします。つまり戦争は人の意識に係る判断(文化)が引き起こすものであり、武器(文明)そのものが自ら引き起こすわけではありません。この人の意識の判断には様々な欲望が絡み合い、過去、現在、未来を見渡す知性と知恵が動員されます。しかしこれまでの人類史において、戦争を法に基づき排除したのは、1946年11月3日、日本国憲法を制定した日本だけあります。つまり「法」は、権力者の無際限でも許される権力行使に歯止めをかけ、その権力を縛る決め事が発祥とされるよ

うに、決め事(法)を決める知性をもって無際限な権力の暴走を制御しようとする「人類の知恵」なのです。この人類の知恵は文化の所産であり、文化をもって文明を制御する人類の知恵、を示します。

戦争の背面は、戦場におもむく兵士(人間)の内面において、自らの死に直面するとともに、自己と共同体(国や家族)との関係を考える契機、さらに自己と同じような他者を殺すという内面的圧力、という心の問題があります。しかし現代日本においてはこのリアルな精神的圧力を受けず、平和裡に生活する理想社会にあります。70年続くこの理想社会の中で、死のバーチャル化とゲーム化が進み、死のリアルさは薄れ、死の恐怖に向き合う心が育たぬ環境にあります。また生活共同体となる家族、地域、国家、世界と自己との関係を、人間として問い直す機会もない状況に流されています。対称的な逆説を述べれば、生きることのリアルな感性、生きることの意味と目的、生きるとは＝ゲームなのか、等々、生きていることの実感を得ることが難しい環境にあります。さらに核家族化、地域社会の崩壊、福祉国家の劣化、民族・宗教主張が過激・孤立化する世界情勢等々、緩やかな相補性は失われつつあります。

一見、登山と戦争は何のかわりもなさそうです。登山の死は自らの意思で踏み込んだ山岳環境の中にあり、他者性が薄くなります。「自然と私」の相関において、私自身が危急な自然現象を制御できないことから、遭難死は自身の問題であり、退避、回避、対応能力の未熟さに求められます。一方戦場の中にあり、「敵と味方」の相関から、戦場の死は敵味方の相対的欠陥により引き起こされます。戦略、戦術、武器、不運、それらは敵の弱点を攻撃して徐々に敵の勢力をそぎ落とし、味方の領域を増やす戦闘行為であり、ある面でゲーム理論にもかなう相対的行動といえます。つまり、登山の死は自身の未熟さから生じますが、戦争の死は敵と味方の相対的關係(戦力差異)によって生じます。さらに登山も戦争も、人知で計り知れないアクシデントの遭遇を、免れることはできません。

登山の死はすべからく自己の問題へと帰結しますので、自主、自立、自己責任の内面性が大きく関わってきます。死の環境を除き得ない登山行為の中であって登山者は、戦争でない平和裡なうちに己から見つめる死生観を育むことができます。

古くは山岳修験道があり、そして近代アルピニズムは宗教でない、科学的知性によって死生観を育む機会とすることができるのです。つまり登山哲学です。

他方、戦争の死は自己の内面性の問題ではなく、生活共同体の存続や安全確保のためという社会的マネジメント、自己と他者的要因の関連意味づけを要します。戦争哲学という言葉はありますが、その内容は不毛です。なぜなら、戦争は対人殺戮の暴力行為であり、故意なる環境破壊であり、生産備蓄された武器の大量消費であり、経済的な在庫処分でもあるからです。戦争は敵対体制の変革、つまり勝利者体制の領域拡大に役立ちますが、その結果として人々の幸福をもたらせるか、戦争哲学の主要な課題ですが未だ人類は明快な答えを持たず、権力行使、武力行使に熱中しています。戦争哲学の裏面には平和哲学と書かれているはずですが、平和の中で人類がどのように変遷するか……、戦後 70 年を過ぎた日本社会はその実証現場でなかったか、とするのが私の仮説です。そして平和哲学の一端に、登山哲学が組み込めるのではないか……、とするのがさらなる私の仮説です。

つまり、野蛮な戦争に代わって、死への思いと体験を平和裡に実践できる「登山」における自省こそが、実存の最大な課題、「己の死との対話」を可能とされます。このことが「登山哲学」であり、私の遭難死亡事故体験からの答えです。

欲望は人間行動の原動力、エネルギーですが、その欲望を刺激し、商品化により拡大し、欲望の享受を大衆化する資本主義経済は今、地球環境限界の中で成長指向は止まらなければなりません。欲望をどのように制御したら良いのか、喫緊な人類の主題です。電気技術者が自動制御のフローから考えれば、欲望のゲート回路へ、ネガティブ・フィードバック(負の帰還)をかければ定常状態で安定します。つまり、「欲望の自省」であり、経済の無自省な拡大発展ではなく、本来の経済目的であるべき人々を幸福にする交換価値へ収斂、させることが重要です。幸福、平和を単に享受するだけでは、人類存続のための「質(文化)を低下」させます。その低下を抑えるために活用できる一端が登山体験であり、けっして戦争ではありません。

戦争でなく、唯物論でなく、無神論でなく、宗教でもない、現代知性の成熟にとって、経済に絡めとられないまじめな登山の体験は、総合人間力を要します。そのことをまとめ、整理してみると、「登山の総合人間学」となるのです。

## 〈 資 料 編 〉

- その 1. ヒマラヤ遭難登山隊長の自省 . . . . . 159**  
山岳遭難とリーダー意識を考える要因 / 遭難時におけるリーダーの意識 /  
その後のリーダー意識の変遷
- その 2. 失敗に学ぶ . . . . . 183**  
失敗の種類 / 判断と責任の限界 / 登山の安全性と危険性 / 登山の失敗に学ぶ
- その 3. 3.11 とクライシス・マネジメント . . . . . 193**  
リスクとクライシスを区別 / クライシス・マネジメント /  
リスク・マネジメント / 環境エネルギー問題の考察
- その 4. 社団法人 日本山岳協会への批判 . . . . . 220**  
批判の構造 / 現状批判
- その 5. 登山の社会的背景～登山学確立へのアプローチ . . . . . 250**  
登山の史的背景 / 登山の展開
- その 6. 「山岳展望」17号から「山岳文化」へ . . . . . 259**
- おわりに . . . . . 266**

## その1. ヒマラヤ遭難登山隊長の自省

2012年10月:記稿

2015年9月:推敲

日本山岳文化学会・野村仁氏の「山岳遭難史にみるリーダー意識の変遷(Ⅲ)」において、「1970年代、社会人山岳会または同人グループの遭難報告より」は、1978年ヒマラヤ登山と遭難死亡事故のリーダー2例が上げられています。カラコルム山群ハッチングダール・キッシュの山森欣一氏(現:日本山岳文化学会副会長)と、ネパール・ヒマラヤP29南西壁の私・田中文夫(元:日本山岳文化学会評議員)であります。

これに先立つ2006年～2007年、野村氏は「山岳遭難史にみるリーダー意識の変遷(Ⅰ)(Ⅱ)」を日本山岳文化学会論集第4号、第5号に発表されています。2007年11月25日の日本山岳文化学会大会シンポジウムのテーマにもなり、野村氏は進行役を果たされました。そのシンポジウムには私は参加しなかったもので、同日、野村氏への手紙とともに1978年の私の遭難体験報告書を提供しました。

野村氏は2010年11月27日、日本山岳文化学会第8回研究発表大会で「山岳遭難史にみるリーダー意識の変遷(Ⅲ)」を発表されます。その中に「遭難報告書を注意深く読み解くことにより、登山者の主体的な意識の在り方に迫り、登山史上の真実に迫ることができる」、とあります。このことは遭難当事者達にとり、『琴線』に触れる微妙な問題でもあります。特に死亡事故の場合は報告書に現れる「表の相」と、その時現れない、または現わしてはならない「裏の相」があります。だからといって避けることでもありませんが、『琴線』に触れる微妙な問題には、時を経て理解と鎮静が進み、解消してゆけるものもあります。時を経た後再びみなおすことは、より真実の多面に迫ることができます。時は情念を鎮めます。

野村氏の設問に私は『琴線』を引かれ(トリガー:Trigger)、30余年を経た今ふたたび、俎上のリーダー論を振り返ってみました。時の経過は感情を鎮めます。「自省」とすると記憶を中心として展開すると思われるかもしれませんが、私は意識して記録

文章を残しています。例えばシェルパ雇用についても、シェルパー一人ひとりとの雇用契約書や遺言書(will)は、英文タイプライターで書面とし、本人のサインや母印確認の控え原本は今でも保管しています。当時の主要な記録や交渉事、報告書類は、カーボンコピー用紙の原本を保管しています。その資料に基づいて書いたのが『青春のヒマラヤに学ぶ』(ISBN4-8355-1085-2 C-95 文芸社、2001.1.1)であり、**第2編の登山報告**です。

記憶は若干不鮮明となる部分もありますが、文書を読み直すと正確さが呼び戻され、「私(客観)が私(主観)を見つめる意識(自省)」において、30余年の時の経過はより客観的視座からまとめることができるところです。

## **1. 「山岳遭難とリーダー意識」 を考える要因**

### **1) 対象の範囲**

リーダー論を展開する場合、単一山行のパーティリーダーを対象とするか、大規模登山の広義な組織をも含めた総合リーダー論とするか、その対象の範囲、思考方法、整理の仕方等は異なってくるはずです。

例えば前記のヒマラヤ登山におけるリーダー意識の場合、単一山行であっても規模・時間・費用・社会性等々、広義な組織と総合リーダー論を抜きにはまとめられません。一方国内山行における単一遭難リーダー意識の場合は、そのグループのみを特定対象とした、狭い範囲での山行意識、事前準備、行動におけるグループ心理と掌握、気象条件、そしてリーダーの判断心理等々、広義な社会性や組織論は除外できます。

つまり対象を「限定的」に把握するか(国内単一山行等)、「総合的」に把握するか(ヒマラヤ登山等)、その思考対象、範囲、方法論は異なってくるはずで、全てを同一に論ずべきものではないと考えます。

### **2) 「リーダー意識」 の捉え方**

一つの山岳遭難にともなうリーダー(隊長)意識は、次の段階に分けて捉えます。

- ① **【事前】** その登山に臨むリーダーとしての意識 = 登山観、リーダー論、チーム(組織)論、発想、計画、準備、遭難対策
- ② **【途上】** 遭難時のリーダー意識(途上) = 具体的対応、ご遺族・メンバー・社会への対応、情報管理、リーダーの心理と責任感
- ③ **【事後】** その後のリーダー意識の変化(事後) = ご遺族等への対応、メンバーへの対応、個人意識の変化、登山及び登山観の変化また、リーダー意識と山岳遭難との関係性は以下の捉え方があり、リーダーの責任にも及ぶ。

また遭難原因分析において、リーダーの意識に係る検討は、次の場合が考えられます。

- ① リーダーの意識によって山岳遭難を生じた場合
- ② リーダーの意識に関わらず山岳遭難を生じた場合

一つの山岳遭難事例を取り上げても、リーダー意識はこのように段階的、構造的に捉えられます。山岳遭難史上に位置付け、整理するならば、遭難事例ごとに上記内容を検証し、整理する必要があると考えます。

### 3) 社会人山岳会と山岳同人

1970年当時、私は既成山岳会への不満から、より理想的な山岳人集団を求めて「山岳同人風(ふう)」を立ち上げました。1972年の会報には、「山岳同人風、組織の意味と機能」を示し、山岳人と理想な組織の在り方を表明、実践していました。

1970年台は「三人寄れば山岳会」と言われたように、自由な雰囲気を求める「山岳同人組織」が多くつくりだされています。社会人山岳会に多くあった、親分／子分、子弟という主従的關係が、私は嫌いでした。酒を飲まない生真面目さが、そのような性向に馴染めなかったのです。1967年12月～翌年1月、東京都山岳連盟有志により韓国遠征(隊長:遠藤登)を共にした岩崎元郎氏と私は、山に対して意気投合しました。その後コンテニユアスクラブを退会した私と、昭和山岳会を退会した岩崎元郎氏との間で、新たな山の集まりを発足させる動きとなり、そこで発足したの

が「山岳同人風(ふう)」であります。そのメンバーのほとんどが私の友人であったがために、岩崎氏は「なかったことにしてほしい」と手紙に記し、別な集団「蒼山会」を立ち上げました。そして今も続く「無名山塾」へと至るのです。

その時私は既成山岳会の実情に対し、新たな山岳人の在り方を提起しました。この頃も「未組織登山者」という言葉があり、この表現に私は、日本人社会の集団帰属意識を感じます。個はすべからず組織に属していなければならないという風潮は、島国の中で農耕社会を営んできた、日本人特有の社会意識が反映されたものといえます。しかしその表現は民主主義を取り込んだ戦後社会の中で、多様化された個人の自由を一定枠に押し込めるものとなります。集団や組織は何故必要なのかを原点に、集団や組織の為に個人が有るのではなく、個がよりよく生きるために組織を活用すると考えた結果が、同人組織でありました。

高名なジャーナリストだった本多勝一氏は、「山は死んだ」としてパイオニアワーク論を發表しました。しかしエベレスト登頂以降の多様化を迎えた登山とは、個の感性を開放した登山となり、個の感性こそが多様なのだと私は考えます。別な表現をすれば、「多様化こそが文化の中身であり、登山は文化として遊びの一種」となるわけです。

山岳人の集団化は、一義的には仲間(遊び)としての集まりとなります。二義的には遭難対策としての相互扶助であることを、同人組織の基礎とします。仲間意識においてゲマインシャフト(横社会)な関係か、ゲゼルシャフト(縦関係)な関係かにより、山岳同人と山岳会という組織の在り方が分けられます。実際はそれが混在し、時には縦、時には横と、日本社会の曖昧さは山岳社会にも反映されます。都合の良い時に都合の良い論理を引出し、組織の運営管理者はリスク管理をおこないます。山岳会内部で山行管理の許認可制度は、山岳遭難を未然に防ぐ無謀の排除という、予防原則の一般的手法であります。ことわざでは、「臭いものには蓋をする」といいます。登山内容が高度になると、山行管理者の未経験な分野ゆえに**無謀と困難**の判断が難しくなります。だから主観的判断で危ないと思ったら、とりあえず禁止して排除しておけば、目の前の危機はまぬがれ、管理者の責任は回避ができます。そして排除される行為者側は、未知なる領域へ挑むがゆえに、山行管理者を説得する言

葉の重みと態度に欠けてしまいます。行為者側の願望が強くなるにつれ、双方の軋轢と亀裂は深まり、やがて分裂。現代社会一般においてはリスク・マネジメント意識が高まり、安全管理基準(マニュアル)を整備して判断基準とするようになっていきます。

山岳遭難において、例え組織(山岳会等)の責任といっても、死者を生き返らせることはできません。あきらかに無謀な死に急ぎを阻止することはできます。しかしたいていはいはごく一般的な危機管理手法で、予防原則(禁止)の適用となります。登山リーダーにおいて最も大切なことは、資料編・〈その 3〉に述べる「クライシス・マネジメント」にあるといえます。

アルピニズムの実践者、冒険者、パイオニアワーカー等々、みな未知・未体験ゾーンだからこそ挑戦の意欲にかられます。それらの人々は自らの意志をもち、自らの判断で、自らの命を担保とするのです。決して他人任せで納得する人々ではないのです。もし安全が担保されていたなら、彼らは挑戦しなかったかもしれません。

それゆえ、山行に対する責任を組織(許認可管理者)に求めるのではなく、個人にあることを明確にしたものが同人組織である、と私は考えました。同じく遊び(登山)あう仲間であることの認識と、遊ぶ(登山)ことは自己責任の範疇である原則に立ち、その中で個人の弱点(遭難等)を補い合う相互扶助組織として、同人組織を立ち上げたのです。

そのことは1972年発行の「山岳同人風(ふう)」会報第1号に、代表者の見識として「山岳同人風・組織の意味と機能」を発表しました。次頁はその時の規約です。

そして1974年、横浜山岳協会P29南西壁登山隊には、山岳同人風からも4名(全隊員18名)が参加しました。さらにこの考えの延長とし、1978年ネパール・ヒマラヤP29南西壁を登ることに目標に特化し、登山意志のある者と、その支援者で構成したのが「ツラギの会」です。

#### ※ ツラギの会 :マナスル南壁～P29西壁から流れ出すツラギ氷河から命名

ツラギの会隊は「この指止まれ」の隊員編成であっても、すでに別な山岳会等での経験豊かな隊員が多く、1974年横浜山岳協会隊よりも確実に実力は上回っていました。隊長の私はすでに一度経験したルートであり、5歳年上の白石副隊長はマッターホルン北壁、ドリユ北壁を登っています。御園生登攀リーダーは雪崩の巣、

谷川岳一の倉沢滝沢第3スラブの冬季登攀者でもありました。牛沢登攀リーダーは都立第一商業高校山岳部OBの現役エース的存在であり、同じOBの中には昭和山岳会や朝霧山岳会等で活躍されている著名な山岳人が多くいます。マナスル西壁のサミッター小原氏も、その一人でした。

この4人を軸に4パーティを編成し、順次ルート工作を展開する計画です。事前の3年に亘る国内トレーニング山行では、若手隊員がめきめきと実力をつけ、誰もがトップに登れる実力を有します。

しかし本論は、ツラギの会の隊員や、社会人山岳会と山岳同人の区別がテーマではありません。山岳遭難に対し、私がどのようにリーダーとして考えており、どのような対応を図っていたかの実例を述べたものです。

## 山岳同人・風 【規 約】 1970年 制定

### 第1条 (名称)

本集団は「山岳同人・風」と称する。

### 第2条 (目的)

本集団は社会人登山者集団であり、登山に関するあらゆる状況において、よりよい登山者たらんとすることを目的とする。

2) 登山の実践に当たり、よりよい仲間を得られることを目指す。

3) 同人の事故時は、相互協力によって最善を尽くすことを原則とする。

### 第3条 (構成・運営)

本集団は登山同人によって構成され、別に定めるところにより運営される。

### 第4条 (山行・責任)

山行は総て同人の意志に基づき、事故時における責任は総てその登山者個人に帰する。

### 第5条 (遭難対策)

同人は山岳遭難保健に加入しなければならない。

2) 山行の事前、事後には別に定める係まで連絡しなければならない。

#### 4) ヒマラヤ登山隊リーダー論

1978 年秋、「ツラギの会P29南西壁登山隊」として、P29南西壁へ向かった私の主要なテーマは、新たなリーダー論、組織・運営論からのヒマラヤ岩壁初登攀でした。たかが登山ですが、歴史を作った著名な人のリーダーシップ、軍隊組織における著名な将軍のリーダー論、思想、哲学、宗教、文化、その他あらゆる事柄がリーダーシップにつながり、多くの読書を重ねました。今でも「あるべきリーダー論」を考え続けていますが、1978年 P29南西壁登山の結論は「青春のヒマラヤに学ぶ」(2001.1.1 文芸社:刊)にまとめてあります。

1970 年に入り、私はヒマラヤ登山隊の運営論、組織論について積極的に学んでいました。それまでのヒマラヤ登山史、日本の登山史を振り返り、登山を文化に位置づけるべく論考です。日本山岳会東海支部マカルー東南稜のリーダーであり、登山界の論客でもあった原真氏から葉書の要請を受け、私の「ヒマラヤ登山論」を原氏へ送りました。

このとき、新たなヒマラヤ登山観として「遊びと文化」の本質から主張する、私の論点からの批判は以下でありました。

- ① マカルー東南稜における「契約的人間関係」で山は登りたくない。
  - ※ 極めて激しい登山は至って情熱的行為であり、ビジネスではない遊び、文化の人間的欲求の根源として、契約関係にとらわれないベストを尽くすことに意味がある。
  - ※ 欧州の登山家はスポンサーとの契約関係を結び、プロ・スポーツ化していた。遊びや文化がもたらせる心の開放にとり、登山の成果を前もって対価に交換するスポンサー契約関係は、登山行為の本質的心を縛る逆行性となる。
- ② 隊員は「選抜」でなく、一定レベル以上の意欲(情熱)あるメンバーの集合が好ましい。
  - ※ 選抜は切り捨て原理を含み、生産至上主義な経済社会原理に合致するが、多様化へ向かう登山界は新たな組織論に、「参加への主体

性と自己責任」を導入する。成果主義ではなく、登山の過程にこそ意味を見出すのが、新たな登山(ヒマラヤ)の在り方となる。

③ 強者と弱者は補い合う関係で結合して登頂をめざす。目的達成への相補的關係が望ましい。

※ 相補性の原理 : 自主的メンバー構成の場合は、必ず強者と弱者が入り混じる。親分～子分の関係でなく、強者と弱者が異なった能力で補い合い、相互に信頼できる関係(愛)が望ましい。

※ 登山隊運営は機能的合理性にもとづき、相補的關係の中から最適な「解(判断)」を選択する。

当時、原真氏からの返信はなく、氏が亡くなられる(2009年)3～4年前に突然のお手紙と機関紙を戴きましたが、登山論に関するご意見、論議はありませんでした。

1974年春、私は**横浜山岳協会**による「P29南西壁登山」(申請上の隊長:田中文夫、実際の隊長:古川純一:日本山岳協会アマ・プロ問題への対処による)に参加しました。横浜山岳協会隊は横浜市、神奈川県、神奈川新聞、テレビ神奈川の後援と資金援助を受けたことにより、公的性格を意識した運営となります。登山隊指揮は名実とともに実際の隊長、古川純一氏です。登山隊運営は公的組織運営を得意とする、副隊長のK氏が中心となりました。私は登攀リーダー4人の内の一人であり、前記リーダー論の①～③を実践する立場ではありません。しかし私が学んでいたリーダーシップ理解からの発言と、申請上の隊長という名目をだぶらせてしまった別の隊員からは、私を本当の隊長に推し上げようとする動きを生じましたが、私は乗りませんでした。親子ほども年が違い、登山実績や名声も神様の存在だった古川氏を押しつけて、私が実質の登山隊長であろうはずありません。

公的責任と組織を重用するリーダーシップに対し、個人を尊重するクライマー的性格の多くのメンバーは対立しました。ヒマラヤ岩壁初登攀をめざすクライマー的性格の登山観にとり、横浜市、神奈川県から税金の一部である「後援金」を受けたことは、チーム統合にとって不協和音の原因となります。公的性格の登山隊は、社会的ステータスを要請されます。自由意志が強いクライマー的性格は、公的要請から

の縛りの狭間で理解し合うことが難しく、最後までチームワークが乱れたのです。

この頃のヒマラヤ岩壁登攀をめざした従来形組織登山隊の多くは、リーダーとメンバーの対立(内紛)が漏れ伝わっていました。トップ・リーダーは資金源(スポンサー)の組織プレッシャーを受けます。そのプレッシャーを直接受けないメンバーは、純粋に登山目的達成に向かい、最大限行動しようとして、困難な状況に陥った時、リーダーとメンバーの意見、判断が乖離します。登山隊は他組織から多額な資金援助を受けることにより、リーダーシップはその対価を成果として支払う責任と義務の精神的負担を感じます。リーダーシップは純粋登山から離れ、「事業」と化するのです。メンバーは事業の経過や意図を知らされず、当初の登山目標と異なるルート変更や、登頂者人選への不満など、自己本位な不満が蓄積します。各々で我慢の限界領域が異なり、ヒマラヤの非日常的な閉鎖環境の中であって、個々の些細な不平不満は容易に蓄積・増幅され、何かを契機として爆発させます。横浜山岳協会隊も、例外ではありませんでした。かつて雲の上でクライマーの「神様」であった古川さんも、現実の登山隊という閉鎖集団の中での関わりを経ることにより、一人の人となって生身をさらします。もはや、雲の上の神様でいられないリアルです。神様は、形而上の概念でしかないのでしょう。

この経験をもとに、より自由意思を尊重した新たなヒマラヤ登山運営(リーダーシップ)を提起し、実践したのが「1978年ツラギの会・P29南西壁登山」の趣意でした。その主張はまず「趣意書」にまとめ、実施を進めていきます。次に基本原則をまとめ、リーダーシップ3原則、メンバーシップ3原則を併せ、準備の初期段階から表明・確認していきます。

これらの手順は「設計のセオリー」でもあり、設計を<sup>なりわい</sup>生業とする私にとっては、思考の連続性の上にあるものでした。

## 【基本原則】

- ① ヒマラヤ登山は自己負担、自己責任でおこなう時代となった。

※ その社会性＝多様な時代における登山、外貨の自由化(1978年制限枠

撤廃)、ヒマラヤ解禁、余暇の増大

※ 外貨の自由化は、それまで学術団体でなければ調達できなかったドルの持ち出しが自由化され、個人で調達できることとなった。このことは組織から個人へと移行できる大きな要因となった。

② ヒマラヤ登山隊は既成組織や関係者の中から「隊員を選抜」するのではなく、「意欲ある個人」をもって、いかなる成功をもたらす組織(登山隊)を作り出すかの時代に入った。

※ それゆえ、個人負担金は一人 120 万円、10 名合計 1,200 万円の予算で実施。

※ 1978 年の大学卒業初年度平均年収 127 万円:厚生労働省(賃金構造基本統計調査)

### 【リーダーシップ 3 原則】

① (リーダーの立場)

生命を大切にし、お互い困難な体験を分かち合う仲間のリーダーである。

② (判断の基準)

P29南西壁登攀成功に対し、最大限有利な条件を引き出す。

③ (メンバーに対して)

公平無私でことに当たる。

※ 努力することにより、良きリーダーはつくられる。

### 【メンバーシップ 3 原則】

① P29南西壁登攀成功のために、持てる力の出し惜しみをしない。

② 他人と違うからこそ、自分が存在できる。(つまり、他人も尊重)

③ 全体の中で意見を出し合って討議し、決定事項には従う。

※ 大人として自主性を尊重するとともに、チームの一員でもあるから他人も尊重する。

名義後援は ①横浜山岳協会 ②神奈川新聞社 ③テレビ神奈川からいただきましたが、横浜山岳協会から 10 万円の寄付をいただいた以外、後援金は受けていません。また、仕事関係から 10 万円の寄付を受けましたが、全額登山隊の会計に繰り入れ寄付金として明示しました。

1974 年の横浜山岳協会隊で記事になった縁で、担当記者を通じて朝日新聞社へ名義後援を依頼しましたが、承認されませんでした。なぜ名義後援を必要としたかは資金調達問題でなく、メンバーがなるべく休職扱いされるよう、社会的立場(ステータス)を高める配慮からでした。実際に休職扱いとなったのは 10 名の内 4 名だけで、残り 6 名は退職しての参加です。その結果、身の丈に合った登山隊となり、遭難にともなう進退の判断は、隊員個々の意見と合議によって決めることができました。

遭難事故以降の行動指針は、隊長として示しました。カトマンズへ戻り、登山終了期間までは皆従ってくれました。計画はカトマンズで自由解散でしたが、遭難死亡事故という計画外の結果となります。隊長指針は、全員帰国し合同追悼会への参加を要請します。しかし 3 名の隊員は当初からの計画として、トレッキングへ出かけて帰国しません。それ以降現在に至るまで、隊長としての私は、その 3 隊員との関係を断ちます。契約的關係にあつては帰国しなくても問題はありますが、生命の共同体験者としての倫理面において、3 名を許容することができないのです。

職場を退職し、かつ自らの生命をかける登山への参加には、重みがあります。「会社を辞めてまで……山へ!」、日常社会で理解しかねる馬鹿げた登山行為ですが、それゆえにヒマラヤ登山は「文化の粋(遊び)」ともいえます。それだけ覚悟の隊員を統率するのですから、登山隊リーダーはリーダーシップとメンバーシップを準備段階から明確に示すことにより、隊員個々の組織的立ち位置の自覚を促すねらいがありました。

またプロジェクトチーム(寄せ集め)であっても、登山隊は社会的立場をもつ組織となります。職責面からは縦系統(ライン)の指示、行動面からは横系列(スタッフ)の協調という、二重規範を伴います。縦社会(ゲゼルシャフト)・横社会(ゲマインシャフト)の在るべき関係性を学習し、実践につなげることを、リーダーとして私は、初期の段階から意識していました。たとえメンバーが理解できなくてもそのことは、社会におけるヒマラ

ヤ登山隊として位置づけておかねばならない自覚がありました。

総論は登山趣意書としてまとめ、登山の目的、組織の目的、リーダーシップ3原則、メンバーシップ3原則等々は仲間と話し合い、事前に公表していました。そしてなぜこのようなことが必要なのか、それを理解できるメンバーは当時、私の他にあと一人しかいませんでした。出発前の準備会、上野公園に集まった時、牛沢隊長とそのようなテーマを話し合ったことがあります、彼は遭難死亡となってしまいました。

リーダー論に関し、リーダーとメンバーとの意識は乖離していたと思いますが、逆にそのことが強いリーダーシップを発揮できたと考えられます。リーダーとしてブレず、強い意志を持ち続けられなければ、ヒマラヤ登山は出発さえできないことを、私は強く自覚していました。リーダーとしての理念と意志と実行力を伴った全人格をかけ、先頭を切って新たなヒマラヤ登山のあり方(自己負担による、意志ある個人の集合)を試みました。30余年たった今でも、その自負は持ち続けています。

リーダー論の究極は哲学・思想の形成であり、その時々の世界観(社会情勢)を反映します。登山に限れば登山論、登山観であり、当然ながら歴史性が含まれます。過去のヒマラヤ登山論から、この登山にかなう新たな「ヒマラヤ登山隊リーダー論」の創出です。リーダーシップとは、それを意識して実践することであり、実践の結果を受けてリーダー意識はさらに深化します。つまり「リーダー意識の変遷」なのです。

## 5) 登山に臨むリーダーの意識と備え

登山計画と遭難対策は山行の表と裏、私はいつもこのように考えてきました。ヒマラヤ登山を実施する以前の同人組織、「山岳同人・風」においてもその考えは同じで、山行の自由意志と仲間の確保とともに遭難対策、つまり山行の届け出義務、遭難救助保険の強制加入義務、遭難時における最大限の相互扶助努力を規約としました。私の在籍中、遭難事故は一度もありませんでした。

「山岳同人」をどのように定義するのかは、本論の主旨ではありません。いかなる組織や個人であろうと、山は山であり、人間の側だけが問題としている、人間の問題で

す。組織山岳会であろうと、個人であろうと、自然の山は区別するわけではありません。私は登山を始めた当初から、遭難(死)を常に頭の中に秘め、それなりの対処を図ってきました。組織登山と個人登山では、遭難の対処法が異なります。個人登山で遭難した場合、その個人での対応はもはやできません。それゆえに、志を同じくする仲間の相互扶助は不可欠です。そのために集うのが「同人の意味」と考え、登山者組織の原点に考えました。

1978年、ツラギの会 P29南西壁登山においても、遭難対策は登ると同じ比重で考えていました。組織形登山隊から見れば、「寄せ集め」と揶揄されるプロジェクトチームゆえに、遭難対策はプライオリティの高いものです。自己負担・自己責任でおこなう登山ですから、できる限りの事態を想定しますが、実際にできることには限度があります。それゆえに同登山隊においては、事前に以下の対策をとりました。

## 【国内対策】

### ① 出発前トレーニング山行にそなえ、山岳遭難救助保険へ加入

※ 生命保険 50 万円、遭難救助 100 万円（海外遭難でも生命保険金一人 50 万円を受給。遺品回収ヘリコプター代金、隊長一時日本帰国費用等に充当できた）

### ② ヒマラヤ登山期間における海外旅行傷害保険へ加入

※ 保険金一人 50 万円につき、掛け金一人 2.7 万円（遭難死亡者生命保険金一人 50 万円を受給。死亡隊員ご遺族へ全額返金）

### ③ 医師又は看護師の同行

※ 申請は隊長・田中の中学同期生、鈴木医師（東京医大山岳部 OB、現：日本山岳文化学会会員）、同行看護師は遠藤隊員（国立第2病院を退職して参加）

### ④ 登山隊連絡会と留守本部設置

※ 出発1カ月前に新宿で連絡説明会。親、兄弟、先輩、知人、共産党機関紙・赤旗の記者（津山隊員の勤務先：あかつき印刷の関係からの記者参加→赤旗に記事掲載される）

※ 留守本部長を富田栄吉氏（現：日本ガイド協会認定ガイド）にお願いし、参加できなかった和田好弘氏（現：日本ガイド協会認定ガイド、日本山岳文化学会会員）、

村松徳雄氏が留守本部員となる。いずれも国内トレーニング山行を共にし仲間意識を育んだ。

遭難処理におけるトラブルの多くは、遭難対応費用出費にともなう資金不足にありました。事後に隊員から、不足資金を回収しなければならない場面があります。ましてや死亡した隊員のご遺族からの徴収は、心情的に極めて困難となります。

そのような過去の登山隊トラブルを聞いていたことから、高額掛金となる海外旅行傷害保険・山岳危険担保付に加入します。用途は遭難対策費に全額当てることで隊員の合意を得ていました。実際の遭難対策費用は加入保険金額の半分で済み、一方の保険金額一人 50 万円分をご遺族へ返還することができ、お金によるトラブルは生じませんでした。

そのことは、国内トレーニング山行用で加入していた、山岳遭難救助保険の死亡保険金額が、海外登山にも適用されたからでした。海外での捜索救助費用は対象となりませんが、保険のベースとなる生命保険金額は、海外でも支払い対象となったからです。実際にヘリコプターを2度ベースキャンプまで飛ばして遺品回収を早期におこないます。さらに登山隊撤収と並行して、隊長の私が一時日本へ帰国し、速やかにご遺族への状況説明と遺品引き渡しをおこなう費用にも充てることができたのです。

ヒマラヤ岩壁登攀事故の場合、医師の同行は絶対条件としませんでした。途上の救命と医療行為は極めて困難で、外傷や体調不良への対応は看護師で可能と考えたからです。看護師の遠藤隊員は、国立第2病院を退職してまで参加してくれた熱意に、敬意を払わなければなりません。

出発1カ月前に新宿で開いた「登山隊連絡会」は、重要な集まりでした。親・兄弟、友人知己関係者、報道機関等々を、新宿にあった友人の建築設計事務所を借りて一堂に集めます。事前に関係者へ、登山概要の周知と万一事故を生じた時の連絡や顔合わせが目的でした。1974年横浜隊の写真を示し、困難な岩壁登攀である計画概要を説明します。さらに成功の確率は 50%と公言し、困難な登山であるこ

とを話しました。

しかし問題はこの企画の意図を外れ、不参加だった牛沢隊員のご遺族で生じました。牛沢隊員は「家族が心配するといけないから」と、その理由を遠征の途上で私に語ってくれましたが、明らかに家族への説明不足がありました。牛沢隊員は登山隊連絡会に、先輩のK氏の参加をお願いしていましたが、その先輩も当日は欠席でした。ご遺族は登山内容をどれだけ理解されていたか分かりませんが、遭難事故説明会や合同追悼会ではテープレコーダーを持ち込み、私の説明を録音されています。また遭難1周年に当たって自宅を訪問した際、家に入れてもらえません。しかし同じ高校山岳部 OG だったお姉さんの取り計らいで、ようやく家に入ることができました。その後毎年一度の訪問を続けましたが、ご家族の心を開かれた感触は、その後もありません。年賀状を出しても返信はなく、10年を過ぎました。お住まいを転居され、転居先を知らされぬままに、訪問と年賀状は丸10年で途絶えます。

このようなトラブルを避けるためにおこなった「登山隊連絡会」でしたが、個々には個々の事情があります。亡くなった、牛沢隊員を責めることはできません。

一方でなぜか、外務省からの**遭難第一報**は、牛沢隊員の自宅に入りました。次の現地対策に述べますが、このトラブルを解決し、登山隊留守本部長へ連絡して下さったのが、連絡会欠席だった先輩のK氏でもあります。(私もK氏と面識あり)

また、連絡会に参加された万實隊員の父は、平家の血筋といわれるように凛とされ、一言も苦言は呈されません。秘境に近い福島県昭和村の実家へ、快く迎え入れて下さいました。さら高橋隊員のご両親は遠方(秋田県仙北市)と高齢を理由に、葉書にて連絡会不参加の知らせがありました。高橋隊員の遠征アルバムを作成して持参すると、「自分も冒険的なことは好きだから・・・」という父親の諦めの言葉と、無言で従う実母の寡黙さのなかに、私はより深い悲しみを感じました。

### 【事故に備えた現地対策】 (シェルパ、ポーターは除く)

後方支援組織を持たないプロジェクトチームですから、万一の事故への備えは重要です。そのために次のような備えをしていました。

- ① カトマンズ渉外隊員の駐在

1974 年横浜山岳協会P29登山隊へ参加した上村隊員は先発し、終了までカトマンズに滞在します。カルカッタやネパールでの通関、カトマンズ渉外を担当。登山期間中もカトマンズに滞在し、後方連絡と支援をおこないました。

※ 上村隊員は牛沢隊員の先輩でもあり、1974 年横浜山岳協会隊以降、英会話を学んでいました。登山隊としては渡航費用全額と滞在費の半額負担ですが、勤務先を退職して参加・支援してくれました。実際目に見えぬ役割ですが、英語による通関、渉外、遭難時における連絡拠点や情報収集として、大きな役割を果たしました。

※ これらの経験を生かし今でも女性山岳ガイドとして活躍しています。

## ② カトマンズの連絡網確保

カトマンズの代理店、ヒマラヤンジャーニー(大河原氏)と緊急連絡網を確認。緊急飛来用ヘリコプター代金 3000 \$を預託します。着陸マークの確認、電信文の書き方(特にヘリの要請期限)等の確認をおこないます。

※ これは現実となり、有効に機能しました。現金を預託していることから、代理店側は安心してヘリコプターを依頼できたといえます。

また、遺品回収用に 2 度ヘリコプターはBCを往復し、上村隊員が同乗しました。

## ③ 日本大使館

日本大使館の担当者(大橋氏)へは、古川純一氏から戴いた衛星写真(名古屋大学提供)を提出し、ヘリコプターの飛行ルートを事前説明していました。また隊員名簿を提出し、緊急時の国内連絡先(富田)を確認します。事故発生の場合、ネパール政府、日本大使館、ヒマラヤンジャーニーとの連絡手順も確認しました。

※ しかし実際は、この確認事項が生かされません。日本大使館は公電(遭難と死亡隊員名)を外務省本省へ打電した際、国内連絡先までは内容に含まれなかったのでしょうか。なぜか外務省からの第一

報は東京都内の牛沢隊員の実家に入ります。外務省は国内連絡先不明のいい加減な登山隊という最初の評価だったそうです。牛沢隊員の実家連絡以降に動かれたのが先輩のK氏で、外務省に対し、しっかりした登山隊であることを説明し、登山隊留守本部長・富田氏への遭難第一報の連絡をして戴きます。(牛沢隊員～同隊員の姉～K氏～上村隊員はいずれも同一高校山岳部 OB、OG の関係)

登山隊としては最善の方法を準備していたのですが、ただ一つ、日本山岳協会へメンバー変更後の最終計画書を差替えていませんでした。日本国内初動の混乱は、①在ネパール日本大使館公電の不備、②日本山岳協会へ最終計画書の差し替えをおこなわなかった登山隊の不備、によるものと考えられます。

この事例のようにいかなる対策を図っていても、関係機関、関係者が増すにつれて些細な錯誤や不備が重なり、意思疎通が滞ります。現代では「情報」の量とスピードが激増していますが、その分逆に、**情報の不確かさ(情報エントロピー)が増します。**正確な情報伝達については本論外としておきます。

### 【登山開始前ベースキャンプにおける行動指示】

登攀開始前、ベースキャンプでの全体会議において、日常の行動指示と、万一最悪事態に陥った場合の隊長指示と隊員の判断について確認していました。

① 毎日の行動指示は、全て隊長から発信する。

※ 隊長は毎日の交信により行動管理グラフを記録し、高所順応と体調管理を把握している。

② 最悪な事態においても隊長から指示を出す、生死に関わる重大な最終判断は隊員個々の判断によって行動しても良い。

※ 隊長はオールマイティではありません。全体的な動きからの指示を出せますが、離れた局所において生死に係る重大な最終判断は、その隊員個々の判断にもとづき行動して良いことの確認。

(自然の中における人間活動の限界)

## 2. 遭難時におけるリーダーの意識

遭難の詳細と経緯は拙著「青春のヒマラヤに学ぶ」(2001.1.1 文芸社) に詳述。

### 1) もしリーダー(隊長)が死亡していたら

これは仮定の設問ですが、この可能性の実態はありました。もし隊長(私)が死亡していたなら、この登山隊は空中分解したと思います。これまで記した事前準備において、唯一の準備不足は「隊長(私)が死亡した場合への対策」であり、実際その危機があったからです。←(3.11 東日本大震災の原発事故で、菅直人首相が現地指揮)

氷河崩壊の爆風は隊長(私)をも吹き飛ばし、あと2m 氷壁を流されていたらクレバスへ転落、どうなっていたか分かりませんでした。氷壁に素手の指を突き立て制動していましたが、そのことが有効であったか、気休め程度であったのか、今でも分かりません。ともかく、全くの無傷で生存していたのです。他方、第2キャンプの外に並んで立ち、お茶を飲んでいた牛沢隊員はC2下部岩壁を落下し、死亡となってしまいました。

「この指止まれ」で集まった登山隊であり、隊長の私(当時32才)は西欧形のリーダーシップをとっていました。登山の指揮・運営の中核であるとともに、登攀リーダーの一人として先頭でルート工作をおこないます。西欧形リーダーとは意志の中核であるとともに、先頭切って行動する形態です。

一方、日本古来の組織形リーダーは、殿(しんがり) から指揮をとり、先頭切って行動することはまれにしかありません。そのような組織形日本隊は、当時西欧のリーダー達から批判を受けていました。

偉大な名クライマーであり、幾多の初登攀記録を持つあの古川純一氏(当時50才)でさえ、1974年横浜山岳協会隊では殿(しんがり) に位置し、私たち28才組の登攀リーダー達がローテーションを組んでルート開拓をおこなっています。

### 2) 遭難時におけるリーダーの指揮

無傷だった隊長の私は、爆風停止直後から第2 キャンプに戻り、行方不明者発

見の指揮をとりました。その詳細は拙著、「青春のヒマラヤに学ぶ」に詳述しています。遭難発生時は2隊員を発見し、死亡を確認します。高橋隊員は発見できず、搜索は継続とします。

遭難の夜、残る全隊員は第1キャンプに集結しました。合議により、今後の活動内容を決めます。その詳細も拙著に詳しく記してありますが、組織登山隊でないために「**登攀は断念し、ご遺族への対応を最優先する**」ことで全員の合意を得ます。隊長としてはそのことを主導する考えを延べ、異論なく合意を得ることができました。

行方不明となった高橋隊員の搜索とキャンプ撤収は白石副隊長にお願いし、隊長の私はベースキャンプ(BC)に降ります。リエゾンオフィサー(ネパール政府)、日本大使館、留守本部等への報告書作成や、連絡手配等々、渉外任務に当たります。

突然に、思いもよらぬ氷河崩壊爆風による、遭難死亡事故となりました。隊長としての私は、これまた思いもよらぬ冷静な対応ができたものと、自ら思っています。その理由は前記の通り、事前の準備をおこなっていたからといえます。しかし隊員達の動揺は大きかったのでしょう。プロジェクトチームでの目的喪失は、協調性を失い、隊員は自らの殻に閉じこもるようになり、自己主張が強くなる隊員もいました。

当初からリーダーとメンバーの登山意識は少し離れていたため、目的実現に向けた強いリーダーシップを発揮することが出来ていました。しかし目的を失った遭難以降、これまでのようにメンバーをまとめることは非常に難しくなります。自己中心的に変わってゆくメンバー達の心に対し、私自身は嫌悪感を持ったのも事実です。そしてこのことが後に、私を山岳集団(山岳会等)から遠ざける要因となったのです。

ベースキャンプ(BC)では遭難発生と同時に、雑用をしていたポーターの一人が腸閉塞の症状を訴えていました。遠藤看護師の見立てでは、緊急にカトマンズへ搬送する必要があると判断し、無電でヘリコプターを要請します。飛来したヘリコプターには、連絡のためカトマンズへ送っていた津山隊員が乗っており、『ご遺族がカトマンズへ来られる』という情報を伝えます。その情報を受け、隊長の私は病気のポーターとともにヘリコプターでカトマンズへ戻ります。ポーターは病院へ直行。診察の結果は軽症で、腸閉塞ではありません。そしてご遺族は、カトマンズに来ておら

れませんでした。一時、フライト搭乗者名簿に載っていたための情報でしたが、その名簿には横線が引かれ、取り消されていました。

そこで急遽隊長の私が、日本へ一時帰国することでネパール政府の了解をもらいます。それゆえ、再度ヘリコプターをベースキャンプ(BC)まで飛ばし、遺品回収をおこないます。

遭難から 16 日後、隊長の私は一時帰国で日本へ戻りました。帰国翌日には、ご遺族への遺品引き渡しと、ポラロイドカメラ印画写真を添えた事故説明をおこないます。これら全ての国内準備はカトマンズからの連絡で、富田氏を中心とする留守本部により、用意されていました。

ポラロイドカメラによる遭難現場写真は、ネパール政府への初期説明やご遺族への最初の説明に役立ちました。さらに一時帰国の際、35 mm カラーフィルムを現像し、ネパール政府、日本大使館への正式報告書に添付します。説明文章とこれらの写真添付による報告書は、第三者の理解を得るために大変役だったものといえます。

一時帰国し、遺品の引き渡しと、ポラロイド写真を交えた事故説明がスムーズにおこなえたのは、留守本部長・富田氏の尽力が極めて大きくありました。一時同じ会社に所属し、私より 2 歳年長で、その後長年の岳友として、遠征メンバーたちとのトレーニング山行を共にしていたことが、仲間意識の形成に大きく役立っていました。

このようにご遺族への対応を最優先とし、その資金の裏付けを確保していたことは、既成の組織形登山隊よりも迅速な対応が図れたものと思っています。例えば同時期にヒマラヤを登っていた、群馬県山岳連盟ダウラギリ登山隊は、我々事故の 10 日後に、雪崩遭難事故を生じました(私の友人、深沢氏が死亡)。彼らはその後も登山を継続し、登頂に成功しています(山田昇氏らが登頂成功)。私が一時帰国した際にあずかった群馬隊隊長の手紙は、成田に戻ってから郵便ポストに投函しました。

山岳雑誌『岩と雪』68 号の記事となった、在ネパール日本大使館から送られてきた文書の中に、**ネパール政府観光省・シャルマ登山課長の談話**があったとされます。シャルマ登山課長は、「P29 隊の遭難は不可抗力の雪崩によるものだったが、群馬隊は誰が見てもおかしいコースをとっていた」とされます。この評価の違いが

いかにおこなわれたか知る由もありませんが、私が推測するには「遭難事故への対応と事故報告の仕方の違いにより、評価が分かれたもの」と考えられます。我々はプロジェクトチーム(寄せ集め)、ゆえに自主的対応を最大限図り、それなりの準備と心構えをしていたつもりです。これまで私の登山経歴の中では一度も遭難事故を生じたことがなく、事故処理の経験はありませんでした。しかし事前の準備と心構えは、いざ現実となっても慌てることはありませんでした。

遭難は遭難であり、死亡した生命は取り戻せません。人為的な遭難であったか、不可抗力な遭難であったか、当事者からの判定は出しにくいところです。たとえ不可抗力と思っている、長い年月を経なければ当事者としては言い出せない裏事情もあります。それは様々な方々への心遣いでもあります。私は20年後の報告書において、ジャック・モノーの「偶然と必然」を引用し、『**氷河崩壊の必然と、岩壁登攀行為の必然とが交差した、偶然であった**』ことを表明しましたが、第三書からの歴史的評価は未だ知ることができません。

帰国後の合同追悼会の中で、行方不明となっている高橋隊員の彼女(?)から、「彼を返して下さい」と言われます。返答できませんでしたが、高橋隊員は日産自動車(エンジン設計部署)を退社し、私のアパートに泊まってから、ヒマラヤへと旅立ちました。『**死者を生き返らせることができないからこそ生命ははかなく、生命を燃し尽くす激しい情熱こそが、生きていることの証しである**』と、今でも私は強く思っています。しかし「遺伝子操作」や「再生医療」研究が進化し、生命の再生が可能となった場合、『生命のはかなさ』を感じる人類の感性と倫理、文化の中身は、大きく変化するのでしょうか。もしその時、この論述が役立つのであるならば、遭難死亡した隊員の、山に向かった意志が役立つことでもあります。なによりも私は死を前に、生きていることの「**情熱**」を、大切にしていきたいと思うのです。

### 3. その後のリーダー意識の変遷

山岳遭難処理を終え、その後の対応や意識の変化を述べれば、以下となります。

#### 1) ご遺族への対応

死亡3隊員個々のアルバムを作成し、各ご遺族を訪問し手渡しました。

毎年9月14日前後には、牛沢家(東京中野区)～万実家(福島県大沼郡昭和村)～高橋家(秋田県仙北市)を一人で訪問します。初日は東京の牛沢家を訪問し、そのまま夜行で秋田に向かい、大曲からタクシーで高橋家を往復します。さらに夜行で福島を経由、会津若松から只見線に乗り、会津川口駅から昭和村の万実家まではタクシーで往復(一日数本のバス)、ふたたび只見線で小出に向かい、小出からは上越新幹線で帰京となります。丸2日間半の行程です。

初期には私が元気で訪問することを喜んでいただきましたが、5年を過ぎた頃から、お互いに何となく負担を感じ合うようになります。この訪問は10年間続けましたが、牛沢家の転居先不明もあり、その後の個別訪問の旅は終わりました。

しかし遭難の真実と責任を、私は生涯背負っていくつもりです。

#### 2) P29へ

その後は隔年おきにネパールを訪問しました。アルパインツアーのツアーコンダクター3回、友人や家族と共に幾度もトレッキングへ出かけ、そのつどP29南西壁を機上から黙祷します。しかし埋葬地までへは行けません。(トレッキング領域外にて、入山許可が必要)

数年前、古川純一氏から手紙を戴き、遺骨収集の話がありました。『もし他の登山隊が入る時、埋葬地が登山ルートの障害にならないか?』というご意見です。日数と費用がかかり、個人では動きがたく、未だそのための行動は起こしていません。

#### 3) メンバーへの対応

遭難事故で目的を失って以降、それぞれのメンバーは自分の殻に閉じこもり、自

己防御反応をとる傾向が顕著となりました。隊長として私は事故処理や日本への一時帰国、残務整理で忙しく、メンバーとのコミュニケーションが疎遠となってしまいました。それら心情変化は前節2)の「遭難時におけるリーダーの指揮」に記したところです。

カトマンズでの解散は、計画当初からの合意事項でした。しかし3隊員遭難死亡事故の結果となり、解散における隊長としての要請をおこないます。「合同追悼会には全員出席してほしい」、と。しかし3名の隊員は当初からの計画だからと言ってトレッキングに出掛け、合同追悼会に参加しません。このことはリーダー意識にとって許しがたく、現在に至るまで3隊員とは交流を断っています。

それぞれの隊員は元来所属していた山岳会があり、そちらへ復帰すれば「ツラギの会」は不要となります。登山隊残金の清算をもって、解散とします。

白石副隊長は登攀経験豊富であり、私より5歳年上でした。職人気質なクライマー的性格は、隊をまとめて導くリーダーシップを苦手とし、白石副隊長自身もそのことを良く自覚していました。それゆえ年の順でなく、私が隊長となっていました。

私の登山認識に一番近かったのは牛沢隊員であり、隊長と隊員のクッション役でもありました。牛沢隊員を失ったことは、リーダーシップにとって大きな痛手でした。

#### 4) 個人的な意識変化

私自身も氷河崩壊の爆風に吹き飛ばされ、テントの外にいた4名のうち、ただ一人生き残る偶然を体験しました。生きて残された理由は分かりませんが、空想的に述べれば『しっかり事故処理をしなさい。登山は危険だけど、人間を鍛えるに良い環境だよ……！と、生きて社会へ発信しなさい』と、私は理解しています。

山を止められるかもしれないと思い、一度は山道具のほとんどを処分しました。

山の会を主宰する気にはにはどうていならず、個人山行や、ヒマラヤトレッキングのコンダクターをおこないます。近年は単独行が多く、テント持参で好きな時に、好きな山へ出かけています。

遭難から17年後の1995年、脳に障害を持ち発育遅滞でも6才になった3男が、

真夏の暑い朝に突然死を迎えました。障害をもって生まれた時もそうでしたが、この『突然死に対する心の痛みと受容』は、ヒマラヤ遭難体験を経た自然との対話から得られたものであります。また、『我が子を先に失う親の心の悲しみ』を、遭難のご遺族同様痛いほど味わうことになりました。

私のリーダー的性格は、他者に従属するよりも自ら判断・切り拓く事を好みます。その後、山岳団体、組織から離れましたが、株式会社を起業し、設計業務に専念します。10日間不眠不休で働いた時は、まるで高所登山のようでした。神経は業務完遂に向かって極度に集中し、心臓は高鳴り、呼吸も浅く数を増し、眠気も吹き飛んでしまいます。街の中にも、まるでヒマラヤ登山があるような、そんな体験もありました。

山岳組織に復活したのは2003年3月に創設された「日本山岳文化学会」からとなります。その中で私の関心事は、もはや山岳登攀ではなくなりました。登山を文化として捉え、その登山文化が一般社会の中でいかに活用できるかに関心が向きます。当然ながら社会を導くリーダーシップには、いつも関心を持ち続けています。

### 【 自省所感 】

ヒマラヤ登山では精一杯「生命(いのち)」を燃やしました。大切な人々を失いましたが、これらの現実から『人生で何が大切か・・・』と、体験を通して学ぶことができました。

そのことを綴ったものが、2001年1月1日、文芸社出版(ISBN4-8355-1085-2、C0095)「青春のヒマラヤに学ぶ」前篇に収録してあります。本来登山記録とは別に分けて出版すべきです。しかし、澤村幸蔵氏(故人)の寄稿文にあるように、後篇の遭難登山体験があったからこそ学んだ前編の自省が、私の最も述べたかったことなのであります。

さらに2003年8月15日、日本文学館出版(ISBN4-7765-0055-8、C0095)「頂きのかなたに」では、その心情を私小説として上呈しました。

## その2. 失敗に学ぶ

2011年6月:記稿

2015年9月:推敲

近年、『失敗学』というジャンルがクローズアップされています。命名者は立花隆氏で、2002年には『非営利活動法人・失敗学会』が設立されています。会長は『失敗学のすすめ』の著者、畑村洋太郎東京大学名誉教授です。工学・経営学などを網羅的に含み、「失敗は成功の基」となりうるよう、失敗のヒューマンエラーを前向きに捉える分野です。その分析により失敗要素を最小化し、あるいは除去して、成功を導き出そうとします。

iPS細胞の発見で2012年ノーベル医学・生理学賞受賞の山中伸弥・京都大学教授は、失敗を重ねた末に、生命概念の見直しを迫る人類史上の一大発見と実用化への道を切り開きました。このことは、「失敗に学ぶ」直近の最も良い例となります。しかしその中で実験マウスの生命は、当然のごとく無批判に操作されています。人間優先思想の隠蔽を、人類は胸に刻む必要を忘れてはなりません。生命持続のためには食物連鎖によって、他の生物を殺して食べる必要悪の業があります。

山岳遭難における失敗は、「**取り返しがつかない**」結果に陥ることが多々あります。つまり「死亡事故」となるのです。この場合、失敗した本人にとっては、もはや「**取り返しがつかない**」ことであり、それ以外の他者にとっては貴重な事例の提供となります。もしヒューマンエラーの要因が見つかれば、近年はリーダーの刑事責任を問われる裁判事件も生じています。

『失敗学』におけるヒューマンエラーについても、当然ながら刑事責任を負う場合があります。しかし一般社会のシステム機構では、状況行為判断者(責任者)と行為被害者は、同一場所にいない場合が多くあります。つまり判断者(責任者)は現場おらず、報告データに基づいた間接的判断となるのです。その場合には、伝達ミス、確認ミス等のヒューマンエラーと、情報システムエラー等の装置不備、故障等のメカニカルエラーがさらに加わります。しかし山岳遭難のヒューマンエラーは、判断者(リーダー)と行為被害者が同一環境の下にある場合がほとんどです。つまり判断者自

身も行為被害者と同じ危険な環境にあり、その中での直接的判断となりますからチェックや代替がかなわず、多くの場合「取り返しがつかない」結果を生じます。

山岳遭難の場合、「取り返しがつかない」ということは『死』を意味し、死は生にもはや「後戻りができません」。それゆえに山岳遭難死亡者は「失敗に学ぶ」ことができません。「失敗に学ぶ」ことができるのは、遭難事故から生還し、死ななかつた場合となります。その他の人々は、生還者の体験や遭難の事例から、教訓として「学習」することになります。さらに遭難原因の分析からは、同じことを繰り返さない指導効果を果たすことができます。

私自身はヒマラヤ遭難事故からの唯一生還者(テントの外に4人いた内、3人が死亡)となつて、その体験とともに学んだことを以下にまとめてみました。

## 1. 失敗の種類

失敗には起こるべくして起こる**必然的な失敗**と、全く予期できない**偶発的な失敗**とがあります。また、**取り返しがつく失敗**と、**取り返しのつかない失敗**もあります。

### 1) 原因による失敗の種類

- ① 必然的な失敗 : 起こるべくして起こる失敗 : 蓋然的な普通の失敗
- ② 偶発的な失敗 : 全く予期できない偶然な失敗 : 予知領域外の遭遇

### 2) 結果による失敗の種類

- ① 取り返しがつく失敗 : 失敗から学習し次なる成功の糧となる失敗
- ② 取り返しのつかない失敗 : 死や破壊等に見る復元できない原型壊失の失敗

### 3) 責任が伴う失敗

- ① 責任を負うべき失敗 : 必然な失敗 : 因果関係が判明している場合
- ② 責任を負えない失敗 : 偶発的な失敗:因果関係が判明していない場合

## 2. 判断と責任の限界

山岳自然環境の中にあり、「人間の系」は「自然の系」の一部分となります。自然の中でおこなわれる、人間の意識が生み出す判断と責任は、部分(人間)から全体(自然)を判断するという、論理的パラドックにあります。それゆえに、人が自然現象を見極めて判断する場合、その判断には部分(自己)としての限界がともないます。このような人間の判断に限界があることを認めれば、自己としての責任も、おのずから限界をともなうこととなります。つまり、誰がその立場にあっても、それ以上の判断と自己責任を負えない「**限界点**」があることを認めなければなりません。この限界点を『**絶対的限界**』としてみます。

一方で、人は意識・無意識に拘わらず、自ら感じる限界点があります。自身のコンディションや相手次第でその限界点は変動しますが、日常環境の中で「**もうだめだ**」と思っても、まだ絶対的限界までには余力があります。自己意識では耐え切れぬ思いで限界を感じても、まだ努力や頑張りによって耐え、忍ぶことができる範囲が残ります。この感覚を意識する限界点には幅があり、個々によっても異なります。したがってこれを『**相対的限界**』と呼んでみますと、『**絶対的限界**』へ至るまでには、まだ1/3程度の余力を残している人間の安全装置とも云えます。

### ① 絶対的限界(客観的限界)

自然の系において復元不可能な状態に移行する点。数学的にはカタルフィーとも呼ばれ、以前と同じ状況に戻れない臨界点。

(例 = 死、破壊、消滅)

### ② 相対的限界(主観的限界) =

個々の感覚の中で限界と感じる点。

前記①に至らぬ領域の範囲内で限界認知感覚領域は変動するが、まだ復元可能領域にあり以前の状況に戻れる点。

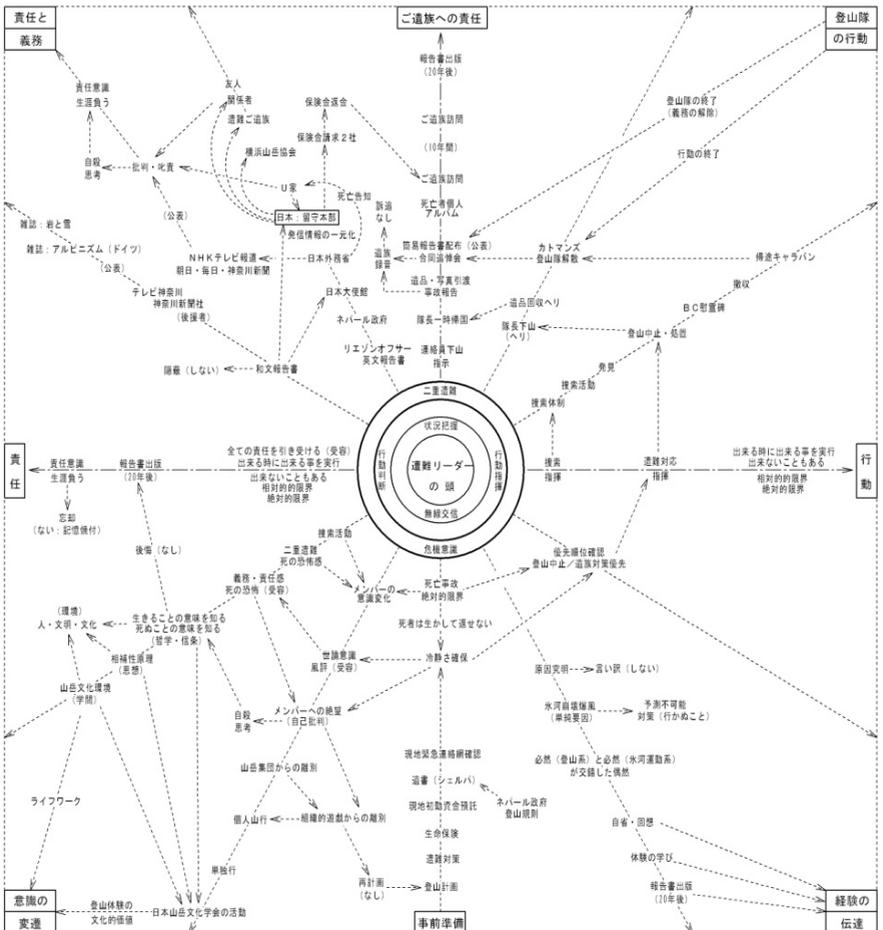
(例 = もうだめだ・・・、もう死にそう・・・、といった個体的限界感覚)

『**相対的限界**(主観的限界)点』は訓練や経験を重ねるほどに幅を広げ、絶対的限界点へと近づきます。それゆえに訓練を積んだ人ほど絶対的限界点までの余力

が少なく、いざ限界を感じた時は絶体絶命のピンチとなってしまうのです。エベレスト下山中に遭難事故が多いのは、その現れと云えましょう。

『相対的限界』には、自信、経験、訓練、努力といったヒューマンファクターにより、限界の意識レベルが変動します。それゆえに、判断する者とされる者との関係においては、責任と義務が発生する場合があります。日常環境における一般的登山行為は、②の相対的限界領域での活動となり、相対的關係の中で「契約」を結んだとすれば、当然に契約履行義務と責任、法的義務と責任が発生します。

【図—2】 遭難時リーダーの思考系統



しかしより高度な登山行為では、①の**絶対的限界**領域への対応を前提に対策を講じる必要があり、その責任と義務も、行為者自身が負うことが原則でした。しかしエベレスト商業登山のような場合、自然環境は絶対的限界の中にありながら、登頂を請け負う商業契約の条項の中に当然、絶対的限界状況に陥った場合の免責事項が含まれることとなります。そのことは一般的生命保険や損害保険においても、自然災害等における免責事項が特記されているのと同じことです。

1978年ツラギの会 P29 南西壁登山において、すでに私は上記のことを意識していました。つまり ①の**絶対的限界**状況となり死者を出しましたが、次のステップで何がベストとなるか、即時な判断が出来ました。その対応は前記くその 1)各所で述べた通りです。

失敗学会において、「**失敗時の社長の頭**」というブロック図がありました。失敗した時に、トップ・リーダーが何を考えていたかを系統的に表現したブロック図です。それを参考に、第2章P29遭難時とそれ以降の、私の思考系統を【図-2】に示してみました。円の中心軸に近いところは短期的なもの、円から遠くほどに中・長期となりますが、各ベクトルの長さは時間を反映していないので、座標点の時限はそれぞれ異なっています。とりわけ、思考の順序と関連性を読み取っていただければと思います。(※A5→A3 版拡大コピーにて判読可能)

### 3. 登山の安全性と危険性

「登山の安全性」とは、「登山の危険性」を正面から受け止め、その対策を講じることに尽きます。極論を述べれば、登山はしないことこそ安全であり、そのことは「予防原則」から導かれます。しかしそれでは、登山が否定されてしまいます。それでも登る登山の魅力とは、いったい何なのでしょう。答えは、1924年6月エベレスト初登頂をめざして死んだイギリスの登山家、ジョージ・マロリーの名言とされる『そこに(山)があるから(Bacause it's there)』にとどめておきます。

安全登山とは、山岳環境において出来る限りの危険を予知し、出来る限りの対策を図ることに尽きます。そのことは「**登山者の第一条件**」となります。また遭難した

場合を想定し、事前に意識・学習しておくことも大切です。前記<その1>で述べた私のヒマラヤ遭難体験から、事前の意識・学習・対策を講じておくことは、万一遭難を招いてしまっても、冷静に対処出来ることを学びました。また事前の問題意識が高い者ほど、冷静さを保っていたのも事実でした。

## 1) 遭難予防原則

- 1) 危険な行為はしない
- 2) 危険な場所へ立ち入らない
- 3) 危険な仲間を避ける(近づけない)

遭難予防原則からは、山へ行かないことが結論として導かれる。

## 2) 登山の危険性

- 1) 登山の危険と困難は紙一重(同類性)
- 2) 登山はあえて困難(危険)な行為をする
- 3) 登山はあえて困難(危険)な場所へ立ち入る
- 4) 登山はあえて困難(危険)を(仲間と)楽しむ

それゆえ

- 1) 山岳登山行為は危険要因を含む
- 2) 山岳遭難対策は登山の第一条件

## 3) 安全登山対策

- 1) 登山者自身で危険性を自覚し責任を負う(自己責任)
- 2) 登山者自身が対策を講じる(安全対策)
- 3) 一人だけの遭難対策は限界がある。そのために組織化(相互扶助)が必要。

※山岳人組織の原点

## 4) 組織的対応 (遭難対策=安全登山)

啓蒙、普及、学習、指導、訓練、体制、規制(法)、資格制度、相互扶助、

救助隊、保険、遭難対策基金、山岳利用税(入山税)、山小屋、医療体制連絡網

#### 5) それでも危険は除き得ない (自然の摂理)

### 4. 登山の失敗に学ぶ

私はヒマラヤ遭難死亡事故を体験し、偶然にも生還してきたことから、失敗を糧として多くのことを学ぶことができました。死亡してしまった仲間の隊員3名にとっては、「取り返しがつかないこと」です。偶然にも生還した私には、彼らの分も含めて「取り返すこと」が使命となります。しかし死者を生かして呼び戻すことではなく、遭難の体験から得た教訓を社会へ還元することが、「取り返す」ことの表現と考えるのです。物質として社会へ還元することではなく、体験から得た「心の問題」、「心の在り方」、「その後の自身の生き方、考え方の考察(自省)」を社会へ提示することにほかなりません。この主観的テーマをどれだけ客観性と統合し、総合人間学の一端として表現ができるか、「哲学的努力」となります。

日本山岳文化学会で論文発表もおこないましたが、その意図を伝えきれません。文部科学省傘下の学術団体として、その論文に科学的表現を求められても、心や感性の表現は科学で網羅できるものではありません。心や感性は「虚」な領域です。そこで思いついたのが、数学的複素数(実数+虚数)を三次元ベクトル表現する『人の意識・文明・文化＝環境の複素な世界構造(図-1、P81)』でした。さらに論文調文体を離れ、自由な表現へと移行してみました。学術論文としてでなく、体験・報告⇒論考・考察を一体的にまとめる、『総合人間学の物語』と考えたのです。失敗して気づく、様々な問題があります。その根底には「意識と無意識」の領域にわたる「体験⇒気づき⇒人間脳と心」の問題もあります。もはや登山や個別学問の領域をはみ出した学際と体験を重ね合わせた『登山の総合人間学』です。

## 1) 登山の文明史は、失敗を乗り越えてつくられる

登山の進化はスポーツ同様、ある目標を設定して乗り越えてゆきます。それは「記録」として残され、一つの記録は次々と新たな記録に塗りかえられていきます。その記録は後戻りすることなく前へ進む一方向性であり、登山の文明史的要素となります。しかし自然と対峙してきた登山様式はスポーツ競技と異なり、一つの失敗で死を招く可能性を含んでいます。登山者は常に、絶対的限界を見据えながら、相対的限界を乗り越えてゆく中で、楽しみを求める行為者でもありました。その証拠は、これまでの登山史や文献によって積み上げられ、ことさら立証しなくても公知の事実となって、記録に残されています。

その中でも特に、スイス・アルプス、アイガー北壁初登攀の歴史は顕著です。「魔の山」と言われ次々と犠牲者を出しながらも 1938 年、ヘックマイヤー、フェルク、ハラー、カスパレクによって初登攀が成されました。それ以降も遭難者は絶えませんが、人はある面、征服欲にかられます。困難であるほどに立ち向かってゆく、自我の主張と自己確認の欲求を満たそうとします。裏を返せばまた、生きていることへの自己証明でもありました。その行為は誰かが止められるものではなく、危険を承知してながらも自己責任をもって行為することで、生きていることの証しを実感する輩(やから)なのですから。その行為は、自己への究極な問いかけとなります。このような登山の激しい「**文明的自然な欲求**」が、初登頂、初登攀、さらに様々な記録を打ち立て、登山の歴史をつくってきました。幾多の失敗(死)を乗り越えてつくられたのが、登山の文明史といえましょう。

その結果 20 世紀末、ほとんどの登山課題は究められ、人類の課題を乗り越えながら進化を促す登山目標が、見当たらなくなってきました。その課題(目標)というものは、人類史における進化の課題を意味しますが、現代においては人類の歴史的課題から、ヒトの個たる「**個人史的課題**」へと移行しています。つまり、登山の文明史観からすれば「**山は死んだ**」ことになり、文明史観的登山は終焉となりました。

## 2) 登山の文化史は、失敗から学ぶ

登山を「個人史的課題」から取り組めば、人としての楽しみを享受する「**登山**

文化」となります。その積み重ねが「文化史」となるわけですが、文明史との大きな違いは「意識的におこなう(欲望)」ことにあります。文明史への参加は、自然なままの欲求を体現する無意識な中でも可能であり、“人類初”といった絶対評価が目的にあります。しかし登山目標は科学の発見、発明ほどの分野になく、エベレスト初登頂でほぼ終わります。次なる時代は多様化した「人の心の進化」の目標となりますから、その登山成果は個人の中に位置づけられます。

北極、南極、エベレストを地球「第1の極」から「第2、第3の極」までとすれば、これは文明史の目標となります。そして次なる「第4の極」を人それぞれの【心への探求】にあるとすれば、その心を満たそうとする行為の中に目標が見出されます。時空を超えて宇宙を思考する人の心は小宇宙にも例えられ、未だ解明されない神秘さがあります。個々が目指す発見・探究・向上等の目標は、人それぞれの心に宿り、地球「第4の極」として個の心への探究となります。

しかし個人なるがゆえに比較のパラメータは同一性を失い、その多様な探究成果は他者との比較・序列化が困難となります。そのことは文明史の中へ位置付けるのではなく、個による探究結果や成果は「文化史」として整理、位置付けることが妥当ではないかと私は考えるのです。登山ばかりでなく、山岳に関わる全てを整理し、【山岳文化】としてまとめあげることの意義は、文明的進化・発展の一方方向性に対するアクセラやブレーキ、ハンドルの、調整的役割を果たせるものと考えているのです。

地球第4の極『人の心への探求』において、個の成功や失敗がもたらす体験・報告 ⇒ 論考・考察が、他者への共鳴、共感を及ぼすそのことを「文化」と捉え、人間社会の多様性と理解されることが、文化の果たしえる役割ではないかと考えるのです。

失敗(死)を繰り返しても、登山が繰り返されてきたという事実は、合理性から理解できない情動の不可思議さでしょう。その過程や成果への共鳴は、次なる登山の動機となって立ち現れ、登山文化は継承されます。成功や失敗に学ぶことは、様々な作品や生き様に表現を変え、過去から現在へと積み上げられ、未来への動機付けとなって登山の文化史を成します。そして成功よりむしろ、失敗に学ぶことの方が多

いのです。なぜなら、人の感性は身近で大切なものこそ、失ってみないと気付かない大いなる愚かさがあるからだ、と、ヒマラヤ登山を通して私は気づかされました。

では、失敗から何を学ぶことができるのでしょうか。私の体験からまとめます。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1) <b>次なる成功への方策提言</b> (失敗要因を取り除く) : 体験から学ぶ成功への方策</li><li>2) <b>自然を受容する心</b> (非日常的体験) : 非日常体験から学ぶ日常の気づき(心)</li><li>3) <b>生きることの意味を知る</b> (死ぬことを考える) : 非日常体験から得る諸相の限界</li></ol> |
|---|

これらは山岳だけに囚われず、文化一般諸相を含みます。しかし山岳の非日常領域体験からは、日常としての一般諸相(文化)へいかに取り込むことができるでしょうか。例えば日常生活における特殊な体験、つまり身近な人の死や災害と直面した場合など、日常生活の中で起こり得る「**絶対的限界状況**」において発揮することができます。さらにまた日常生活の中でも、**絶対的限界**と**相対的限界**との**見極め**が容易となり、【**心のゆとり**】を保つことができます。それゆえ、有るがまま平静な心を保ちつつ、日常を過ごすことが可能となります。私がヒマラヤ遭難から得た、生きることへの知恵です。

### その3.

## 3.11 とクライシス・マネジメント

2011年6月:記稿

2015年9月:推敲

2011.03.11 東日本大震災と福島原子力発電所事故が発生しました。前者は千年に一度と言われる自然大災害。後者は人体に極めて有害となる放射能汚染をともしない、現代の文明技術で制御しきれない、人為大災害。両者の性質は異なるものの、近代における明治維新、太平洋戦争敗戦後の社会変革に次ぐ、日本社会の一大転換機となりました。

日本政府の対応は、震災処理と復興、原子力事故終息と放射能汚染防御の二正面作戦となります。千年に一度と言われる未曾有な自然災害に対応するだけでも極めて困難な状況に併せ、福島第一原子力発電所メルトダウン事故が加わり、誰がトップ・リーダーであってもその対処は極めて困難を迫られたことに変わりありません。誰がトップ・リーダーを務めても、国民を納得、満足させる判断や対処はできなかったと考えます。

特に福島第一原子力発電所事故に対し、自民政権交代後の民主党政府(菅直人首相)の対応は、国家統治能力の不慣れをさらけ出しました。その中でリーダーシップの稚拙さは、特に際立っていました。原子力発電所事故の検証は、政府、国会、民間、東京電力それぞれが事故調査検証委員会を立ち上げ、各々報告書をまとめました。

自然大災害、原子力発電所事故と、その規模・内容において比較すべき対象となりませんが、山岳遭難事故への対応、対処においても、それらミニチュア版としての同類性があります。これまで述べてきました山岳遭難体験は、危機への対応、対処、終息と受容等、これまで考え続けてきたものです。その視点から、菅直人首相をはじめとする時の民主党政府の危機管理意識とリーダーシップについての考察を加えるとともに、「リスク・マネジメントとクライシス・マネジメント」とを瞬時に区別して対処することを提言するものです。

「クライシス・マネジメント(Crisis management)」は第二次世界大戦後の東西冷戦・

核開発競争時代における安全保障が中心課題とされた危機管理手法として、「リスク・マネジメント(Risk management)」を含む危機管理概念とされています。その起源は第一次世界大戦における戦線拡大や、甚大な被害防止にあるとされますが、**クライシス・マネジメン**は巷(ちまた)聞き慣れない言葉です。

**リスク・マネジメント**は一般的危機管理概念として普及し、国家からあらゆる企業・組織等における安全・安心・防犯・防災から、個人の人生設計、家族の安心設計、山岳遭難対策等々、あらゆる分野におよんでいます。

クライシスとリスクの判断概念は曖昧であり、そのために待ったなしの危機管理対象において、対処を誤らせる事例が生じます。ここで問題としたいのは、福島第一原子力発電所事故の問題です。

資料編<その 2>で述べました「**絶対的限界**」と「**相対的限界**」の区分概念を適用することにより、危機管理における「**クライシス・マネジメント**」と「**リスク・マネジメント**」の区別を即座に判断して対処することにあります。この区別概念による危機管理は、危機管理者(リーダー)の最適判断をもたらすことと、併せて危機管理者(リーダー)の責任や人間的特性について考えてみます。

## 1. クライシスとリスクを区別

「**クライシス(Crisis)**」と「**リスク(Risk)**」はともに、危機や危険を対象とする同類な用語です。

「**クライシス**」と「**リスク・マネジメント**」の対象範囲は、世界、国家、地域、地区、組織、個人、その他様々な枠組みに分かれます。それら枠組みが特定された領域の中で、様々な危機管理や脅威管理手法が図られます。さらに地球環境保全に至っては、宇宙の中で人類の、日常的危機管理が問われます。危険や危機の進行中において、マネジメント統括者(リーダー)の意識と決断は、危機の進行を止めるか、破綻に導くか、重要な**ターニングポイント**となります。危機発生の時限において、**【元の状態に戻らない事態を対象とする「クライシス・マネジメント」と、元の状態へ戻る事態の中で最小限の負担で危機を抑えようとする対象を「リスク・マネジメント」**

と区別】します。この区別することにより、危機管理への対応と対処、決断の意識レベルが明確に異なり、適正な危機管理対応を図ることの提言であります。

これまでの一般的な理解において、「クライシス・マネジメント」は危機発生直後からの対処法が中心となり、「リスク・マネジメント」は事前に危機の内容を把握・特定し、発生頻度、影響度等を評価した後に対策を講じる、予防分析が中心と考えられてきました。

しかしこの概念区分は対象とする危機や危険を形象的に取り扱うものであり、それに対処する危機管理者(リーダー)自身の人間的特性には触れていません。危機管理における最大の問題点は、判断者自身の人間特性によるリーダーシップの発揮にあると考えることが、この論考の主旨です。

危機管理者は危機対処へのリーダーであり、日常における危機への対処意識と自覚、心情や哲学、それらを個と組織にどのように適用、訓練させるか、リーダーシップの判断基準訓練(意識づけ)が、欠かせません。そこで新たな危機判断基準概念として、危機事象の段階における「相対的限界事象」と「絶対的限界事象」との区別対処を導入し、【図-3】(P.184)に示す即時決断、最適判断をもって対処することが、危機への負担を最小化するものと考えられます。その意識づけは自己学習と訓練を重ねることにより、リーダーたる自覚と最適判断意識の向上をめざし、危機事態へ冷静な対応ができるよう備えておくものです。

【表-5】(P.184)に示すよう、リスク・マネジメントにおいて危機(リスク)管理者は、段階的な責任分担により組織化することができます。組織化は担当者の個性に左右されにくいメリットがあり、通常はマニュアル化されます。危機の事象が相対的限界領域にある場合、個の自主判断は難しいケースが多くあり、マニュアルや規則によって判断しやすくなります。しかしクライシス・マネジメントにおいては絶対的限界領域にあることから、即座な判断が求められ、危機管理者の人間的特性に係ってきます。事の重大さにより、即時の判断が歴史的決断となる場合もあります。3.11 福島第一原子力発電所電事故対応は、まさにその一つをなします。

これまでではリスク分析によって危機内容が把握され、マニュアルによって危機対応が体系化されてきました。全ての危機がマニュアル通りであるならば、危機管理

者の判断は不要となり、全てがオートマチックにコンピュータ・システムで対応可能となるはずです。たとえば国際宇宙ステーションやイーゼス艦のように、コストを度外視すれば、かなりの領域でコンピュータ化が可能となります。自動車さえも自動運転技術が開発される現代科学と技術は、日進月歩の進化を果しています。

計画の多くでは、コンピュータ・プログラムに則って、危機管理マネジメントの技術的対処を可能とします。その考え方の一つとして、フェイルセーフ (Fail safe) という設計手法に基づき、宇宙ステーションや航空機、高速鉄道のように、幾重ものバックアップ機能を組み合わせて安全を図ります。しかしそれであっても、技術を運用する人の側のヒューマンエラーや、金属疲労による機体破断のように、材料耐久性のミスマッチングや、人知の気づかぬ小さなエラーが積み重なり、より大きな危機や災害を招く要素は除きえません。

巷(ちまた)知られる「**ハインリッヒの法則**」は、“1件の重大な事故や災害の裏には29件の軽微な事故や災害があり、さらにその裏には300のヒヤリ、ハットする事故や災害に至らぬ気づきがある”と説明します。

経験則からまとめた類似に、「**マーフィーの法則**」もあります。

むしろ現実での重大危機対処は、マニュアル通りに展開されることの方が少ないのです。特に自然要素に左右される計画遂行の危機管理は、常に自然がもたらす人知の気づかぬ事象に遭遇し、思いもよらぬ危機をまねきます。従来の危機管理概念を【表-5】に示し、その改善のために提起するのが【表-6】です。

**【表-5】 これまでのリスク&クライシス・マネジメント概念**

	リスク・マネジメント	クライシス・マネジメント
目 的	予防	対処
対 象	発生前	発生後
段 階	把握・特定→評価→対策	予防→把握→評価→検討→発動
評価の尺度	発生確率×影響度	再評価
人間的特性	対象外	対象外

**【表-6】 提起するリスク&クライシス・マネジメント概念**

	リスク・マネジメント	クライシス・マネジメント
領域	日常的	非日常的
事象の限界	相対(主観)的限界	絶対(客観)的限界
状態	元に戻る	元には戻れない
マネジメント	危機負担を最小限化 (マニュアル、規則、定款、契約、その他)	危機回避又は新事態への対処 (論理的意志)
判断者と責任	段階的責任者(判断)	最高責任者(決断)
人間的特性	公共的(組織・集団)	個性的(歴史的な個性)

資料編<その2>で述べた、「**絶対的限界**」と「**相対的限界**」という概念から思考したもので、従来の危機管理はいずれも【**元に戻る**】ことを前提としています。新たな提起では、【**元に戻らない**】絶対的限界を初期に分別することにより、緊急度に応じた許容時間意識を明確にさせるものです。その許容時間により、判断と対処の内容や手法が変わります。戦場や大規模災害等におけるトリアージ(triage:優先度を決定して選別)は、すでに救命救急現場で活用されています。この場合、元に戻らない(例えば:死亡)場合は後回しにされ、元に戻る(例えば:生存)方が優先されます。原子力発電所原子炉のメルトダウンには、元に戻せない手段をとったとしても進行を止めなければ、限りなく大きな被災となり、生命の危機を拡散してしまいます。

危機管理者は、危機事象の**リスク**と**クライシス**の区別を真っ先に判断すべきで、その直観力や経験、論理的洞察力が求められます。

**クライシス**は限られた時限内に判断して対処しなければ、もう元へと戻れない一方向的緊急性があります。判断が遅れるほどに、災害は拡大します。元に戻る限界点を超えてしまうため、その時限、その事象における最高意思決定が必要となります。クライシス・マネジメントにおいては、トップ・リーダーの責務と権限の委任は出来ません。

リスクはそれよりも許容される時限の範囲が長く、元の状態へ戻れる領域にあるため、判断に必要な**双方向的思考**が許されます。相対的限界を超えても、復興や復元、補償等で元の状態に近づけることが可能なことを見究めます。それゆえ、リスク・マネジメントでは段階的に管理者を定め、段階的、組織的に責務と権限を委任することが出来るのです。行政を担う役所組織は、その代表例であります。

資料編<その 2>で判断と責任の限界を述べましたが、クライシスやリスク・マネジメントにおいても、「**絶対的限界**」と「**相対的限界**」を日常的に意識し、訓練することにより、様々な危機に対して咄嗟の適切な判断ができるようになるのです。

資料編<その 1>でヒマラヤ遭難体験例を述べましたが、日常生活において危機への意識付と訓練は、いざ危機の中に入った場合でも、一瞬の戸惑いの後に、すぐさま冷静な対処を可能とした経験を記したものです。トップ・リーダーは常に、重大で緊急度の高いクライシス・マネジメントへの意識づけと、危機をも受容する心の訓練が不可欠なのです。さらに、クライシス・マネジメントへの責任と決断から【**逃げないで受け止める心**】が不可欠です。

日常社会においてはリスク・マネジメント領域がほとんどで、クライシス・マネジメントは稀となります。そのことは、日常領域における危機管理をリスク・マネジメントとし、非日常領域における危機管理をクライシス・マネジメントに分けてみると、より理解しやすくなるでしょう。

この二つの概念を明確に分け、意識付けと準備を整えることにより、危険や危機に立ち向かうリーダー判断がよりの確におこなえる経験は、資料編<その 1>のヒマラヤ遭難体験で実感したところです。要素や規模によりその対処法は異なり、マネジメントの構造も、地球規模～国家規模～地域規模～特定組織内規模～小規模～個人規模と異なります。しかしその本質的危機特性は同類であり、リーダー意識の本質も同類となります。現代のグローバルゼーションは地球規模で展開されており、自由意思にもとづく自由競争社会は、そのリスク・マネジメントやクライシス・マネジメントにおいても、自己負担、自己責任を旨とし、それぞれの領域における主体者が負うこととなります。



資料編(その2)「**失敗に学ぶ**」で述べましたよう、ヒューマンエラーにおけるリーダーの立ち位置が現場にあるか、現場以外にあるかにより、リーダーシップ発揮の差異を生じます。山岳遭難の場合、トップ・リーダーを含め全員が現場にいる場合がほとんどで、リーダーが被災者になると、リーダーシップの不在が生じます。

3.11 福島第一原子力発電所事故においても、菅直人総理大臣(当時)が現場へ乗り込み、指揮を執りました。もしその時、原子炉のメルトダウンから原子炉爆発が生じた場合、どうなるでしょうか。総理大臣が欠けた場合には、副総理⇒官房長官等の委譲順位は定められているようですが、行政府の最高責任者として総理は、原発事故現場へ直接乗り込むべきではありませんでした。

行政府等の組織形リーダーシップは、組織の指揮命令系統に則っておこなわれるので、遅滞、歪曲、漏れ、妨害、遮断等の情報伝達不備を招きやすい欠点があります。情報伝達障害は、リーダーシップ欠如に等しくなります。リーダーの指示、命令欠如は、「取り返しがつかない状況を招く」可能性を秘めています。極めて希に起こる大きな危機に対し、組織型上位下達方式のリーダーシップは十分とはいえません。それら危機のレベルや範囲とともに、組織から個人までを対象とする様々な分野、領域での危機管理マネジメントが設定されるにしても、その運用上のトラブルまでは読み込めないものです。

現代社会は文明進歩に伴う人工都市が肥大化し、総合的・統括的に全てを把握できなくなり、「**判断の質**」の**低下**(情報エントロピーの増大)を招いています。そのことはさらに、「**総合人間力**」の**低下**をもたらせることとなります。文明肥大化社会のマネジメントは、組織分散しなければ対応できなくなりました。そのトップ・マネジメントに「**神**」を利用することは、もはや現代社会において出来ません(「神は死んだ」：ニーチェ)。万能でない人間の「**個の限界**」を見据えなければならない現代社会においては、「**トップ・リーダーの総合人間力**」は益々重要な役割を担ってきました。その見識、覚悟、決断力は、文明と文化の歴史を踏まえた、理性の明晰さと感性の多様性を含んだ【総合人間力】が求められます。リーダーシップの決断を伝える言葉や文章には、人類へのメッセージ性が求められます。しかし現実には、そのような「人間(リーダー)」が実在しないこともまた、理解しておかなければなりません。

## 2. クライシス・マネジメント

クライシス・マネジメントは、ある危機状態が元の状態へと戻らず、新たな事象へと進展される限界点、絶対的限界領域における危機管理マネジメントとなります。それは日常領域から非日常領域へ移行する境界点であり、極めて重大かつ迅速な判断が求められます。国家が戦争へ突入することや、空想的地球防衛、軍事侵略や放射線被曝、大規模災害等が思い浮かびます。登山としては遭難死亡事故等、生命を失う危機はクライシス・マネジメント分野となります。非常時における抑止や防衛、反撃から攻撃、制圧の手段には、軍隊を動員する組織的クライシス・マネジメントがあります。いずれの場合も対処出来なければ、国家や地域は破壊や崩壊、消滅となり、人々は多くの生命を失う絶対的限界領域に至ります。

クライシス・マネジメントは、危機が進行する中で絶対的限界点へ至る手前での判断・対応となります。また、防ぎようのない大規模自然災害においては、事後処理の判断・対応となります。それら事象は絶対的限界を過ぎると変形・変質し、もう元へは戻れません。この日常から非日常的状態へと移行するクライシス・マネジメントは、トップ・リーダーの責務です。

2011年3月11日発生、東日本大震災における広域地震大津波被害と、東京電力(株)福島第一原子力発電所災害は、一首長、一株式会社社長の判断領域を遙かに超える甚大な被災範囲と、復旧、復興、廃棄には長い年月をもたらせる非日常事態となりました。国家行政トップ・リーダー(首相)は、その非日常事態を掌握直後から、国家レベルの自然災害対処(地震、津波)と文明危機(原発事故)であることを即時に理解、判断出来なければなりません。トップ・リーダーの役割はまず、事態の限界状況を把握し、クライシス・マネジメントとなるか、リスク・マネジメントとなるか即座に判断することにあります。特に原発事故に対してトップ・リーダーは、事態をクライシスと判断し、最悪事態対処(クライシス・マネジメント)への覚悟を決めるとともに、優先順位(Priority)に基づく大きな対処方針と、抜本的対策への実行指示となります。

東日本大震災は、改めて自然災害の破壊力の大きさとともに、人が容易に制御できない原子力活用文明の恐怖を、一瞬の間に現実の一大危機として晒してくれ

ました。とくに原発事故を机上のリスク・マネジメントで整備せざるをえない自治体や電力会社(原子力発電事業者)、原子力安全保安委員会等は、想定領域をはるかに超え、人類危機レベルへのクライシス・マネジメント意識が備わっていませんでした。メルトダウンによる格納容器の破壊と放射性物質の広域飛散は、国内のみならず地球規模での核汚染となり、生命、財産、主権を脅かします。この事態の終息は、最優先の緊急事態です。原子力発電事業者(東京電力)、日本国内だけの問題では収まらず、世界へと波及する人類の危機となります。現在の原子力事故終息技術は確立されておらず、世界の英知を結集しなければならない未経験な科学技術の領域にあるとされています。

国家規模における原子力事業マネジメントは法制化され、その権限と責任範囲、運用を法に基づき、委任の組織化がされています。しかし現状の法体系は、「元に戻らないクライシス」と「元に戻すリスク」の峻別思想は見えず、**緊急事態**や**非常事態**の定義もなく、担当主務大臣(トップ・リーダー)の「意識」に係るばかりとなっていることが見えてきます。

以下に関連法規を検証してみましょう。

## 1) 災害対策基本法

第2条は【災害】【防災】その他の定義を定め、第2条以降では各々の責務が決められています。その所掌事務機関として第11条以降【中央防災会議】等を定めます。中央防災会議の会長は内閣総理大臣が当り、防災担当大臣以下、各委員によって構成されます。国に準じ、地方防災会議も同様に組織されます。第三節では非常災害対策本部及び緊急対策本部として、第24条以降、設置、組織、所掌事務、権限と委任等を定めています。そして同24条の中で「非常災害が発生した場合において、内閣総理大臣は臨時に内閣府に非常災害対策本部を設置することができる」ようになっています。さらに第25条により非常災害対策本部を組織し、その本部長は国務大臣があたるとしています。

しかし【非常災害】という言葉の定義はなく、非常災害と認定する者が誰であるか、法文上の定めはありません。その任に当たるのが内閣総理大臣であろうことは、

第 24 条を読めば推定できます。つまり非常災害の認定は内閣総理大臣(トップ・リダー)の意識に係ることになります。

同様に【災害緊急事態】の言葉の定義もなく、第 11 条によって内閣総理大臣は災害緊急事態の布告について中央防災会議(会長は内閣総理大臣)へ諮問することになっています。【災害緊急事態の布告】は第 105 条に定めており、閣議を経て布告し、緊急災害対策本部を設置します。災害応急対策は第五章、第 50 条以降で細かに規定していますが、動くのは市町村、都道府県、各種行政機関、地方公共団体等であります。

以上のことから、【非常災害】や【災害緊急事態の布告】【激甚災害】というクライシスの判断は、一重に【内閣総理大臣の意識】に係っているということになり、その判断基準、概念は示されていません。(政令、省令、規則までは調べていません)

ここに、クライシスとリスクを分ける考えを導入し、「国家的クライシス・マネジメント」の責任者は内閣総理大臣とし、「国家的リスク・マネジメント」は内閣総理大臣からの委任により、その責任者を担当国務大臣と明文化することを提起するものです。「国家的クライシスの判断」は、当然に内閣総理大臣の専権事項であるはずです。それにより現行法体系は変わるとは思いますが、ここでは新たな法律の論考をおこなうものではありません。

## 2) 原子力災害対策特別措置法

第 1 条は【原子力緊急事態宣言の発出】、【原子力災害対策本部の設置】、【緊急事態応急対策の実施】等をもって、原子力災害から国民の生命、身体及び財産保護を目的と定めています。同法第 3 章において「原子力緊急事態宣言の発出及び原子力災害対策本部の設置等」、危機管理マネジメントを定めます。第 15 条で原子力緊急事態発生の確認は主務大臣がおこない、直ちに内閣総理大臣へと報告。内閣総理大臣は直ちに「原子力緊急事態宣言」を発し、以下を公示する。さらに閣議決定を経【原子力災害対策本部】を内閣府に設置し、内閣総理大臣が本部長となって対策に当たります。原子力災害対策本部員には、内閣総理大臣から任命された国務大臣や指定行政機関の長、内閣危機管理監により組織され、

危機管理マネジメントを掌握します。

- 一 緊急事態応急対策を実施すべき区域
- 二 原子力緊急事態の概要
- 三 区域内の様々な居住者に対して周知させるべき事項

次に内閣総理大臣は当該区域首長に対し、緊急事態応急対策事項(立退き避難、屋内避難等)の勧告や指示をおこないます。緊急事態が収束されると「原子力緊急事態解除宣言」を公示します。

原子力緊急事態応急対策の実施は、原子力事業者が当ります。同法第4章において「緊急事態応急対策の実施等」により、第25条、26条に内容を規程しています。原子力事業者の責務は第3条に定められ、第4条の国の責務よりも前にあります。原子力事業者の優位性は、原子核制御技術及び廃棄物処理等の現代文明未解決部門を運用していることにより、高度な専門性を有していることによるからでしょう。軍事同様、シビリアン・コントロールが難しい部門です。

しかし原子力の危機は放射能汚染物質が拡散すると、世界・人類の大問題となります。原子力専門家と国内法だけの問題でないことは、いまだ核燃料取り出しができず、廃棄作業に移行できない福島第一原子力発電所事故とその経過が物語っています。世界の英知、技術を結集し、最短期間をもって終息させることが第一としなければなりません。

このクライシス・マネジメントこそが、内閣総理大臣の主務なのです。

### 3) 有事法制

【有事】とは、他国が日本の制空権、制海権を確保した上で地上軍を日本本土に上陸侵攻することをいいます。軍事侵略に対応する国家防衛の概念をいい、大規模災害等への対処ではありません。また東日本大震災は、広域自然災害と原子力発電事故放射能汚染災害の非常時とはいえ、憲法の枠組みを超える**非常事態宣言**や**戒厳令**の発布となる、**国家緊急権**を発動する範囲のものではありませんでした。もし放射能汚染の拡散が国内規模で収まらない状況となれば、前記に等しい非常事態宣言も考慮しなければなりません、「**有事法制**」とは性質が異なります。

#### 4) 憲法

第 13 条には「個人の尊重・幸福追求権と公共の福祉に反しない限り」という定めがあります。行政権執行に伴う公共と個人との乖離は、いつの時代、いつの危機事態にも生じます。執行する側の平等さと、される側の個人差との乖離は、これまでどこの国、どんな政治体制においても、解消されていません。現代の日本は、その乖離が最も少ない部類の国にあると思われます。

国家レベルの「クライシス・マネジメント」における**トップ・リーダーの役割**は、時代の文明を背景として、文化的価値の統合をもった**大局観**を示し、公共の福祉の中に個人の権利を位置付け、**説得すること**にあると考えます。その歴史的価値基準を踏まえ、大局からの判断を世界へ示し、国民へ説明・説得させるのが、トップ・リーダーの役割となるはずです。

#### 5) その他法制

内閣の職務、権限等は、憲法第 5 章(第 65 条～第 75 条)に定められ、内閣法第 1 条には職権、内閣法第 2 条には行政権行使にともなう国会への連帯責任をもっておこなわれます。しかし、平常時、非常時、を区別する概念は導入されていません。非常時における内閣総理大臣の「クライシス・マネジメント」に類する危機管理職務の定めは、自衛隊法第 7 条に自衛隊の指揮監督権が定められ、警察法第 6 章 71 条～74 条に警察の緊急事態の特別措置が定められています。

大規模災害に対し、アメリカの FEMA(Federal Emergency Management Agency of the United States :アメリカ合衆国連邦緊急事態管理庁)のような、天災や人災に独立して対処できる国家組織は、日本にありません。

#### 6) 危機管理者への考察

国家として対応しなければならぬ「クライシス・マネジメント」の領域において、3.11 東日本大震災の菅直人首相を初めとした日本国政府危機管理者の対策は、後手に回っていると、マスコミを中心に国会でも批判に晒されました。我々が報道から得る政府の危機管理情報は、確かに為政者(リーダー)の認識の甘さと、腹が据わ

らぬ決断の曖昧さを露呈しています。危機管理部署が乱立し、対策は二転三転します。リーダーシップの混乱や不在は災害対処の遅滞を招き、時を失い、二次災害以降を誘引します。

**3.11 東日本大震災**は、誰が為政者であっても容易に収束できる事態にはなく、極めて困難な判断と対処に迫られていることは確かでした。**戦争の場合**には指導者対指導者の戦略的駆け引きがあり、敵味方の相対的判断を読み合うことが不可欠です。しかし自然災害・文明災害における対策・対処は、絶対的限界点を見据えた優先順位(Priority)の判断となります。敵対する相手との駆け引きではありませんから、判断はさほど難しくありません。地球や国土を守るか、国民の生命・財産を守るか、為政者の名誉を守るか・・・、状況における**絶対的限界点**を把握できれば、判断の目的は単純化されます。その時優先順位(Priority)を決める人間力が不足していると、その判断は難しくなります。つまりは、「**総合人間力**」が必要なのです。

「**クライシス・マネジメント**」よりも判断に困るのは、相対的限界領域における「**リスク・マネジメント**」です。様々な領域において情報が混乱し、状況把握は勿論のこと、判断基準や指揮・命令もあいまいになりやすい。判断の価値基準も多様となり、それらに係るリスク調整は容易ではありません。しかし限界点までにはまだ余裕があるのだから、冷静に優先順位を考慮して対処できるはずですが。しかし現実の切羽詰まった危機状況を目にすれば、過大なプレッシャーがのしかかり、冷静でいられないのが普通です。この「**心理的な初期問題**」に対し、**登山の危機体験**は心に少しのゆとりを与えてくれます。経験の蓄積は、腹を据えるのに時間をかけません。要は腹を据え、覚悟を決め、無私な心境に、素早くなれることにあります。

**トップ・リーダー**はまず、予見を持たずに全てを受容する心の在り方が肝要です。次にこの危機が、「**クライシス**」か「**リスク**」かを即座に判断する能力です。例え「**クライシス**」であっても訓練していれば、一瞬の動揺の後にすぐに心の落ち着きを確保できるものです。ヒマラヤ遭難体験で、私はそのことを実感しました。

危機でありながら危機でないと最初から「**予断**」を持つことは、以後の対処を誤った方向へ導きます。その予断は、危機の実態を自己の解釈に都合良い部分だけを拾い集めて構成し、真実の全体像を見失わせてしまう恐れがあります。予断の意

識を強く持つと、不都合な真実が見えなくなり、聞こえなくなり、危機の本質を歪曲させてしまいます。それゆえに、予断の思惑と異なった危機があることへの気づきを遅らせ、結果に過ちを生じます。相対的限界領域においては、特にこの「予断」が介入しやすいのですが、絶対的限界領域では予断が介入する余地などありません。客観的事象が相手ですから、成すべきことは明確であり、判断も難しくありません。

例えば福島第一原子力発電所災害初動における首相や官房長官発言からは、「予断」の特徴を多く見受けることができました。特に**枝野官房長官発言**は、予断の先走り、容易に見破られる実証説明力不足は、国民をさらなる不安に陥れてしまう効果がありました。国民に不安を与えたくない予断の意図は理解できますが、説明の言葉に反映される人間力不足を、テレビ画面は無情に表現します。かつてマクルーハンがテレビを称して「クール・メディア」といいました。視聴者は、映像と言葉を冷静(クール)に受け取ります。他方で「ホット・メディア」はラジオ音声等の、目に見えなくて、様々想像させながら感性を刺激する手段をいいます。これを意識して最も有効に用いたのが、第二次大戦におけるドイツのヒトラーといわれます。

内閣官房長官は内閣事項の総括事務(内閣法第12条、第13条)を担う代表者であり、総理大臣に代って内閣の公式見解を国民に向けて発信します。枝野官房長官は弁護士出身であり、その発言には言質を取られぬよう、慎重に言葉を選んでいたよう見受けられます。内閣の職務は憲法第73条に定められ、法律の執行に当たる行政事務を総括している国家権力の執行者です。内閣のスポークスマンたる枝野官房長官の発言、その言葉にこそ言質を与えて国民に説明し、その言葉の責任を負うことこそが内閣の職責、と私は考えるのです。

内閣の発言に言質を与えると国会で上げ足をとられ、足元をすくわれるから、それを避けるために言質(責任)を伴わない軽い言葉で説明する。もしこの推論が真実であるならば、内閣も国会も、何と本末転倒していることでしょう。

テレビ画面に映し出される**リーダーの総合人間力**は、経験と知識を積んだ視聴者からは容易に見破られるものです。リーダー自身の経験がなくても、絶えざる日常の危機管理意識を磨くことにより、判断力、決断の時を察知する洞察力は磨かれます。冒険者、探検者、研究者、その他前例なき事象に挑戦している人々は、未体

験な不安をバネに絶えず危機管理意識を磨いている人達です。「クライシス・マネジメント」は百態百様、リーダー自らが意識し、対処すべき特性をもっています。トップ・リーダーの弁明は危機に際して不要であり、危機の全てを責務とし受容してこそ、その責務が果たせるのです。そして今、出来ること、出来ないこと、を冷静に素早く判断し、対処することにあります。出来ないことを出来ると言って空手形を切るとは、その場しのぎでしかありません。後の結果を、さらなる不幸に陥れてしまう可能性が多いのです。そのような対応が、未熟な民主党政権の落とし穴と理解しました。

原子力発電技術は、未だ人類が制御できない部分をともなった、未完成技術であることを踏まえれば、政府は、原子力事業者(東京電力)まかせでなく、人類文明の課題として、地球規模プロジェクトで取り組む危機と受け止めなければなりません。政府には、対応を主導すべきトップ・リーダーの決断と、意志伝達、何を指すかという「確かなメッセージ性」が欠けていました。政府(官房長官)から発信する言葉は多いのですが、言質を与えない弁明と映り、いずれも国民にとっては政治家への信頼を失わせる結果を招くものでした。

被災者は突然、肉親の死、恋人・友達・友人・隣人、その他多くの人々の死を見つめました。思ってもみなかった非日常環境の中に閉じ込められ、一瞬にしてあらゆる日常生活基盤を失ってしまった。生命維持に不可欠な**衣・食・住**、とりわけ食料、水、仮住い、情報は不可欠となります。次に生活の持続と改善を図るための**ライフライン**(給排水、電気、ガス、情報)と**衣**(衣類)**医**(医療)、**食**(食料)**職**(仕事)、**住**(住まい)、**育**(子供の教育)が欠かせません。それら非日常環境から日常環境へといかに短い期間で戻れるかが、復興の努力過程となります。そこには努力する意志とともに、より効果的なマネジメントが必要です。マネジメントをより有効に機能させる役割は、リーダーシップの存在と行政組織機能の円滑な運用にあります。その面からも、菅直人首相を始めとした民主党政府首脳のリーダーシップが国会において問題視され、6月2日の内閣不信任決議案の採決(結果:否決)となりました。

### 3. リスク・マネジメント

「リスク・マネジメント」は、まず想定される危機の事態を掌握し、その発生頻度と影響度を評価し、いかに避けられるか、いかに被害を最小限に抑制できるか、いかに復元復興できるか等々、予防回避措置と復元回復対策との相対的比較検証考查プロセスでの判断となります。想定される危機の結果と対策を把握し、相対的限界領域事象を比較検証しながら、相対的バランスを図ることへのマネジメントとなります。また、「リスク・マネジメント」の領域を超えてしまう復元不可能となる場合には、前記の「クライシス・マネジメント」へ即移行することになります。

#### 1) 日常的リスク・マネジメント

日常的なリスク・マネジメント業務には生命保険、損害保険、賠償保険、貸借担保融資などの金融面や警察、消防、救急、防衛等の緊急措置対応があります。日常生活において常に発生する「リスク・マネジメント」は、社会機構や社会制度に組込まれます。生命、財産を脅かされる緊急措置には警察、消防、救急医療等、社会の公共機関が対応。リスクに対する経済的担保には各種保険があり、個人や法人等の危機意識と負担能力に応じた任意加入となります。一方ではまた、薄く広く負担し合う公的制度もあります。これらのリスクは、発生頻度が高いがゆえに社会制度化されており、激甚的なクライシスとは異なってきます。

これら「リスク・マネジメント」は「**相対的限界**」の領域内にあり、生命、財産の喪失を除けば、自己の責任と負担能力に相対的に依存する、自己判断領域となります。事前に予測・想定・投資を促し、予防、対策を図ることです。「リスク・マネジメント」ではそれらの手順を定め、設計し、訓練や警告によって危険や危機に備えます。危機を乗り越える対処により、もっと良い事態へ改善するか、もっと悪い事態へ進行するか、取り巻く環境による相対的限界領域の中で各々の判断となります。

この**メリットとデメリット**との相対性の中から、いかに**デメリット**を抑制して**メリット**を引き出すかというマネジメントは、「**相対的限界領域内**」における判断です。このマネジメントは、「クライシス」に至らぬ判断の先の、主観的に感ずる限界領域ま

でを対象とします。人が主観的に感ずる限界観にはまだ余裕が含まれており、絶対的・客観的限界へ至るには、およそ 1/3 程度の余力を残していると思われます。

それゆえ、「リスク・マネジメント」は主体的作為をおこなう全ての人々の判断意識の最初にあり、別な表現では**損得・利害・得失の計算・打算**でもあります。このことは、誰でも普通におこなう日常的マネジメントで、意識しておこなうか、無意識のうちにおこなうか、人様々です。

このように「リスク・マネジメント」はリスクの内容をを分析し、シミュレーション(損得勘定)をおこないます。その手法モデルを提供するのが、乱数、確率、行列、サンプリング、検定等の統計数学です。コンピュータソフトの EXCEL は、その計算を容易にしてくれツールといえます。しかし本論では、リスク・マネジメントの分類や対処手法等々は論旨から外れますので、省略とします。

## 2) 山岳遭難リスク・マネジメント

恒常性の高い日常的危機管理に対し、蓋然性が低い山岳遭難危機管理はどのような役割を担うことが出来るだろうかという点から、以下論考を進めます。

日常性の危機管理と山岳遭難危機管理とでは、その本質を異にします。任意活動である山岳遭難危機管理は、自己責任、自己負担が基本原則です。一方、日常生活にともなう危機管理においては、必ずしも自己責任、自己負担の基本原則が相当とは限りません。日常の社会生活の中においては、病気、事故、事件、火災等、誰にでも起こりうる類似した身近危機が様々潜んでいます。それら日常起こりうる身近危機への対応は、広く浅く人々が支え合う公的社会制度を確立して、各々が参加をしています。日常の小さな負担を蓄積し、罹災した者の危機へ充当する相互扶助を社会制度として組み入れるものです。

さらに自然災害や原子力災害、戦争のような、日常生活者の意図しない自然や人為的強制的罹災をこうむる場合は、社会の総力をもって罹災生活者保護や被災予防、防御対策等を実施しなければなりません。この事態においては、リスクとクライシスが混在してきます。

昨今の山岳遭難においては、警察や消防機関に救助・搬出依頼する場合がほと

んどです。入山の届け出、救命救急や検死など、法律や条例で定める行為もあり、公共機関の関与が当たり前と思ひ、その費用負担も公共機関が負うもの、と思ひ込んでいる昨今の登山者像があります。

2011年5月15日、山岳(漫画)映画「岳(ガク)」を妻(大学山岳部OG)と一緒に鑑賞してきました。様々なシーンで間違いや不整合を指摘できますが、漫画(?)と割り切ってしまうえば、映画そのものは景色がきれいで面白いものでした。しかし山岳遭難救助が警察行為の正規な業務と認識されやすいシナリオに、私は危惧を覚えます。「なぜ山に登るか」を考え続けた我々世代の登山行為は、山岳遭難危機管理を公共が負担すべき性質のものとは考えませんでした。個々の山行は個別限定的な個人の行動であり、**自己負担、自己責任**は当然な範疇と考え、それに対応する**登山者集団**(山岳会)をつくって担保していました。その理由は遭難者自らが自己避難、自己脱出、自己遺体搬出できるわけがなく、**仲間**に依存せざるを得ないからです。そこで必要となるのが、遭難弱者を補う山岳救助搬送組織ですが、我々の世代は山岳会(部)や同人グループ、同好会等の一次集団をつくり、組合や連盟、協会等のさらなる上位団体組織が形成されました。今もそれら団体は残されています。山岳人集合の第一義は、同好の仲間集団における共同行為者(パートナー)の確保と情報交換。第二義は、危機管理と遭難対策相互扶助であります。

**山岳遭難危機管理**、その本質は個別限定的な**自己責任**の特性を持っています。しかし現代、広域かつ不特定多数な登山者は、「**たかが山登り**」と考えるのか、自己責任はもとより、仲間や集団による相互扶助体制の考えを持ちません。**インターネット**で仲間を募り、現地で合流して登り始めることが最先端な登山であるかのような時代になっています。そしていざ困った時は安易に**携帯端末機器**で、ヘリコプター救助や救急車出動を要請します。それゆえ個々の「**リスク・マネジメント**」はなく、警察・消防業務に依存する現状です。

一方でこのことが常態化し、行政機関や登山関連事業者等は、登山者の登山届け提出義務化とともに、**携帯端末機器**の携行を呼びかけています。この一面だけを考えて、「**されど山登り**」という**登山の本質**を求めることに逆行しています。

山岳遭難救助が映画化され、テレビドラマ化される時代をの中で、映画「岳(ガク)」

は制作され、興業されました。この映画は山岳を舞台とした人命救助物語であって、登山を讃えた山岳文化を表現するものではありません。

遭難救助が常態化するほどに、行為者(登山者)が行為(登山)に向かう質の低下を招きます。そして、相応の負担は地方自治体にのしかかります。出費は税金でまかなわれ、非納税者(地域外)たる不特定登山者へ使われることを、納税住民が納得できるでしょうか。

任意活動たる登山の危機管理と、一般社会の日常危機管理との相違は、「遊び(趣味)と生活(文明)」の蓋然性をもって分けることができるでしょう。遊びは自由な任意性があり、自己責任の範疇です。生活は必然であり、生活者公共の負担は当然でしょう。

現代登山は「遊び(趣味)」の範疇であり、自己負担、自己責任が基本です。文化としての「遊び」は、人がよりよく生きるために必要な、生存の十分条件を満たすものとなります。より良く生きたいがための文化行為と理解できます。一方「生活(文明)」は、人が生存を続けるに当たっては不可欠なものであり、生存の必要条件となる蓋然性があります。

これまでは山岳遭難に公共の税を投入することに違和感がありましたが、今日の登山ブームから考察すると、もはや山岳の世界は日常社会の延長となり、非日常世界でなくなりました。古き登山者は「衣・食・住」を背負って登りましたが、現代多くの登山者はそれらを山荘に依存し、対価を支払います。背負う荷物が軽量となり、特に身体訓練をしなくてもアルプス登山が可能です。しかしその分、途中で悪天候に急変すると、簡単に遭難を招いてしまいます。それを避けるためには山岳ガイドに対価を支払い、なんとか山荘までを頑張ります。山荘はホテルのように改修、改築、新築され、個室、風呂、フルコースの食事・・・おもてなし等のサービスを提供しています。それが良い、悪い、の批判を記するのは論旨ではありませんが、日常社会の延長であるならば、警察、消防、行政等、公共機関の介入もやむなしとなります。もはや山岳は非日常的ロマンを求める世界でなくなり、日常が延長したリアルな世界を楽しむ社交場と化しました。文化芸術的感性よりも、文明的快適サービスを受け、金銭の対価を支払って享受する時代なのでしょう。名ある山稜の登山道整備も

同類です。山岳遭難リスク・マネジメントもまた、金銭対価のサービスに含まれ、登山者自らの自衛措置や心構えを欠いています。そしてもし、サービス提供者に瑕疵が生じれば、裁判訴訟を起こします。

それらはいずれも、「**たかが山登りの世界**」の話です。本論では**アルピニストの昔話**、「**されど山登りの世界**」を再認識してほしいと願うものです。

日本山岳協会や勤労者山岳連盟はかねてから遭難対策を図っていますが、組織内登山者が対象です。不特定多数な登山者(日山協いわく=未組織登山者)に対する遭難救助搬出は対象外です。

戦後第二の登山ブームの主演になっている「**たかが山登り**」の登山者に対してはむしろ、山岳(漫画)映画「**岳(カケ)**」そのものを適用するの一案となります。さらにそれ以上に、映画主人公やヘリコプター・パイロットのような人物象を組織化し、危機管理庁(アメリカのFEMAのような)の下に本格的山岳遭難救助機構を編成するのも良いと考えでしょう。そして登山は有料化し、コースに応じた「登山料」を徴収するのです。さらに死体運搬や検死業務を緩和し、諸法令の見直しが必要となります。

## 4. 環境エネルギー問題の考察

### 1) 環境問題への考察

地球環境保全はリスクもクライシスも含まれます。地球温暖化防止対策については、これまでの文明史を踏まえた、先進国と発展途上国との間で意思統合ができません。過去を斟酌した公平を図り清算を第一とするか、過去は消去し未来へ向けた現在の公平から開始するか、過去を踏まえつつ未来に対する新たな公共(Commons)への意思統合は、交渉の入口条件整備でさえ調整は困難です。しかし今や地球環境を論議するとき、第一に問題とすべきは「**人類欲望の抑制**(文化価値)」についてです。新たな「**公共**(Commons)」をめざし、人類の欲望は無制限な自由競争でなく、人類存続の為に公知をもって個の権利は抑制されなければならないでしょう。その為には、環境を共有する中でのリーダーを必要とし、公知を語り、個を説得できるリーダーシップが不可欠となります。

問題はその歴史的背景をいかに正しくトップ・リーダーが認識するかです。危機の経験を重ねることは不幸な事態ですが、平時においてこそ危機管理意識を高め、訓練やシュミレーションを重ねておくことが、いざという時の危機管理に役立ちます。トップ・リーダーにとっては、イメージトレーニングが大切です。アメリカ大統領が核弾頭の発射ボタンを常に保有管理するように、平時においても国家的危機管理意識はトップ・リーダーに不可欠となります。その意識による自己練磨は、緊急かつ非常時に冷静な対応を可能とする、唯一の道となります。クライシスを想定したマネジメントこそが、トップ・リーダーたる役割と考えるのです。

それゆえ、トップ・リーダーの判断はどこが「**絶対的限界**」なのか、どこまでが「**相対的限界**」なのかを常々考え、迅速に見究めることにあります。それ以降の対応は、それぞれ必要とする組織的役割を設け、委任によって各々担当が受け持ちます。トップ・リーダーが目的実現を目指す背景には、この「**クライシス・マネジメント**」の意識を平時から常態化しておく、緊張が重要です。いつ起こるかわからない自然災害等に備えるには、リーダーの総合人間力による即時な「**クライシス・マネジメント**」に大きく左右されます。

戦後半世紀以上を経た今の日本社会においては、三世代目の交代期となり、広島・長崎の原爆被災体験も、語り部が極めて少なくなりました。日米安全保障条約や北方・南方・竹島・尖閣諸島、等の領土問題も、知識の中の観念論に収縮しつつあります。ジョセフ・キャロン元駐日カナダ大使は、「グローバル化した世界の中で、今や**国境は頭の中にあり**、地理的に国境線を変えるのではなく、**変えるべきは感性にある**」(2014.04.03 朝日新聞)と述べるよう、平面二次元で考えていた地政学的世界は、まさに見えない意識の中、抽象の世界、虚な社会(6章. 人の意識・文明・文化=環境の複素な世界構造、P.81)を加えて理解しなければ、再び戦火を交えることになってしまいます。虚な社会に国境はなく、人類みなひとしく対等な立場に立てるのです。

地球環境問題は統計数値から帰納するシュミレーション・モデルをよりどころとし、生活体験から演繹される提言や生活実感とかけ離れたコンピュータグラフィックス化しています。太平の世が続き、何事もなかったような日本国民の無意識を、**3.11 東日本大震災**は一挙に露呈させてくれました。他方では静かで粘り強い東北人被災

者の特性や、国民支援の輪や絆の連帯意識が即座に広がりを見せました。国政のリーダーシップ不備を、国民のメンバーシップが補ったとも言えましょう。近年のグローバル化による所得格差ほど国民意識の格差は少なく、日本国民の同質性はまだ残されていることを大災害は証明しています。

ある領域のトップ・リーダーは、常にその領域における「クライシス・マネジメント」を心掛けていなくてはなりません。国家とヒマラヤ登山隊とは比較すべきスケールが異なりますが、結果に死を招く「クライシス・マネジメント」の質と意識においては、国家も登山隊も同類なものはずです。資料編くその1>で述べた「ヒマラヤ遭難登山隊長の自省」では、その時トップ・リーダーとしての「クライシス・マネジメント」について述べてみました。スケールこそ異なれ、トップ・リーダーの意識と判断・責任の重圧は、山岳遭難と事前の準備で体験したところでは、山岳遭難に備えるべくリーダーの資質は、広義なトップ・リーダーに通じるものがあります。「クライシス・マネジメント」は画一的、マニュアル通りにゆきません。トップ・リーダーの日常意識と総合人間力が発揮され、危機に面した対処の結末を分けます。

3.11 東日本大震災は、戦後の国策として原子力発電を推進してきた日本のエネルギー政策と、近年の環境政策の可否が浮き彫りとなりました。

再生可能エネルギーの活用と省エネルギー技術をより一層活用すべく、政策は方向転換を図ることになりますが、最も有効な決断は、発電能力の限界を知り電気に頼り過ぎないことです。発電能力に応じた節度ある電力使用、つまり【**節電と省エネルギー**】への意識付です。エネルギー多消費文明に対し、環境バランスを図るべく、文化の力を発揮すべき21世紀です。

※ 再生可能エネルギー：①地熱エネルギー【地熱発電、地熱利用】、中小水力発電 ②自然エネルギー【太陽光発電、太陽熱利用、風力発電、バイオマス・エネルギー(発電、直接利用)、温度差エネルギー(氷雪利用)】③廃棄物エネルギー【ゴミ発電、黒液・廃材利用】

## 2) 電気エネルギーに関する考察

私は電気設計技術者でもあることから、2004年の日本山岳文化学会第2回大会において「太陽光・風力発電と発光ダイオード照明による環境技術」を発表しました。論旨、【太陽光・風力発電とLED照明は山岳地帯や第三世界などのインフラ整備に有効であり、配電網が整備された都市環境ではLED照明等の省エネ効果が有効となる。このように環境に適した技術の使い分けが必要】、を述べました。

口演では1990年～2010年までの日本のエネルギー概要をまとめ、現状の技術からすると自然エネルギー(太陽光発電、風力発電、バイオマス発電)は蓄えるのではなく、配電線へ系統連系(発電電力を配電線に供給)させるのが最良の方法であることを示しました。太陽光・風力発電は原理的には良いのですがエネルギー密度が低く(取り出せる電力が少ない)、現状技術ではその発電エネルギーよりも施設建設維持エネルギーの方が上回り、総合的には他の発電エネルギーの負荷となってしまいます。自立型エネルギーでないことを、概略計算で示しました。自然エネルギー変換技術の一大進化か、革新的エネルギーが発見されない限り、小規模な**再生可能エネルギー**【新エネルギー(自然エネルギー、廃棄物エネルギー)、地熱エネルギー、中・小水力発電】を含め、系統連系により集積利用せざるを得ません。また、発電量が不安定な自然エネルギー利用においては、蓄電装置と組み合わせることが良いのですが、それに適した蓄電装置がまだありません。その候補として電気二重層が大容量化されていますが、まだ大規模施設に実用的でないこと等を説明しました。

原子力発電は運転中における二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)発生が少なく、2002年の政府決定による「地球温暖化対策推進大綱」では安全性を最優先に利用拡大を認めています。しかし、施設建設や運転中における安全性の問題、使用済核燃料の処分・再利用問題等、未解決技術を残したまま実用化を先行させています。また、使用済み核燃料の原子爆弾への転用や核ジャックやテロ対策等、地球規模での安全保障問題は残されたままです。

地球を照らす太陽光は、高温重水素のプラズマ状態における原子核融合による放射熱エネルギーの一種です。その原理を地球上で再現しようとする試みが「核融合発電所」となります。海中に膨大にある重水素と、トリチウムの原料となるリチウ

ムは、南米、北米に大量に存在し、海中からも採取できるとされます。

しかしいずれも、熱エネルギーから電気エネルギーに変換させる効率は 30～40%程度となり、60～70%の排熱をとまなうこととなります。この排熱を海へ流すことにより、海水温の上昇、海流の変化を生じ、地球気候変動の一因であることの指摘は、東京大学名誉教授・中村純二博士のによります。(2013.11 日本山岳文化学会、大会発表) 排熱を再活用し、地域冷暖房や温水に利用できますが、放射能汚染水は別で、膨大な放射能除去装置を要します。火力発電と排熱再利用システムは「コージェネレーション・システム」と呼ばれ、エネルギー利用効率は 80%台に及びます。その原型は船舶にあり、推進力機関、発電、蒸気、温水等、最大限熱エネルギー利用を果しています。

地球文明活動による人工発熱が、太陽光エネルギーに比べて無視できない量に至ると、太陽系における地球の熱収支が崩れ、地球環境を人為的に変化させることとなります。このことはすでに、「地球温暖化」として気候変動諸現象は現実のものとなり、人々はそれなりの体験を経て実感するところです。それゆえ核融合発電所を実用化させ、人工太陽が地球に出来たとしても、次なる気候変動に人類がどのように対応・進化し続けるかが問われます。気候変動を人為的に招く文明活動に対し、以下三つの対応が考えられます。

- ① 気候変動を最小化すべく文明活動を抑制、制御する。(文化力)
- ② 気候変動を受け入れ、文明力の進化で適応を図る。(文明力)
- ③ 適応できず、人類が減びる。

現代は二酸化炭素削減等、上記①の抑制、制御で対応することが世界の潮流となっていますが、人類の欲望は果たして抑制、制御の限界を保つ理性で、抑えることができるでしょうか。本論の主張でもありますが、「失って、始めて分かる人間の愚かさ」から考えますと、「人類は滅亡してみないと分からない、人類の愚かさ」に置き換えられます。しかしそれでは【The end】。滅亡する前に「人類のクライシス・マネジメント」が必要なのです。

私は電気技術者として、山岳文化環境論からエネルギーを無意識、無制限に使用する現在の文明志向社会を批判してきました。資源と環境の限界を見据えた調

和ある文明・文化社会への意識転換こそが、【21世紀、人類最大の課題】と考えます。これから目指す文明の方向性は、意識しながら電気を使うことが不可欠です。省エネルギー技術、多様な自然エネルギーのハイブリッド活用と系統連系(スマート・グリッド手法が普及)、一方向に進化する文明を制御する、「文化力」の活用に期待するものです。

文明の大動脈流となる電力エネルギーと、山岳文化との直接的関係はありません。日本山岳文化学会の主たる興味の中核が「山岳」であるため、東京電力(株)OBが多数在籍される当学会において、原子力発電の是非やエネルギー論争は発生していません。私が問題としたいことも、電力エネルギー論争ではありません。大自然の中で人為活動している山岳人の「文化意識」から、電力エネルギーを歯止めなく使用し続ける現代文明と文化社会の在り方に対し、子や孫へ引き継ぐ21世紀の新たな方向性を提起したところです。

福島第一原子力発電所事故直後、東京電力(株)は計画停電を実施しました。ある地域が一斉に電気を遮断された影響は、現代の文化生活がいかに電気に依存していたかを国民に知らしめました。このことは、「失って、始めて分かる人間の愚かさ」をまさに体験し、電気の存在を再認識したことにあります。その詳細はここに書き記すまでもなく、カルチャー・ショックの一面や、緊急電源遮断による生命維持装置の危機にまで及んでいます。日常に満ち溢れている当たり前で気づかない存在(ライフライン他)が、いかに大事な役割を担っていたか、改めて認識され直します。仔細なもの、仔細なことへの気づきは、古来日本文化の感性だったはずです。

**山岳体験**は、日常生活の中での非日常体験にその特徴を見いだせます。登山行為は物質的生産がなく、消費するばかりです。文明が生産した衣・食・住を身に携え、天に向かってひたすら苦痛に耐えて登るばかり。そのことに喜びを感じ(自然な欲求)、再び意図して試みます(意識的欲望)。繰り返すことの中から課題を見出し、その課題は「文化の力」へと昇華してゆきます。「**文化の力**」は最初に形あるものから、次第に形のない意識(心)の世界へと変遷してきました。形と意識が調和するとき、心技体のバランスがとれた快適状態へと至ります。一つの小さな宇宙の誕

生です。酸素も薄くなる高峰で、自然に対峙してみると、日常の当たり前で気づかなかった諸々に、改めてその大切さを気づかされます。その全てを自己の中に受け入れてみると、「**受容の心**」が育まれるのです。

しかし「**受容の心**」だけでは、大震災被災者の復興に何の役にも立ちません。山岳体験の非日常性を日常社会へアピールしても、満ちた文明社会の中ではただ通り過ぎるだけで、納得された定着までに至りません。やはり「大切なものを失って気づく、人間の愚かさ」は、ここにもあります。では、山岳体験から大震災被災者へのカウンセリングは可能でしょうか……？

しかし被災者にとってはそのことよりも、一刻も早く避難生活からの脱却(復旧)と、復興への歩みを始める、生存の必要条件確保が先決ではないかと推察します。

生活の必要条件となる**文明が確保**され、生存の十分条件となる**文化は**、文明の後ろから(位相の遅れ)**補完**されます。さらにその上に(3次元)、理性と心の領域となる**意識の世界、抽象の虚な社会**が現れます。

もはやその領域は、登山者や電気技術者の範囲を離れた、学際からなる「**総合人間学**」の領域となります。

## その4. 社団法人 日本山岳協会への批判

1973年

山岳展望の会：「山岳展望」第17号掲載

### はじめに

日山協(社団法人 日本山岳協会)批判は過去においても、現況においても様々なされてきた。言語的問題ばかりでなく、意識的に非加盟の立場をとる山岳団体は多い。勤労者山岳連盟は独自の別組織をなし、山岳会単位においてもそれらの組織にかかわらぬ独立的立場をとっているものも少なくない。これらは主張なき批判として、やはり日山協批判の一存在として派生してきたことは否めなからう。

山岳展望の会同人でもある大内直樹氏も指摘(注1)されたように、すでに社会状況の中にあって「未加盟者」という言葉が定着してしまったようだ。大内氏が指摘されたよう、「未加盟」という言葉は「加盟」を必然条件とみなしうる前提の下に使われよう。つまり、「日山協に加盟することは必然的なことである」という状況が、「未加盟」という言葉を使用する以前に承認されていることになる。問題は言葉の使用上からばかりでなく、安易に「未加盟者」など使用されている現状、特に日山協運営側やマスコミ側という世論操作をなし得る機能を有する立場に対して、特に世論構成者(一社会人)、一登山者としての立場から潜在する問題点を指摘することにある。

批判には各々の立場、視点によって問題の捉え方、主張の目的等々が相違してこよう。そこで本論においては、問題の捉え方を、「一登山者の立場」から見つめることを明記しておこう。つまり原点からの告発であり、原点から遡って組織論に言及してみたいと思う。

### 第一章 批判の構造 (7P~23P) …… 省略

- (1) 組織と個人の関係から
- (2) 批判の実効性
- (3) 批判の視点(立場)

#### (4) 批判の方法と限界

## 第二章 現状批判

日山協の現状批判に入ろう。これは特に批判の中枢をなすものであり、以下の批判を生み出す思想的背景は、次節において展開しよう。ここにおける批判は第1章第3節における「批判の視点」から、個別的観念による感覚的反発を主に生じ、その方法は第1章第4節①の「文字による批判」となります。

### (1) 海外登山推薦状発行システムにおける違憲性

現在の日本国憲法において、基本的人権の享有は公共の福祉に反しない限りにおいて尊重されなければならない(憲法第13条)。山登りが憲法に保障された基本的人権の享有(憲法第11条)であることは、証明を待たない。そして山登りが公共の福祉に反する事実関係は、「遭難」という事態において発生する。さらに山登りの自由性とその濫用、さらに拘束の問題は、別な機会に展開しよう。ここでは、次の二点を承認できなければならない。

- ① 山登りは基本的人権の享有であり、憲法により、侵すことのできない永久の権利として尊重されなければならない。
- ② 山登りにおいて、①の権利の濫用と、公共の福祉に反する事実とは、「遭難」という事態において生ずる。

つまり、個人の山登りは尊重されなければならないのだが、海外登山においては登山界内部だけの事情により、自由の尊重がなされていない。

現在、日本からネパール、パキスタン、アフガニスタン、台湾の山へ登る場合、それらの国の登山規則(注3)に基づき、日本を代表する山岳団体、科学団体の推薦状を必要としている。日本の場合、その代表団体を日本山岳協会とすることで、外務省が認めてきた(注4)。そしてネパール、パキスタン、アフガニスタン、台湾登山における登山計画申請手続きは次となる。

- ① 登山を実施するグループの所属する都道府県山岳連盟へ所定の様式にて登山計画を申請する。
- ② 都道府県山岳連盟の推薦を得てから日山協へ提出し、日山協の推薦状を取得する。
- ③ 日山協の推薦状を添え、外務省を通じて所定様式の申請を、登山する国の政府へ申請し、許可を受ける。～ という手順をとっている。

批判に価する問題点は、国際法に基づく外交手続きにあるのではない。さらに、日本の外務省と日山協の間の手続きにあるのでもない。あくまでも、内部の問題であり、日山協加盟者と非加盟者との【差別】が問題なのである。その差別の思想が問題である。

現在、日山協は非加盟者に対し、ネパール等への海外登山における『推薦状』発行の対象としていない。そして推薦状発行が問題となった契機は、「アマ・プロ問題」からである。

先のIOC会長であったブランデー氏はオリンピックをアマチュアの祭典と位置づけ、その中へコマーシャルイズムが侵入しないようアマチュアとプロフェッショナルとを区別し、プロをオリンピックから排除してきたことにある。企業宣伝と密着しているプロ選手を、オリンピックから排除していた。日本体育協会(日体協)も「アマチュア規定」の順守を強く主張し、日体協傘下の競技団体に適用し、規定のない団体には作成・遵守を要請した。日体協加盟団体の一つである日本山岳協会(日山協)もその要請に基づき、昭和 45 年夏、松方三郎日山協会長の判断により、アマチュア規定作成に踏み切った。松方三郎会長から草案起草を指名されたのが、日山協副会長であった小島六郎氏である。

推薦状発行問題がアマチュア規定に照らされて問題になったのが、1972 年のネパール登山計画であった。一つはRCC IIのエベレスト南壁計画、もう一つが JCCのP29西壁計画であり、さらに埼玉岳連のナンガバルバット計画案もある。

これらはいずれも、1971年に発足した「社団法人・アルパインガイド協会」会員を、日体協規定の「アマチュア」に該当しないことを理由として、推薦状発行取消という問題を発生させたのである。このことは問題発生の契機であり、批判の対象は

日山協が「日山協のアマチュア規定に適合していなければ推薦状を発行しない」、と判断したことにある。さらに問題なのは、日山協非加盟者がアマチュアにも、プロフェッショナルにも該当せず、「非加盟」を理由に「未組織登山者」として切り捨てることにもある。

小島六郎氏は『岳人295号』において、アマ・プロ問題での「日本山岳協会の立場」として、『もし登山人の間にアマチュアかどうかといった問題が起きたとすれば、日本山岳協会は、それが自分たちの組織と関係のない登山人の場合は問題ありませんが、組織内部の登山人であるときは、日本体育協会加盟の団体としてとりあげないわけにはゆかないのです。』、と記されている。

① 日山協非加盟者

② アルパインガイド協会員

- ・ この二者は日山協規定のアマチュアに該当せず、推薦状発行の対象とはならない。
- ・ アルパインガイドは、遠征隊の隊長や登攀隊長等の中枢任務に携わらず、コーチ、トレーナー、役員の存在ならばよい。～ とした。

問題は、社団法人・日本山岳協会が、組織への「加盟～非加盟」を理由とし、また、「アマチュア規定に反する」が故に、「国際法に基づく外交案件に、その法施行の権力を行使できるか」、ということにある。

海外登山における推薦状添付は国際間の外交問題であり、その主たる目的は「遭難防止」にあると考えられる。しかるに、登山隊として「力量の問題」で審査されるならまだしも、非加盟やアマチュア規定を問題として審査にも付さないということは、明らかに憲法で保障される基本的人権を侵すものとなる。

第一に憲法14条では、「法の下での平等」を定めている。「すべての国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分または門地により、政治的、経済的または社会的関係において、差別されない」、としている。社団法人としての定款は、その法人内部において法に準ずる命令や制裁をとまおう。しかし法人の定款よりも憲法が優先し、憲法の精神に反する定款は違法となる。つまり法人の規定(日山協・海外登山推薦状発行基準)に法人構成者が満たず、推薦状を発行してもら

えないならとこかく、法人とは関わりなき者、また、法律の下で法人と同等の権利を有する個人(自然人)が、法人に加盟しないことによって外交手続きを進められないことは、「法の下での平等」を侵すことになる。 (逆に法人は、法の下で個人と同等に認められる抽象的概念)

外国の登山規則により、日本の外務省が登山隊への推薦状発行機関を法人(日山協)に委託することは合法であるとしても、外務省の委託事業として「法の下での平等」は維持しなければならない。また、アルパインガイドを理由に、遠征隊の隊長や主要任務を果たす地位に立つことを拒否することは、社会的身分の差別に当たる。

このように、外交問題にからみ、社団法人としてのアマチュア規定を適用させる日山協の対処は、憲法違反であろうことを指摘するものである。

日山協が外務省の委託機関であるためには、

**第一**、差別の思想をなくし、心情が反するとしても、海外登山推薦状発行基準は「法の下での平等」により手続きが確保されなければならない。

**第二**、憲法第31条に定める「法定の保障」により、「何人も、法律の定める手続きによらなければ、その生命若しくは自由を奪われ、またはその他の刑罰を科せられない」というように、国民全てに窓口を解放すべきである。

海外登山は基本的人権の行使であり、憲法 13 条に定めた「個人の尊重と公共の福祉」において、「個人の自由、および幸福の追求」は、「公共の福祉に反しない限りにおいて」、尊重されなければならない。「公共の福祉に反する事実」とは、先にも記した「遭難を生じた場合」であり、海外登山ではその影響が広く大きくなるからである。日山協への非加盟やプロガイドを理由とする排除は、自由であるべく山登りの否定であり、思想的差別であることを指摘しよう。

日山協が非加盟者を「未組織登山者」と呼び、アルパインガイドを「アマチュア規定違反」という時、その言葉の裏には「登山者は日山協にはいなければならない」、「登山者はアマチュア規定に拘束されねばならない」という、「日山協の思想」が介入している。この思想と外務省委任の行政権力が結びついたところに、日山協思想に反する者の排除をおこなう。しかしそれは海外登山に関する社団法人の限界を逸脱し、憲法に定められる一人一人の登山者の権利を侵すものとなつ

ている。そこで日山協組織の必然性、外務省委託事業にともなう海外登山計画審査の必然性を軸に、日山協の存在そのものを問い直さなければならない。

登山者は過去において、山登りの個人的自由性なるがゆえ、登山者組織の理論構成、必然性の模索、組織思想などを問わなかった。しかし今、登山者個人の自由性、独立性が阻害されようとしている。登山者にとって、登山者組織はいかにあるかを今すぐ、問うべき時である。

社団法人として日山協の定款は、日山協内部においては法に準ずる働きをもち、定款に基づいて定められた細則も、定款に準じて法人内部での拘束力をもつ。その一つである「日山協アマチュア規定」は法人内部での拘束と制限をともなうとしても、法体系の最上位に位置する「憲法」に優越するものではない。法の形式的効力の問題として、「上位の法規は下位の法規に優越し、上位の法規に抵触する下位の法規は効力をもたない」、とされている。法人における権利と義務は私人が主体的になす「契約」によって生じる。一般的には法人側において、すでに定款や規則が作られており、私人がその定款や規則を承認するか否かによって契約の成立、不成立をみる。これを「附合契約」とよんで、すでに決められている定款や規則の内容を変更するような一対一での個々の契約は事実上存在しない。日山協加盟にしても、すでに定められている定款、規則等に対する諾否の自由しかない。その定款、規則等に「否」の立場をとったことにより、海外登山が不可能となる事実は、日山協定款、規則の拡大解釈であり、法人の拘束力が及ばない自然人として憲法に保障される基本的人権を侵すものとなる。

ネパール、パキスタン、アフガニスタン、台湾における当国の登山規則により、「推薦状」を必要とすることは、条約承認に基づく法の拘束力をもち、各国国民の主権行使に制限を与えるものとなる。そして外務省を窓口として実施されるが、政府内部にその内容を判断できる部署がなければ、「法律の委任」による外部委託もありえる。海外登山においては日山協へ技術的適否の判断を委任することになるが、「推薦状発行基準」に基づく「推薦状発行業務」の委託をすることも、憲法に反することではなかろう。問題は、委託業務を受諾した、日山協の業務遂行上の問題である。繰り返すが、法人規定という法体系の最下位規定により、国民の権利・義

務・基本的人権の保障、法の下での平等(差別)という最上位の憲法を制限することにある。またそれを黙認する外務省も問題だ。

日山協が外務省に代わって行政権限行使の委任を受けるならば、ただちに無差別に海外登山計画申請書を受理することである。そして審査基準に適合する計画であれば、推薦状を発行しなければならない。本論の指摘とともに日山協は討議し、無差別に受理する必要がある。審議、運用経費は外務省へ請求すべきである。日体協が文部省傘下にあり、日体協の下に日山協があるから、外務省から経費支給ができないとすれば、日山協は日体協から脱退するか、あるいは外務省委託事業を受けるべきでない。

次に「審査基準」についてである。

現在すでに作成されており、本年(1973)1月22日～23日にわたって開かれた第10回海外登山技術研究会で原則的に承認された、とされる。これは「岳人第306号」に、日山協海外登山委員会・常任委員長の丹部節雄氏が記している。その審議に対する批判は「岩と雪 第24号」において、ヒマラヤ経験者によってなされている。その批判に対し「いい勉強になった」と、日山協副会長の小島六郎氏は「岩と雪 第25号」で弁解している。

日山協「海外登山に対する推薦状発行規則」第3条において「審議」という使われ方をしていた言葉が、「海外登山推薦状発行審査基準」では「審査」という言葉に変質している。審査することへの批判は次章とするが、法手続きとしては「審査」そのものが違法性をもつものではないだろう。問題が残るのは、審査する基準の内容と審査の仕方にある。総ての登山者を一元管理、支配すべく押し付けの論理である。上位下達の押し付けではなく、多くの登山者から支持・承認されるべく説明と、実態に即し修正すべきである。

昭和44(1969)年3月14日付をもって実施された「海外登山に対する推薦状発行規則」をもう少し見てみよう。

第3条 協会は、常務理事会において申請書の内容を審議し、推薦を受けようとする隊が、海外登山を行いうる一応の技術的水準にあり、かつ安全に目的をなし

える能力があると認められた場合に限り、推薦状を発行する。ただし日本体育協会アマチュア規定に抵触する隊に対してはこれを行わない。—— 略 ——

第9条 協会は、海外登山に関する諸規定等(日本、相手国の何れを問わない)に違反した海外登山を行った隊およびその隊員の参加する隊に対しは、当該登山隊の本隊の日本出発の日より向こう3年間、推薦状を発行しない。

個人の尊重や私権の享有は民法によっても保障されている。第1条の「基本原則」内であれば何人にもさまたげられるものではない。また法人は民法第2章により、特に第44条では「法人の不法行為能力」の規定もある。

日山協の「海外登山に対する推薦状発行規則」の、先にあげた第3条、第9条の自主改訂を願うものである。そのことは「日山協組織への批判」をなす視点でもあり、登山者どうし、登山界内部の問題を、民事訴訟の裁判としたりたくない意志を含むからである。以上の指摘は一登山者をもって、社団法人・日本山岳協会を相手に、憲法違反、民法違反として告訴できることを指摘しておく。

## (2) 組織批判

その思想的背景への批判 — 支配感覚への批判 —

未組織登山者 — という言葉がある。第一節でも指摘したように、「登山者は組織されなければならない」という論理を、必然的に含んでいる。この論理は登山者～そして組織を考えるに当たり、常識的に演繹される。登山社会ばかりでなく、それぞれで社会を語る学問、形而上学、形式論理学等による言語問題がある。現象を抽象化し言語によって伝達するとき、抽象化(エンコード)した時点において現象との同一性を離れてしまう。言語は伝達されることにより、受け手側の許容する範囲内で抽象化が復元(デコード)される。言語化することは現象を言葉へと翻訳する機能(エンコード)であり、伝達された受け手側の理解は再度翻訳(デコード)されるという、二度の概念変換がおこなわれる。つまり現象の真実とは別に、言葉だけが一人歩きをはじめてしまうのである。言語による意図伝達は発信者と受信者の意識中枢により、二度の意識変換(エンコード/デコード)を経ることにより、真実を正確に反映しなくなる。抽

象化により、真実は常に歪むのである。このことを押さえた上で、論考を進めることとなる。

未組織登山者 —— という言葉の使い方の裏には、このような組織運営者側の組織論理が組み込まれており、その論理で扱われる私人(単位者=細胞)の概念を反映するのである。一般的な日本社会の組織概念は「支配と被支配」が定着しており、「上位下達」によって意図伝達がなされる。日山協組織論理というものには言語によって明示されていないが、組織運営者の思考論理構造はあらゆる判断の中にもじみ出ているのである。日本社会は過半数以上の従順な私人からなり、支配と被支配の構造を見破る者は少数だった。支配の論理に抵抗する者は生存を抹殺される力を受ける。「少数意見の尊重」という欧米型民主主義の論理は、多数派による社会支配の中で、少数者を犠牲として安定性を保ってきた。

論理が飛躍しすぎているが、日山協非加盟の立場をとる登山者を排除する論理は、戦後の日本国憲法に明記された「平和を志向し、自由で平等な基本的人権の尊重」を顧みず、戦中、戦前の内務省的国民統治意識の延長による、日本人社会感覚を抜け出していない。日山協だけでなく、すべからず日本社会の組織感覚は、同類にある。(後日追記=原真氏は「日本人の本質」として、登山論とは無関係に近い、と手紙をいただいた)。

登山者組織の意味と機能を真面目に考えるにおいて、組織の意味付が強いほどに、そのような「未組織」という言葉が発想されるのだろう。登山を個人のものとする視点からは、組織への意味付は不要であり、組織の果たす役割、つまり機能だけが意味をもつことになる。そして登山者個々にとっての組織的機能とは、次なる点があげられる。

- ① よりよい登山への契機を見つけられる場であること。(自己愛)
- ② よりよい登山への同行者(パートナー)が見つけれられる場であること。  
(愛の一般性)
- ③ よりよい登山において失敗してしまった時(遭難)、ふたたびよりよい登山へ出かけられるように助け合えること。(相互扶助)

登山の目的や組織に意味付を与えたとき、そこには行為することの喜びとは別な、その言語に変換された抽象概念によって意味付され、思考的価値を与えようとする。初登頂、初登攀、日本人として初〇〇、単独〇〇、女性として初〇〇・・・といったように、様々な価値観を創作する。その評価にともなう社会性が生まれ、組織体、業界、世論等々が発生するのである。登山を始原の行為とする個体的性質(次元)は、価値評価という社会性の中へ変換され、二次元化されるのである。そこに組織や業界、世論、アマ〜プロ問題といった、登山行為そのもとは別な次元で諸問題が発生してくる。一人一人登山者の感性 --- 自由で、法の下で平等に、基本的人権が尊重される --- を基準とすれば、登山者総合組織は意味付をしないで、登山者間の潤滑油となるべく機能的役割を付与するだけが望ましいと考えるのである。

地球上という有限の場において、登山における個体的喜びは変質する。同様に社会的価値(意味付)や評価も変質する。たとえば「初登頂」の意味は、人類初という純粋に個の内面的心性から、世界の初、国家の初へと、さらに帰属集団初という意識の中へ段階的に細分化されてゆく。それぞれの段階における価値観によって評価も異なる。『山は死んだ』とする本多勝一氏(注5)の主張は、原真氏が付属解釈を与えた(注6)ように、登山の意味付は変質してゆくことを指摘されている。

日本山岳協会が意識する国家レベルにおける山登りの意味付と、国民一人一人が楽しむ山登りの意味付は異なり、塚本珪一氏が指摘された(注7)ように、登山は個人の喜びに属するようになった。日山協という組織の意味付、日山協としての社会(国家)的価値付けのために個々人が山へ登る概念は失われている。日山協は組織としての意味をもつ必要がなくなり、登山者一人ひとりが機能しあえる「場と機会」の提供が役割となってくる。その機能は先の①〜③で示した。支配〜被支配という関係と、その中で支配しようとする側から意味付ける登山は終わった。パーソナリティの満足を求める登山へと、変質したのである。パーソナリティのレベルにおいて、いかに機能し合えるかが日山協組織の課題となっている。

日山協批判の現実的軋轢は内部から生じるのではなく、外部(一般社会)の変質によるものである。日山協が現実的適合性を得ようとするならば、その運営思想、運営

視点を変えることにつきる。古い体質のまま法規範の委託業務をおこなうならば、やがて現在の日山協を否定する勢力にとって代わられるであろう。社団法人としての限界は、革命論理からは明確である。社団法人内部の規範を越えて国民の権利にまで行政力を行使するとき、その越権行為は否定される。

### (3) 新たなる哲学の要求

日山協の支配感覚への批判を現代的意味から指摘してみた。法人規範により、法人外の登山者たちを切り捨てる外交業務委任、委託の違憲性を指摘してきた。そして日山協が社団法人の枠内だけでなく、総ての登山者社会を総括したいのならば、「新たなる哲学」を創り出さなければならない。現在の組織理念の延長からでなく、山登りの総合を根本的に考え直さなければならない。歴史的意味合いを失った登山(山は死んだ)は、これからは「遊び」の概念を中心に据えなければならないと考えられる。

山登りは、遊びである。以後の命題として、承認されるであろう。

遊びにおける組織とは、その遊びへの意味を与えるものではなく、いかに遊び合えるかという、機能の場の提供となる。その中で遊びの組織機能が求められることは、「遭難」という事態への対応となる。

遊び ～ 遭難

この事象を根底に据えた新たな哲学の確認、そして日山協定款第 4 条に示される、次なる事業の見直しを図ることにある。

- ① 登山技術の指導
- ② 登山道徳の啓蒙普及
- ③ 山岳遭難の予防と遭難対策に関する企画および指導
- ④ 山岳自然保護運動の推進
- ⑤ 国民体育大会山岳部門の運営
- ⑥ 海外登山に関する計画の審議と指導
- ⑦ 機関紙その他出版物の刊行

⑧ その他目的を達成するために必要な事項

洗い直す根底として、次なる事項を提言する。

- ① 主体的、任意な遊びへの参加ができること。
- ② 遊びは教育するもではなく、主体的に創り出される。
- ③ 遊びの感覚は個々によって相違する。
- ④ 遊びの限界は「遭難」によって生じ、それにより、遊ぶ者に負わされる社会的責任が生じる。

この4項目から日山協事業を見直してみよう。

### 1) 登山技術の指導や道徳の啓蒙普及は教育するもではなく、登山者の自覚と創造性において自由であるべきである

自覚の段階的発展性の中に、登山学校や登山学等による啓蒙があり、教育ではない自発学習となる。学ぶことを可能とする体系の中に、登山学校や登山学による知識の取得があるが、登山そのものの喜びではなく、登山をより良くおこなうための二次的支援となる。知識は現象(山)を理解し、存在へ働きかける現象(登山行為)に方法を与える。登山行為の方法は同類性に分けてパターン認識することができる。人間感覚の「自由性」は、他者と「ちょっとだけ異なる」ところにある。大きな差異は不安となり、全く同じは自己認識に欠ける。「ちょっとだけ異なる」領域でこそ、不安のない自由性を感じるのである。同類性のパターン認識において、「登山」と規定すべく最大公約数としての「登山概念」が規定できよう。行為の技術、技術の知識を提示することができるとしても、それをもって遊びを同一化、同質化してしまうのではなく、あくまでも遊びは遊ぶ人の主体性を根底に据えなければならない。

指導員検定により、山登りを正規分布の枠組みの中に押し込むことではない。検定による登山者のランキングは、登山の本質とは無関係なことである。アルゴリズムのある世界(現在おかれている状態が、その集合に属するか否かを、手続きを経て必ず決定できる世界)として登山者社会を規定することは可能かもしれない。しかしその社会は登山の本質にとって、無意味なことだ。登山者をアルゴリズムのある社会の中で捉えるには、「遭難による個の限界とその責任」の関係性においてである。

## 2) 山岳遭難の予防と遭難対策を、登山者個人の本質的責任において問わなければならない

この視点のみがアルゴリズムのある概念として、登山者～登山社会～一般社会を結ぶ接点となるのである。

「山岳遭難は自己の山行にも生じ得る可能性をもっている」、ということ認める者どうしによって組織構成をおこなうのである。アルピニズムと散歩を同一視するところに、アルピニズムの低迷がある。形而上的にも「山岳遭難を肯定する者」により、組織を構成するのである。組織におけるギブ・アンド・テイクは、「自分も山岳遭難するかもしれない——その時救助してもらえる(テイク)ことは生命の本質的喜びである。だから他者が山岳遭難した時には、何らかの力で助けなければならない(ギブ)」、というギブ・アンド・テイクの概念である。契約的關係の中にある法的な権利や義務概念ではなく、現実的關係性の中において個の限界から生ずる倫理的概念である。技術や知識の習得、向上は、倫理、道德感をうながすものではない。契約的關係における権利と義務は「金銭」を媒介させて解決できる。山岳遭難への対応は金銭消費を媒介しつつも、金銭で総ての解決を図ることができない人間的問題がある。登山行為へ駆り立てる背面の思想、かの生き様を理解するならば「規制と指導的排除」による山岳遭難防止策は、人間の本質への放棄と連なることを指摘する。

集合論のパラドックとして有名な、『クレタ人が「クレタ人は嘘つきである」と言った』という命題は、部分(一人)が全体(クレタ人)を語る視点において、論理的矛盾をなしている。同様に、社団法人としての日山協運営の論理をもって登山の全てを代弁することには、部分が全体を語る論理的矛盾にある。日山協が切り捨てる他の登山者を含み得なければ、登山界を代表した論理ではあり得ない。日山協会長が登山界を語る時、大多数を代弁する言葉であったとしても、構成員切り捨て、排除を含む限り、総体ではあり得ない。人の視点には、組織(法人)の立場と個の立場とする、二つの矛盾する立場が同時に存在するのであり、組織の代表者が総ての個の代表者では決してない。組織という枠、境界内の代表者でしかありえない。そして世界には無数の境界、つまり境界線はなきに等しいほど無限となる。

組織内という部分から全体を視野に入れた発想は、遭難を未然に防ごうと、とかく原因を取り除くことに方向付けられる。組織内で遭難を認め、その上に立った互助的組織化の発想はおこらない。大多数の日本人体質が、そうさせるのだろう。登山の本質を掘り下げ、個からの発想は起こりにくい。しかし繰り返し指摘しているように、時代の変遷はすでに組織的登山の意味は失い、多様化した個の登山の時代にある。個を原点とした組織論は、日本社会において説得力が乏しいのも現実である。ましてや「死」を前提とした組織論は、より一層説得力を失う。現代の日本社会では、個が実存の哲学的な死に向かいあう文化、風潮が大きく欠落している。高度経済成長社会の中で、実存的な死に向き合うなど、何の社会的、経済的利得を生まないからだ。むしろ成長ムードにとっては、マイナスイメージに映る。その結果、自律的精神の未鍛錬はやがて文化の力を衰退させ、多数迎合的社会到来への主因となることを知りえ得ていないのだろう。

「遭難救助は登山者組織の総てである」

### 3) 自然と登山者

登山の本質を「遊び」とするならば、それは「生産行為」ではなく、「消費行為」となる。消費行為は主体の欲望を満たすものとして、主観的、精神的欲望を充足させる形として立ち現れる。遊びと人間との関係を考察したR・カイヨワの『遊びと人間』は示唆に富むが、ここではその分析を問うものではない。遊び場としての自然(山)の中で、遊ぶ人(登山者)がどのように在るかを考えてみる。

登山者の大まかな分類は、これまで精神分析的視点からなされている(注10)。

しかしここでは別な、存在論的視点から考えてみた。

- ① 認識的登山者
- ② スポーツ的登山者
- ③ 思索的登山者
- ④ 審美的登山者

存在論を視点とする分類が必要なのは、登山行為にとって「山」はすでに存在そのものであり、その存在への働きかけが登山行為をなすからである。働きかける

側の人間(登山者)が、いかに存在(山)を見、その存在へ働きかける(登山)主体であるかが、自然と登山者との関係を明かす視点となるからである。存在へ働きかける側の人間の捉え方として、精神分析的には「欲望」、宗教的には「魂」、文学的には「心」、哲学的には「主体」、科学的には「脳波」等が対応しよう。これらの因子から、人間(登山者)は自然(山)へいかに作用することを見出しているのだろうか。人間は自然を保護するものか・・・、破壊するものか・・・、自然が破壊されるのであれば登山者は自然を守らなければならないのか・・・、観光開発、資源開発と登山者との人間社会関係は・・・。

遊びが本質であるはずの山登りにとって、存在論的視点から捉えた登山者の分類は、登山者と山、登山者と登山者の間における閉鎖社会性を本質としよう。観光開発や資源開発における自然の破壊(利用)は、登山者の閉鎖社会とは対立関係となる。つまり、遊びの場を奪われるからである。公共の福祉という観光開発の大義名分から、登山者だけを別枠として保護することはできない。大衆の審美性(観光)も共存するからである。

他方、大衆の審美性を経済操作しようとする企業の実態が、観光開発による自然破壊として示されている今、登山者は自然保護に対して無関心であってはならない。この点、日山協組織としての思想を目にしたことはない。問題は、登山者と大衆観光との調和であり、人と人が織り成す社会の問題となる。

この調和への解決点は、**今西錦司博士**が「かげろう」の研究において見出された「**棲み分けの理論**」が適していないだろうか。まずは登山と大衆観光を区別する。さらに登山者内部において、死を自覚する登山とハイキングとを区別する。それらお互いが、自然の中でどのように棲み分けるかを考えるのである。さらに山地生活者を加え、観光開発はどこまで許容できるか、登山者は山地生活者のどこまで踏み込めるか、ハイカーが登山をする場合にはいかなる責任と義務を負うか、等々、話し合う必要があろう。

例えば、登山する者は総合組織(日山協)へ加入しなければならない。総合組織は遭難救助を主目的とし、登山者は救助の権利を受けられるとともに、救助機能を維持できるだけの経済的負担を負う。加入制度としないならば、「**登山税**」を設けても

よい。登山者数が多くなれば、職業人の存在が可能となる。アルパインガイドの現代的意味は、登山学校と遭難救助、さらに登山ガイド業に求められよう。

ハイカーも登山者も、「登山」をするときは同一責務を負わなければならない。そして観光開発は、登山の領域を侵すまでおこなわないことで提携できないだろうか。登山者総合組織をめざすならば、登山界への説得ではなく、一般大衆社会を説得して遊びの場を守ること、そのことが登山の文化を持続させることになる。また、登山者総合組織の機能である。

文化史において、「遊び」が極めて重要な要素であることを指摘したのが、シラーの『人間の美的教育に関する書簡』であるという。その中で、『人間はその完全な意味において人間である限りにおいてのみ遊び、また、遊ぶ限りにおいてのみ完全な人間である』、という。さらにスペンサー・ヴントを経、カール・グロースは『動物の遊び』の中で、遊びの無償性、自由性という観念を継いだ。そしてジャン・ピアジェからヨハン・ホイジンガへと至るのである。

1938 年に出されたホイジンガの著『ホモ・ルーデンス』は、遊びを文化の根底にすえようとしたのである。ホイジンガは文明の全体をルール of 発明と尊重、フェアな競争から解こうとした。ジャン・シャトーも、ルールのある闘争の倫理的創造性と、幻想の遊びの文化的創造性を指摘している。

数学史においては、ギリシャの古くから数の遊びや謎解き遊びなどを行っている。19 世紀末にはジャニゼフスキーによってトポロジー (位相構造) の概念が出され、それを確率計算と結びつけることにより、戦略ゲームの理論が考え出された。これらを集大成したのがフォン・ノイマンである。ラプラスは現象から法則を見出し、それを微分方程式示すことにより多くの説明を加えることができた。それが行き詰ったとき、形骸だけでも何とか説明できないかと確率論を導入し、アルゴリズム (問題の解き方) のある世界とした統計学へと進化した。その代表的操作装置がコンピュータである。

しかし今、トポロジーの概念からアルゴリズムの無い世界までも説明しようと登場してきたのが、フランスのトポロジスト、R・トムによる「カタストロフィの理論」である。これにより物理学のみでなく、社会科学や生物科学の現象にも適用できる力学

系を大成しようとしている現在である。「カスプ型のカタストロフィ」により、アルピニズムの本質でもある生(登攀)と死(遭難)の説明も可能な現代にある。

回り道が長くなった。このように社会では、「遊びの研究」が真摯におこなわれている。だから登山者も遊びの研究をしなければならないというものではない。なぜなら、「遊びを理解すること」と、「遊ぶこと」とは、異なるからである。遊びを理解し、そのことを社会的に説明することは登山でなく、むしろ学問分野に属するからである。そして今、ここで強く主張すべきことは、一部登山者でそれらの知見と能力を持つ者が、社会の中に登山を位置づけ、文化としての価値を証明することにある。大衆ジャーナリズムに操作された登山ブームではなく、登山を通して創り上げる登山文化を社会の中に定着させることにある。

日山協も含めた登山界の学際的研究欠除の体質こそが、登山と自然破壊に何ら抗することもできない無能な集団を招くのである。自然と登山がいかに関わるか、登山者相互はいかにあるか、それが今、「登山学」のテーマでもある。

#### (4) アマチュアリズム ～ アマチュア規定批判 (アマチュアリズムの意味)

登山者にとって、アマチュアリズムは必要な思想であろうか。結論からいえば、登山者にとってアマチュアやプロフェッショナルの区別は、何ら登山の本質に関わるものではない、と思われる。しかるに、アマチュア規定のみによって登山行為の規制や制裁をなすことは、登山の本質と関係なきところの問題である。

アマチュアリズムの概要は、「岳人第 295 号」においてスポーツ評論家・川本信正氏によって提示された。アマチュア規定の発生と、その過程から現在におけるまで、その根底にあるのは「縄張りの概念」であり、「疎外の概念」である。「縄張りの概念」とは、同じくして遊び合える仲間の資質を決めることであり、発生地イギリスにおける上流階級(アマチュア)が、その遊びに近似する専門労働者(プロフェッショナル)を仲間外れとしたような、「疎外の概念」から出発している。「競争原理」からなるスポーツ競技の本質にとって、その競技と近似する専門労働者を入れることは、

「努力による段階的向上過程の比較＝つまり競技」にあつて、近似する専門労働者は初期条件が圧倒的な優位にあるからである。初期条件におけるアマチュア(上流階級)のハンディキャップと、専門労働者(プロ)が上流階級者を上回ることへの不満が募り、専門労働者(プロ)を排除する。

スポーツは生体維持のために必然な「労働」と対峙する、消費行為としての「文化」に含まれる。労働で鍛えた肉体と、遊びで鍛えた肉体とでは、自らその強弱が決まる。スポーツ競技における価値は、その競技だけのためにいかに努力したか、その結果の比較にある。生活のため、生存のための努力ではないとしたのが、アマチュアリズム発祥の思想である。生存のためという必然性(文明)ではなく、遊び(文化)による消費行為からなる文化の概念こそが、競技する肉体を支える競技者の資質、スポーツの価値を支える。

スポーツは人と人との競技であることが、スポーツの形式をなしている。そして文化の枠内において、専門労働者を除外することにより、市民の努力結果の比較(競争)を可能としてきたのである。文化にとってのスポーツ競技は、空間(距離・速度・時間)と質量からなる物理的測定可能技術を、常に媒介させている。定性的な同一要素(ルール)を種目とし、異なる性質ごとに分離独立させた種目別を構成する。同一種目内で努力の結果を競い、定量的に計測して順位付けする。それゆえに計測可能な技術に支えられ、比較・序列化の客観性を獲得するのである。

- ① スポーツは、人と人との身体運動とともなった競技である。
- ② スポーツは、計測技術によって比較を可能とし、その結果を序列化する。
- ③ スポーツは遊びとして、その価値は努力の過程と結果において生ずる。

スポーツの共通要素を以上のように分けてみた。そしてアマチュアリズムが介入するのは、③の要素にある。アマチュアとプロの差異は、「努力」の概念が異なるのである。アマチュアの努力は、生活に直結しない遊びの範疇における努力であり、プロの努力は生活に直結した職業の範疇に含まれる努力となる。遊び＝文化とするならば、職業＝文明と表現できる。両者を同一と認めて前項①②を競っても、プロが優位な初期条件となってしまう。それゆえ、遊びにあつてのスポーツは、職業的努力の優位を排除しなければならなかった。

しかし山登りは遊びであっても、スポーツそのものなのか・・・？アマチュアとプロフェッショナルとを分ける必要があるのか・・・？次に考えてみよう。

**第一に、「登山はスポーツである」という説と、「登山にはスポーツ性が含まれる」という説とである。**

現在は前者の考えが支配的であり、日山協が日体協に加盟することはこの理念に支配されている。日山協と組織を分かち勤労者山岳連盟においても、登山の理念をスポーツとして位置づけている。しかしいずれもスポーツの定義から起草した理念ではなく、社会通念から提起したものに過ぎないと思われる。登山を真摯におこなっているものの大多数は、登山をスポーツのみで割り切れない「心」の要素を感じている。そのことは「生と死」の問題である。しかし登山者はその問題を自らの心の中にしまい込み、他者へと伝える文化を育まなかった。小集団として山岳会内部や、身の回りの人間関係という狭い範囲での伝達であり、文化のレベルへと発達しなかった。登山には、生と死の弁証法的理解と伝達が可能であるのだが、マス・コミュニケーションの段階で留まり、文化レベルの理解へと至っていない。「登山の本質は何か・・・」、「人間にとって登山とは・・・」、という視点から登山の文化的発展が開花されるのだろうが、前節で述べたように、登山そのものではない学問領域となるため、それを心がける登山者が不在なのである。人間のための学問にとり、登山は格好の一分野(登山学)であるのだが、研究者不在である。「登山学」は一つの独立総合的視野から人間を捉え直すことが可能であり、「遊び」を社会的、人間的に位置づける方法論となり得よう。学問的視野から登山を捉え直したとき、「登山はスポーツの域を脱している」ことが理解される。つまり、「登山にはスポーツ性が含まれる」という考えに、論理的根拠を与えるのである。実証科学とは異なり、人間社会学として総合的な人間の把握と理解となる。実証科学に欠落している人間総合の学問は、今が流行と呼ばれるか、前衛と呼ばれるのか、歴史的判断を待つことになる。

「登山はスポーツである」とするなら、不適合な要素がある。つまり「登山の計量計測」の問題である。登山における計量計測は、被対象となる自然条件があまりにも不確定にあり、行為の中でも変化する。山が高くなるにつれ、その変化は大きくな

る。そして何よりも、競う者が同一時刻に同一条件の中に存在できないことにある。実験に例えるなら、実験パラメーター(要素)が異なる実験結果をどのように比較しようとしても、比較の根拠を失ってしまうのである。アマチュアとプロフェッショナルとを区別するがごとき、登山における自然条件の差異は、比較・序列化の基準をなさない。しかし以上のことは登山一般論においてであり、山岳自然を切り取った限定の場面においては、競技化が可能な分野もある。その領域において、スポーツ競技は成立しよう。縦走やクライミングの中で、可能な分野は考えられる。その要素として第一に同一負荷における所要時間の比較(同一距離における速度差)であり、第二に負荷質量(荷の重さ)の差による所要時間の比較である。10 級、20 級、等々に分け、縦走やクライミングの速度競技は可能となろう。例えば穂高の屏風岩に安全な支点を埋め込み、登攀開始から終了までの所要時間を計測、序列化すれば順位が決まる。観られるスポーツとするならば、横尾尾根末端にスタンドを作り、双眼鏡を手に観戦する。さらに山岳自然の中だけでなく、人工造営物(人工岩場)を低地や屋内に作れば、もっと公平な登攀条件が確保でき、より平等な競技登攀となる。しかしそこまでいってしまうと、もはや登山とは呼べない「スポーツ・クライミング」として、別物となる。 自然造営物(山岳)に登るのが登山であり、人工造営物に登ることはもはや登山と別な、スポーツ・クライミングの分野となる。 登山は極めてスポーツ競技に類似しているが、スポーツ競技そのものではないという結論に達するのである。

**第二**、スポーツ競技そのものとならない登山において、アマチュアとプロフェッショナルを区別し、アマチュアリズムの思想からプロフェッショナルを排除する論理は、低次元な観念的差別思想と理解される。プロフェッショナルな登山家がまだ社会的地位を確立できない段階において発生する事態でもある。登山の意味や価値の問題からでなく、登山者の属する社会構造と権力構造圧力により、プロと未組織登山者が排除されるのである。逆にプロが権力と結びつけば、逆の事態も想起される。このことは、時の流れと政治権力とがどのような結び付きとなるのか結節点の違いであり、一登山者の本質に関わるものではない。従ってアマチュアとプロフェッショナルとの対立は権力抗争に過ぎない。自然に対峙する登山者ならば、皆等しくプロフェッ

シヨナルな「生死の自覚」をもった登山者であることが好ましいのは、いうまでもな  
かろう。

**第三**として、登山の評価価値と享受価値とを考えることにおいて、アマ・プロの区  
別を問題とするのは評価価値を考える面においてであり、享受価値を考える上から  
はアマ・プロという登山者の区別は何ら意味をもたない。

登山の評価価値とは、登山者社会において意味あるものであり、登山の歴史の  
中に位置づけられ、登山者全体へと影響を与えるものとなる。登山者の享受価値と  
は、その登山者個人の喜びであり、それを評価し、感知できるのは当人のみとなる。  
享受価値の尊重は、遊びにとって本質をなす。芸術や学問の探求心と同様、「する  
こと」そのもののプロセスを楽しみ、生きてゆく心の支えとなる本質的心情のあり方  
である。科学万能、実証主義中心の世にあり、自然破壊や公害が問われている昨  
今の中で、享受価値の見直しが求められている。つまり、心への問題である。享受  
価値は生きる上での基本的心情であり、この自己愛だけでは社会の存続を果たし  
得ないことも、同時に考慮しなければならない。人類の社会は一人だけでは存続し  
ないからである。また享受価値においてはアマチュアやプロフェッショナルの区別  
はなく、人間の心の問題として皆に等しく存在する。しかしその心に占める意味や  
深さにおいては、アマチュアとプロでは格段の差異があろうが、そのことが表象化さ  
れることはなく、他者からは見えない。人生を生きる上において、一人ひとり皆、  
プロフェッショナルである。

登山の評価価値ではとかく、その登山のスケールが目安とされた。享受価値にと  
っては、登山の質が問われた。日本の登山界にあって、ヒマラヤ遠征等のスケール  
に重きをおいてきたのは日本山岳会が主流となり、質の向上という面ではアルピニ  
ズムをかかげた社会人山岳団体が主流となっていた。量(スケール)と質(アルピニ  
ズム)という、同一に比較できない要素によって競合してきた日本の登山界の中で、質を  
求めるミクロ的性格は、量を求めるマクロ的性格の前で抑圧され、ミクロ(個別性)を  
ミクロ(局面)として位置づけることができなかった。ミクロ的性格の強い社会人山岳  
団体(全日本山岳連盟)と、マクロ的性格が強い日本山岳会とが合流してできた日  
本山岳協会にあって、ミクロ的性格の指導者がマクロ的権威を与えられたとき、マク

口への劣等意識からミクロの個別的価値意識を疎外させる力となって作用したのがアマ・プロ問題の発端ではなかったろうか。量と質という異なった要素を混同させ、質の差異を量的形式によって同一視してしまう。プロを排除した近代オリンピックのアマチュア精神とは、そのような専門的高品質な力と精神を排除したアマチュア(素人)の遊びから発したものであり、その背景には貴族の遊び文化のアマチュアリズムと、奴隷労働者の専門化された技と力のプロフェッショナル意識を含めた階層的差別の思想が初めにあった。日本山岳協会というオリンピック傘下の一組織にあってもなお、その差別思想を引きずってしまうのであろう。

アマ・プロの区別によりプロを排除する考えは、近代オリンピック思想に準拠する体育の延長であり、登山の本質とその価値の位置づけとは無関係な行政権力の行使をとまなつたところに、憲法で保障する基本的人権を侵すまでに拡大解釈を許す、理論性の欠除がもたらせたものであろう。

第四に、これまでの登山者概念、つまり山登りにとって「アマチュア」とは、いかなる意味を持つのであろうか。アマチュアとプロの区別は人間側の分類であり、自然の側(山)から見ればアマ・プロもない、皆等しく「人間」としてしか存在しない。自然論として登山者はアマ・プロなど存在せず、皆等しく「登山者」である。「人間が山に登る」、それが「登山」であり、その登る人が「登山者」なのである。

アマ・プロの区別は人間社会の問題であり、その文化的意味しか持たない。山に登る過程に「死」の可能性を有するような登山であるならば、その登山者は皆等しくプロフェッショナルでなければならない。アマチュアとしての「甘さ」は、自然と対峙する登山には通用しない。「生と死」に媒介される登山にあつては、人生をプロフェッショナルに生きる覚悟こそが不可欠となるのである。窮地に陥った時アマチュアだと言って、その状況を放棄することはできない。スポーツ競技の中での途中リタイアは、敗者となって評価されるだけで、切迫な危機から安全地帯への避難が確保されている。遊びでの放棄は、せいぜい仲間はずれになる程度である。しかし登山の多くは、途中放棄は「死」につながり、仲間の脱落者を放置して登山を続行することはできない。自らの危機を承知しながらも、仲間を助けて共に危機からの脱出を図ろうとする。登山は遊びでありながら、途中放棄で仲間はずれにはできない自己犠

性の倫理性さえある。登山における自己犠牲の究極は「死」であり、スポーツ競技のトリックプレイや犠打(バント・犠飛球)のような自己犠牲とは異なる。

「より安全な登山」をおこなうには、「より完全な登山者」でなければならず、スポーツ競技が定めるアマチュア規定は何ら意味がない。むしろ完全な登山者とは、よりプロフェッショナルな人間でなければならない。地球の最高峰、エベレストの初登頂者ヒラリー卿は、『技術はプロ、精神はアマチュア』、といったというが、それは登山者として動機や感性の問題であり、自然に対峙する人間の特性としてはよりプロフェッショナルな覚悟(精神)と技術を備えることが、成功と安全の確率を高めることになる。「プロフェッショナルな精神」とは、総ての存在や思考を山登りのために向け、終局的価値を登山に求めることにより可能となり、より完全を目指す登山者ならば、そうあるべきなのである。自然論から主張するならば、死を媒介とする登山者がより完全であるためには、無限な技術の開発とともに、プロフェッショナルな精神の持ち主であるべきである。

終局的価値を登山に求めた時、それが死をもいとわぬ集中に陥ると、人はそれを「発狂」と呼ぶ。上田哲農氏の『登山者発狂説』というのがある。なにも登山者ばかりではなく、芸術家、文芸家、哲学者、宗教家等々、精神へ帰着する心の問題を扱う分野にあつては、同様な現象を招きやすい。発狂は死を肯定するのではなく、死をも無視できる精神の高揚状態といえよう。まさに登山の最前衛は芸術と同じく、精神の集中的高揚は死をも無視する。合理性では捉えきれないアルゴリズムの無い世界である。そして精神の自由とは、発狂の自由でもあるはずだ。それが「愛」で包み込める範囲ならば、発狂者を含む集団は最も高い「質」を有する。

発狂は死をも無視する。そしてプロフェッショナルな登山とは、死を肯定することではない。そしてまた、死を否定することでもない。死を否定できないから肯定するのではなく、登山行為に集中する中で人間の必然的な死の運命に逆らうことによつて生の実感を得る、究極な「遊び文化」の一つなのである。自然の摂理の中で、存在者として死の宿命と対峙し、死をも無視しえる人間の精神の、生の喜びを知り得ている登山者のことである。プロフェッショナルな登山には、生と死の究極な弁証法が含まれており、その思考と実践はより集中した精神と、より高度な技術とを要する

のである。アマチュアの行政権力行使の下で、このようなプロフェッショナルな登山を切り捨てるのが登山の本質と無関係な構造であることが、理解できよう。一方で、プロフェッショナルな登山を目指す登山家は、単なる登山行為だけでなく、そのことを社会の中に周知させる**登山学の確立**にも尽力すべきであろう。

## (5) 国体登山と、日本体育協会参加への批判

国体(国民体育大会)への参加は、社団法人としての日山協だけの範囲なら批判する対象ではない。さらに、国体へ参加するために、日山協内部でアマチュア規定を準用することも、外部から批判する対象ではない。

元来アマチュア規定は IOC(国際オリンピック委員会)内部の問題であり、オリンピック参加資格という、登山と無関係な事項である。事業種別を民間事業と公共事業とに分けて考えると、オリンピックは公共事業を上回る一大民間事業となる。世界規模での公共事業はなく、世界大戦は事業と呼べない。なぜなら事業には政治権力が付随し、国連主体事業は限定的な部分でしかおこない得ないからである。他方、政治権力と切り離されたスポーツにおいては、オリンピックやワールドカップ等による、世界規模でのイベントが永らく実施されている。

では日本における国民体育大会(国体)は文部省主管により各地方自治体が主催する、公共事業の性格をもっている。第二次大戦で疲弊した「**国民の体育向上と健康増進**」を掲げている。しかる意味から、「登山の国体参加」が、山登りの本質から逸脱するものではない。国体の目的からすれば、全種目を得点競技化する必要はなく、順位、序列化のない体育を基本としていよう。しかしそれでは盛り上がりず持続させる意欲に欠けるため、すべからず競技種目に得点を付与し、採点種目として順位、序列化を競うスポーツ競技としてしまった。そのことはまた、オリンピック競技種目とも合致し、国体はオリンピックと類似した性質を帯びるようになった。そこから派生してくるのが、アマチュアリズムによるプロフェッショナルの排除思想である。民間事業とするオリンピック参加資格のアマチュア規定が、公共事業たる国民体育大会参加資格に準用され、その構成員の一つ、日本山岳協会の海外登山審査規

定へと再準用され、その結果、法の下に平等でなければならない国民の基本的人権を排除(プロおよび未組織者の差別化)してしまう。このことが日本国憲法違反となることは自明であろう。

ここでは国体の批判が目的でない。オリンピック参加資格アマチュア規定→文部省→日本体育協会・国民体育大会参加アマチュア規定→日本山岳協会アマチュア規定→海外登山審査におけるアマチュア規定の適用、とする一連の流れの中で、海外登山審査の段階で法の施行に準拠した行政権力行使たるアマチュア規定適用が、憲法違反ではないかという指摘なのである。その原因が先の一連の流れに見る、民間事業と公共事業の混同による、適用範囲を逸脱する規定の適用にある。さらに日本的「お上意識」の現れでもある。ましてや「未組織登山者」は登山者でないような意識こそが、アマ・プロ問題以前に、基本的人権を無視していると言わざるを得ないのである。

『山と溪谷・第 412 号(1973 年 1 月号)』において、日山協国体担当主務である羽賀正太郎氏は、『岐路に立つ国体登山の運営』と題して、1973 年の国体登山を展望されている。その内容を以下に要約してみた。

## I) 羽賀氏自らの、登山の本質の認識

- ① 現時点では競技的な要素は登山思想や登山行為からは見つけ出せない。
- ② ゲームとは思わない
- ③ スポーツ性が含まれていることを否定はできない。
- ④ ゲームとして順位決めは不可能 —— しかし、いかにしたら採点種目となり得るか。

## II) 国体登山の意味

- ① スポーツの普及～アマチュアリズムとスポーツ精神の高揚～国民の健康増進と体力の向上。
- ② 一般の登山観念とは全く異質な競技会 —— 一般登山と区別。

### Ⅲ) 羽賀氏の将来への展望

- ① 対象が自然であっても、人と人が技を競って争い、勝敗を決めるゲームとなるかもしれない。
- ② 日山協～国体批判 ――― 本質論からでなく、国体登山を理解し、その上に立っての考え方を日山協は望んでいる。
- ③ いかにしたら国体登山を採点種目として日体協に承認させるかを解決したい。
- ④ 前記③が不可能なら、どのように国体運営をするかを考えねばならない。
- ⑤ 国体登山が、登山界最大の行事としたい。

### Ⅳ) 日山協の自認 (羽賀氏の言を借りて)

- ① 登山団体を統括している最高機関。

### Ⅴ) 日体協加盟意識(羽賀氏を含めた日山協 (運営者の意識)

- ① 日体協よりスポーツ団体として認められている。
- ② 日体協加盟のスポーツ団体としての立場から、山岳競技を主管、運営する。
- ③ 日体協加盟が認められているのは ――― 登山はスポーツであり、日山協は登山団体を統括している最高機関という認識が得られているためであろう。
- ④ 登山はスポーツである。

以上はほとんど原文を抜粋するようにした。すでにいたるところで指摘したが、「日山協は登山団体を統括している最高機関」という自認は、極めて多くの誤謬と弊害を生ずる原因となっている。遊びにおける組織とは、組織が遊びを意味づけて価値を与えるのではなく、遊びのより良い状況を創りだすことにあることは、すでに述べてきたことである。組織が内部に向かって意味を創りだすことではなく、構成員(登山者)が機能しやすい状況を創りだす役割も先に述べた。遊ぶ人を統括する行政機関とするならば、社団法人を脱ぎ捨て、国民一人ひとりを法の下に平等な対象

として向き合うことが出発点となろう。繰り返すが、法人(日山協)内部だけならば、この批判を展開することはない。「登山者を統括する最高機関」という意識こそが、法人の限界を逸脱する行政意識と重なり、行政の業務委託領域をはみ出した国民の基本的な人権侵害領域に及ぶのであろう。登山をスポーツと捉えてアマ・プロ問題を派生させることも勿論であるが、それ以上に重大なのは「未組織登山者の切り捨て意識」である。自然人たる一人の登山者は国民として、憲法に示される「主権在民」の「民」であり、国家を構成する基本単位である。「法人」は民法第一編第二章において、法の下では自然人と等しく権利を持つことが許された「概念的(架空)存在」である。社団法人日本山岳協会は人格を持った一団体ではなく、自然人を構成員として、特定な目的のために組織した集合体である。その集合体が法律の下では、自然人と等しく権利をもつことが許されるのであり、法人と関わらぬ自然人までをも法人の規律で統括することではない。このことの自覚が、すべからず日本の法人組織に欠けていよう。先にも記した「お上意識」は、今なお国民意識に浸透している。「日山協は登山者を統括する最高機関」というが、どのような手続きを経ているのか。憲法では第 31 条で「法定の手続きの保障」を定めている。総ての登山者が納得できる法の手続きは、どのようになされたのか論者は知らない。

登山を「遊びの広義な枠」で捉えるか、「スポーツの狭義な枠」に押し込めるか、これらの議論の出発点において、すでに概念の枠組みが先行している。本論は前者の枠組み、つまり「**遊びの広義な枠組**」により批判を展開し、広義な枠組みを「**登山学**」として集大成できないものかと思案するのである。そして日山協は後者、「**スポーツの狭義な枠**」に基づき行政機関の委託代行をし、登山者を統括する最高機関という意識をもって、海外登山計画審査や国民体育大会運営をおこなう。本論は前者の立場から、後者の法的違憲性を批判してみた。



- 注1 山岳展望の会 会報第 11 号 大内尚樹
- 注2 憲法第三章 「国民の権利及び義務」
- 注3 日山協発行 「山岳手帳」 参照
- 一、中華民国台湾省への登山手続きについて
  - 二、わが国登山隊のパキスタン派遣に関する注意事項
  - 三、アフガニスタン国内の登山規則
  - 四、ヒマラヤ登山遠征隊規制に関する規則 1969 (ネパール)
- 注4 「四三 日山協会第 92 号」 文書 岳人 295 号 三章
- 注5 本多勝一 「山を考える」
- 注6 「岩と雪」 第 24 号 「海外登山・現状と問題点」
- 注7 「岩と雪」 第 8 号、第 10 号 「登山は個人に属すべきである」 塚本硅一
- 注8 クロード・ピゲ 「言語表現の哲学」
- 注9 竹内芳郎 「言語・その解体と創造」 (その一 ~ 四) 展望 151 号~155 号
- 注10 小林晃夫、小川新吉 「本邦アルピニストの心理と性格」 RCC II 現代アルピニスト講座 「アルピニズムの歴史」



## —— 追記（2015年8月） ——

本論は42年前、『山岳展望 第17号』に発表したものです。

6P～52Pに亘る長文のため、第一章は省略しました。第二章も重複文章が多々あり、文意を損なうことなく、この度修正を加えました。2015年の現在にあつて、このまま通用するものでは勿論ありません。過去の文献記録的意味において、復活させました。

「日山協批判」は山岳展望第17号の主題として、時の論客、原真氏と湯浅道男氏に原稿依頼をおこないました。編集担当の私(田中文夫)が趣意を書き、趣意書とともに古川純一氏の協力要請状を添え、手紙にて依頼しました。原真氏からは受諾できない旨の手紙と、代わりの原稿『奥山章と私』を送っていただきました。湯浅道男氏からの返信はなく、結局のところ、書き手不在となりました。依頼の趣意書は詳細に踏み込んでいたため、その延長で私が論考を書く事となります。約一ヶ月間仕事の合間、お昼の喫茶店で原稿用紙約百枚を書きました。その原稿を和文タイプで原版を起こしたのが、岩峰社に勤務していた岩崎元郎氏です。また、第二次山岳展望編集メンバーの中心が、岩崎氏でもありました。

さらに30年後の2003年3月、日本山岳文化学会設立総会の中、斎藤一男初代会長から、「またあのような論文を書いて下さい」と声をかけられます。反響のなかった本論は、「読む人には読まれていた」ことを実感したひとときでした。しかも斎藤会長は、日本山岳協会会長も歴任された後の時です。

真面目な論考は、いつか、どこかで、だれか心ある方が、読んでいて下さるから、決して無駄ではなかった思いを強くしました。

【 山岳展望 17号 】



【 原真氏からの葉書 】



山岳展望17号拜読。編集御共  
 同様。拙文とのせうに感謝  
 です。  
 又その長文の山岳批評には  
 感心しました。多文又たは将来  
 期待出来る登山界の論客になり  
 たいとす。又そのに及んで私の  
 意見を申し及けたい。文章の  
 中に少し複雑なや抽象的  
 にすると思えます。  
 山岳批評は論と士り感し  
 て論いた言が(登山)の力を  
 持つべきかと私にはします。  
 存在する及は日本人の本質であつて  
 登山と無関係に近いものがある。

## その5. 登山の社会的背景～登山学確立へのアブローチ

1970年

山岳展望の会：「山岳展望」第14号掲載

今回の調査(登山に関する実態調査～山岳展望第14号)を総括して言えば、「登山とその社会性」がテーマであった。これを細目かつ純粹に追求してゆくと、現実の登山行為、登山者意識とは少々かけ離れた「哲学」を中心とした学問に陥るであろう。これまで数多くの山岳文献も、この域になるとボカされてしまっている。たとえあったとしても、随筆家や人類学者、文学者などのように、既存の学問サイドから述べられている。

「登山学」というと、とてつもない深淵に落ち込んでしまうが、法で規制される昨今の登山現象にあって、山登りを理論づけるのも必要ではなかろうか。それが山登りの自由を確立する上で、大きな起点となるのではなかろうか。登山者からの理論づけこそが、正統に社会認知される大きな手段であろう。

ここに手段という言葉を使ったが、山登りそのものには、学問の理論づけなど不要である。なぜならば、山登りを正確に認識させるためには、相手にも山を登らせることしかなく、自らの行為を理論付ける必要は、何もないからである。山登りの学問的理論づけは、第一に社会の中で山登りを価値付ける手段であり、第二に個人的な「私自身への探求」となろう。前者は他人を納得させて登山を権威づける学問であり、後者は全くの遊び要素となる。つまり、山登りへの直接的実用性はないが、登山欲求を他の欲求から守る垣根となろう。

山登りを学問らしく捉える努力は、一つには知的遊びとして、もう一つには活字文化人の大脳に、少しでも山登りを理解してほしいという願いを込めている。そうすることが、映像文化の曙である現代社会の背景にあって、活字文化人による法の乱用と権威の傘から、少しは守られるのではなかろうか。しかし登山は、活字文明から生まれたのではなかったか。

## (1) 登山の史的背景 (社会と個人の問題)

〈 発生へのアプローチ ～ 表音文字 〉

登山と mountaineering とを並べると、我々は同じような意味で、「山へ登る」ことと理解している。しかし各々の言葉をバラしてみると、「登る」は何かに向かって「のぼる」様式を表す。一方で「m」は、何の意味も示していない。前者を表意文字といい、後者を表音文字と呼んでいる。日本にもカナ文字のような表音文字があるにしても、カナ文字よりも漢字のほうが古く、いまだ文章の中核は漢字である。

近代文明をリードしていたヨーロッパにあつては、アルファベットを主体とした表音文字である。この表音文字こそが、人間の意識を分離させたのではなかろうか。いわゆる即時存在としてあるがままの「私」と、「私」自身も「私」の意識の対象になってしまう対自存在としての「私」である。いわゆる【I, my, me】を区別して用いる意識である。一方で漢字は、一字の中に微妙な意味を含め、人間の複雑な意識をその一字の中に込めることができた。

「山」という一文字の要素は、やまがもつあらゆるものを含んでいる。ましてや一つの山に限らず、二つとも、無数とも解釈できる。しかし英語などの表音文字にあつて、「m」という文字は単なる記号にすぎず、何の意味も形象も含んでいない。であるから、「mount」と記号を連ねた構造化することにより、「山」という意味を与える(定義する)言語となる。意識することにより言語として構造化する(定義＝プロトコル)、つまり「見る私」という主体意識が、「見られる私」という客体化を言語構造として認識する。デカルト(1596～1650)の有名なことば、『コギト・エルゴ・スム(我思う、ゆえに我あり)』はそのことを良く表象する。

山のふもとに立ってみよう。「見る私」は、「私」の感覚の色眼鏡を通して山を分析する。そして脳に五感を通した情報を刻み込む。入力情報そのものには具体的行動を指示する意味はなく、脳にセットされた論理思考を経て、行為への指令となる。脳における論理思考が私自身であり、知・情・意の「意識と意思＝論理思考」の部分となってくる。人間も自然もその要素を知識の断片化、細分化、局所単位化によって認識し、それを論理的構造化へと組み直して世界の再認識をおこ

なう。この西欧型(表音文字社会)意識構造は、人間の身体同様自然をも、意識と意思の客体として、それらを論理的思考(定義づけ)によって制御しようとする。

「初登頂」という概念は、歴史の流れの中における一つの定義づけとして、そのことの意味は「初めて」という価値の付与にあり、そのことを成し遂げた力への賞賛ともなる。1787年、ド・ソシュールによるモンブラン初登頂は、華々しい山頂への幕開けとなった。

グーテンベルグの発明した印刷機は活字の表音文字を量産することにより、知識の普及蓄積が容易になった。その結果実存の意識を拡大させ、知識の力による社会統治を展開させてゆくこととなる。そのような状況の下、初登頂の成果はまた「対自然」における「征服」の概念をも形成することとなる。

一方で東洋においては、まだ「登山概念」は発生していない。西欧型意識構造と異なり、表意文字による東洋型意識構造は、「私」そのものも自然の内に含まれる一元論に帰着して、「空」という言葉の中にそれら全てを含むものとした。仏教を中心とする東洋思想からは、矛盾(パラドックス)という概念が生じない。したがって矛盾そのものを考察する弁証法など生まれようもない。そして山を自然に存在する客体として観測や、征服といった感覚すら持ち得なかったのである。

## (2) 登山の展開 (遊びの文化)

### 1) 山頂の時代 一力の誇示

ド・ソシュールによるモンブラン初登頂から、ウインパーによるマッターホルン初登頂までを「アルプスの黄金時代」と呼ばれている。初登頂に成功した瞬間、こんにち我々が味わう山頂の感覚とは、異なるものがあっただろう。それは先にも記した「征服」の心理であったと思われる。

ヨーロッパ中に広がった百年戦争は、ナポレオンが討たれて終結となる(1815年)。戦争という力の拡大を背景に、モンブランは登られた。啓蒙思想によるフランス革命は、市民の実行力の誇示とともに、権威という架空な概念の圧力を切り刻んだ実存意識の高揚が、知識の力を拡大させた。

この時代には梯子あり、縄や斧を使用する人工登攀の原型があった。しかも彼らは、それが良いとも悪いとも考えず、登るためには当然使わざるを得なかった道具なのである。自然の征服や科学的探求のために、最善の道具の使用は目的達成のアイデアであった。あるときは手となり、あるときは足の代用となる道具の使用に、善悪の判断はともなわない。人工登攀における道具の使用の善悪は、後の時代の遊びのルールに由来する。登山における探検要素は、知識を活用した最善の道具立てにより、自然に対する人間の力をもって未知な領域を解明し、その要素により自然を再構成し直して理解・説明することとなる。表音文字による西欧文明の知の特徴である。

ヨーロッパ文化圏にあるアルプスの初登頂は、個人レベルにおいての探検、探査、力の誇示の範囲にあった。しかしヒマラヤ初登頂の場合にはその規模の大きさから、イギリスがエベレストを、フランスがアンナプルナを、ドイツがナンガバルバットを、日本がマナスルをというように、およそ国と国との力の誇示競争となった。このことは登山を楽しむ遊びからの発想ではなく、「人類初」を獲得し合う「パイオニアワーク」として、文明の覇権争い同様な、世界、国家レベルの競い合いとなった。

山頂の時代にはパイオニアワークの初登頂が登山の主要価値であったが、有限な地上の山岳にあって、この価値観は時代とともに変わってゆく流れの中にある。登山の黄金期も後半を過ぎると、世の思想はヘーゲルからニーチェへと移り、個の意識はますます研ぎ澄まされてゆく。征服して頂きに立った人間は、果たして何を見たのだろうか……。 「虚無」という、やりようもなく深くて暗い谷間ではなかったろうか。

だが、困難なときほど、「私」は無心となり、その集中が逆に「私」の心を充実させる。「否定の否定は肯定」という、ヘーゲルの弁証法は次なる世代へと受け継がれることになる。登山は山頂の理念に取って代わり、登路と高峻さの中に「**より高く、より困難を目指す**（マンマリーイズム＝アルピニズム）」という、次なる時代を迎えることになるのである。それはまた、パイオニアワークの文明競争から、遊びとして楽しむ文化の時代への変遷でもある。

## 2) 登路、高峻さの時代 一遊び

マンメリーによって打ち立てられた登路の概念と高峻さこそ、現在日本で主流をなす「アルピニズム」の柱である。バリエーション・ルートから、より困難な登攀を求めていった。登頂の時代は登山者の主体と、それをサポートする従者によって組織化され、主体たる登山者は社会においてもエリートであった。庶民意識には、山と私を対峙させ、組織だって立ち向かう力がもてなかった時代にある。初登頂されてしまった後、マンメリーはより困難なバリエーション・ルートをよじ登って山頂に達した。コーカサスからヒマラヤのより高峻さに挑み、ついにはヒマラヤのナンガバルバットで帰らぬ人となる。

山頂の時代、力の誇示が「対社会」であったのに対し、アルピニズムのより高く、より困難なルートから山頂へ至る考えは、「私」が「私」に対して力の拡大を認めることとなる。いわば「対自意識」の問題として、実存の中へと潜入してゆくのである。そのような困難な岩壁を攀じ登ることが、「私」として生きる実存の確認となり、ニヒリズムの虚無を否定する弁証法的「生」の実感と確認となった。虚無の意識に切りさいなまれた身と心が、困難な登山を克服することにより、全人格一体となった「私」でありえるのであった。それゆえに個の時代にあっては、「なぜ山に登るのか」という問に対し、哲学的回答を得ることができる時代となったのである。

アンケート表1(山岳展望第14号・「登山に関する実態調査」1970年)に見られるように、「なぜ山に登るのか？」の回答の中で、自然鑑賞・自然との融合が54.5%と過半数以上を占めるように、東洋的登山観は「自然即私」といった主体・客体を一体的に自然と捉える思考が定着している。より高く、より困難を求める登山者は20.4%と、五分の一に過ぎない。しかしアンケート表10の回答では、より高く、より困難を求める登山を積極的に希望する登山者は46.5%と半数に迫っている。ということは、近代登山のはじめの頃の登山者層は知的レベルが高く、登山はインテリ層や支配階級に普及した。それが「山頂の時代」であったのだが、次のアルピニズム時代に入ると登山は一般庶民へと普及をはじめ、誰でもが比較的容易に困難な登山形態へ取り組めるようになったからであろう。

登山用具においても、「山頂の時代」にあつては積極的に道具を使用したことは先に述べた。しかし登路が問題になると、用具使用への規制意識、つまり遊びのルール化が問題となる。そのことは困難度にも関係し、「より困難」を求める思想の中では安易に道具を用いてはならない、共通ルールが成立してくる。より困難に立ち向かう「私」と、安易な解決に頼ってしまう「私」との相克が生じる。この相克の矛盾を理性的な「私」によって乗り越えるところに、ニーチェのいう「力への意思」や、「超人」の思想を乗り越える、実践的解決が図れるのである。アンケート表 8 の人工的手段の使用についての回答において、「使用制限のルールが確立されるべきだ」の回答が 39.5 %と一番多いのも、いまだ「登路、高峻さの時代」にあるといえよう。「積極的に使用すべき」が 23.2 %と次に多いのも、「山頂の時代」がいまだ影響を残していると理解できよう。

いつの時代にあつても、登山行為は交換による「商品」となりえない。行為そのものである登山は唯物的交換価値ではなく、衣・食・住・道具・エネルギーを知恵と技術を用いて消費を享受する中で、文化的交換価値を見出してきた。山岳写真、山岳文学、山岳雑誌等々である。しかし現在、社会的労働価値を持ち得なく、山岳プロガイドの成立をもってようやく、登山の労働対価をお金と交換する職業(プロガイド)が芽生えてきた時にある。そしてガイドされる登山者は、これまでの自主・自立的登山意識とは異なり、契約的金銭対価をもって山岳自然に向き合う、他力依存契約の登山者が増加してきたことは、さらなる時代の変遷となるのである。観光登山、鑑賞登山、巡礼登山等々、次なる「分化の時代」の序章にある。

### 3) 分化の時代 — パーソナリティ

世界大戦という文明圏の拡大闘争は流通の市場も広げ、いまや一国、一大陸にとどまらない世界市場へと発展していった。それは主に欧米意識の分化による他者への支配欲求拡大であり、自己(国家・世界)統合の欲求であろう。しかしそれができないのは、パーソナリティの持つ、バクテリアのような強さがあるからだ。

ニュートンの古典力学から量子力学へ、アインシュタインの相対性理論、ルイセンコの遺伝における環境条件説、フロイドの精神分析、エレクトロニクスの急速な発

展……等々、科学の分析を再構成した、高度な物質文明がいま展開されている。「私」を取り除いた「存在」そのものを分析し、再構成し直す客観的手法は、表音文字文化ならのものである。登山においても同様に、要素に向かって分化する必然があるのだろう。その要素は大きく分けて、次の三つが考えられる。

I 対他への力の誇示（社会型）

II 対自への力の誇示（実存型）

III 遊び型

一人の登山者が右のどこに所属するかではなく、各々人間が備えている人間の欲求を構造的に考えたものである。それらのうちのどの部分が強いかにより、その時々その登山者の登山行為が決められる。それゆえ、歴史という文化変遷の過程の中で、その時、その人の環境により、どれを選択するか判断意思となる。

I は主に探検的で、初登頂を目指す。あるいはパイオニアワークと呼んで、他者からの優越性を確認する。

II は主に冒険的で、初登攀を志す実存的私への確認。

III は無目的な「遊び」そのものへの享受となる。別名、スポーツとも呼ぶ。

一人の登山者にあってもこの三つの要素を時々に応じて使い分けるのだから、登山者相互を総合化して「登山学」で捉えたとすれば、複雑な関係となって登山者相互の価値判断を一層難しいものとしている。アンケート表 9 に見られる、「これからどんな形式の登山をしたいと思うか？」の問に対し、「難しい理屈抜きで楽しい登山をおこなう」という回答が 51.1 % と過半数を超えることは、自主・自立による自己矛盾を弁証法的に理解・解決するような「登山の本質」としてきたものは、終焉を迎えることになるのだろう。山岳自然は観光資源と化し、スポーツ競技場に化す運命なのかもしれない。

しかし少数においては、人間の実存的自己矛盾を理解しようと、山岳自然に普遍的修行の場を求め続けるかもしれない。

#### 4) 登山の終焉 —映像文化

登山の変遷を表音文字の主客分離～再構成から考えてみたが、その終末は象形文字が進化した、電子映像文化から考えることとなる。「文化」が人間の生命をより豊かにする生命の衣ならば、文化を伝えて再表現するのはコミュニケーション・メディアとなろう。言語、そして文字は、人間の脳以上に知識を長期に保存でき、印刷はその作用を大量に、同質・均一に、短時間のうちに普及できた。しかし今、テレビによる映像文化は、これまでと違う大きな変化を招いている。電子映像文化の変遷は、これからの更なる論考が必要となる。それは人間の心の変化へと作用する。ふたたび、自主・自立による自己矛盾を弁証法的に理解・解決するような「登山の本質」としてきたものは、終焉を迎えることになるのだろう。しかしそれまでに「登山学」を確立させ、人類の本質的存在にとっての有効性を提示できればと思う。



#### — 追記 (2015年8月) —

本論は45年前、『山岳展望 第14号』に発表したものです。

20P～27Pに亘る『「登山の社会的背景」 — 登山学確立へのアプローチ』、と題しています。文意を損なうことなく、この度修正・加筆しました。

2015年の現在にあって、このまま通用するものでは勿論ありません。過去の文献記録的意味において、復活させました。

また文中、「アンケート表○」とありますが、同書における「登山に関する実態調査報告」(編集部) 6P～19 P によりますが、内容は省略します。



## 登山の社会的背景

—— 登山学確立へのアプローチ ——

田 中 文 夫

今回の調査を総括して言えば、「登山とその社会性」がテーマであった。それを題目、かつ副題に追求してゆくと、現実の登山行為、登山意識とは多少かけ離れた「哲学」を中心とした学問に陥るのであろう。これまで数多くの山岳文庫も、この域になるとゴッカイでしまっている。いや、尤もであつたとしても、編集家や人類学者、文学者をこのように、いわゆる既存の学問サイドからしか選べられてはならぬ。

「登山学」というと、とてつもない深奥に落ち込んでしまつたろうが、法で規制される昨今の登山現象にあっては、山登りを理解づけるのも必要ではなからうか。それが山登りの自由を確立する上で、大まかに要となるのであろうが、登山者サイドからの理解づけこそ、正

統に社会から認識されるべき手段ではないだろうか。今ここに「手巻」という言葉を使つたが、山登りに学問としての理論などとは必要なのである。なぜならば山登りを正確に認識させるには相手にも山を登らせることしかなく、自らの行為を理解づける必要は何もいからずである。山登りの学問的理論は、常に社会の中で、山登りを準備づけるための手段であり、常に社会と個人の登山を準備づける。前者は他人を納得させる登山を準備づける。いわゆる学問であり、後者は全くの遊びであらう。つまり、山登りへの直接的実用性はないが、山登りの欲求を他の欲求から守る領域ではないか。ここで山登りを学問らしく排えてみようとするのは、も一つは知的なそびとして、もう一つは俗文化人の

## 登山に関する実態調査報告

桶 集 室

一、はじめに

「社会問題」という言葉がある。これはある面ばかりで非にマスコミ好きの言葉であり、私たちの周辺によく聞くこともある。

この言葉の定義としては、「社会の次論から生ずる諸問題」(広辞苑)といふことになる。したがってこの意味から考えれば、社会一般の人がごそつてその問題あるいは動向について興味・関心を示すことがなければならぬはずである。

登山は社会問題の一つであるといふ云われる。

しかし、生活面からはなかに離れた自然園中で行われる登山という行為に対しては、一般にそれほどの関心も払われないのが普通である。平常の秋風における登山

には「社会問題」ということの定義にある社会的欠陥などは無いであらうし、もしあるとすれば、それは道義をかいではかない。

ひとたび道義が起ると、マスコミはそれにかなり高い関心を示し、その行為を否定するのである。そして人はマスコミを通じ、茶の間の話者として演説、登山行為そのものの背景を論じるのである。だが、報道される記事、論評をみると、かならずしも事実を報道しているとは限らず、登山の本質にある根深い「心傷」は無視され、単なる現象のみをみつめた論評に終始しているようである。

それは、登山者「真の意味での」側で立てば、かな

## その6. 「山岳展望」17号から「山岳文化」へ

2005年

日本山岳文化学会 機関紙「山岳文化」第3号 掲載

「また、あのような論文を書いて下さい。ずっと気になっていた」

山岳文化学会、設立総会のスピーチを終えた斎藤会長は、席に戻ろうとして私の名札を見付け、声をかけられた。それまで斎藤会長と面識はなく、まったくの初対面。しかしその一瞬は何となく、ずっと前から知り合いだったような雰囲気がありました。

2003年3月8日、山岳文化学会設立総会。

その日、私は遅刻してしまった。

すでに総会は始まり、満席の熱気と斎藤会長のスピーチの中に私は入った。空席を見付けたのは、最前列のたった一つ。立ちんぼうも変なので、仕方なく勇気を出して最前列のその空席を埋めることにした。

実にこの席が、スピーチ中の斎藤会長の席だったことに気付かされたのは、スピーチが終わってからのこと。スピーチを終えた斎藤会長は落着いて、冒頭の一言とともに中央の席に移って行かれた。

山岳展望17号が発刊されたのは、1973年9月。

その後は途絶え、現在に至っている。山岳文化学会設立のこの日から、遡ること丸30年。

2004年11月、日本山岳文化学会第2回大会。

文献分科会により、山岳雑誌の創刊とその時代背景の研究発表がされました。発表者の植木理事(故人)は神奈川岳連、横浜山岳協会における大先輩。発表の最後は「山岳展望」創刊で締め括られた。会場ロビーには、残されていた僅かばかりの「山岳展望」創刊号が並べられています。この「山岳展望」創刊の中心が、これまた斎藤会長であったことを、私は36年前から知っていた。

1968年11月、山岳展望12号発刊。

この号から編集同人は一変し、若手に切り替えられています。その中心人物が岩崎元郎氏であり、佐内順、武藤昭、佐々木誉実、山田裕紀氏らであった。遅れて、大内直樹、柏瀬裕之、遠藤甲太、小泉共司、杉山美裕氏らが参加した。

これに先立つ二年前、遠藤登氏を隊長として、東京都山岳連盟有志により、正月の韓国遠征が行なわれた。渡航自由化前の一ドル 360 円、個人負担は 100 ドルで、ウルサンバイの垂直な花崗岩に、新たなトレースを刻んでいた。

当時コンテニユアス・クラブに所属していた 21 歳の私も、この遠征に参加した。昭和山岳会から参加した、一歳年上の岩崎氏とは意気投合。大いに山と青春を語り合っていた頃でした。

そんなことから、山岳展望 12 号、編集同人末席に私も加わることになります。

新宿、線路脇のヴォルガ、酎ハイと焼き鳥を口に、夜更けまでそれぞれの山を熱く語り合った編集同人達。

12 号から 14 号までは、斎藤会長が営まれている岩峰社が出版所となり、そこに勤めていた岩崎氏自らがタイピストでもあります。私も岩峰社を訪ねたことがありますが、斎藤会長にお目にかかる機会は一度もありません。

この 12 号、山岳展望は岳界重鎮の手から若者達の手へと、一挙に世代交代をしたのです。

イデオログは佐内氏(故人)。しかし若輩の浅薄さは否めず、藪の中からヒマラヤを展望しているようなものでした。井の中の蛙と、そこには確かな山岳界への展望も含め、押さえきれない青春の夢や正義な願望が自ら先走っていたように思い返せませす。

皆、若かった。

それはロゴスからパトスへのバトンタッチでもありました。若者達は理屈より、まず実践に立ち向かって行きました。日本の厳冬の岩壁から、ヨーロッパ・アルプス、ヒマラヤの岩壁へと、より高く、より困難なルートを求め、実践と実績を競います。

ヴォルガから、一ノ倉沢の雪に消えた人もいます。

実績少ない若者がいくら念仏を唱えても、説得の言葉の重みがありません。そんなことより、アイガー北壁、エベレスト南壁(南西壁)へと挑戦するほうが、より現実にア

ピールできた時代が、すでに始まっていました。

山岳をソフト(知能・文化的)と共に楽しむより、ハード(記録・文明的)な進化の楽しみへと偏っていった。未知に向かい、アルプス、ヒマラヤへと、若者達はエネルギー放出の舞台を求め、世界へ羽ばたいて行きます。右肩上がりな成長社会は、ソフト&ハードのバランスよりも、アンバランスな突出事象(新記録性)に魅力を覚えます。

そのような中では山岳を展望(ソフト)する書き手の評価は定まらず、書き手もだんだん品薄になってゆきます。12号からの山岳展望は、毎年一冊をようやく発刊。五年を経て、やっと17号へと辿り着きます。

1973年

ヒマラヤ登攀満開でした。日本でも山岳ガイドを業とする、プロガイドが出現。そのプロガイドが隊長となってヒマラヤ遠征を計画していた登山隊へ、日本山岳協会は推薦状発行対象としないことにしていました。

いわゆる山岳界のアマ・プロ問題です。

ブランデー協会会長率いる時のオリンピックは、アマチュアの祭典としプロは排除されています。山岳の社会も、アマチュアを全国組織する日本山岳協会が、日本を代表する組織とされていました。

ヒマラヤ等の遠征では、その国を代表する組織からの推薦状を添え、当事国へ許可申請を行なう規則がありました。

日本クライマースクラブが計画したP29西壁、埼玉岳連が計画していたナンガ・パールパット、それぞれ隊長とする古川純一、飯塚誠一氏をプロガイドと称し、日本山岳協会は推薦状発行対象と認めません。

山岳展望17号ではこのことを軸に、編集をまとめることになります。当時、エベレスト南西壁を計画されていた湯浅道男氏、マカルー東南稜が終わったばかりの原真氏の二人に、執筆を依頼することになりました。依頼は私が担当。執筆依頼の要旨を長文に書き記し、古川純一氏の添え状を付けて依頼しました。

結果、湯浅氏からの返信はありません。原真氏は書きたくないテーマであることの断り文と、代わりの原稿として「奥山章氏と私」を戴くことが出来ました。

さて、17号の書き手が見つからないまま時は過ぎてゆきます。仕方なく、それまで

依頼文を書いていた私が書くはめになります。一ヶ月間毎日、昼休み、渋谷の喫茶店でコーヒーを飲みながら、120枚の原稿「日本山岳協会への批判」を書き上げました。

次は岩崎氏が和文タイプライターと格闘。ようやく17号発刊にこぎつけたのです。

17号発刊の翌年(1974年)、杉山美裕君と私も例外になく、ヒマラヤの岩壁を目指しました。古川氏を名目上「総指揮」と称し、実質面では隊長。私が申請上「隊長」と記述し、実質は登攀隊員。こんな建前上の簡易なトリックで日山協推薦状を得、横浜山岳協会隊はP29南西壁登山へと出掛けて行きました。

さらに4年後、私は再びP29南西壁登攀へと出掛け、山岳展望の声はすでに聞こえなくなっていました。

最後となった17号、「日山協批判」への反応は聞こえません。ただ一人、原真氏からは所感の葉書を戴きました。そしてもう一人、朝霧山岳会・梶山幸佑氏(故人)は過去に、「読んでいる人は読んでいるよ」と、電話のお話を戴いたことがあります。

以来、山岳展望は・・・休眠。

あれから丁度30年が過ぎました。

2003年3月8日、山岳文化学会設立。

眠りから覚めた山岳展望は、今その名を変えて甦ったのだ、と私には思えてきます。しかももっと重厚に、もっと幅広く、そして山岳のすべてを網羅する、私も大好きな「山岳文化」となって。

「またあのような論文を書いて下さい。ずっと気になっていた」

斎藤会長から戴いた初対面での一言は、確かに30年前、山岳展望17号「日本山岳協会への批判」を「読んでいる人がいた」ことの証でした。

しかも斎藤会長は、当時私が批判した日本山岳協会会長を歴任された後でもあります。更に偶然は重なり、日本山岳協会(現)会長・田中文男氏(2015年、八木原氏と交代)と私とは、男と夫の漢字違な同姓同名発音ともなっています。

30年の熟成。

山岳展望から山岳文化へ、そして日本山岳文化学会へと歴史は受け継がれました。この歴史の軸となり、今もって活躍される斎藤会長の、山と文化と実践への飽くなき探求は、あの頃若者だった私達には今もってお手本となります。

若輩なる私は今再び、その社会的役割も加味した確かな継承をしなければならぬ、と思っています。そして山岳文化には、次なる二つの方向があると思うのです。

一つは山岳文化の総体を文化伝承のDNAとして確立させ、歴史的検証にも耐え得るような内向な方向。

もう一つは山岳文化の視点から、山岳を取除いても通用する21世紀文化として、いかに役立つ発信ができるかとする外向な方向。

「環境の世紀」と言われる21世紀。山岳の大自然の中で活動を重ねてきた山岳人と山岳文化にとり、まさに現代と未来社会に向かって物言う時ではないでしょうか！

「環境」を特定分野の専門家だけのものにしてはなりません。地球に住まう一人ひとりが身の回りの問題と捉える時、地球に住まう一人ひとりが当事者であり、環境専門家でもあり得ます。

そして非日常的山岳に分け入った山岳人から捉える環境は、日常社会に住まう普通の人々の環境認識とは異なった、より多彩で繊細な経験を加味することができるはずです。

山岳文化から環境社会へ向けた様々な発信こそが、かつて山岳展望が途切れてしまった無意味さを、現在有効なものへと変換できる情報提供が図れるのではないのでしょうか。

エベレストが登頂されてから半世紀がすぎました。山岳社会は、成長の限界を迎えていた半世紀の中で多様化してきましたが、その秩序は未だ混沌の中にあります。混沌こそ自由の本質であるでしょうが、自由とはまさに秩序が意味を成さない状態でもあります。

それはまさに、第二次世界大戦に敗れ、戦後60年(2015年は戦後70年)を迎えた日

本社会の現状とも重ね合わさります。その中で唯一なスタンダードとして登場したのが経済指標です。

では新たな秩序として、第43代アメリカ大統領ジョージ・ブッシュらが求めるキリスト教的「フリーダム」で良いのでしょうか？私には同意できません。

終戦の翌年に生まれた私には、大自然の中で山岳と対峙する機会を持つことができました。私という人格にとって、自由とはある限られた範囲や状況における選択の自由さとして存在しています。その中で自ら選択できる意思が、私という人格を形成してきました。そして様々な体験の中から、私が私という人格に収束することが、なんとも無意味な作為であることを認識するに至っています。

私という意識における自我と、社会を構成する単位となる私という存在から、誰しも離れることが出来ません。ソフト&ハードのバランスを図ることは、人間として生きるそのことであります。

21世紀の文明は、第二次産業革命ともいえる電子技術革命でもあります。20世紀の機械産業によるエネルギー多消費型社会から電子情報社会へと移行し、省エネルギー型社会へと変革を遂げています。

私という人格でさえ、様々なデジタル情報に分解されて蓄積可能となります。これらの情報を再度組み立て直して私という存在が復元される。どれがオリジナルな私であり、どれがコピーされた私であるのか、見分けがつかないほど精巧に復元できる。

また一方ではDNA操作により、同じDNAを持った生物の複製も可能となっている科学技術。

そんな中、63億人とされる現代の地球市民にとって、21世紀の環境社会における自我とは、いかなる意味を持つのでしょうか？山岳という自然の中で会得できる感性から、どれほどのアイデンティティが形成できるのでしょうか。しかし私は、人類第四の極たる「人の心への探求」を求めてやみません。

それらは億人億様なDNA同様、ほんの僅かな並びの差異から、個体識別可能程度な違いしか生じません。しかし少なくとも五感で認識する生の情報と、第六感で感ずる仔細な情報とを組合せ、複製ではないオリジナリティを持った生の感覚判断

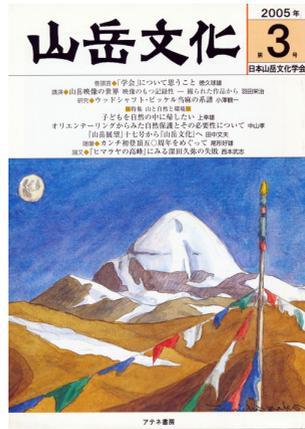
を、私は持続したいと思っています。

環境の世紀に住まう人類の存続は、人類の持つ美意識の形成が共存の鍵となるでしょう。山岳とはまさに、自然という美の存在そのものであり、山岳と共に育てた山岳文化こそ、21世紀文化形成の柱となり得るのではないのでしょうか。山岳文化は文化のあらゆる要素を含んでいるから。

【 山岳展望 17号 】



【 山岳文化 3号 】



## おわりに

昨年9月で設計事務所を閉鎖し、晴れて自由な身となりました。

わがままな自己主張を出版しても売れないし、売れるための方策を加えるのもイヤだし……、自由で気ままな、だから売れない、だから売らない作家でいられたら……、と思いながら日々過ごします。たっぷりした時間の中で、期限のない作業は集中力に欠けます。それでも諦めずに、なんとか第5作「登山の総合人間学」をまとめました。

書名は「たかが山登り されど山登り」の方が気持ちにピッタリなのですが、すでに湯浅道男氏により出版(成文堂、1997.04)されている指摘を得、主題と副題を入れ替えました。第3作「老いの道標」と重複する部分がありますが、若き日の想いは続きます。40年余を経た今、より総合的視野をもって統合できる様子を、読み取っていただけましたら幸いです。

何事も「たかが……」から始まり、やがて「されど……」の深みへと陥ります。それがライフワークとなったなら、大変幸せなことです。「登山」は単に身体が高みへと「登る」単純行為だけですが、もっと広くて深い思考と体験のおりなす精神こころの垣塙るっほ、「登山の総合人間学」への発展でもありました。

### 登山の総合人間学

〈たかが山登り されど山登り〉

= 非売品 =

2015年12月7日 終稿

著者 田中 文夫

[ホームページ公開] [http://home.catv-yokohama.ne.jp/55/f\\_tanaka](http://home.catv-yokohama.ne.jp/55/f_tanaka)

日本山岳文化学会 正会員

総合人間学会 正会員